
武芸者の道筋

鍊金鋼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武芸者の道筋

【Nコード】

N13360

【作者名】

鍊金鋼

【あらすじ】

その日その瞬間に運命は変わった。

その男はどう思い、どう行動していくのか

そしてどんな結末を迎えていくのか。

（ご都合主義やテンプレなどがありつまらないかと思いますが読んでくださると

自分的にはすごく嬉しいです。）

プロローグ『変動の時』（前書き）

初めまして今回が初作品になります黒谷です。

皆様方の作品を見て自分も書いてみたいと思い投稿させてもらいました。

何分は初めてな物なので、文章が安定しない

誤字・脱字があると思いますが暖かい目で見てくださいと嬉しいです。
では、つまらないかと思いますがどうか宜しくお願いします。

プロローグ『變動の時』

変わらないと思っていたものが変わるときは
大抵が突然に変わるものだ。

その日は変わった日だった。
だからと言って良かったか、と問われれば違うと言わざるを得ない
が。

その日の朝は本当にいつもと変わらなかった。

週明けの月曜日だったので面倒臭い学校が更に気分的にめんどくさ
いなあと

思いながらも、のろのろと学校に行く準備をし遅刻しないように、
かといって

早く行こうともせずぎりぎりまで家でゆっくりし、行ってきましたと
親に声を

掛けてから自転車で家を出発した。

そこから少しずつ。だが確実にいつもの日常とは変わっていった。

最初は自転車が転倒したのだが、それくらいなら少し恥ずかしかったが

今日はついてなかったなで、済ませられたが、そこからだんだんとおかしくなっていた。道路を渡ろうとすれば車が猛スピードで

突っ込んできたり、高層マンションから植木鉢が落ちてきたり
学校では誰かから押され階段から落ちそうになるわ
帰りにタイヤが急にパンクしハンドル操作を誤り川に突っ込んだり
等等……。

他にもあったが挙げたら切りがないので割愛してもらおう。

そのせいでひどく友人に笑われたみたいだが
こっちは周りから何か来るかもしれないと
警戒していたので、良く聞いていなかった。

そして、今は今日一日でボロボロになって
しまった自転車で帰宅してる途中である。

「ほんとついてなかったなあ」

今日のことをばやきつつこれ以上巻き込まれたくないので
さっさと家に帰ろうと思い自転車のスピードを速めると。

「ん？」

突然前触れもなく視界が白く霞んできたのだ。

最初は目にゴミでも入ったかと思いい目をこすってみたが
一向に元に戻らず、それどころかだんだんと酷くなっているようだった。

「おいおい何だよこれ……」

視界が白くなるにつれ意識もはっきりしなくなってきた。
当然そんな風になって自転車をちゃんと運転できるはずもなく
派手に転倒したが、もう感覚がないのかまったく痛くなく

身体を起こそうとしたが、体は俺の意思に反してぴくりとも動かなかった。

そして、だんだんと感覚が無くなってきたがそれでも精一杯に口を動かして。

「ほんとついてない」

どうでもいい

悪態をついた後俺の意識は暗転した。

翌日の新聞には

【〇〇市内の高校生謎の死! ?】

とひっそり掲載されていた。

プロローグ『変動の時』（後書き）

まずは、こんな作品を読んただきありがとうございます。

何分初めてなもので、色々おかしいところがあると思いますので
頑張って直していこうと思います。

そして出来れば感想などを送ってくださるとありがたいです。
それを参考にして書いていこうと思いますので。

最後にこれからも読んでくださるとありがたいです。

それではこの辺で。

プロローグ2『選択』

俺が目を覚ました場所は、少なくとも俺の知っている場所ではなかった。

自身の状況を把握する為に周囲を見回してみると、中央に長方形の黒のテーブルが

ありテーブルを挟んで向かい合うようにソファが置かれておりそのソファの片方に俺は座っているようである。

ちなみに俺は手前のソファに座っているみたいだが

俺は座った覚えもないし、そもそもこんな所に来たつもりない。

何だ誘拐か？と思ったが自分の家は知ってる限り普通の家だしそんなに金も無かったはずだったと思うんだが。

もしや、俺の家には重大な秘密が！？とバカなことを（現実逃避とも言える）

考えていると。

「遅れてしまって申し訳ありません。」

瞬きの間にとかではなく本当にいつの間にか向かい側に男がいた。

灰色のきちっとしたスーツを着ているが顔は平平凡凡だった。

もう、俺は今日？は色々ありすぎてもうそんなに驚かなかったのさっさと質問しよう思い声をかけてみた。

「すみません、ここはどこなんですか？」

何かありきたりな言葉だなあと思いつつも

男の返答を待っていると。

「それをこれから説明致しますので
なお質問は説明を終えてからお答えしますので宜しくお願いしま
す。」

微塵も表情を変えずに返された。

わざわざちゃんと説明してくれるならありがたいし
それならいいかなと思ったので、ソファに深く座って待っていると。

「まず、初めにあなたはお亡くなりました。」

いきなり質問したくなった。

が、なんとか質問するのを堪え続きをきくことにした。

「世界はプログラムのような物で、自分はそのプログラムを管理し
ています。

そして、世界にバグなどが発生した時にはそのバグを世界が修正す
るのですが

時たま修正しきれない物があるのでその浸食された物ごと

修正するのが私の主な仕事です。そのバグに巻き込まれて

修正されてしまったのがあなたという訳です。何かご質問はありま
すか？」

とりあえず理解はしたが、当然ながら納得はまだ出来なかった。

でも、どうせ泣いても喚いても現状は変わりそうにないし早々に諦
めるしかないだろうな。

物のついでにまだ分からないことがあるので

とりあえずまとめて質問することにした。

Q その日事故に合いそうになったのは何か関係があるのか？

A 世界が自然に修正しようとした結果です。

Q 最後に視界が白くなったのはなんなのか？

A 私が修正した結果です。

Q こういう事はよく起きるのか？

A そちらの時間でいう一年で4、5人それに巻き込まれます。

とりあえず、大体の質問は終えたがまだ一番大事な質問があったのでそれを聞いていることに。

「それで、この後自分はどうなるんですか？」

それが、無ければ俺をわざわざここに連れてくる必要性が無いからな。

「あなたには転生かまたはトリップをしていただきます」

何処かで見た展開だなと思いつつ続きの説明を待つ事に。

「では、転生&トリップで普通か特別かを選択してください」

あれ？少し何か違ってきたなあと若干混乱していたが分からない事は聞くべきなので質問する事に。

「その二つはどう違うんですか？」

「普通に転生する場合はあなたが世界を選択し

その世界に 記憶を保持したまま転生していただきます。

なお、その世界においての環境・才能・能力・容姿などは完全にランダムなので、その当たりはご承知ください。

特別に転生する場合は世界を選択した時に能力・才能・容姿を決めていただき

転生していただきます。なおトリップの場合はトリップする場所は選択しますので」

「それなら誰でも特別な方を選ぶんじゃない？」

「通常はそうですね。ですが、特別の場合は代償を支払って貰います。

例えばですが右腕を代償にするならばその世界で先天的か後天的かはランダムですが、必ずその右腕を失いますのでご了承ください。なお代償1つに

対し希望する願いは1つと限ってはいませんので。その判断はこちらで致します」

そういう事か。

結構理不尽だと思うが生き返れるなら御の字だろう。

それに、どうせ怒鳴ってもこいつはどうともしなそうだし。

どうもこの男は機械的っぽいんだよなあ。

さて、どうしようか？

プロローグ3『異なる世界へ』（前書き）

今更ですが自分は「鋼殻のレギオス」しか読んでいないので

「レジェンド・オブ・レギオス」「聖戦のレギオス」を読んでいる人たちによってこれは設定が違おうと思う場合もあると思いますがそこは

すみませんがご了承ください。

それではこれでプロローグは終了ですので次でやっとなぎま！の世界に行きます。

では、宜しく願います。

プロローグ3『異なる世界へ』

「特別の方でお願いします」

しばらく考えた後目の前の男に言った。やっぱり能力などは俺も憧れた事もあり、
欲しいと思うし危険な目にあった時には自分の身ぐらい守らないといけないし。

「了解しました。では、まず世界の選択と転生・トリップどちらに致しますか？」

「その前に漫画などの世界でも大丈夫なんですか？」

「はい、大丈夫ですよ。その世界はちゃんと存在していますので」

「じゃあ、世界は魔法先生ネギま！で世界への行き方はトリップの方で」

ネギま！は結構好きな漫画だし、それに魔法世界とかそういう不思議な所も

旅してみたい。転生だったら戸籍とかは出来たり家族は出来るけど生まれてくるのが、俺じゃ記憶を持ってるから幼児の演技なんて出来ないと思うから

周りから不気味がられたり排斥されたりするかもしれんしな。
それに、望んで産んだ場合こんな変な奴じゃ親の人が不憫だ。

「分かりました。細かい所を決める前に何を代償にするかを選択して下さい」

これは、結構悩んだがとりあえず向こうに行ってもあんまり影響がなさそうな物を必死に出来の悪い頭で考えて選んでみることにした。その結果選んだのが。

「魔法先生ネギま！の原作知識の削除・現在の自分の名前の破棄前の世界での自分が存在した痕跡の消去で」

この三つだ。

最初の物は確かに影響があるかも知れないが、そんな物があつたら登場人物に先入観が俺は絶対入る。そんな事で人物は評価しないようにしたい。

それに、先の事が分かったら、それは楽な事なのかもしれないがそれじゃあ楽しくないって事でこれを選んだ。

次のは名付けてくれた親には申し訳ない事をしたなと思ったが実質的な影響は無いからという事で選んだ。

最後のは代償っていうよりむしろ俺の願いだ。俺が死んで俺を知っている人が

悲しむかどうかは分からないがもし、いたらそのせいで生活に悪影響が

起きたら俺が気分的に落ち込む。

「その三つの代償で宜しいのですね？」

「それで構いません」

「分かりました。では、その代償の変わりに叶えて頂ける願いの数は……………合計で六つですね」

おお予想以上に多いな。まあ向こうが決めてくれたんだし文句言って減らされたら嫌だし、それ以前に増やしてもくれなそう
だ。

「では、そちらが望む願いをどうぞ」

「じゃあ、自分に対する洗脳・幻術・催眠・暗示などそれに類するものを

効かないように。指定した錬金鋼を11本。剄の量をレイフォンとアルシェイラの
間ぐらいに。当然、剄を使用するためにオーロラ粒子は自分で供給出来るように。

剄技及び武器を扱いきれる才能。肉体の不老化及び肉体の限界を無くして下さい。

これ全部叶えますか？」

最初のはそういう類は絶対に厄介なのでそれを防ぐため。

不老不死ではないのは、終わりが無いのはきついなあという俺のへたれ的理由で

能力がレギオス中心なのは当然好きだからという理由で。

「その六つですね。……………はい、別に問題無いのでそのままで結構です」

いけるのか……。やっぱり人間とは圧倒的にスペックが違うな。

「では、次にトリップする時代と場所を選択してください」

「時代は原作開始の800年前から、場所は魔法世界で魔物などに

類する生物や人などが居ない場所でありある程度安全な場所である事」

前者は修行する時間と旅する時間が欲しいという理由で。

後者はいきなり危険な所に放り出されたら普通に死ねるからな。

いくら頑張れば将来的に強くなれるとしても、いきなり敵に襲いかかられたら

現一般人である俺は無残に殺されるだろうしな……。そんなのは勘弁だ。

「分かりました。代償は向こうの世界に行った時に頂きますのでそれと、願いを叶える時に少し肉体に変化があるかもしれませんが、でござ承下さい。」

それでは、何も質問がなければトリップを開始しますが、宜しいですか？」

んゝ俺が思う限りたぶん無いと思うんだが。

(……あっ！　　そういえば重要な事があった！)

「その世界でも修正力は働くんですか？」

これは結構いや、かなり重要だ。またこの人の修正力で消されたくないし。

「私が直接修正した方においては私はもう致しません。その世界での物語を変えすぎなければ修正力は働きませんし、こちらのほうでもある

程度は許容するように変更しますが、その限界を超えた時には世界

はあなたを

修正しようとするのでその辺りはご注意下さい」

もしかしたら俺は中々早まった事をしてしまったかも知れん。

「あのく代償の変更って「できませんので」ですよ〜」

やはり駄目なようだ。まあなるようにしかならないか。

「では、トリップを開始しますので。それと少しだけ色を付けておきますので。

向こうに着きましたら手紙がありますので、それをお読みください。

では、また善き人生を」

そうして、俺の視界テレビの電源を切るように暗転した。

プロローグ3『異なる世界へ』（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

もし、誤字・脱字・変なところ質問がありましたら

出来る限り答えていこうと思いますので宜しくお願いします。

では、ここからレギオス側の用語を説明していこうと思います。

説明といってもウイキなんでそこらでも見れますので。

武芸者…武芸者は通常の間と身体構造が異なり、腰の辺りに剽を大量に発生させる「剽脈」（けいみゃく）と呼ばれる内臓を持ち、そこから剽の通り道になる「剽路」（けいろ）と言う管が神経と並行するように全身に伸びている。剽は全ての人間が生きているだけで発するエネルギーだが、普通の人間が発する剽は非常に微弱で、生まれつき剽脈を持つ者のみが武芸者として戦うことができる。

錬金鋼…多くの武芸者は「錬金鋼ダイト」と呼ばれる特殊合金を武器とする。錬金鋼には特定の大きさや形状、性質などを記憶し、同じく記憶した声と剽に反応して一瞬で記憶した通りの状態へと変化する「記憶復元」の特性が備わっており、これにより元の数倍以上の体積や様々な形状、性質に変化することができ、それに伴って重量も変化する。すなわち、掌に収まる程度の錬金鋼を、一瞬にして然るべき形と大きさ、重量を備えた武器に変化させることができる。声は勿論、剽も個々人で質が異なるため、錬金鋼は記憶させた声と剽の持ち主しか復元できず、錬金鋼を復元する際の音声信号には専ら「レストレーション」と言う語句が用いられる。そのため錬金鋼は使えば使うほどその持ち主しか使えなくなる（設定を消去すれば誰でも使える）。これらの、錬金鋼が記憶する情報は専用の機器で記憶、

消去、調整することができ、この「武器としての錬金鋼の設定」の調整や、錬金鋼の開発、選定などを専門に行う技師もいる。

主人公設定（更に修正）（前書き）

投稿する時間は結構不定期になると思います。
それでも、読んでくれると嬉しいです。

主人公設定（更に修正）

主人公設定

名前…黒宮^{くろみや}涼^{りょう}

性別…男

年齢…18歳

身長…165cm↓（トリップ後）173cm

体重…55kg↓（トリップ後）67kg

誕生日…8月4日

血液型…O型

容姿…トリップする前と大して変わらないが目だけ藍色に変わった。
髪は黒で前は目元の辺りまでで、後ろは首のあたりまでの長

さである。

顔は割と整ってる方で、よくいえば優しそう悪く言えば気弱なかんじ。

性格..結構なめんどくさがりだが、それでも楽しいと思う事は進んでやっていく性格

温厚というかどちらかという事なかれ主義^{へたれ}で

初対面の相手には基本敬語で自分から基本的に喧嘩を売ったりトラブルの種を撒かないように注意している。

それでも一回関わってそいつが気に入らない奴じゃなかったら何だかんだ言いつつも助けようとする。若干お人よし。

他人の負の感情には割と気づくがそれ以外はほとんど気付かない。

備考..自分がやれると思ったことは自分だけでやろうとし迷惑を掛けたくなく

他人に頼らずそのせいで度々無茶をする。家事などは料理がある程度

出来るだけであってその他は今のところ全く出来ない。生前は割とオタクであり

無気力であったがトリップしてから少し向上心が芽生えた。

所持品…基本的にボックスにしまっている。ボックスの中には100m四方の空間があり

その中の時間は経過しない。生物以外は収納できる。

服などの場合はボックスから出してすぐに着用可能である。服や食料いくつかにれている。

鍊金鋼。

(刀・手甲及び脚甲・鋼糸・レイピア・盾・青龍偃月刀

弓・劍・砲・杖・鎖付き鉄球)

能力…洗脳・幻術・催眠・暗示などそれに類する効果を無効化する。

…肉体の不老化

…剋技及び武器を扱う才能

…活剋習得完了・衝剋の使用可能。

…身体能力の限界突破

主人公設定（更に修正）（後書き）

この設定は度々更新していくのでたまに見てください。

名前は考え中なので本編で出たら書いときますので。

そして作者はネーミングセンスがないのでもし何かいい名前があれば遠慮せずどんどん送ってください。

では、次からはネギま！の世界に行きますので。

次回も宜しくお願いします。

第一話『現状把握』（前書き）

総合PV4000越え&ユニークが1000人を超えました。
これも皆様方のおかげです。本当にありがとうございます。
これからも頑張って書いていこうと思いますので。
暇つぶしでもいいので読んでいってください。

第一話『現状把握』

気がつくともた俺は知らない場所に座っていた。

周囲は薄暗いが、視界が確保出来ない程ではないので周囲を確認してみると

そこは森のような場所のようで、周囲には多くの木々が存在していた。

「ほんとに、違う所に来たんだなあ」

夢じゃないんだよなあと変な所で感心した。とりあえず身体を起ここそうと思い、服に付いた土などを払いながら立ってみると。

「ん？」

少し視界が高くなっている気がする。

確か身体に変化があるとか、あの人が言ってたからそのせいか。それに腰の辺りに何か違和感がある。

「多分これが剽脈だろうな」

身体が造り変えられたおかげか剽脈けいみやくから剽路けいろうに剽を流すことは問題なくできるようである。まあ流せることが出来るだけであってほとんど何も出来なさそうだけどなあ……。

「そういえば、あの人手紙があるとか言ってたな」

言われたのを思い出したので服のポケットの中を
探してみるとそれらしき紙があったので読んでみる事にした。

【この手紙を読んでおられるという事は無事にそちらに到着したようですね。

さて、さっそくですが、おまけの内容をご説明致します。

あなたの手の甲に私が勝手ながら術式を書き込ませて頂きました。術式の効果は物の収納です。入れられる物の容量は決まっておりまして

中には100m四方の空間があり、その空間分しか入らないのでお気をつけください。

その中の時間は経過しておりませんので。更に生物は入らないのでご了承ください。

今現在入ってる物はそちらの指定した物とこちらから一週間分の食料と飲み水及びある物も入れさせて頂きましたのでそちらでご利用ください。

そして、物を仕舞う時にはその手の甲に物をかざさして、念じて頂ければ

結構です。逆に物を出したい時には、その物を念じて頂いたら出せますので。

あなたはそこに入っている物をきちんと把握できますので忘れるなどの事は

起きませんのでご安心ください。それでは、説明を終わりますので善き人生を。

P. S

この手紙を読み終えた後術式が刻まれますのでお気を付けを。」

中々いい物をくれたようだ。あの人に感謝の念を

思い浮かべていると、前触れもなく右の手の甲が光出したと思ったら。

「ぎっ!？」

突然身体に激痛がはしり思わず膝をついた。

(おいおい! こんな痛みがあるのなら、ちゃんと手紙に書いとけよ!!)

心の中でそう悪態をついていたが、それもすぐに終わりさっきの痛みが嘘のように引き何とも無くなったので改めて手の甲を見てみると。

「魔法陣っばいな」

実物なぞ見た事ある訳無いので、漫画の知識頼りだから、確実にそうとは言えないが、それらしき術式が刻まれていた。

とりあえずさっきのはむかついたので手紙は握り潰して捨てておいた。

怒ってても、どうしようもないかと思いきつさと

何か出してみるかと思いい、そうして念じてみると

音を立てずに手のひらには短く白い棒状の物ダイト錬金鋼が存在していた。

「おお!」

いくら説明されて出ると分かっても実物を見てみるとやっぱり嬉しくなるもんだ。

そして、少し緊張しながら。

「レストレーション」

音声信号を言いながら剉を流すと、俺の持っている錬金鋼に変化が起きた。

膨らみがどんどん増し握りの部分が自分に合わせられて、最適化されながら

その物体は重量感を出しながら姿を現した。

その物体の形は刀身の反りが深く、片刃であり

刃渡りは70cmはありそうだった。

そう俺が最初にしたのは武器の形は刀であった。

もちろん使った事などまったく無いが、理由何て物は特にはない。

それでも、これを見た時嬉しくもあったが、同時にひどく怖かった。

今まではあまり深く考えていなかったが

これは命を奪うための道具だと初めて実感が湧いたからだ。

もちろん料理をする時に包丁などを握った事はあるし、包丁でも命は奪えるが

あちらの本来の用途は料理などで、食料などを切ったりすることである。

でも、これは違^刀う。

刀は本来の用途で、命を奪うための物だ。普通の学生であった

俺は殺意を持って他の生物の命を奪った事などはない。

覚悟を決める。とよく言うが実際に体験していない物に対して決めた覚悟なんて酷く脆弱な覚悟だろうと俺は思う。

だから、俺はそういう事があるかもしれないという事だけは心に留めておこうと思う。

いつか来るかも知れないその日まで。

この世界でどうなるか俺には分からない。

命を奪った時に罪悪感で潰されるかもしれない。理不尽な事が起こるかもしれない。

身近な人が死んで悲しむかもしれない。無残に殺されるかもしれない。

それでも、その瞬間までは楽しく生きていこうと思う。

「よし！ やるか！！」

鍊金鋼をぎゅっと一層強く握りしめて俺はこの世界での修行を開始した。

現在から修行開始

原作開始まであと800年

第一話『現状把握』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

展開が遅いかもしれませんがなるべく早めていくつもりなので、もう少しお待ちください。

感想・批評・要望などがあれば喜んで受け付けますので遠慮なさらずにどんどん送ってください。

では、用語説明を

剋脈…腰の辺りにある剋を大量に発生させる「内臓」あまり酷使すると剋脈疲労がおこり意識を失う事などが起きる

脳や心臓と同じでここを破壊されると一撃で死亡する。

武芸者は強大な力を得る代わりに普通の人間より一つ急所が増えている。

剋路…剋が通るみちであり神経に並行し体中に全身に伸びている。

レストレーション…錬金鋼を起動するためによく使われる言語である。

剋や声は個人で違うので錬金鋼は一度記憶させたその人の剋と声でしか

復元できず使えば使うほどその持ち主にしか使えなくなる。

錬金鋼記憶する情報は専用の機器で記憶、消去、調整することができ、

この「武器としての錬金鋼の設定」の調整や、錬金鋼の開発、選定などを専門に行う技師もいる。（ここでの設定は最初の時の事務所で

渡した男がすべて調整しているので問題はない）

では、次回もよろしくお願いします。

第二話『試行錯誤の日々』(前書き)

またまた投稿させていただきました。

読んでくださったら感謝です

第二話『試行錯誤の日々』

それから修行を開始したのだが、やはりそう物ごとが上手くいく筈もなく、修行は難航した。

最初に一先ずの拠点がないと、この先の生活がどうにもならないのでそれを探す為に森の奥へと入っていった。草木を掻き分けながら進んでいると途中で水の流れる音がしたので、その方向に向かうと川を発見したので、緊張しながらも水を飲んでみると、飲む分には特に問題はなさそうだった。

ついでに顔を洗ってみると、その時水に映った顔が眼の色だけが元々黒色だったものが、何故か藍色に変わっているようだったが別に困る物でもないので深くは考えなかった。そして、

水が近くにあった方が何かと便利なのでそこを中心に活動する事に。雨風は防げないかもしれないが運がよくこちらの気候はよく暑くもなく

寒くもないのでしばらくは大丈夫そうだった。その後は今日は色々ありすぎて疲れてしまったのでそのまま地面に横になり寝むってしまった。

翌朝目が覚めて最低限の身支度を整えてから修行を開始する事にした。

まず、身体を造らないと、どうしようもないので最初はひたすらに筋力や体力
敏捷性などを鍛える事に専念した。腹筋や腕立てなどの筋トレはもちろんのこと

ランニングやダッシュをなどをしたが、筋トレ等は地味な反復練習をしなければならなかったのでこれが地味につらかった。

何事も基礎は大事というのは頭では分かっているつもりだが

それでもつらいものはつらかったので、少し修行のペースが落ちたりしたが

自分のなけなしの根性を振り絞ってなんとかある程度まで鍛える事ができた。

余談だが。この時にはあの人から貰った食料は当の昔すに尽きてしまったので

水は川から汲んでき、食べ物は川から魚を、そしてそこに生えている薬草？

などを食べていくことにした。もちろん現代っ子の俺は最初そこらの魚や草などを

食べるのにはひどく抵抗があったが食べないと、このままじゃそう遠くない内に

餓死するのは目に見えているので食べる事を決意した。

薬草の知識なんて物は全くないので見た目からして危なそうな物は除外し、その他の物を片っ端から採って食べてみたが

最初に食べたのが毒草であったかは知らないが、急に身体が熱くなり

意識が朦朧とし始め普通にやばい状態に陥った。その時はもう、ただ死にたくない

一心で剷を体中に流してみたらだんだんと熱が治まり始め、意識も回復したので

ひどく安堵したが、冷静に考えてみると今のはまぐれであつたとしても

ないりきけいかっけい
内力系活剷（以降「活剷」）なんじゃね？と思ひ

初めてやったのがあんなに情けない物なんて……と思ひ軽く鬱になつた。

そして魚の方だが、なぜかここに居る魚は変な物が多く一見してグロテスクな外見な物が非常に多かった。本気で俺はどこの世界を選んだのか（代償のため原作知識は持っていないので）非常に気になったが、背に腹はかえれないと思ひきつて食べてみる事にしたが

あいにく火や調味料などは持っていないので恐る恐る生で食べてみたら

腹痛が止まらなくなり、悶え苦しむことになつたが薬草の時と似たような状況

だったので同じ方法で内臓の機能を上げてなんとか治す事が出来たが初めての活剷の活躍場所が何か情けなさ過ぎて物凄く鬱になつた……。

とりあえず食事は、そこから食べてみてダメだった物を

食べないように注意しながら食べていたが、相変わらず食べる物は美味しくはないし

たまに体に異常が出るので散々な食事時間になつた。

それによつて、魚も薬草も嫌いになつたが、食べ続けなければ

生きていけなかったので食べ続けたが、食事は非常に嫌な時間であった。

次に修行をしたのは活剷を用いて、肉体を強化できるようにしていく鍛錬を始めていく事にした。先に肉体を強化するほうが、もし敵がいた

場合の時も攻撃などを避けやすくなったり生存率もあがるだろうという

理由で、この修行をすることにした。外力系衝剷がいりきけしょうけい（以降「衝剷」）は対象を破壊するための剷でそれと同じ理由で化錬剷かれんけいはそもそも習得が困難であるのでこの二つは後々に回す事にした。

物を仕舞う術式（次回からはボックス）の中には二つほど

手紙に（はっきり）書いていない物が、入っていてその一つが本だ。本といってもただの本ではなく剷や剷技けいぎに

関する事はぎっしりと書いてある、教科書のようなものだ。

それを参考にしながら活剷をちゃんと使えるように鍛錬を開始した。

最初は基本の剷息を行いながら、筋トレなどをしそのまま過ごす事にしたが

初めの方はつらく、一時間も持たない事が多く、中々進歩しなかったが

徐々に慣れていき、今では激しい運動をしなければ日常的に剷息を維持できるようになった。

剋息が乱れないようになれば剋の量や剋に対する感度が上がるしそれをすれば剋技の威力や無駄が無くなる等、やはり基本は大事なと感心した。

さて、それが出来るようになった後活剋で肉体を強化しようと試みたのだが。

これが予想外だったが、すぐに使えるようになった。

これには驚いたが、同時に納得もした。剋は身体の一部であり剋路というものが神経と並行するように全身に伸びているのである。

つまり、大抵の人間は神経を通して腕や足を当たり前のように動かすように

武芸者も当たり前のように、腕や足などに剋を流す事も出来るのだと思う。

それに事前に剋息をきちんとやっていたおかげでもあるだろう。もちろんまだまだ未熟だが、それでもすぐに出来るようになったのはありがたかった。

そして現在は活剋が大分出来てきたので、活剋をしつつ並行して衝剋の鍛錬をやっている所なのだが少し困ったことが起きてしまった。

(しかしこれどうしよう……)

度重なる鍛錬や時たま降る雨などで、俺の現在着ている服はボロボロなのだ。

これしかまともに着れる物が無かったからずっと今の服を着ていたのだが、それも限界が来てしまったようである。

とても、こんな姿で街中は歩きたくはない格好だ。

一応着る物はボックスにあるにはあるのだが……。

「だからって言ってもこれはないよなあ」

思わずそうばやいてしまったが、結局何を

ばやいても中身は変わらないので諦めてあの男がくれた

二つの内の最後の一つをボックスからだしてみると

目の前に二つの物体が姿を現した。

「汚染物質遮断スーツと戦闘衣はねえよ……」

そう。そこに入っていたのはこのセットであった。

一応これでも服の替わりにはなるが、汚染物質遮断スーツは体にぴったりと張り付くし、なによりこのスーツ半透明なのだ。

こんな物街中で着てたら普通に変態扱いされること必至である。

戦闘衣の方は別にそうでもないが、直接着るにはさすがに問題があるのですが、この二つをセットで着なければならぬのである。

それに、これら服の本来の用途は大気中にある

汚染物質のある場所で戦う時に汚染物質を遮断するための物でありこの世界のような汚染物質の無い場所では、ほとんど意味を成さないのである。

あの男は何を思ってこんなのを入れたのだろうか。

(でも、これ着るしかないか……)

だが、現状ではこれしか着る物がないのでこれで諦める事にした。
俺は大きいため息を吐いた後、緩慢な動作でその二つを着るのであった。

修行開始から50年経過
原作開始まであと750年

第二話『試行錯誤の日々』（後書き）

次の話は戦闘描写とまではいきませんがそれに近い物を書こうと思います。

うまく出来る自信はありませんのが頑張って書こうと思います。

では、用語説明を

ないりきけいかっけい
内力系活剋…剋脈で発生した剋は剋路を通ることで肉体のあらゆる能力を強化する力へと変化出来る技術。

がいりきけいしょうけい
外力系衝剋…体外の放出される破壊力を持った衝撃波へと転ずる技術。

かれんけい
化鍊剋…剋に特殊な変化ををあたえ風や火などにする技であり。習得が困難な半面非常に強力。

おせんぶつしつ
汚染物質…大気中や大地に含まれている謎の粒子状物質でこれに接触する自然界において全ての動植物が死に絶える、それは人間でも例外はない。

では、感想・批評・誤字脱字報告などはしてくれると嬉しいです。

次回もよろしくお願いします。

第三話『這い寄るモノ』

二つを着た後、さっさと修行を再開する事に。

さすが戦闘衣ってことだけはあるし、あの人が原作にあった戦闘衣よりは

頑丈にしてくれたかはどうかは分からないが、鍛錬ぐらいならまったく傷は

つかないし思ったよりも動きが阻害されないので鍛錬は問題なく続けられた。

そうそう今更ではあるが自分で決めて

おいた名前の紹介をしておこうか。

改めて自己紹介黒宮くろみやう 涼だ。

さて、あの時より続けている修行である衝剄であるが、

その時に使用している鍊金鋼には最初に復元した刀で行っている。

やっぱり、初めて自分自身で復元した鍊金鋼であるので、そのままこの刀を使い続けているのである。一応自分が指定した鍊金鋼は今使用している刀を除いて後10本があるが、それを今使用していないのは

別に今とっておいて後のお楽しみ！ によって訳ではなく、バラバラの鍊金鋼を使用して習得速度を遅らせるよりは

先に一つの武器を極めた後にやった方がいいだろうと考えたからだ。

（それに……今は一つに絞った方が尚更いいだろうしな）

そう思ったのはもちろん理由がある。

それは、この前に服を戦闘衣に着替えてから結構な時間が経ったあの日の事。

その時は、活剱の鍛錬をしていその途中に、強化した目が一つの人影を捉えたのだ。

その時には一瞬しか人影を見なかったのも、見間違えかと思ったが修行後で落ち着いた時に何度も思い返してみるも確かに人影であつたと思うので、人がいるという事を前提に考えてしていく事にした。

まず、こんな変な森の奥にわざわざやって来るようだし十中八九何か目的があつてここに来ているのだろう。

ちなみに。蛇足だが、今現在目を最大に強化して見える範囲は自身を中心にざっと半径3kmが限界である。

だとすればだ。ここに来た人物がこちらに危害を加えないとも言えないし

もし来たとしても、活剱だけでもなんとかなるかもしれないがちゃんと武器を使えるようにはしといたほうが更に確実だろうしな。

いくら、俺がこの世界の知識がなくて何も分からないからと言っても、俺はこの到という能力をあの人から貰っているのである。

この力は何も能力などが無い世界では異端過ぎる。そして、強大だ。俺も能力等がない何もない世界を選ぶなんて鬼畜な事はさすがの俺でも

たぶん……きつと……おそろくだがしないだろう。

だから、この世界にいる人たちも

十中八九何か能力は持っているんだろう。

次に何故ここに人が来ているかが問題だ。最初に俺がトリップする時の希望に

【魔物などに類する生物や人などが居ない

場所であり、ある程度安全な場所である事】を希望したはず

なんだが。もしかして、その時は希望通りだったが

時間が経ち過ぎて、もうここは安全じゃなくなってきたって事か？

もし、そういう事ならこれを機に前から行きたかった

旅にそろそろ出るのもいい機会かも知れない。と呑気な事を考えていた。

そういう理由から、より一層修行に身をいれているのである。

活剄による肉体強化で前方の樹に向かう。地を踏みしめながら思いっきり足を踏み込み、地面を陥没させながらそのまま直進し樹に激突する寸前にその樹に向かい跳躍。そして足を樹の側面につけ、その勢いで樹がしなった状態から元に戻る反動を利用し樹に弾かれる直前に。

――――内力系活剄ないりきけいかつげいの変化……旋剄せんげい。

足を集中的に強化し、さらに急激的に自身を加速。他の樹に向かい、その樹に激突しそうになる時にさっきと同じ行動を繰り返した。

常人から見たら樹が独りでに激しく揺れているようにしか見えないだろう。

それほどの速度で動いているのである。

それを何回も繰り返しふいに一際大きく樹をしならせ空中に跳躍。空高くに舞い上がりそして身体が重力に引っぱられ落下し始めた時に空を滑空するような体勢を取る。

――――外力系衝剄がいりきけいしょうげいの変化……背狼衝はいろうしょう。

背中から衝劔を背後に向けて放ち、反動で爆発的に加速。
そして右手に持っている刀の切っ先を地面に向け。

――――がいりきけいしやうけい外力系衝劔の変化……轟劔。ごうけん

膨大な劔を練り上げ刀に纏わせ大きさ3mぐらいの長大な劔を作り出す。

そのまま地面に激突する瞬間に、纏わせていた劔を地上に向けて放出。

その一帯が揺れるほどの衝劔を放ちその反動で衝撃を緩和し地面にゆっくりと着地。

「ふう」

息を整えながら今の鍛錬の成果を考える。

（活劔は何とか様になってきたな。あの速度で動いても樹にまったく激突はしなかったし、ちゃんと俺の反応も追いついてる。とりあえず敵が余程馬鹿みたいに強く無い限りは最低でも生き残れるぐらいはなんとかなるだろう）

いつ来るかは分からないので早めに仕上げれて良かったが。

（でも、刀の扱いなんて素人に毛が生えた程度だしなあ。

まあ我流だから上達速度が遅いのはしょうがないか……)

劉技の方は教科書？を参考にしているので上達は早かったのだが、刀の扱いはその本に書いていなかったで自分の想像だけで、振っているだけなのでまだまだなのである。

(このままじゃまずいな……。師匠とか居たら良かったんだが贅沢は言えないし諦めるしかないだろう。最悪の場合は

戦闘の中でその刀の扱い方を覚える必要があるかもしれない……。か)

そうしてこれからの事を考えていたが、今は目先の事が大事なのでその考えはとりあえず破棄しておく。それよりもこの間見た人影について思考を巡らすが。

(でもまあ、見えた人影も前に見てから全然見ていないしそれにまだ戦うと決まった訳でもない。

人型の生物ならちゃんと意思疎通とかできるだろうし)

最終的に楽観的な考えになった。

でももし、もしも戦闘になったらその時俺は一体どうするんだろう……。？

(ああもう！！ やめやめ！ その時にならないと分からないし今から悩んでもしょうがない。さっさと寝よう)

そうしてその日はそのまま身体を川で洗って体を綺麗にしさっさと寝る事にした。

でも、俺はその時強くなって調子に乗ってたんだろう。
結局俺がしていたのは鍛錬であって俺はまだ一回も
殺し合い
戦闘をしたことがないって事を。

修行開始から100年経過
原作開始まであと700年

第三話『這い寄るモノ』（後書き）

次は戦闘描写がありますが初めてなので
そんな、うまく書けないと思いますのでよろしくお願いします

では、用語説明を

旋剄せんけい…脚力を大幅に強化し、高速移動する。爆発的な速度を生み出
せるが

ほぼ直線にしか移動できないのが欠点。

背狼衝はいろうしょう…衝剄を背後に向けて放ち、反動で加速。

轟剣ごうけん…剄を練り上げて剣にまとわせ、長大な剣を作り出す。
剣を扱う武門ならどこでも覚えられる技。

第四話『邂逅』（前書き）

今回初めての戦闘描写です。

初めてなので変な所などがあるかもしれませんが
これから頑張って上手く書けるようにがんばるので、
長い目で見てください。

では、どうぞ。

第四話『邂逅』

深夜寝ていると急に目が覚めた。別に虫の知らせという訳ではない。単純に周囲に接近してくる複数の気配を感じたからだ。

戦闘がおきると決まった訳でもないのに、体が竦みそうになったが、それを必死に我慢し正確な人数を調べてみると、

(1、2、3……………分かる範囲で8人か)

向こうの出方が分からないのでこちらから仕掛ける訳にもいかない。寝た状態のままいつでも動けるように活剏を体に流し、ボックスから待機状態の鍊金鋼を出しておく。

ここで鍊金鋼を復元しないのは復元時の発光現象によってこちらが起きているのを相手に気づかれてしまうからだ。

そうこうしている間に気づいた時にはすでにあっという間に自身の周囲は囲まれてしまっていた。

(くそっ!!　こんなのいつもならすぐに気づくはずなのに!)

悪態をついても現状はどうしようもないのでとりあえずこの状況はどう考えても

まずいので逃れようと体を起そうとした瞬間に急激に到とぎのような物の気配が膨れ上がり。

「風の精霊45人。縛鎖となって敵を捕えろ。」

『『『魔法の射手・戒めの風矢!!』』』』』

『火の精霊55柱：『『『魔法の射手・連弾・火の55矢!!』』』』』

緑色の矢のような物が先行し、その後ろから同じく赤色の物が数百本こちらに狙いを付けて向かって来ていた。

（いきなりかよっ!? 何だ盗賊みたいなのか!?

警告も無しに撃ちやがって! 殺してから奪えばいいってことかよ!!

いや、今はそんな事は重要じゃない。それよりさっきあいつらが言っていた

言葉は漫画とかで見た魔法とかの詠唱か? ということは、

ここは魔法の類がある世界か!?)

内心驚愕しながらも、あれにどんな効果があるか分からないし分かっていたとしても受ける訳にはいけないので、そのまま後ろに

跳び

回避しようと試みたが。

（くっ! いつも通りに動かない!!）

修行の時のように体は動かなかった。

【スポーツなどでもそうだが精神面は非常に重要な物
メンタルめん
である。緊張しすぎたり何か他の事が気にかかったりしながら

やると集中力がすぐ切れたり、体が思うように動かなくなり自身の本来の力が出せなくなる時がある。黒宮が陥っている状況は戦闘とスポーツの違いはあるが黒宮自身まさにそれと同じ状況であった。」

予想より跳んだ距離が短くなり、危なかったが幸い矢の方は避けきることが出来た。

矢の着弾により飛び散った木の破片や、石礫が襲いかかってきたが、そこは

着ている戦闘衣のおかげで負傷はしませんでした。

だからと言って安心なんて全く出来ないで、足を止めないように走りながら。

「レストレーション！」

このままではまずいので、錬金鋼を刀の形に復元し拙いながらも刀を走りながら構えた。中々言う事を聞かない体無理やり動かし、

敵の方の様子を見てみると向こうは次の魔法？の詠唱をしているようだが、わざわざ待つてやる必要もない。

刀を振るい衝剄を敵の一人に向けて放ってみたが、それは奴らに命中する前に何かに阻まれてしまった。

（なんだっ！？ 壁みたいな物でもあるのか！）

敵の詠唱を中断させる事が出来なかったので、

このままではまた魔法？が飛んできてしまうので。

「それならっ！！」

――――ないりきけいかっけい内力系活剄せんけいの変化……旋剄。

足を強化し爆発的に加速。一気にその敵の一人の眼前に躍り出る事が出来た。

向こうは俺の速度が予想以上に速かったのか固まっているようで、隙だらけであった。俺はそのまま刀を振り下ろそうとしたが。

――――人を殺すのか？

「っ！！」

そう頭の中をよぎった時。一瞬怖くなり思わず手を止めてしまった。

もちろん敵がそんな隙を逃すはずはなく。

奴らの一人が今までしていた詠唱を中断し。

「魔法の射手・雷の三矢！！」

先ほどとは色が違い黄色で、かなり本数が少なかったが、その分発動する

スピードが速い。俺との距離も近く、隙だらけであった俺に避けられるはずもなく。

「があ！！」

見事に命中してしまい、その衝撃で弾き飛ばされ樹に叩きつけられた。

直撃した所の戦闘衣が少し壊れてしまったが、戦闘衣のおかげかどうかは分からない

が、体には大した怪我は負っていないようだ。だが、どうもさっきの物に電気の特徴が

付随しているのか、体が痺れて思ったように動かない。必死に体を動かそうとするが

そこに、先の魔法を放った一人以外の奴等はずっと詠唱を続けたようである。

「契約に従い我に従え炎の覇王。来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとぼしれよソドムを焼きし、火と硫黄、罪ありし者を死の塵に。

『燃える天空』！！」

そして、赤い光線が俺に向かって放たれた。

まだどんな力なのかはつきりと正体は分からないがそれでも、感じる力は

ここら一帯を更地にする分には十分な威力を持っているようだ。

ここに來た時にこういう事が起きるかもしれないってのは俺も分かっていたはずだ。それでも、ただまだ分かっているつもりだったんだろう。その結果がこれだ。

（こんなすごい力を貰^劉って何て無様！！）

その時俺はこんなときに考える事ではないが自分に対して怒りを覚えた。

そして、何よりもこんな所で終わるなんて俺は絶対に許容出来なかった。

（生き残りたい？　なら、さっさと障害を排除しろ！

殺すのが怖い？　そんな考えは捨てろ！　奴等は俺に敵対してきたんだ。

だから今はとつとこの状況を覆せ！　黒宮　涼！！）

そうして自分に気合を入れ終えた時

この一帯の森は爆発に包まれた。

第四話『邂逅』（後書き）

この小説を書いて思ったんですが、

やはり中々お気に入り登録や総合評価は伸びませんね。

展開が遅いのか、文章が読みにくいのか、

ただ単純につまらないのか色々理由はあるかもしれませんが、

出来れば、そういうのをやっていただけたら自分のやる気も上がる
ので

やってやってもいいという方は是非お願いします。

それでは次回のお話の時に。

第五話『生存を掛けて』（前書き）

今回の話は皆様に不評かもしれませんが。

もし変な所などがあっても気にせず読んでくださったら幸いです。

それと最初の方微妙に三人称視点にしたつもりなんです
がちゃんとなっていますかね？

ではどうぞ。

第五話『生存を掛けて』

その時男達はひどく焦っていた。

男達は今まであまり大人数の相手に戦わないように

数が少ない旅人や商人などを中心に、盗みや殺しなどを働いていたが、

ある日仲間内の男の一人が自分達の力を過信したのか、それとも調子に乗ったのか

どちらかは分からないが、更に大規模な人数を襲撃しようと提案した事から

男達の歯車は、ずれはじめた。

男達はそこまで強くはなく、基本的に数に物を言わせて攻撃する

戦法だったので同じ人数での戦闘はあまり慣れておらず、更に言えば男達は

調子に乗り慢心していたので男達は自分達が襲った集団によって返り討ちにされた。

男達は大打撃を受け仲間の数も大幅に減らされた。残った数人で必至の思いで

逃げていた時に着いたのが、この森であった。

この森にどんな危険があるのか分からないので、慎重に注意しながら進んで行くと、

驚くべき事にこの森には魔獣など危険な生物がまったくいないの

である。

男達はこれ幸いここをしばらくの間
ここで身を隠そうとした時にその奥に先客がいたのである。

もちろん、こんないい所を逃すのはあり得ないし、男達も焦っていたので

短絡的にその人物をさっさと排除しようとしたのである。

前の戦闘で疲労した体をしばらく休めた後に、先客に対し攻撃を開始した。

幸い向こうは一人だったので男達は念話でお互いに連絡をとり、
連携をしながら一気に攻撃を仕掛け、止めに

広範囲焚焼殲滅魔法こうはんい ふんしょうめつ まほうを放ち勝利を確信した。

広範囲焚焼殲滅魔法こうはんい ふんしょうめつ まほうは本来個人に向けて

使用するものではなく、文字通り広範囲に超高温の炎を発生させる
ものである。

男達はこれを複数人で協力し詠唱して放つため時間が掛かるが、
それゆえに男達にとってのいわゆる切り札である。

ゆえに油断が生まれた。

突然夜空が輝いたかと思うと、男達の誰一人が気づく事も無く
仲間が縦に真っ二つになり、中身を零しながら体が左右に倒れたの
である。

男達は一瞬呆気にとられたが、すぐに体勢を立て直し輝いた方向に視線を向けたが、そこには夜空が見えるだけで何もおらず、そうしている間にまた一人味方が血を噴き出しながら絶命した。

二人も死者を出した時にやっと男達は襲撃者の姿を捉える事が出来た。

そいつは、全体的に黒かったが、ただ一か所だけ色が違った。

平時の時に見たら綺麗に見えるはずだが、夜の闇の中でも映えるその藍色の目はその時の男達には何故かひどく恐ろしく感じた。

s i d e .. 黒宮

時は少し遡り。

このままでは死んでしまうので、活剷を体に流し素早く痺れから回復。
言う事を聞くようになった体で、俺は眼前に迫る脅威から逃れる為に。

――――内力系活剄ないりきけいかっけいの変化……水鏡渡りみかがみわた。

さっきの状態がまるで嘘のように体が動き、砂埃を巻き上げ俺の姿が消えた瞬間旋剄せんけいを超える超高速移動を成し、次に俺が姿を現したのは空高い空中であつた。

空中に着いた瞬間。先程まで自身が居た場所で凄まじい爆音が周囲に響いた。

（敵の一人一人は別に大した事はない。が。俺は戦闘せんたいは初めて。実戦経験では向こうには圧倒的に負けてるだろう。

思わぬ所で足を掬われるかもしれない。……ああもうっ！！ぐだぐだ考えたってしょうがない！　こうなったら！！）

「出たところ勝負だ！」

そう言った後に、刀を振りかぶりその刀身に剄を収束させ上段から刀を素早く振り下ろす。

――――外力系衝剄がいりきけいしょうけいの変化……閃断せんだん。

斬線の形のまま薄く凝縮された剄を放ち、今度は壁みたいな物に弾かれる事も無く

そのまま敵の一人を真つ二つにした。その事に思う事が何もなかったと言え
ば嘘になるが、今は戦闘中なのでそんな考えはすぐに頭の中から無くなった。

敵がこちらに気づく前に素早く剄を収束し、更にもう一度。

――――ないりきけいかっけい内力系活剄の変化……みかがみわた水鏡渡り。

超高速移動を成し一瞬で敵の一人の傍に着地。

相手の胴体に向かって型何もない、力任せの刀を振り抜きまた一人絶命させる。

返り血は体表に纏っている剄のおかげで、浴びる何て事はなく弾かれたので着く事はなかったので変な所で安心した。

この時にはさすがに敵に気づかれてしまったが、長期戦は最初からする気がないので

活剄により強化された、肉体で土を蹴り僅かな土埃をたて消えた後、敵の内の一人の背後にまわり袈裟がけに刀を振り下ろしました一人敵を殺した。

（後五人っ！！）

だが、さすがにここまで時間が経つと敵も反撃をし始め。

『『戦いの歌!!』』

五人の内二人が俺を足止めし、残りは詠唱をするようである。

向かってくる二人は何らかの肉体強化を行っているのか、常人では、考えられないようなスピードで来たが。

（それでも遅すぎる！）

【魔法とは修行すれば個人によって異なるが大なり小なり使えるようになるものである。だが到は本当に限られた人にしか使えないのである。魔法は精神の力と術式で大気に宿る自然エネルギーを従えて行使する物でありそれによって得た物を様々な用途に活用できるものである。対して到は完全の個人の力であり用途が自分の肉体の強化や破壊である。なので、魔法の方が肉体の強化などにおいては圧倒的に到の方が強大なのである。】

二人が旋到^{せんけい}?もどきで俺を挟むように移動し、剣を一人は横なぎに振り、もう一人は縦に振り下ろしたが。

「なにっ!!」

男達が切ったのは俺の残像であり本体では無く、その時すでに俺は

空中にいた。

そのまま刀を空中に軽く上に放り投げ、そこで身を捻り下にいる二人の頭を掴み
掴んだ手から剄を流し込む。

二人から声にならない悲鳴があがり、その後男達の全身が徐々に膨れ上がり、

そしてそのまま破裂。人間だったものが飛び散った。

————がいりきけいしやうけい外力系衝剄の変化……はくどうしやう爆導掌。

まだそれほど威力は出ないが、一人一人を破裂させるぐらいの威力は十分にある。

空中に放りなげた刀をキャッチしながら地面に着地し、
詠唱をしているはずの残った三人を探そうとすると、

「目醒め現れよ燃え出づる火蜥蜴、火を以ってして敵を覆わん。『
紫炎の捕らえ手』！」

右方向から剄に似た気配を感じたので、首を向けて見ると円筒状の火柱がこちらに
向かって飛んできていたが、着地した直後で動けない瞬間だったの
で、避けられず

命中してしまった。かなりの痛みを覚悟していたのだが予想していた

痛みはなかったのでさっさと動きだそうとした時。

「これは!？」

自身の体はその火柱によって捕えられて体が動けなくなっていたのだ。

それに、その捕えている炎によって焼かれる心配はなさそうだが、それでも、サウナのようにかなり暑い。

（捕縛する類の物か!! って待て待て!

という事は次に来る物は!?)

そう俺が思った次の瞬間には先程とは反対の方向から。

「闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ。『白き雷』
!!」

「炎の精霊47柱、集い来りて……『魔法の射手・連弾・火の47
矢』!!」

攻撃が放たれており、その内一つは白い稲妻のような物が放射されているようで

先に俺が当たった物と違い充分に殺傷力がありそうなものであった。そんな物をあたってやる訳にはいけないので。

「はあっ!!」

全身から衝刺を放ち自身を拘束していた炎を吹きとばす。

そのまま攻撃を避けようとはせず、現在で唯一実戦で利用できるであろう

混合剄技である技を使用した。その瞬間おれの姿は掻き消え。

————かつけいしょうけむんごうへんげ活剄衝剄混合変化……らいじん雷迅。

活剄により強化した肉体で轟音を響かせ、超高速で敵に向けて突進しながら衝剄を放ち、それにより周囲の物を破壊し、あちらの攻撃もすべて粉碎した。
向こうの敵が反応する暇もなくその間を駆け抜け、
駆け抜けた時に発生した雷光に触れ敵二人は爆散した。

そして、雷迅を停止させるため足を踏ん張り、地面に足をめり込ませながら急停止し、残った最後の敵の方を見てみると。

「ひいっ!!」

引き攣ったような悲鳴を出した後、
慌てて懐から符?のようなものを出した瞬間足元に魔法陣?みたいな物が
浮かび次の時にはそこに敵の姿は無かった。

若干呆気にとられながらもとりあえずは、

すべての敵を倒し終えたので、到息を整えながらも周りを見まわしてみると

辺りはひどい有様であった。地面は抉れ、木は軒並み破壊されており、

ここから離れた場所では敵による光線により森が燃え、辺りを照らしていた。

森はこのまま燃え広がられるのはまずいので、

これ以上被害を広げられないようそのまわりの木に

衝動をぶつけ破壊して回りこれ以上燃え広がらないようにしておいた。

消火活動が終わりさっきの場所にいく場所に戻ってみると

そこには、そこら中に血潮が飛び散りさっきまで生きていた物があった。

「……」

それを見て、改めて人を殺したという事実をまざまざと

突きつけられ気がして少し気分が沈んだが、ただ後悔だけはしなかったし、

殺した敵に対しても特に思う事はなかった。

俺はこんなに薄情な人間だったか？と思ったが、よく考えれば俺が

この世界に来てもう百年ぐらいも経っているのである。

そこまで時間が経てば考え方ぐらい変わったのかも知れないが、

その自身の変化について別段俺は悲しいとも思わなかった。

俺がそんな事を考えていると、急に体に倦怠感と眠気が襲ってきた。

やはり初の実戦であったので、自分が思っているよりは精神的にも肉体的にも疲労しているようだ。

俺はその感覚に逆らわずそのまま体を休める事にした。
瞼がだんだんと下がっている中俺は。

（起きたら旅にでも出るか……）

何てことを思いながら目を閉じた。

修行開始から100年経過
原作開始まであと700年

初の実戦終了。

第五話『生存を掛けて』（後書き）

主人公があっさりすぎかも知れませんが、そこは吹っ切れたと言う事で納得してくださいとありがたいです。

そして肉体強化などの部分は完全にこちらが考えた物なのでもしかしたら皆様の考えている物とは違うかもしれません。

それでは用語説明を、

水鏡渡り^{みかがみわた}…瞬間的に旋廻を超える超高速移動を行う。

閃断^{せんだん}…斬線の形に衝撃波を飛ばし、進行上にあるものを両断する。

爆導掌^{ばくどうしょう}…相手の体をつかみ、そこから廻を流し込み体を内側から爆砕する。

雷迅^{らいじん}…活廻による超高速の突進と共に衝廻を放ち、その衝撃波であたり一帯を破壊する。その際、移動と廻による空気との摩擦で周囲に

雷光が撒き散らされる。半端な能力で使うと旋廻とさほど変わりない、

ただ速いだけの攻撃になってしまう。

今更ですが雷迅って刀でも使えますかね？

まあここでは使えるという事でお願いします。

では、また次回のお話で。

第六話『探究』（前書き）

今回は少し時間が飛びますので。

それと出来ればいいんですが、主人公の二つ名を決めたいので皆様が送ってきてくださるとありがたいです。

自分でも考えているんですが中々いいのがうかばないので。

それでは今回も楽しんでいただけたら嬉しいです。

第六話『探究』

明けて後日。目が覚めてからすぐに戦闘衣を脱ぎ昨夜の戦闘で汚れた体を川で綺麗にした後、改めて戦闘衣を着てみると何故か戦闘で破壊された箇所が直っていた。

これには少し驚いたが、たぶんあの男が何かやってくれたんだろうと思ひ素直にありがたく思った。

体を綺麗にし終えたので昨日の戦闘を振り返って一人反省会。

俺はこの世界の事を知らなすぎなのである。そのせいで戦闘では敵がどんな攻撃をしてくるのか分からずかなり苦戦し情けない物になってしまったし、おまけに実戦経験も足りなさすぎる。

その事も踏まえて前々から考えていた旅に出る事にした。

すべての準備。とはいってもボックスに長持ちする食糧を入れるだけなので

大して手間もかからず、すぐに準備は出来た。

旅に出る前に後ろを振り返り今まで居た所を見て若干感慨にふけた後ここを出発した。

そこから様々な場所へ旅をしながらその途中に、襲ってくる魔獣などを撃退し、それを売り捌き服などを買いながらこの世界について調べてみた。

まず、あの時襲撃してきた奴等が使っていた攻撃方法はやはり俺の考えていた魔法で間違っていないかったようだ。

調べてみると魔法を使う者は基本的（例外あり）に偉大な魔法使いを目指している者が多いらしく、世の為人の為陰ながら魔法を使い人助けなるものを

しているようだ。でも、こういうのは自分からなるものじゃなくやっっていく内に

自然に呼ばれるようになるもんじゃ、と思ったが俺には関係ないのでどうでもいいかと思いきいしない事にした。

そして、魔法の用途は多岐にわたり攻撃・防御・索敵等々かなり凡庸性が高く、戦闘関連にしか使えない俺からしたら、少しだけ羨ましかった……。

ついでに言うところの世界には魔法の他に「気」という物もあったがそれについてはこちらの劉の方が自分的には使いがてがいたので、気に関してはあまり興味が湧かなく調べる事はしなかった。

次に分かった事だが。何とここは地球ではなかったのである。

これにはかなり驚愕した。変な魚とかいたが、まさか地球ですら無いとは。

そして、調べてみると、この世界の名前は魔法世界ムンドウス・マギクスという

名前の世界であるようだ。ついでにだが、この世界にも地球はあるようにここでは

旧世界と呼ばれてる様である。ムンドウス・ウェトウス

この世界には人間以外にも亜人や魔獣、果てには龍種なども存在しているようだ。

俺が最初に修行していた所は、ヘラスという帝国の奥深くの場所であつたようである。

ヘラスの他にも、自由交易都市グラニクス・遺跡発掘者たちの街ヘカテス・

テンペテルラ・魔法学術都市アリアドネー・超巨大魔法都市国家メガロメセンブリア。

そして、世界最古の国オスティア・ウェスペリタティア王国。などが存在している。

話は変わり現在の修行成果だが、刀を使う劉技においては、全て最低限実戦で

使えるぐらいにはなり、活劉の方もあの頃より更に高めることがで

きた。

刀の扱いは全て実戦で叩き上げになっており、ちゃんと剣を習っている人から見たらひどく歪に見えるかもしれないが、俺はこれで満足しているので良しとしている。

そして現在は以前の状況より切迫している状況ではないのでとりあえず

すべての武器をローテーションしつつ鍛錬をしている。

まあその事については別に後で構わないだろう。

そうそう、俺としてはかなり遺憾なことなんだが、何故だか俺は賞金首になってしまっている。いつもと変わらず野宿していると突然襲撃

された時はいきなりなので、かなり驚いたが前回の事もありすぐに対応し

無力化した。最初はただの物取りかと思ったが、その内の一人に何故俺を襲撃したの

かを聞く（脅迫とも言う）と、何と俺には賞金が掛かっていると言うでわないか。

それに、驚いたが何故賞金が掛かっているのかも聞き出すと、どうも最後に逃げた時

の奴が有り金すべてで賞金を俺に懸けたせいらしく、それを聞いた時はあいつを

逃がした事をひどく悔やむ事になった。

それからというものの街に買い出しなどに行く時には、

目立たない服と目にサングラスを掛け更に、殺戮さつげいを用い気配を消しこそこそと買い物に行かなければならないという散々な目に合うよ

うになった。

更に色んな奴等から襲撃されるようなり、それに対して大抵の奴は追いつかぬか、

こちらが逃げるかをして撒いているがあまりにもしつこい奴は、残念ながらこの世界からご退場して貰っている。

それに加え俺の容姿が昔からずっと変わらない事もあり、自分も不老不死（別に不死ではない）の方法でも手に入れたいかはたまた、ただ単純に

偉大な魔法使い側でいうとこちらが悪だからなのか分からないが、最初は

50万ドラクマしかなかった賞金だったが、そこから徐々に膨れ上がって来て、

今じゃ250万ドラクマにまで上がっている。

蛇足だが俺の基本的な格好は靴は動きやすい物を履き、下は黒のズボンを履き、

上は白のTシャツを着その上に黒のジャケットを着ている。

余り服についてはこだわりがないので他のも似たような物だ。

そして今現在。

中々大規模な数の敵に襲撃されたのだが。

「な、何なんだ！　これはっ！？」

「ぎゃあああああ！！！！」

「や、やめろ！頼むからやめてくれえええ！！」

その場は阿鼻叫喚に包まれていた。別に俺はその場から動いてる訳では無い。

と、いうのも今現在使用している鍊金鋼というのが鋼糸こうしである。

傍から見たら手に革製の手袋を付けているだけで、ただ突っ立っていて何もしているようには見えるが、よく見ると両手の指先から無数の鋼糸が出ている。

ただでさえ研ぎ澄まされた鋼の糸は圧力と摩擦によって人の肉を切る事が

出来るのだ。その鋼糸に剄を走らせて自分の肉体のように操作出来るので、

自由自在に操作もできるし、爆発的に殺傷力は高まるのだ。その結果が

この阿鼻叫喚に包まれた目の前の惨状である。

とはいってもだ。まだまだ操れる本数は少なく最大でも

1000本ほどしか操れない上に、威力も心もとない。

これより更に鋼糸こうしを出す事は出来るには出来るが、まだちゃんと操

る事が出来なく

それにより操作を誤まってしまう自分の身等を傷つけたりするので、これ以上は

出していない。もっと鍛錬が必要だなと今後について考えるが。

（まあ今はこれだけでも充分みたいだな）

眼前の光景を見てそう思う。奴等は必死に鋼糸を切ろうとしているみたいだが、

威力の低い攻撃では纏わせている到によって弾かれるてしまうし、通りそうになってもそこは糸なので、糸をしなれば簡単にかわす事も

出来るので結局は切る事は出来ない。仮に切断してもたかが数本では焼け石に水。

そんな事を考えながら敵を鋼糸を操作し次々に敵を切り刻んでいると。

「調子に乗るな！ この！ 化け物がっ！！」

来たれ地の精、花の精、夢誘う花纏いて蒼空の下

駆け抜けよ一陣の風『春の嵐』！！」

鋼糸から空中に逃れていた敵の一人が、高位の呪文を放ってきたので、

攻撃していた左手の鋼糸を防御に、右腕の方はそのまま他の敵の排除に回し、

左手の鋼糸を複雑に組み合わせながら蜘蛛の巣状に防御陣を形成。

敵の攻撃魔法は見事に防御陣に命中した。

「そん……な。馬鹿なっ!!」

敵の攻撃魔法はただ命中しただけであった。

魔法は鋼糸の衝剄によって弾きとばされ、それにより発生した衝撃は放射状に張られた鋼糸により地へ流されて向こうの攻撃は何一つとしてこちらに通る事はなかった。

「化け物……ね。一体その何が悪い？」

そんな特に意味のない事を言った後、
右手にある鋼糸で攻撃呪文を放った相手を細切れにした。

その後、何の問題も無く敵を全滅させた。あの場所に留まっても意味がないから、
さっさとその場から去りそのまま、また気の向いたまま旅をしていて途中にあった山に寄り歩いていると。

「ん？」

視界の端に映った物が気になりその方向を見てみると

そこには木々に隠れたようにひっそりと入り口があった。
俺は自身の好奇心の赴くままその中に入って行った。

旅に出してから120年
原作開始まで後580年

第六話『探究』（後書き）

国の事ですがもしかしたらまだ無い国があるかもしれませんが作者の勝手でもう存在することになりました。

春の嵐が高位の呪文かは作者が勝手に決めましたので。

それでは用語説明を、

殺^{さっけい}剄…多くの武芸者が使用する気配を消す方法。

第七話『弱肉強食』

入り口に入ろうとすると、その手前の地面に魔法陣があったが見る限り機能していないようなので、気にせず中に入る。中を見てみると

入口の辺りは外からの光によってまだ何とか見えるが、それより先には

光源はなく真っ暗闇でありなかなか苦勞しそうである。なので俺は。

「レストレーション」

鋼糸の鍊金鋼を復元。半数程の鋼糸を眼前の暗闇に向かい先行させた。

何故ここで鋼糸を復元させたかと言うと、鋼糸は敵を切る事にも、もちろん使用できるが、その鋼糸に走らせた剄を神経の代わりにしその鋼糸の触れている所から情報をもたらせてくるのである。

それを先行させることによって視界よりは劣るかもしれないが広範囲の情報を得る事が出来るのである。

鋼糸を先行させながら進むと、怪しげな魔法的な物や普通の罠などを多数

発見したが、こっちは事前に察知しているので回避出来る物は回避し、

回避しきれない罠は、離れた所から鋼糸で切り刻んだり衝剄で破壊しながら進んだ。

「しかしここ何の為に造られたんだろ？」

入り口にあった奴は多分だが入り口を隠すための物なんだろう。外だった分、中の物より劣化が激しくって機能できなかったんだと思うが。

それに内部にも罠等がある事から、おそらくだが何かを守る為にあるんだろう。

その守っている物がどんなのが気になるところだ。

そうしながら道を進んでいると鋼糸が暗闇じゃなく光を

捕えたので、その壁に鋼糸を引っ掛け、身体を一気に引っ張り傍に着地する。鋼糸を待機状態に戻してから、鍊金鋼をボックス内にしまつて

新たに一番使い慣れた刀の鍊金鋼を出しておいた。

そして、出た場所を見まわしてみると、そこは魔法によって光源を確保

しているのか、今まで進んできた通路とは違い、外と変わらないぐらゐの視界は

得られるような所であつた。その場所も今まで進んできたような狭い通路では

なく、無駄に広い場所であり上下左右で軽く3km以上はあり、その奥の方に何か

台座のような物があるようだ。なので奥に進みながらこの場所について考えるが。

（明らかに何かありそうだなあ……）

そうなのである。こういう所ではお約束で番人みたいなのが出てくる物だ。そうは言ってもだ。そういうのがあったとしても行きたくなるのはやはり俺がオタクだからなのだろうか？

そんな事を考えながら奥の台座に向かって進むと、突然足元に巨大な魔法陣が浮かび上がり発光し始めた。

「やっぱりそう来るかつ！！ レストレーション！」

俺は素早く魔法陣の範囲に入らないよう後ろに跳び、鍊金鋼を復元した。

そうして復元した刀を構えながら、中から何が来るのかを警戒しながら待っている

徐々にその姿を現した。その姿を見たとき思わず。

「おいおい……。何てもん出すんだよ」

何て事をつい言ってしまった。そう言ってしまった俺はしょうがないと思う。

魔法陣から現した姿は龍であった。もちろん今までに龍種には何度も遭遇した事もあるし戦闘もした事はあるが。

エインシバリタボゴサージャ
「古龍龍樹はねえよ……」

そう。それはいつかのヘラスで見かけた古龍と同じ姿だった。

いや厳密には少し姿は異なり色は全体的に赤黒く、大きさは二回りほど小さかった。

それでも感じる力はヘラスで見た物に比べ力が劣っている何て事はなく。

それどころか超えているかもしれない。

『シャギヤアアアアア！！』

「……はああ」

あちらは鼓膜が破れるかと思う程の大音量の咆哮を上げ、こちらは溜息をついた後にどちらも戦闘体勢をとった。

古龍はその巨体から出るとは思えないスピードで、地響きを立てながら

こちらに突進をしてきた。その自身の重量により俺を押し潰そうとするので、そのまま

上空に跳び突進を回避。

「まずは小手調べ」

そのまま身を捻って刀を古龍に向かい振り下ろす。

一一一一一 がいりきけいしやうけい 外力系衝剄の変化…… しんけい 針剄。

刀を振り抜いた勢いにそって針のように鋭く尖らせた剄を放つ。
針剄は古龍の頭蓋を穿とうとするが。

「無傷ね……」

古龍は煩わらしそうに頭を振っただけで大したダメージはなさそうだ。

それどころか逆に怒りを増しただけのようだ。

そして、そのまま振り返り視線だけでも人を殺せるような目を俺に向けたまま
口を開き、その口内の奥が光輝いた瞬間。渦状の極太の光線を発射した。

「……ッ」

あんな物当たりでもしたら身体をばらばらに引き裂かれてしまうので
空中で足から思いっきり衝剄を放ち、その反動で横に跳ぶ。直撃は
避けたが

その横を通りすぎた際の余波だけで体を切り刻まれてしまった。
着地した後身体を状態を確認してみると、体のあちこちを切り裂かれていた。

古龍のブレスはそのまま空中に向かって直進した後霧散した。

「痛ってえ……。何ちゅうもん撃ってくるんだよ」

余波だけでこれである。直撃したら体はずたずたになり即死は免れないだろう。

古龍はその後、ご自慢の羽で空に飛び上がり、かなりの高度を保ちながら

そのままブレスを放ち始めた。

「くっそ！ めんどくさい事を！」

上空から降ってくるブレスを避けながら悪態をつく。

このままでは向こうから一方的な攻撃をされるので、古龍からのブレスを

回避しながら一旦刀を待機状態に戻しポケットに入れておき
素早くボックスから新たな鍊金鋼を出す。

「レストレーション！」

復元。俺が新たに復元したのは鋼糸である。とはいっても今の俺では
残念ながら古龍ほどの物を鋼糸で切断する事はできない。
だが、その代わりに鋼糸を古龍の体に引っ掛けそこから俺の体を
鋼糸によって引っ張り古龍の背に着地。

古龍によって振り落とされないよう注意しながら
鋼糸を待機状態に戻し刀の鍊金鋼をポケットから出す。

「レストレーション！」

復元。そこから刀に剄を走らせ、古龍の片方の羽に向かい

振り下ろすっ！！

刀はまるで最初から決まっていたように羽に斬線が走り、片翼を切り落とした。

片翼が無くなった事によりバランスを保てなくなった

古龍は耳がつんざくような咆哮をあげながら地上に向かって墜落。

それに、巻き込まれないように古龍から飛び降り地面に激突する瞬間、

足から衝剄を放ちそれによって落下の勢いを殺しながら着地。

先に落ちた古龍は羽を切られた事により先ほどよりも怒りに染まった視線を向けた。
それでも。

「ここで殺される気は残念ながらまったく無いんでな。悪いが」

刀を強く握りしめ、活剄の密度を高める。

「お前には俺の為にここで潰れてもらう!!」

古龍に向かい突風となって駆け出した。

古龍と戦闘を開始してから早二日が経過した。

戦っている広間はもはや見る影もなく破壊されており、かなりボロボロな有様だった。

あれからこちらは致命的なダメージだけは避けるように注意しながら、

尚且つ向こうには着実にダメージを与え続けた。それにより古龍の羽は

もう片方も無くなり、尻尾も切り飛ばし体中には無数の切り傷を刻む事ができた。

だが、もちろんこちらも無傷という訳ではなく、細かい傷は勿論の事。

古龍のブレスを避けた直後に古龍の振りかぶった手により叩き落とされてしまった。

古龍の腕との間に刀を挟み、更にその吹きとばされる方向に衝剄を放つ。

わざと跳ぶ事によりダメージを軽減させる事は出来たが、それでも受けたダメージは大きく。刀の持っている右腕にひびと、それにより背後から

叩きつけられた事であばらの何本かは完全に折れてしまった。

そして今現在は古龍の遠距離からの攻撃を防ぐ事だけに集中し、相手を一撃で仕留める為に剄を練り上げている。

一撃当てたら倒す自信はあるんだが問題は。

(どうやって当てるかだよな……)

古龍に対し確実に当てる為には敵の動きを止めないといけないのだがそんな都合よく古龍が止まってくれる訳ではないので自力で止めないといけないのである。一応手はあるにはあるのだからあまり進んでやりたくない物なのでしたくないが
そうも言ってられないので、その手段を使う事にする。

向こうは羽もないので空を飛ぶ事はないので基本的に
ブレスか接敵し攻撃するしかないのだ。

今回向こうは遠距離からのブレスを選択したようで
ブレスをチャージし始めその発射されるまでの少ない時間の間に。

刀の持っていない手、つまりひびが入っている右手に激痛が走るが
それに、構わず右腕の指の間に出来る限りの剄を収束させ腕を霞ませながら振るう。

――――がいりきけいしやうけい外力系衝剄くの変化……九乃ない。

指の間から針のように細い剄の弾丸を形成し、そのまま古龍の足元に向かって放ち地面を破壊。あばらや腕が痛むが、それに構う事無く
九乃を放った直後から古龍に向かって走り、刀に剄を凝縮させる。

そこに遅れて古龍の体勢が崩れ、後ろに傾きながら見当違いの方向にブレスが放たれたが、その事は気にせず、ただ古龍に向かって駆けた。

そして古龍が重苦しい音をたてながら後ろに倒れこんだ直後更に加速。

その古龍の頭部の傍に着地。

そして、レイフォン唯一の剄技を繰り出した。

「終いだ！」

刀を振るった瞬間、刀身に凝縮された剄が消失。

――――がいりきけいしやうけい外力系衝剄の変化……てんけんぎ天剣技・かすみろう霞楼。

斬撃を古龍の頭の内部に浸透させ頭部の中で無数の斬線へと変化。
古龍の頭部を横へ縦へ斜めへ。あらゆる方向に切り刻む。

古龍は断末魔を上げる暇もなく、頭の付近はずたずたになり原型を留めてはいなかった。そうして見ていると古龍の体が徐々に透け始め、

最後にはその体は消失してしまった。

古龍は神に準ずる存在なので霊格が高く肉体を破壊されても死ぬ事はない。

「あゝ。あゝ。疲れた……」

そうぼやきながら、鍊金鋼を待機状態に戻し、完全に折れた右腕とあばらを中心に活剷を流し回復に努める。この程度の怪我だったら大体一週間程度で治るのでとりあえずは大丈夫だ。

そうしながら、結構な距離のある台座に向かい歩を進め始めた。

古龍とお戦闘という重労働終え、やっとついた台座を見てみるとその中心に鎮座していたのは。

「腕輪？」

銀色のシンプルなデザインの腕輪がその台座にぽつんとあった。どんな物かも分からないのでとりあえず腕に付ける事はせず、腕輪を手に取り調べてみると内側にびっしりと術式が刻んであるが。

「全然、分かんねえ……」

そうなのである。魔法については一応一通り調べたんだが、そこま

で詳しくは

調べていなかったのである。ましてや、こんな所にあるくらいの物だから

一般のところにあるような書物で調べてみたとしても分からないのかもしれない。

（っていうかよく考えたらここは魔法世界なんだから
お宝でも、魔法に関係する物しかないだろう！！）

こんなシチュエーションにいくらか自分でも知らずにテンションが上がっていたようだ。

そのせいで大事な事を忘れていた。それでも、戦利品をこのまま置いて

行くなんていうのは、さすがに勿体なすぎるのでボックスの中にしまっておいた。

その日はこんなにも長期で戦ったのは初めてであり疲れたので
その場所で、台座にもたれ掛かるようにし寝ることにした。

古龍擊破

謎の腕輪を入手。

第七話『弱肉強食』（後書き）

古龍は完璧に独自設定なんで本物とは違います。

もう一体ぐらいいてもいいんじゃないかなあと思いましたて書かせて頂きました。

では、用語説明を

針剄しんけい…剄を針のように鋭く尖らせ、相手にぶつける。

九乃くない…両手の指の間に針のような細い剄の弾丸を形成し、相手に向かって放つ。（ここでは片手で放っていますが別に片手でもいけますんで）

霞楼かすみろう…レイフォン独自の技であり天剣技。斬撃による衝剄を相手の内部に浸透させ、狙った場所で無数の斬線へと変化、内部から切り刻む。

では、次回もよろしくお願いします。

第八話『気の赴くままに』（前書き）

今回も独自設定がありますんで気を付けてください。

では、よろしく願います。

第八話『気の赴くままに』

丸一日ぐらい寝てしまった後。まだ折れた箇所が完治していなかったのも、しばらくはそこで治療に専念することにした。

治療が終わり完治した後、この遺跡には用は無いのでさっさと出る事に。

その後、まず街などに寄り消費した服や食料を買い最近の情報などを調べてみると、

【旧世界に真祖の吸血鬼現る！？】

目立つように書かれた記事を見つけた。吸血鬼までいんのかよ！？
と思い、

少し興味が湧いたので吸血鬼について調べてみると。

・まず真祖の吸血鬼は今現在では失われた秘法によって自らなるものである。

・伝承などと同じで不老不死である。

・吸血鬼らしい弱点も存在する。ただし年数が経つと大抵は克服できる。

（ほとんどお伽話とかわんねえな……）

結局大した情報が手に入る事はなかった。

吸血鬼には興味はあったが、わざわざ地球に行ってまで興味は無いので

この事については頭の片隅に留めておく程度にした。

調べ終えた後いつまでも同じ所に留まる訳にもいかないのでその街を後にした。

「さうて、次どこいくかなあ」

大体ヘラスは行き終えたので違う所に行こうと思ひ地図を広げ紙面をくまなく見回してみると。

「んノクティス・ラビリンス夜ノクティス・ラビリンスの迷宮とやらにでも行ってみるか」

見るからにダンジョンっぽい名前という単純な理由で決めたが特に目的も無いし、別に用事も無いので行く事にした。

ここからではかなりの距離があるが、その過程を楽しむのも旅の醍醐味なので気落ちなどはしなかった。

「よしっ！ 行くか！」

そうして俺はまた旅を開始した。

「やっと着いた」

目につく場所全てに寄り道をしてると予想以上に時間が掛かってしまい

目的地に辿り着くのに100年以上も経ってしまった。

その間にも襲撃者が途絶える事はなく、次々と襲いかかり俺はそれを次々と返り討ちにしたせいかまた賞金があがり350万ドラクマまでにあがった。

そして夜の迷宮に着いたのだが。

「これぞ遺跡って感じだなあ」

どんな所か気になってはいたが見た目はそれほど奇抜ではないようだ。

まあ中はどうかは分からない。とりあえず中で何があるか分からないので。

「レストレーション」

錬金鋼を復元。今回の形は手甲と脚甲である。今回は鋼糸に頼らずに行く事にし、狭い所でも取り回しがきくということでこれにした。準備が終わった後に中に入っていたが。

「何も無い……」

何も無いのである。罾も無い。魔物の類もない。素敵アイテムも

無い。

これは拍子抜けかなあと思いながら通路を進んでいると、

そいつは現れた。

一瞬目の前が光ったと思った次の瞬間にはそいつは居た。

そいつは人のような形をしていたが、ただ人の形を模しているだけであった。

顔の部分には口も鼻も目もないし、体に凹凸もない。
ついでに言えば体に雷のような物を纏っているようである。

そして一番の問題は俺はいつ。どうやって。こいつが
ここに現れたのか俺にはまったく分からなかった。

いくら戦闘状態じゃなく、普段より気を抜いていたかもしれないが、
それでも、俺の体は常人とは比べられないほど鍛えられていて
全ての身体能力は上がっている。それに加え剋により戦闘の時よりは
劣っているかもしれないが、いつでも動けるように常にある程度の
剋は
体に流し体を強化しているのである。

その俺でさえも捉えきれなかったのである。
久しぶりに冷や汗が体に流れた。

「何だこい……っ!!」

蹴られた。そう頭で考え思考が追いついたのは蹴られた事によって壁に叩きつけられた後だった。

「ぐっ！ げほっげほっ……………くそっ！」

今のだけであばらが折れた。それに加え軽い火傷も負ったようだ。いくら肉体が強化されていても、防御力だけはどうしようもない。剄では肉体の機能は強化できるが、肉体の硬度は強化できないのである。

そこが剄においての唯一の弱点と行ってもいい。

だから、武芸者は例外を除いて敵の攻撃はほとんど避けなければならないのである。

（尋常じゃない速さだなあ。おい）

このままでは、ただ蹴り殺されるのてしまうので、活剄により全てを最大限まで強化。

特に目の機能は集中的に強化し向こうの動きに対応出来るようにし、更に体から常に衝剄を放ち向こうの攻撃に対し防ぐようにする。

これによって敵の攻撃をいくらかは減退出来ると思うが、これを使っている間は他に衝剄を放つ事ができない。

速さは向こうが圧倒的に上なので、こちらから動く事に意味は無い。その場所から動くことはせずその場で構える。

次に動いた時は奴の姿を捉える事は出来た。

とはいっても文字通り姿を捉える事が出来ただけであって
体の反応は追いつかなかったが。

またもや殴られたが、衝剄によって威力はいくらか減退しており骨
が折れるなど

そういった事は起きなかったが、それでも痛い物は痛いのである。

そこからは俺のサンドバック状態が続いた。こちらから反撃を試み
るも

攻撃した後にはもうそこに敵は存在せず空振りし、その間に違う所
が殴られ、
蹴られるなどが繰り返された。体中には奴に攻撃された事によりあ
ざだらけ。

たまに雷みたいなのを放ってくるがそれは少しだが敵のモーション
があるので

それを見て軌道を予測する事で回避は出来た。

（とはいってもこのままじゃじり貧だ。これじゃあいつか
こちらのエネルギー切れでやられる。何か手はないか？）

そんな事を考えていると。

（ん？）

奴を見ている中で少し違和感を感じたので、先程よりよく奴を見
てみると

こちらに細い電気が走っているので、これを

疑問に思いながら見ていると、その場所に奴が現れ
こちらに攻撃を仕掛けてきたのである。

（これは……）

それから観察を続けると奴が攻撃を仕掛ける際には必ずその細い電気が先行してき、その場所に現れてから、こちらに攻撃を仕掛けてくるようだ。

試しにその電気に合わせて拳を振りかぶってカウンターの要領で攻撃すると、今回は見事に手ごたえがあった。

（なるほど）

そこからというものの、こちらの攻撃は奴に面白いように命中するようになったが、奴には大して効いていないようだ。いや、効くには効いているが受けた場所からすぐに再生している。倒すには奴の体を文字通り一撃で消滅させるしかにだろう。

向こうは急に命中するようになったこちらの攻撃を警戒しだしてかどうかは分からないが、今は少し離れてこちらの様子を窺っているようだ。

（そっちの方が、好都合だ！）

俺は瞬時に体から放っていた衝剄を解除し雷速。とまではいかないが高速で移動し奴に攻撃を仕掛ける。その間にも奴は攻撃をしかけるが先行している電気を見てかわしながら奴の懐に入り拳に硬く握りしめ。

―――がいりきけいしやうけい外力系衝剄の変化……ごうりきてつぱ剛力徹破・こうが咬牙。

外側から強力な衝剄と内側から徹し剄によって奴の上半身を内外から破壊するが。

「駄目か……」

さすがにこちらの攻撃の規模が大きかったらしく、動きは止まっているようだが、それでも徐々に体を再生し始めている。通常の剄技では、足止めはできるが

殺しきることは出来ないようだ。かといって逃げるのは愚策だ。相手は雷速。

それより遅い俺が逃げても十中八九追いつかれるだろう。

（なら、これしかないか）

バックステップで奴から距離をとり奴が動けない間に技を放つ準備をする。まだ未完成だが、今はそれで充分。

―――かっけいしやうけいこんごうへんげ活剄衝剄混合変化……ひおうルツケンス秘奥・せんになしやう千人衝。

俺の姿が二人に増え、次に四人に増え、倍々ゲームのように姿が増殖していった。

まだ名前の通りに千人までとはいかないが今は
そこまで人数がいても逆に邪魔なので、五十人ほどで問題ない。

その数で奴の全方位を囲み本体の俺は自身の攻撃に巻き込まれない
ように

奴の真上に跳ぶ。秘奥に秘奥を重ねるのは難しいかもしれないが
そんな事言ってられる状況ではない。そして、分身した全員で口を
開く。

「かあっ!!」

――――がいりきけいしようにい外力系衝剄の変化……ルツケンス秘奥・ひおう咆剄殺。

五十人全員の口から分子構造を破壊する振動破が放たれた。

全方位からの攻撃を奴は避けられず前の技で体積が小さくなってい
た事もあり。

奴は瞬く間にばらばらになっていき、だんだんと体を小さくなって
いつて

最後には砂のようになって崩れていった。

「はああああ」

それを確認した後、俺の口から長い溜息が洩れ、一気に体から力が
抜け

その場にへたりこんだ。分身は消え、周囲は咆剄殺ほうけいさつによって
辺りは綺麗な穴だらけになっていた。

（今回は結構やばかった。速いっていうのがこんなにも厄介だったとは。

もっと活剋により肉体を強化したり、何らかの手段で防御力を高めないと。

きついな。ていうか結局あいつは何だったんだ？）

今回の戦闘を振りかえって、今後どうするかを考えながら、しばらくそこで休憩することにした。休憩が終わった後また探索を始めたのだが

奴に出会った以外は変わった事も無く特に収穫はなににもなかった。

「結局無駄足だったかな？」

奴にやられた所が、所々痛むが動けないほどではないので常に活剋を流し回復に努めながら街へと行く事にした。

まああいつと戦えたのは収穫って言ったら収穫かもしれないがそれでも釈然としないなあ思いながら歩いていると。

「ついに追いつめたぞ！！」

そう言ったのが聞こえたので俺の事か？と思ったが

近くには誰もいないので、その可能性は排除して辺りを探ってみると少し離れた所に複数の気配を感じたので、殺剋さっけいをしながらそこらの高い木に登り目と耳を強化しその場所を見てみると。

「観念しろ！ 吸血鬼め！！」

元は綺麗だった金糸のような髪。まだ小さな体に所々擦り切れている服を纏った

女の子と、その女の子を守るように立ち、刃物を持ったぼろぼろの
小さな人形が
複数の魔法使いに囲まれていた。

旅に出ってから230年
原作開始まで後470年

雷の上位精霊撃破。

第八話『気の赴くままに』（後書き）

雷の上位精霊は姿かたちは勝手に考えたましたので。

主人公は雷のスピードについていたり、触れたりしていますが原作のラカンもついていくのは出来ていたしネギの雷天大壮にも触れていたのでは？

いけるのでは？と思いついて書かせてもらいました。

そして最後ですが誰か普通に分かりますよね？

では、次回もよろしく願います。

それでは、用語説明を

剛力徹破・咬牙（ごうりき てつぱ こうが）…外側からの強力な衝剄と徹し剄によって対象を内外から同時に破壊する。

千人衝（せんになしゅう）…ルツケンスの秘奥であり、ルツケンスで最も派手な技。無数に分裂して一斉に攻撃を加える。

咆剄殺（ほうけいさつ）…拳が使えなくなってもなお戦う意思を現実化

させるために生まれた、初代ルツケンスの奥義。声を震動波に変え、その震動で

分子の結合を破壊し、物質を破壊する。

第九話『真祖の吸血鬼』（前書き）

今回は結構ご都合主義がありますので
そういうの嫌いな方はすみません。

そして、ついにお気に入り登録100人超え&PV74000超え・
ユニークアクセス

10500超えになりました。これも皆様方のおかげです。
本当にありがとうございます。これからもどんどん増えていくよう
頑張っていこうと思います。

第九話『真祖の吸血鬼』

（あれが真祖の吸血鬼なのか）

思わぬところで会ったなと思いながら
件の吸血鬼をまじまじと見てみる。

（あれ？ おかしくね？）

真祖の吸血鬼は調べた限りでは失われた秘法で『自ら』なるものである。

当然そんな失われた秘法とまで言われるくらいなんだから、まずその術式を

探す事から困難だし、万が一から手元にあったとしても
術式は相当難しい物だろう。

（どう見ても十歳そこらにしか見えないんだが）

そうなのである。何度目を擦って件の吸血鬼を確認しても見間違い
ではなく十歳ぐらいの西洋人形のような少女であった。

普通に考えたら十歳そこらの少女がそんなものに手を出す事はない
だろう。

いくら何でも十歳の少女が吸血鬼になろう！なんてそんな
破綻した考えは持たないだろう。もちろんあの姿が本物の姿じゃない
って

事もあるかもしれないが、生憎俺に対しては
幻術の類は効かないのでそれは無い。ということは残る可能性は。

（誰かに真祖の吸血鬼にされたか……）

それしかないだろう。実験をした側からしたら成功した存在なんだから
みすみす逃すとは思えない。その少女がここにいるということは逃げ出したか、
そいつが死んだかだろう。

だけど、この世の中。さすがに真祖の吸血鬼の実験はないが、人体
実験は
別段珍しくない。俺も旅の途中にそんな実験の痕をいくつも見つけてきた。

そして、俺にわざわざ助けてやる必要も義理も無い。なのでさっさと立ち去ろうと
しようとした時、吸血鬼の少女を取り囲んでいる魔法使い達が口ぐちに。

「さっさとくたばれこの吸血鬼めが！」

「我ら偉大なる魔法使いにより化け物に正義の鉄槌をっ！」

そう言われた時に俺の強化された視力は少女の顔が歪んだのを見逃さなかった。

その表情は負の感情ばかりで構成されていた。
悲しみ・怒り・恨み・恐怖・諦めそんなものばかりで出来ていた。

「はあ〜なんだかなあ〜」

立ち去ろうとしていた足は止まり、思わず手で乱暴に頭を搔いた。

らしくないと思いつつも体は淀みなく動きボックスから鍊金鋼を取り出した。

「こういうのは正義の味方に任せろよ。

いや、敵が正義の味方か？ めんどくさいなあ」

鍊金鋼の復元時の光が暗い夜の闇を照らした。

s i d e ..???

「ここも……か」

そう小さく言ったその言葉は、偉大なる魔法使い共には聞こえないように呟いた。

その言葉に込められた意味は失望ではなく諦観だった。

私の少女時代はどこぞの領主の城に預けられ何不自由ない暮らしをしていた。

父も母もそこにはいなかったが、それでも私は子供ながらにだった
が幸せだった。

———十の誕生日をむかえるまでは。

私が目覚めたときはすべてが終わった後。この身が吸血鬼バケモノになった後だった。

私は神を呪った。世界を憎んだ。そして私をこんな体にした男を憎悪した。その時はただ自身の衝動に任せて行動した。その結果は私を吸血鬼バケモノにした者の殺害。

この身はすでに私が事実を認めようと認めまいとも人間ではなく吸血鬼ケモノ。

容易くその男は死んだ。殺す前に見た男の目はもはや人間に向ける目ではなく

化け物に向ける目だった。

それからすぐに私はその城を焼き払い城から出る事にした。

初めの方は吸血鬼らしい弱点もあり大変だったが、それでも誰か受け入れてくれる。

そう思っていた。だがそんなものは幻想だ。まやかしだ。

初めはいい。このような姿だから人は親切にしてくれる。だがそれも吸血鬼とばれるまでの間だけ。

何年も成長しない事を疑われ始めてから態度は一変した。石を投げつけられ陰口を言われている間はまだましな方だった。

だんだんと行為は過激になり始めた。初めはその村の子供。次に老人。次に大人。最後は村ぐるみで。

その時代の事もあり魔女として焼かれそうな所までいった。

ここまで来てやっと理解した。

私の居場所はどうの昔に世界失われているのだと。

そこからは生きていくために力を付ける事にした。

不幸中の幸いかこの体の潜在能力は高く。魔力も力も人間だった時とは

段違いだった。それでも初めの内は力を付けるまでが大変だった。

襲い掛かって来る敵からは情けなかりうとも必死に逃げた。逃げる途中に

魔法使いの攻撃が自身に命中し一目見ても重傷だと分かる程の傷が出来てもこの身は瞬く間に再生した。

ある程度力がつくと従者を作った。とはいっても人形だが。それでも信用できる相手には違いなかった。……若干性格が歪んでしまったが。

そうして、襲撃者を撃退している時、ある街で情報を得た。

曰く、魔法使い達の住む世界がある……と。

この世界に絶望しか覚えていなかった私はそれを聞いた時、また僅かな希望が湧いた。

魔法使いの国ならもしかしたら私も受け入れてくれるんじゃないか？いや、国じゃなくても受け入れてくれる人があるんじゃないか？

そう、希望が湧いた。

それからという物。その魔法使い達の住む世界に行く方法を必死に探した。そしてついに行く方法を見つけた時久しぶりに嬉しいという感情が胸中で巻き起こった。

そして、幻術で姿を誤魔化し、その世界に向けて出発した。ほんの僅かな希望を持って。

だが、吸血鬼というのはどこでも排斥されるものらしい。

世界は変わっても私の周りは変わらなかった。いや、それどころか更にひどくなった。

この世界に居るのはいわゆる偉大な魔法使いを目指している奴が私の居た世界より圧倒的に多く、そいつらからしたら私は『悪』だった。

それに魔法使いの世界というだけの事はある私の居た世界の奴等より強かった。

「さっさとくたばれこの吸血鬼め！」

「我ら偉大なる魔法使いにより化け物に正義の鉄槌をつ！」

そしてこんな結果だ。こいつらは強かった。

それに加え今まで碌に休めなかった事もある。

チャチャゼロもぼろぼろ。私自身の魔力ももう尽きかけ。

「ドウスルンダ？ 御主人」

チャチャゼロにそう聞かれたが、正直言って手はない。
だからといって死んでやるつもりもまったくないが。

こうなったら不死性に任せて逃げるなり
するしかないかと思っていると。

「伏せてろ」

ここには居ない。そして不機嫌そうな声が何処からともなく
聞こえたと思ったら空が急に真昼のように明るくなった。

「きゅ、吸血鬼！ 貴様何をした！？」

向こうも慌てているようだ。どうやら奴等の仕業ではないらしい。
私は声の主がいったようになるべく体勢を低くし今持てるだけの
魔力で対物・魔法障壁を全力で展開した。

なぜそうしたかは、はっきりとは分からない。しいて言えば言葉に不機嫌さは

籠っていたが、私が今まで聞いていた恐怖や嫌悪、侮蔑や憎悪などが声に含まれていなかったから、なのかもしれない。

そして、光が堕ちてきた。

その光は私を取り囲んでいた魔法使い共を貫き、破壊してき、魔法使い共は瞬く間に目の前で無慈悲に容赦なく殺された。私は光が収まるまで必死に障壁の強化をするしかなかった。

そして光の奔流が収まった時、生きている者は私とチャチャゼロの二人だけだ。

「オイオイ トンデモネーナー」

チャチャゼロがどこか茫然としたように呟くが私もそれと同じ意見だった。

私が苦勞した者達をここまであっさりと殺されると、逆に悔しいとも思わなかった。

そうして目の前の惨状に茫然としていると。

「あゝあ。派手にやっちゃったなあ」

この場に似合わないどこか呑気な声が後ろから聞こえた。

バツ！と後ろを振り返って見てみると、そいつはなぜかぼろぼろな格好をしており所々怪我をしているようだった。髪はここでは珍しい黒髪で、顔は割と整っており藍色の目が特徴だった。

いつでも動けるよう態勢整えその男から目を離す事はせず警戒をしながら。

「貴様か？　これをやったのは？」

確認の意味を込めて聞いてみた。いくらなんでもこれが終わった直後に

都合よくこの場所を通ったりしないだろう。そう考えるとこれをやったのは

こいつの仕業と考えるのが妥当だ。

「まあそうだな」

半ば予想通りの答えが返ってきた。

予想通りの答えだったが、それゆえに体に嫌な汗が溢れてくる。

こんな惨状を引き起こした奴だ、どう考えても今の状態じゃ逃げ切れない。

そう焦っていると、男は少し慌てたように顔の前で手を振り。

「ああ無理かもしれないけど別に警戒しなくていいよ。

ここに来たのは一応無事か確認しに来ただけだし」

その言葉を聞いた時は耳を疑った。

（無事かどうか確認しに来た……だと？）

もしや、私が吸血鬼という事を知らないのか？と思い、それを聞いたらどうせ今までの奴と同じ反応をするだろうと思いがら

ここで言うのは得策じゃないと、半ば自暴自棄に分かっていながら言ってしまった。

「貴様正気か？ 私はしん「真祖の吸血鬼だろ？」ッ！！」

それを、聞いた瞬間思わず頭に血が上がった。

「じ、じゃあ！！ な、何故助けた！ 何が目的で私を助けたんだ！！！！」

怒鳴ってしまった。それ程こいつの行動が分からなかった。私が真祖の吸血鬼だと知った奴は決まって攻撃するか逃げるかだった。

だが、目の前のこいつはそのどちらでもなかった攻撃するでもなく、逃げるのでもなく、あまつさえこの私を助けた。真祖の吸血鬼の私をだ。

そう怒鳴ると目の前の奴は少しびくりしたような顔をした後少し罰が悪そうに頭を掻き。

「いやあそんな大層な理由h「早く言えっ！」……んゝただの自己満足だから気にするな」

「は？」

思わず口を開けてしまい間抜け面をさらしてしまった。

自己満足は分かる。人は報酬無しでは動けない。
それが金銭なり、相手のお礼の言葉なり、自己満足なり、自己陶醉
なり、

他にも様々な形での報酬を貰って動くものだ。

もし理由無く助けるのはそいつは異常者と同じだ。

だが、それでもただの自己満足で私を助けたのがふざけてるとしか
思えなかった。

「貴様……ふざけてるのか？」

「全然。まったく。これっぽっちもふざけてない」

「ケケケツ」

私を捕えるなり、殺すなりはいつだって出来たはずだろう。
呆れるしかないが、どうやらこれが本当の理由らしい。

何だか警戒するのが、馬鹿らしくなってしまい体から力が
抜けてしまいその場に座り込んでしまった。

そうやって目の前の奴に呆れていると男は満足そうに頷き。

「んゝ別に怪我とかなさそうだな。

んじゃ、俺はそろそろおさらばさせて貰うか」

「あ……」

そう言われた時に思わず小さく声が漏れてしまった。

理由はいい加減だったが、それでも私を恐れない、排斥しない
今ままで会ったこともない唯一の奴だったのである。

ここでもし奴と別ればもう誰にも受け入れてくれないかもしれないな
い。

そう考えると怖かった。どうしようもないほどに怖かった。

そんな考えが表情に出ていたかは分からないが
奴は私の顔を見た後自分の頭を乱暴に掻いた後、

「ああゝ！　もう！！」

手を差し出してきた。

これは何のつもりか？　という思いを乗せて奴の顔を見てみると
奴は照れ臭そうにしながら。

「もし良かったらお前一緒に来るか？」

そう言った。

私はその言葉を聞いても、よくその言葉が理解出来なかった。

「俺は旅を続けているから根なし草だけど
それでもいいなら、来るか？」

その言葉を頭で理解した時涙が溢れ出そうになった。

それほどに嬉しかった。奴に騙されているのかもしれない。

それどころか私は不老不死だ。奴は私よりも先に死んでしまうだろう。それでも、そんな事を言ってくれる奴なんて誰もいなかったしもう諦めていた事だったからだ。

泣くだけは必死に我慢した。紛いなりにも、今まで100年以上は生きていたというプライドもあったので、泣かないように我慢しながら、

それでも私が奴の手を取るのを躊躇っていると、

「寿命の事だったら気にするな。
俺も不老だからそう簡単に死にやしない。で、どうする?」

そう言った。これで後は私の意思だけだ。
騙されるのも怖いが、ここで手を取らないのはもっと怖かった。

だから私は。

「しょ、しょうがないな!　そこまで言うんなら
わ、私が一緒に行ってやろう!　……か、感謝するんだな!」

「ご機嫌ヨサソウダナ御主人」

「ええい!　黙れ!　このボロ人形め!!」

その手を離さないようにしっかりと握った。

初の原作キャラに邂逅。
旅のお供ゲット。

第九話『真祖の吸血鬼』（後書き）

今回でやっと初めての原作キャラを出せました。

エヴァとチャチャゼロの口調変じやないですかね？

やっぱりこういうのは難しくて中々上手くないかないですね。

それでは次回も宜しくお願いします。

第十話『二人と一体』（前書き）

何故か昨日はアクセス数が今までの二倍でユニークもかなり多かったです、なんででしょう？

まあ非常にありがたかったです。

では、今回も楽しんでいただけたら嬉しいです。

第十話『二人と一体』

さて、新しい旅のお供っていうかこの世界に来てから初めての友達？を手に入れた訳だ。で、今はとりあえずさっきの場所から離れる事にし移動している最中だが、

「そういえば名前。まだ聞いてなかったな」

結構重要な事を聞き忘れていた。

そう言うのと目の前の少女は呆れた様な顔をした後、

「エヴァンジェリン，アタナシギティA・K・マクダウエルだ。

こっちは私の従者のチャチャゼロだ」

「ヨロシクナ」

「エヴァにチャチャゼロね。俺は黒宮涼。

呼び方は好きにしてくれ。まあとりあえずこれからよろしくな」

キティという名前に思うところはあったが、

そこは大人の余裕でぐっと我慢した。

そうやってお互いに名前を名乗って改めて挨拶をし終わると

エヴァがじろじろとこっちを見ていたので、

「どうした？ そんなにじろじろこっち見て？」

「助けてくれたのはありがたい。が、何故貴様はそんなにぼろぼろ何だ？」

「ああその事な。いや夜の迷宮って所に行った時にさ。そこで良く分からないけどやたら速い奴に会ってな。そいつにぼろぼろにされちまって」

そう言った途端エヴァは頭痛が来たように顔を顰めた。

「そいつは人のような形で雷を纏っていなかったか？」

「おお確かにそんな感じだったな。……ん？　何でエヴァが知ってるんだ？」

そう言った途端エヴァの体がプルプルと震え始めた。

俺は何で震えてるのか分からなかったので顔は俯いて見えなかったがエヴァをじーっと観察していると、

「貴様は馬鹿かっ！！　そいつは雷の上位精霊だ！　そんな奴と戦う奴がいるかっ！！」

噴火した。赤い顔で烈火の如く怒鳴られた。

「いや、そんな事言われても逃げr「言い訳するなっ！」
……悪かったよ」

何故か俺が謝るはめになった。

こんなに怒鳴られたら少しはいらつくもんだが、見た目幼女だし、会ってから間もないから確実とは言えないがこっちを心配してるのが分かるもんだから怒りたくても怒れないんだよなあ

「まったく！ 貴様が馬鹿だという事が良く分かった」

一通り怒鳴った後エヴァはやっと落ち着いた。

「まあ過ぎた事だし気にすんな。とっとと先行こうぜ」

まだぶつぶつ言っているエヴァに声を掛けて

とっとと歩きだした。後人形のチャチャゼロだが、いつの間にか
ちゃっかりと俺の頭の上に登っていた。

「……あっ！ こら！ 待て貴様！！ それとチャチャゼロ！
貴様主人を放って何をしているっ！」

「ケケケ 気ニスンナ御主人」

「気にするわ！！」

そうして一人と一体を新たに加えてまた旅を始めた。

さてさて、お供を連れて旅を始めてから早50年。当然エヴァも賞金首

だったのでそのエヴァと俺が行動を共にした事はすぐに広まった。

それを危険視してか元々エヴァの賞金が150万ドラクマから250万ドラクマに

跳ね上がり俺は350万ドラクマから450万ドラクマまでに上がった。

ついでに言えば二人とも二つ名も着いたが。まあ俺のは別にどうでもいい。

エヴァに「マガ・ノスフェラトゥ不死の魔法使い」や「おとずれ悪しき音信」

などの二つ名が付いた時何故か少し嬉しそうにしていたので何故嬉しそうにしているのかを考えたらすぐに原因が浮かんた、

（ああ。中二病か）

それからしばらくの間エヴァを暖かい目で見守る事にしたが、途中でその目に気づいたエヴァに不快だからやめろと言われてしまった。

なんでだろうか？

エヴァは俺が賞金首だったのを知らなかったらしくそれを知った時にひどく驚いていたようで俺が「やっぱり一緒に来るのはやめるか？」と聞いたら……。

その事は思いたたかないので割愛する。
ただ、盛大にエヴァに怒られて、今も一緒に旅をしているとだけ言っておこう。

修行の方だが、俺は魔法の事は詳しくは知らないで、それは全面的にエヴァ

に任せ、とりあえず模擬戦と糸の扱いだけはする事にはした。俺の錬金鋼を

見せた時は錬金鋼とボックスをかなり興味津津に見ていたが、俺自身どう教えたらいいか分からないので、こちらがはぐらかしている

最後にはしぶしぶ諦めてくれた。俺が鋼糸を扱っている所を見せると「出鱈目な奴め」と呆れたように言われた。

エヴァには呆れられてばかりのような気がする。

といっても俺は教えるなんて事はまったく出来ないで、エヴァが自分で見て使えそうな技術を盗んでいくという方法をとることになった。

元々エヴァは糸で直接戦うんじゃ無く、その糸を持って人形を操って戦うスタイルなので、俺が教えるなんて事は尚更出来ないのである。

そして、俺の修行は今回は武器ではなく化錬剋を中心に行うことにしている。
魔法使いが様々な属性の攻撃を使っているのが羨ましくて俺も使う事にした。

今までも少しぐらいなら出来たが今回からは本格的に修行をする事

に。

これについてはまあぼちぼちという事だ。本格的な物。それこそトロイアットが使うような物はまだまだ。だが現在必死に修行中だ。

チャチャゼロとは中々良好？な関係だと思う。何故疑問形なのかと
言うと

良く斬りかかれるので良く分からない。この頃は、それが親愛の
表現

だということに。無理やりプラス思考に持っていく事になっている。

ある日。適当に目的もなく3人でふらふらと旅をしていた時。

ちよつと聞きたい事があったのでエヴァに聞いてみることにした。

ちなみにチャチャゼロは俺の頭が気にいったのか基本的に俺の頭に
掴まっている。

「なあエヴァこれ何なのか分かるか？」

そう言いながら俺がボックスから出したのは、以前に古龍を倒した
時に

手に入れた腕輪である。エヴァなら何か分かるかと思いい聞いてみる
事にした。

「何だそれは？」

「昔遺跡で手に入れた物なんだが何なのか分からなくてな。」

だからエヴァなら分かるかと思って」

そう俺が言うのとエヴァは俺の手から腕輪を手に取りしげしげと観察し始めた。

「ふむ。中々いい代物だな。これは」

「結局何なんだ、それ？」

「少量の魔力を使って自分の行った事があり、尚且つ長距離限定だが指定した場所に転移する事ができる代物だ」

遠い所に移動するのは便利そうだな。

（ん？　そういえば……）

「そういえば俺に魔力ってあるのか？」

「はあ。リョウ、お前そんなことも知らなかったのか？」

「しょうがないだろ。魔法の事何てほとんど知らないんだから。んで、結局俺に魔力なんてあるのか？」

「あああるぞ」

至極あっさりと、エヴァは言ってくれた。おお。これで俺も魔法を使えるのか！とテンションが上がっている。

「まあほとんど無いような物だな」

また至極あっさりとエヴァが告げてくれた。
一気にテンションが下がった。

「私は転移の魔法は使えるから、それはお前が持っておけ。
お前ほどの魔力しなくても3・4回は使えるだろう」

何かエヴァが説明しているようだが俺はそれどころじゃなかった。
それからしばらく俺は落ち込んでたが。

エヴァに鬱陶しい、と言われしぶしぶ魔法の事は諦めた。

この頃エヴァが俺に容赦なくなっているんだが……。気のせいかな？

あれから更に50年。

エヴァは才能があり瞬く間に強くなっていった。

人形も何百体と操れるようになり、糸も3kmは届くようになった。
まあその時に調子に乗り人形ばかりで魔法使い達と戦っていたら、
魔法使い達が色々と対抗策をとり、あんまり使えないようになって
しまった。

そのせいで暫くエヴァは不貞腐れる事になったが、その時の
様子のエヴァの様子は少し可愛かった。とだけ言っておこう。

そして魔法の力量も俺が知る限りでのトップレベルにまで上がっていると思う。

上級魔法も難なく使えるようになり。更にいくつかのオリジナル呪^ス文^{ベル}も

作ったりしているようだ。

チャチャゼロも経験を積む事により強くなり更に技量もあがり、そんじょそこの奴には負けなくなった。

模擬戦ではエヴァに負けてないが、エヴァはそれが悔しいらしく、何度も

挑んでくるがその度に俺に負け最終的には涙目にまでなるので俺は非常に困る。

それでも、わざと負けるなんて事はしないんだが。

俺の方の修行は順調で化鍊剋はほとんど出来るようになった。

今現在は武器の扱い方を集中的にやり、化鍊剋の方は復習するように何回も繰り返して鍛鍊している。

そして今現在。

そこから獲った獲物を食っている途中だ。

「なあエヴァ」

「何だ？」

「そろそろ旧世界行かないか？」

そうなのである。もう魔法世界は結構巡ってしまったので俺的にはゆっくりする意味も含めて旧世界にも行ってみたいのである。

「どうした？　また急に？」

「いやあ。俺さ、まだ一回も旧世界行った事ないから一回行ってみたいと思って」

そう言ったらエヴァは考えこむような仕草をした後。

「だが、どうやってゲートを通るつもりだ？」

「うっ……。そ、そこは、ほら、あの、エヴァの力で何とかさ」

「なるほど。貴様は何も考えていなかったんだな？」

「そう言われると返す言葉も無いな……」

俺達は犯罪者なので普通に行っても捕まるだけだ。

かといって俺は魔法を使える訳ではないので誤魔化したりは出来ないの
いで

正直いってエヴァ頼みなのである。

エヴァは呆れたように溜息を吐いた後。

「はあ。しょうがない私がどうにかしてやろう」

「まじで！？　ありがとうエヴァ！」

そう言って笑いながら告げるとエヴァは若干照れたように顔を少し赤くしながら、

「フン……気にするな。私も旧世界に行きたかったただだからな」
そう告げた。その後はそこで野宿した。

翌朝俺はエヴァ特製の認識障害が掛かっている魔法具を、
エヴァは自身の幻術で（俺から見たら変わってないので分からない
が）

旧世界と魔法世界を繋ぐゲートをくぐった。

エヴァ達と旅を初めて100年
原作開始まで後370年。

旧世界に向けて出発。

第十話『二人と一体』（後書き）

主人公の魔力はほとんど無いって事にしました。
劉で頑張っで行こうと思います。

タグにも書いてあると思いますが自分は展開が遅いので
まだ原作に突入するのは先です。

それでもいいっていう方は読んでくださると嬉しいです。

第十一話『未開の土地にて』（前書き）

今更ですがスワッテイスとエアリフォスの武器の使用が

全然浮かびません。作中でもほとんど技を使用していませんから余計に・・・。

だから、今の所その二つは出ないと思います。

作者の力量不足ですみません、なんとかアイデアを思い浮かべようと思います。

今回もお楽しみ頂けたら嬉しいです。

第十一話 『未開の土地にて』

旧世界に着いた後賞金首の俺達にその場での長居は無用だったのでさっさとそこからエヴァと一緒に離れる事に。

「さあて、どこ行こうか？」

「本当に何も考えていなかったのだな」

「まあそこは気にしたら駄目だ。

とりあえずはあんまり人のいない地域にでも行くか」

この時代で言うとき暗黒大陸の辺りはまだ未開の土地に近いからその辺りでいいか。

そう当たりを付けた後エヴァ達と一緒に暗黒大陸、

俺の前世？ではアフリカ大陸だがそこに向かうことにした。

さて、暗黒大陸の奥地に着いたのだが、

「城だ」

「城だな」

「城ダナ」

そこには大瀑布と広大な熱帯雨林の中にそびえ立つ大きな石城があった。

いや、石城というより古城だ。いつから人が住んでいないのかは分からないがもう大分古びているようで、外装も所々ぼろぼろであり雑草や良く分からない植物も生え放題だった。

「何でこんなところに城が？」

「知るか。大方昔の金持ちが何かが建てた後にそいつがのたれ死んで、そのまま放置されて古びてしまったとかそんなところだろう」

そう言った後エヴァは遠慮という言葉を忘れてしまったように城にずかずかと入って行ってしまった。慌てて俺もエヴァに付いていき城の中に入って行った。

一見すると城の中は豪華な装いだが、長い事放置されていたので相当埃っぽい感じがする。

「おーいエヴァ！ここに何か用でもあるのか？」

「誰もいないなら別に私達が使っても構わないだろう？だからここを拠点にでもしようと思っただけ」

拠点か……。それもいいかもしれない。

今まではずっと旅をしていたし
ここに居を構えるのもいいかもしれないな。

「ふくん。じゃあここは俺達が住む家になるんだなあ」

「そ、そうだな。そうなるな」

何故か少しどもりながら返事をされた。

「何でもってるんだ？」

「べ、別にどもってなどないわ!!」

そう言った後さっさと城の中を進んで行ってしまった。

あんまり追求すると機嫌を損ねるのでこれ以上は聞かないようにする。

その代わりに頭の上にいるチャチャゼロに聞いてみる事に、

「何だったんだろうな？」

「ケケケ 御主人ハ改メテ言ワレテ恥ズカシカッタンドロ」

「?? 何で恥ずかしがるんだ？」

「ハァー。リョウハ相変ワラズダメダナ」

何故か貶された。

それからまずは俺たちが住む為に城を綺麗にしないといけない。

俺は周りの雑草等を狩ることになり鋼糸で一氣に刈りつくした。
鋼糸がこんな所で活躍するのはちよっぴり悲しかった。

エヴァは外装を直すついでにエヴァ好みの外装に変えていき
何か魔王の城みたいな見た目が変わっていった。

余談だが、エヴァは先に名前を考えてから作業にはいった。

エヴァは形から入るタイプなのでそう言った事を先にやらないと気が済まないそうだ。

そして城の名前は【レーベンスシュルト】になった。由来は知らない。

「ああ……めんどくさかった」

「お前はそればかりだな……」

大体城の整備が終わり今は少し休憩しているところだ。
もうほとんど終わり後は細かい所を残すのみだが。

「ちまちました作業だったから余計疲れたんだよ。
だから、少し運動しないか？」

「ほう？ リヨウから言うのは珍しいな」

「たまにはそういう気分の時もあるんだよ」

エヴァは嬉しそうに尚且つ気合を入れながら準備を始めた。

「チャチャゼロはどうする？」

「いらん。今回は一対一でいい」

「了解。そういうことで、

悪いなチャチャゼロ少し降りといてくれ」

「オイ御主人 俺ニモ殺ラセロヨ」

「今回はなしだ」

「チッ ショウガネエナ―」

そう言った後チャチャゼロは本当にしぶしぶといった様子で俺の頭から降り

邪魔にならない距離まで離れた。それを確認しも後俺はボックスから鍊金鋼を出す。

「レストレーション」

鍊金鋼を復元し手甲と脚甲を装着する。

軽く体をほぐしていると、エヴァが物珍しそうに鍊金鋼を見ていた。

「相変わらず変わった代物だな」

「格好いいだろ？」

「そういうことを言ってるんじゃないんだが……」

「まあいいじゃんか。んじゃそろそろ始めるか」

そう言った途端。どちらも戦闘体勢をとり
周りの空気がピンッ！と張り詰めたようになった。

「今度こそ私が勝たせて貰うからな！」

「まだまだ負ける訳にはいかないんでね」

「言ってる！！」

闇の精霊551柱、・・・『魔法の射手・連弾・闇の551の矢！』

エヴァから大量の闇の魔法の矢が飛んできたので
右腕を軽く振りかぶり。

一一一一一がいりぎけいしやうけい外力系衝剄の変化……きやうしやうだん剛昇弾。

突き出すと同時に、右の拳から衝剄の砲弾を放ち自身に当たる矢の
みを狙って破壊。

それにより空いた空間に身を滑らせ魔法の射手を避ける。そのまま
エヴァに接近し、鎌のようにしならせた蹴りを当てようとするが。

『氷盾！』

エヴァもそれを難なく感知し、自身と俺の間に氷の盾を出現させる。
それが、碎かれる前にそこから空中に離脱。ついでにとばかりに。

『氷神の戦槌！』

直径数十mはあろう巨大な氷塊を造りだし、こちらに放ってきたのでこちらも氷に対抗し。

――――がいりきけいしやうけい外力系衝剄かれんの化鍊変化……えんけいしやうだ炎剄将彈擊。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

元にあった技を拳からも出せるようにしただけの剄技。エヴァの氷塊に

比べると、いくらか小さい炎の弾丸を拳から放ち、氷塊とぶつけさせ氷塊を破壊。

俺が氷塊を破壊している間にエヴァは空中ですでに呪文詠唱を終えたようだ。

「契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、『えいえんのひょうが！』」

ほぼ絶対零度の広範囲こうはんい完全凍結殲滅魔法を

俺に向けて放ってきた。一度でもこれを食らうと抜け出すのは非常に困難な呪文だ。このままでは氷漬けにされてしまうので。

（こんな呪文個人に使うなよ！）

内心愚痴りながら俺も空中に跳びそのまま空中に着地。

「相変わらずその剄とやらは出鱈目だな……」

「そうかな」

そう言った俺の足元には氷の床があった。

俺は空中で戦う術が、今までは鋼糸によって空中にある物に引っ掛けるか

衝動によって一時的に空中を跳ぶしかなかったので、それでは駄目だと言う事で

俺は空中で戦う術を考えた。

それがこの氷の床だ。剉を化鍊によって氷に変化させ、

その場に着地することにしたのである。

名づけるとしたら氷結床だろうか？いや、そのまますぎるか？

まあ名前の事は置いとくがこの技はまだ完成には至ってない。

こういう技は意図してやる物ではなく自然に出来ない

本当の完成とは言えない。戦闘において一々足場を造るのを

考えてたらその分、思考が割かれてしまうので考えなくても

自然に出来るようにならないと完成とはいえないのである。

（攻撃に使えるようにもしたいしな）

「それでも勝つのはこの私だになっ！」

そう言った瞬間エヴァが手にビーム状の光剣を出現させ、一気にこちらに接近し攻撃を仕掛けてきた。

俺はエヴァが近距離で戦うとは思わなかったので少し驚いてしまい回避するのが遅れたが、それでも、避けるだけの時間は充分あるので体を横に反らしビーム状の剣を避けた。

「————ッ!!」

すぐに体に異変を感じたので、慌ててその場所からバックステップで離脱。

また空中に氷の足場を作りその場に着地。
体を反らした側の腕を見てみると完全に腕が氷ついているようだ。

「冷たっ！ くっそ！ それが前に考えていた
オリジナル呪文スベルとやらか？」

そう言うときエヴァは満足そうに説明し始めた。

「そうだ。触れた物を強制的に相転移させ切断するものだ。
更に相転移された物質は大量の熱を奪うから剣を避けても
今度は極低温によって攻撃できるという二段構えだ！」

そういった後エヴァは高笑いをしているが
それを聞いている暇はない。いや、説明してくれたのは
ありがたいが、だからといってどうにか出来る代物でもない。
もしかしたらこの鍊金鋼だったら防げるかもしれないが
そんな博打は出来ない。もし無理だったらあんな物騒な物触れただけ
俺の体なんて真っ二つだ。っていうか。

「おいエヴァ！ そんな物使ってお前俺を殺すつもりかっ!!」

「お前にはこれぐらいせんと意味がないからな」

「そんな信頼ごみ箱にでも捨ててしまえ!!」

変な所で信賴しやがって。

まあかといって負ける訳にはいかないのです

体から放出させた剉を熱に変化させ腕の氷を溶かす。

がいりきけいしいうけい かれん
外力系衝剋の化鍊変化……気縮爆。

大気を圧縮させエヴァの眼前で爆発。
爆発でエヴァの視界を遮る。

「む？」

エヴァがこちらの行動を把握出来ない間に。

ないりきけいかつけい
しつえい
内力系活到の変化……疾影。

左右、そして正面から気配を凝縮させた剽をエヴァに向け分散して飛ばす。

本体の俺はすぐにエヴァに向かって大きく弧を描くように天井付近にまで跳び上がり、
すぐに殺到さっけいにより気配を消してエヴァにばれないようにする。

「煙に紛れて攻撃しようとしても無駄だ！」

エヴァはビーム状の光剣でその気配を三つともそのまま切り裂いた。斬った感触がないのにエヴァが、驚いている間に一瞬にして活潑せきせきを高め

天井を蹴る。エヴァの後ろに周り反応する前に障壁を粉碎。

そして、エヴァの後ろから頭にこつんと拳をぶつけ、

「はい、お仕舞い」

この模擬戦の終了を告げた。

「あの爆発の時か？」

「そうだな」

「……ツチ！」

エヴァは忌々しそうに舌打ちをした。

やはり悔しい物は悔しいのだろう。

「まあ年季が違うからな。まだまだエヴァは強くなるさ」

そう言った後ぽんぽんとエヴァの頭を叩いた。
これは本音である。エヴァは本当に才能がある。

「また今度してやるからさ」

「当たり前だっ！」

その日は模擬戦によって荒れた所を直した後
二人で適当に決めた部屋で寝る事にし。今日一日を終えた。

エヴァと旅を初めて105年
原作開始まで後365年

レーベンスシュルト城を入手。

第十一話『未開の土地にて』（後書き）

今回も独自設定あります。

オリジナルの剽技はその内出すと思いますので。

では、用語説明を

剛昇弾ごうしょうだん…衝剽の砲弾を放つ。

炎剽将弾撃えんけいしょうだんげき…元は槍から放つものだがそれを
手でも放てるようにした物。剽を炎の弾丸に変え放つ。

気縮爆きしゆくばく…大気を圧縮し、爆発させる。

疾影しつえい…剽を気配に変え四方に飛ばす事で混乱を助長する技。

第十二話『快適な日々』（前書き）

皆様方のおかげで総合評価580越え・お気に入り登録230超えになりました。

自分の作品をこんなに読んでくださる人がいて嬉しいです。

これからもどんどん書いていこうと思いますので
宜しく願います。

では、今回も楽しんで頂けたら嬉しいです。

第十二話『快適な日々』

ここに住み始めてから睡眠は今までの旅とは違い快適になった。やっぱりどこか落ち着ける所があると言うのはいい物だ。

んーっと体を伸ばしながら扉から外を出た後エヴァを起こしに部屋に行く。

エヴァはやはり吸血鬼だからなのか朝は弱い。だが、朝といっても、もう10時過ぎなので起こさないとまずいだろうと思いい部屋に向かうことにする。

部屋の前に付いた後一応扉をノックするが、やはり返事はなく断りの言葉を入れた後部屋に入る。

部屋は俺の所とは違って大小様々な人形が置いてあった。

これが全部エヴァの自作っていうのを知った時は

凄いと素直に感心したものだ。

ちなみに俺の部屋はほとんど

ここに来た当初とは変わっておらず殺風景なままだ。

元々部屋にも拘らないのでそのままにしている。

その部屋の中に様々な人形に混じってチャチャゼロがいたので。

「おはようチャチャゼロ。」

エヴァはやっぱりまだ寝てんのか？」

「アア 御主人ハマダ寝テルゼ」

そう言われてベットの方に視線を向けると
布団に埋もれるようにエヴァがスヤスヤと気持ちよさそうに寝て
いた。

「こうして見るとやっぱり普通の子供だよなあ」

エヴァが聞いたなら怒りそうな事を呟いた後
なんとなく起こすのが、躊躇われたので

エヴァの柔らかい髪の毛を撫でていると心無しか表情が緩んだ気が
した。

それを見た後チャチャゼロを見て。

(……守らないとなあ)

そう自然に自分で思って少し驚いた。いつの間にか
そこまでエヴァとチャチャゼロの存在が大きくなったという事だ。

俺はこの世界に来て親しい人なんてエヴァ達以外誰もいない。

エヴァ達が初めて大切な人であり俗に言う守りたい人なんだろう。
少しこういう事を思うのは恥ずかしかったが

悪い気分ではないので、これでもいいかと思った。

何て事を思いながらエヴァの頭を

撫でていると目が覚めたのかゆっくりと目を開け始めた。

「……ん、んう」

「目覚めたか？」

「……うん」

起きたばかりで寝ぼけているからなのかエヴァがやたら素直だった。

「……………んう?？」

そうしてると、だんだんとエヴァの焦点が定まってきて次第にエヴァの顔が赤くなってきた。

「な、な　　なん、な　　なんで、こ、ここに?　　いい、いつから?」

噛みまくりだった。

「いや、エヴァを起こしに来たんだが
気持ち良さそうに寝てたから起こすのが躊躇われてな
来たのは10分前くらいかな?」

そう言った後エヴァは更に顔が赤くなってしまった。

「なあ、一体どうしたんだ—————おわあっ!!」

いきなりエヴァが『エクスキューションーソード』（術名は教えてもらった）を
発動させ斬りかかってきた。

「き、き　　き貴様あ!!」

「危なっ!　　おいエヴァ急にどうしたんだよ!？」

「お、おお前はもう少し女心を分かれええ!!!!」

「意味わかんねーよ！」

何でここで女心なんだy——うわっ！　今かすったって！！
ほらここ！　凍ってるって！」

「うるさい！！！」

「ア—ア　ヤッチマッタナ　リヨウ」

それからという物。鬼気迫るエヴァに追いかけまわされる事に。
あいにく俺にはギャグ補正何て物は無いので俺は必死に避けるはめになりエヴァが落ち着くまで、この追いかけっことは続く事になった。

「まったく！　貴様と言う奴は！」

「悪かったって」

城を破壊しながら、しばらく逃げ回った後
エヴァが疲れたのかどうかは分からないが
とりあえず落ち着いてくれたので今は俺が謝っている所だ。

今いち何が悪いかは分からないが、俺が悪いという事は

分かったので謝る事にした。

そうやって機嫌が悪かったエヴァだが唐突にそれが止まり次の時にはさっきより苛々したように舌打ちをした。

「チッ！ 侵入者か」

「そうなのか？」

「ああ。城を直す時についでに城より3km離れた所までに探知用の結界を張っておいたのだが、それに引っかかったようだな」

（そんな事までしていたのか……）

感心すると同時にそんな事すら考えなかった自分って……。と少し落ち込んだ。

「南と北に二手に分かれて攻めてきているようだ数は20ずつだ」

「んじゃ二手に分かれて迎撃か。
っていうか久しぶりの敵襲だな」

「そういう事だ。リヨウはここから南に向かえ私は北へ向かう」

そういうとエヴァはチャチャゼロを連れ敵の行く所に飛び立とうとしたが。

「エヴァ！ チャチャゼロ！」

俺が呼び止めると少しだけ顔をこちらに向けた。

やはり機嫌が悪いようだ。

「気をつけろよ」

「フン。そっちこそ精々殺されないように気をつけろ」

「心配スナヤ」

それだけ言ってエヴァは飛んで行った。

今回エヴァは苛立っているから敵は悲惨だろうなあと少し同情する。

「さてと、俺も行きますかね」

ボックスから錬金鋼を取り出し

活動によって強化した肉体で敵のほうに向かって俺も跳んで行った。

そうして、氷の足場を造りながら跳んでいくと

こちらに向かって来ている魔法使いの一団を発見した。

ぐっと力を入れて、その魔法使い達の目の前に着地する。

無駄かもしれないが念の為に。事。

「今更かも知れんが一応聞くぞ。ここに何しに来た？」

魔法使い達は俺が急に現れた事に驚いた様だが、
すぐに立て直しリーダーらしき男が、

「ついに見つけたぞ！ 武芸者！！！」

何しにだど？ そんな事決まっているだろう！

貴様達化け物を討伐するのが我ら偉大なる魔法使い達の仕事だ！！」

かなり恥ずかしい事を言われた。

俺に付いた二つ名の一つである。俺が武器を色々扱ってるというありきたりな

感じで付けられたようだ。俺としてはそんな中二くさい名前なんてまっぴら御免だ。物語等では中二要素とかは全然嫌いではないが、自分にそれが

付けられるとなると別問題である。かといって自分から名前を名乗るのも

馬鹿らしいのでどうするか悩み所である。

そんな事を考えている間に奴は何か色々言ってたようだがこっちはこれっぽっちも聞いてなかった。

まあこういう奴等が言うのは大体同じなので聞き流しても特に問題はない。

「レストレーション」

とつと片づける為に鍊金鋼を復元。

「ああ〜どうでもいいからさっさと始めよう」

「なっ！？ ———ッ！！！」

頭に來たらしいが、こちらから声を掛けてやっただけでも感謝して欲しい物だ。

どうもこういう奴等は様式美に拘るからな。

「このっ！！ 精々後悔するがいいこの化け物！！
来れ虚空の雷、薙ぎ払え。『雷の斧』」

それなりに高位の魔法使いのようで、中々の大きさの
雷の斧が上空から叩き斬るように襲いかかって来た。

そしてそれにつられるように他の魔法使い達も
色とりどりの魔法がこちらに向かって放ち始めた。

それを見ても俺は避けようとはせず、魔法はそのまま着弾。

「見たかつ！ この化け物めが！！
我らが負けるはず無いのだ！」

死体すら確認せず何か言ってるようだが、

「まあ高位の魔法使いと言ってもこの程度か……」

エヴァとは次元が違うな。

もちろんエヴァの方の次元が上だけど。

「ば、馬鹿な！？」

俺も何もしないで防いだ訳ではない。そんな事したらさすがに
ミンチになっている。そこで、俺が今回復元した鍊金鋼の形は
剣である。それを用いて使った剽技が、

―――がいりきけいしゅうけい外力系衝剄の変化……じんがい刃鎧。

半物質化させた剄を体に纏わりつかせ、鎧とさせて防いだって訳だ。攻防一体の剄技である。

「そんな、我ら偉大なる魔法使いの攻撃が防がれるなんて……」
何か言ってみたのだが、

「戦闘において肩書なんて無意味なんだよ。
結局はあらゆる意味で強い奴が勝つだけだ。そして」

じんがい刃鎧を瞬時に刃状に変え、
距離が近かった半分ほどの魔法使いに向かって伸ばす。

「俺よりお前らが弱かった。それだけだ」

じんがい刃鎧によって斬殺。

上半身と下半身が別れた事により力を失いそのまま下に
二つに分かれて落下していった。

「ひ、怯むな奴に攻撃を仕掛け続けろ!!」

「」「は、はい!!」

『氷・火・雷』の精霊68頭、集い来たりて敵を切り裂け。

『魔法の射手・連弾・『氷・雷・火』の68矢』」「」「」

諦めずに攻撃を仕掛けてきたが、最初の時全員で仕掛けてきても

無理だったのに半分に減った今の攻撃が通る筈がなく
すべて刃鎧じんがいによって阻まれてしまう。

（ここまで力量に差があるんだったら逃げればいいのになあ。
態々追ったりはしないのにな）

そう思いながら同時に無理か、とも思った。

奴等は悪に負けるというのが駄目なのだ。

そして奴等の敗北条件には 逃げる というのも含まれているのだろ
う。

だから基本奴等は逃げないし自分の勝利を疑わない。

（疲れる戦い方だな）

俺だったら敵いそうにない敵ならさっさと逃げる。

奴等は執拗に攻撃を仕掛けてきているが、いい加減そんなに
撃ってきたら目の前が鬱陶しくなってくるので
そろそろ決着を付ける事に。

奴等を挟むように刃鎧じんがいを展開し
そのすべてを刃状に変化。

――――がいきけいしやうけい
――外力系衝剄きやうじんの変化……挟刃。

奴等を押しつぶすように挟んで中に居る奴を切り刻む。

ようは吊り天井の上下どちらも刃がありそれが迫ってくるような
バージョンだと思ってくれて構わない。

奴等は一瞬でミンチみたいになってしまい原型は留めていない。

「エヴァはもう終わったかな」

こんな事今まで何度もあったので、一々気にしてられない。
俺もいい感じでずれてきたなと思う。そんな事よりエヴァの方が
どうなっているかの方が気になるのでとりあえず城に戻ってみる事
に。

「ん？今帰ったのか？」

優雅に紅茶を飲んで寛いでいた。

チャチャゼロも変わらずそこにおり

敵を斬った刃物を錆びないように今は整備しているようだ。

（……刃物はやたら大事にするな）

改めてチャチャゼロの性格が心配になったが

もう今更どうしようもないかと思い、その事は諦める事にした。

とりあえずエヴァに向かって片手を挙げ。

「ただいま」

するとエヴァはそっぽを向きながら

「ふん。……………お帰り」

そう小さく言ってくれた。

おまけ

「ん？ その水晶玉は何だ？」

「アア ソレハ御主人がリョウヲ心配シテ
遠見d「チャ、チャチャゼロっ！！」」

「悪い。よく聞こえなかったんだが……」

「な、何でもない！！ 気にするなっ！」

「そ、そうか」

「ホントニ素直ジャネーナ 御主人」

レーベンスシュルト城に住み始めて80年
原作開始まで後285年

第十二話『快適な日々』（後書き）

では、用語説明を

刃鎧^{じんがい}…半物質化した剄を自身の体に纏わりつかせ、鎧とする。

剄は粘性のように動き、近づく者に向けて瞬時に刃状の形で固定化する。

逆に粘性の剄を相手にまとりつかせて動きを封じることでもある。

挟刃^{きょうじん}…刃状の剄を上下に展開し、そのまま挟むように閉じその中にいる者を切り刻む。（オリジナル剄技）

第十三話『かつての故郷へ』（前書き）

感想でも頂きましたがこの小説はテンプレとご都合主義が結構ありますのでそういうものが嫌な方はお気を付け下さい。

では、今回も楽しんで頂けたら嬉しいです。

第十三話『かつての故郷へ』

あの襲撃から度々魔法使いや賞金稼ぎなどがこのレーベンスシュルト城に襲撃を掛けてくるようになった。

そのせいで、またまた賞金上がり俺が550万ドラクマに上がりエヴァが450万ドラクマにまで上がった。そしてエヴァに新たな二つ名も付けられ「闇の福音」ダーク・エヴァンジェル「童姿の闇の魔王」ドールマスター「人形使い」などが付けられていた。

エヴァは童姿と言うのが気に入らないらしくその事について憤慨していたがその事はその二つ名を付けた奴にでも言わないと、どうしようもない。

とにかくこの城の位置はもう敵方には、ばれてしまっているとみて間違いないだろう。という事で。

「日本に行かないか？」

「また、お前は唐突に……」

エヴァはまたかと言わんばかりの顔していた。

もうこの場所もばれてるのにずっと同じ場所にいるのも何だかなあと思ったのでエヴァに提案した。

ちなみに日本というのは個人的に行きたいからだ。

「いやあここもさ、もう大分知られちゃったからそろそろ移動した方がいいんじゃないかなあと思って」

「まあ一理あるかもしれんが、
だがこのレーベンスシュルト城はどうするのだ？」

そこが問題なんだよなあ。

さすがにここを手放すのは勿体なさすぎるし
かといってここに置いていけば誰かがこの城を
乗っ取るか壊すかされてしまうだろう。

俺が頭を悩ませているとエヴァが得意げな顔をし。

「まあいいだろう。私も試したい事があるし、
この城の事はどうにかしてやろう」

そう言うときエヴァは俺に向かっていくつかのメモを差し出してきた。
首を傾げつつも、それを受け取って広げてみると
それぞれに術式が書いてあった。
これをどうしろというんだと思いついて見ていると。

「その術式をここから3km離れた所の四方の四隅に刻んでこい。
お前の鋼糸なら簡単だろう？」

エヴァは俺の事を便利屋か何かと間違えてるんじゃないだろうか？

そうは言ってもここを移動したいと言いだしたのは俺なので
文句何て言えるはずも無く、しぶしぶその術式を刻むポイントに向
かい

鋼糸によってエヴァのメモの通りに刻んだ。

これも修行だ。そうポジティブに考えながら刻んだので
それほど苦にはならなかった。

そして、エヴァに言われた通りに術式はすべて刻み終わったのでエヴァに報告するために元の場所に戻ってみると、先ほどとは少し変わっていて何やらエヴァの傍には空のボトルシップ？のような物がそこに置いてあったのでこれは何か？と聞いてみたが後のお楽しみだ。と言われてしまったのでその場で聞くのは諦める事にした。

その後術式で囲った範囲より俺達全員が外に出てエヴァがそのボトルシップにも俺が外に刻んだのと同じような術式を刻んだ。

「結局何するんだ？」

「黙って見ている」

「……」

「ケケケ マア落ち込ムナヨ」

エヴァが非常に冷たい。チャチャゼロが慰めてくれたが面白がっているようなのでまったく慰めにならなかった。

落ち込みながら見ているとボトルシップの術式にエヴァが魔力を流したようでそれが発光し始め、それにつられるように遠くの方で俺が刻んだ術式も発光しているようで、ここからでも光っているのがよく見える。

そして一際光ったと思った時には目の前には、ぽっかりと削られたように

何も無い空間があった。

俺はその光景に唾然とした。

今まで魔法をいくつも見てきたがここまで出鱈目な物は一つも見えた事はなかったからだ。

「な、なあエヴァ。城とかはどこ行っただ？」

そう言うときエヴァは俺が驚いたのが嬉しいのか満足気な顔をした後さっきのボトルシップを指差した。

それにつられて見てみるとさっきまで空だった

ボトルシップの中にはついさっきまで目の前にあった光景がそっくりそのまま小さくなって入っていた。

それを見てまさかと思いながらエヴァを見てみると

エヴァはにやりと笑う。

「ふふん。そうだレーベンスシュルト城とその周りには

すべてこの中に移した。まあまだ細かい調整が必要だがな」

「まじかよ……」

エヴァがすごいというのには充分分かってるつもりだったが

まだその認識は甘かったようだ。こんな事まで

出来るとは思わなかった。

「すげえなエヴァ……」

「そうだろう！ そうだろう！

もっと褒めるがいい！ ふ、フハハハハハ！」

エヴァは物凄い上機嫌だった。

まあこんな物が成功したら誰でも上機嫌になるだろう。

「ん？ でも、これミニチュアとして持っていてもそんなに意味無いんじゃないか？」

「馬鹿ものっ！！ 誰がそんな事をするか！
ちゃんとこの中に入れるようにしているわ！
まあそれはちゃんと調整してからになるがな」

それからとりあえずこの場所から移動し一先ず安全そうな場所を見つけたので
そこに入り、更にエヴァが結界を周囲に展開した。

エヴァ曰くさっきのボトルシップは『別荘』という
名前らしくそれを調整するのだしばらくは集中するそうだ。

俺はというと居ても魔法関連は何も出来ないので
エヴァの邪魔にならないように外に出ておき、同じく暇な
チャチャゼロと一緒に模擬戦したり、酒を飲んだりしながらゆっく
りしていた。

そして数日後。チャチャゼロと一緒に寛いでいる時に。

「ついに出来たぞっ！！」

エヴァが興奮したようにして言ってきた。
いや、興奮もあるだろうが、あんまり
寝てないから変なテンションになっているんだろう。

「さあさあ！ さっさと入ってみろ！」

とりあえず今のエヴァに逆らわないようにし

別荘の近くに寄る。すると足元に魔法陣が浮かび

そのあと少しの浮遊感の後今まで居た所とは景色が変わり、
数日前まで俺達が住んでいたレーベンスシュルト城が

以前と変わらないまま眼前に姿を現した。

「ほんとに入ってるんだな」

遠くからレーベンスシュルト城を見ながらその事に感心していると
俺が入ってきてから少し時間が経ってからエヴァもこの別荘に入っ
てきたようだ。

さっきよりも幾分か落ち着いているようだ。

「遅かったなエヴァ」

「当たり前だ。ここは外の一時間が

一日になるからな。時間の流れが違うんだ。

その変わり一日経たんとと出れんな」

またとんでもないことをエヴァは当たり前のように言った。

一日出れないというほんの少しのデメリットがあるが、

それよりも圧倒的にメリットのほうがかい。特に俺達のような年
をとらない存在には、

かなりいい物だ。こんな物があつたら短期間でも修行とか、休息を
取る事が

出来るんだから非常に便利なものだ。

まあ年を取る奴からしたら
多用したら老けるって事だからその辺は大変かもな。

そんな事を思っているとエヴァは可愛らしくあくびをした後はつとしたようにし俺の顔を見た後少し顔を赤らめた。

「私は眠いからもう寝る」

そう言って自身のずぶずぶと影に沈んでこの場から姿を消した。
影のゲートを使ってたぶん自分の部屋に行ったんだろう。

俺はというと別にやることもないので
とりあえずそこらを歩き回って別荘を見て回る事にした。

大瀑布の水はエヴァが魔法によって循環か何かしているのか
見た限りでは水は減っているようには見えなかった。

熱帯雨林はそこだけその植物が育つのに適した温度をしているようで
こちらのレーベンスシュルト城の所とは温度が違った。

そういう細かい所を見たりするだけで
結構時間は潰せるもので、ふと気付くともう夜になっていた。

もうほとんど別荘は見れたので、本当にやる事が無くなった俺は
少し鍛錬をすることにした。

今回は刀を使おうと思いボックスから錬金鋼を出す事に。

「レストレーション」

復元し何回か刀を振ってみる。

そしてその後一旦、鍊金鋼を待機状態に戻し
次に復元しながらその刀で今できる最高速度の抜き打ちを放つ。

常人ではいつ刀を振ったなんてまったく分からないだろう。

もしかしたら俺の抜き打ちはレイフォンの抜き打ちよりは速いかもしれない。

だがそれは俺のほうが劉量が多いという単純な理由からくる結果だろう。

技量はそんなに変わらないはずだ。

（もっと強くならないと……）

いつどこでどんな敵が来るかは分からない。

強敵と出会った時に敵いませんでした、じゃ話にならないのだ。

そんな事になったら俺達賞金首は絶対に命を落とすだろう。

俺一人なら逃げたらいいが、エヴァ達もいたら逃げる訳にもいかない。

ましてや俺に限って言えば世界の修正力がある。

ある程度は許容してくれるらしいが、第一俺は物語がどんなのかは分からない。

知らぬ間に物語に介入しすぎてしまうかもしれない。

その時の世界の修正あるいは抑止に誰か巻き込まれてしまうかもしれない。

そんなのは御免だ。許容出来ない。だから、もし抑止が来たとしてもそれを跳ね返せるぐらいに強くならないと。

その日はそこで一心不乱に刀を振り続けた。

明けて翌日。

一日経ったので別荘から出て日本に向けて出発した。

「さて、日本のどこに行こうか？」

「この考え無しめっ！　いつもそうだが
そういう事は事前に決めておけ！」

「諦メロ御主人　イツモノコトダ」

「そうだ！　そうだ！　諦めろエヴァ」

「お前が言うんじゃない！！」

レーベンスシュルト城に住み始めて135年
原作開始まで後230年

別荘入手。

日本に向けて出発。

第十三話『かつての故郷へ』（後書き）

もうちょっとしたら大戦編に入ると思います。

作者は主人公が紅き翼に入るかそれとも主人公単独でいくか迷っています。

完全なる世界はそのあとの展開が作者では思いつかないので無理だと思っています。

まあもう少し考えてから決めようと思います。

第十四話『新たな拠点』（前書き）

まず謝罪をさしていただきます。

こちらの都合により長らく更新停止した事に対して読んでくださる方達に対して謝罪します。申し訳ありませんでした。

これからはちゃんと更新していくので
もしまだ読んでくれるならば読んでくださると
ありがたいです。

少し長いかもしれませんが
楽しんでいただけると幸いです。

第十四話『新たな拠点』

アフリカ大陸から出発して、そこらを観光しながら、そして、時たま俺達を狙っている奴等を撃退しながら日本を目指した。

ついでに言えば、他のいくつかの気にいった場所や修行に使えそうな場所を

別荘に入れたりしながら、日本に向かっていたので、その道中もはやお馴染みの

事があり俺達の賞金もまた上がり俺は750万ドル。エヴァが600万ドルまで上がった等があったりしたが、もう今更のことなのでどうでも良くなった。

そして、無事に日本に辿り着いて今現在は現代でいう埼玉辺りにいる。

周りの人達や街並みを見て今の時代を考えると何となく

今の日本は江戸時代っぽい感じだ。なぜっぽいとかというと

前世？では勉強は熱心なほうではないのではつきりとは分からないのである。

ちなみに俺達は認識障害で極普通の日本のどこにでもいるような人物に

見せているので、完全に日本人じゃないエヴァや俺が奇異の目で見られる事はない。

エヴァは自前で、俺のはエヴァ特製の魔法具だが。

そして今現在町を歩き回っているのだが。

「な、なあ、あれは何だ？」

エヴァは微妙に目を輝かせている。

まあ今まで居た所はどちらかというと洋風の所ばかりだったからエヴァには逆に和風が珍しいのかもしれない。

「確か着流し？ 着物？ んゝ着流しは男が着ている物だったと思うからあれは着物なんじゃない？」

「そ、そうなのか」

「何だ気になるのか？」

「す、少し珍しくてな」

そう言いながらエヴァは珍しそうにキョロキョロと周りを見回している。

傍から見ると田舎から都会に來た人に見えなくもないな。

そうしながら歩いていると遠くの方に何かの影が見えたので

活剷によって目を強化してみるとだんだんと輪郭が

はつきりとしていき、それが木である事が分かった。

ここからでも見える位なんだからその木は相当でかいんだろう。

「なあエヴァ、あそこにある木見に行かないか？」

「木？ そんな物どこにあるんだ？」

必死に目を凝らしているようだが
まだ、エヴァには見えないようだ。

「結構離れている所だけど

一回見てみる価値はあると思うぞ？」

そう言いながらエヴァはまだまだ街並み等を見て回りたそう
だったが、そのままエヴァを引きずるようにして連れて行き、
木の全容がしっかり見える所まで連れてきた。

「近くで見ると更にでかく見えんなあ」

「これは……」

その木は近くで見ると圧巻の一言に尽きる。
もう何千年前から生えてるかも分からないぐらいだ。

ざっと目測で測ってみると高さは250mは超えているだろう。
しかも、馬鹿でかい魔力があるのが俺でも分かるぐらいだ。

エヴァはさつきからじっと目の前の木を見ているようなので。

「チャチャゼロ。エヴァを少し頼むな」

「分かったぜ」

その間にこの辺りにいる住人に話を聞いてみると
いつからあるのかはさすがに分からないらしいが、
このでかい木の名前は『神木・蟠桃』しんぼく ばんとうなどと呼ばれているらしい。

更に言えばこの神木は何故か定期的に発光するらしい。

神の木と呼ばれるならこの大きさも納得だし光るっていうんなら尚更だ。

あいにく蟠桃とやらの意味は知らないが大層な物なんだろう。

話を聞き終わった後元のエヴァの場所に戻るとまだ考え込んでいるようなので、

「エヴァさっきからどうしたんだ？」

「……ん？ ああこれほどの物があれば

もしかするとレーベンスシュルト城よりも

いい拠点が出来ると思ってた。それを考えてた所だ」

レーベンスシュルト城よりすごいところか。

あの城でも十分すごかった拠点なのに更にすごい拠点が出来るのが想像できないけど、エヴァがそう言うならそうなんだろう。

「んじゃ、この土地を買い取ってここに住むか？

幸い資金もあるし、エヴァもまだ日本に居たいだろうし」

「私としては嬉しいのだが、いいのか？」

「いいって。今まで俺の勝手に付き合わせちゃったんだしたまにはエヴァの好きなようにしてさ」

「私はそんな事など思った事ないんだがな。」

まあリヨウがいいならば、そうさして貰おう」

それから、まずこの土地を持っている人に話をしてこの土地について交渉をした。

とはいっても、その人に俺達の事を説明出来る訳がないのでエヴァに頼んでその人に暗示を掛けて貰いそこは省略した。

でも、お金を払わないっていうのは個人的に許せないのでも、そこだけは普通にちゃんとした言い値で払った。

エヴァもその事については特に反対する事はなかった。

小判などは俺達は持っていないのでとりあえず金塊でそれに値するぐらいの物を渡しておく事に。

その後、自分の家の近隣住民に挨拶して回る。

人の噂ってのも馬鹿に出来ないもんだからそこら辺は気を付ける事にした。

とりあえず好印象でも持ってくれたら御の字だ。

俺が色々やっている間にエヴァはこの神木を要にして今までとは比べ物にならない結界を張るようだ。

まず探知の為の結界を広範囲にされど他の奴には気づかれないように展開させ、更に内側に物理・魔法等に対しての結界も展開。ついでに、ここには直接転移出来ないようにも細工も施す。

とはいっても探知以外の物はそこまで広範囲には張っておらず、他の結界は自分達が住む所と神木の周りにだけ展開させている。

次に住処だが、別荘にいつも入っている訳には行かないので、

普通に住める所も造るようにする。だが、俺たちに建築技術何て物はあるはずが無いので、そこは普通にこの近隣にいる大工に頼むすることにし

普通の瓦屋根のある家を造って貰った。

エヴァはこの和風な家の感じが気に入ってくれたようだ。

「うむ。これは中々いいな」

「それで、エヴァ。この神木は他には何か使うのか？」

「そうだな。この神木の素材は魔法具を造るのに適している。それもそこらにある物より断然効果が高い物をつくれるだろう」

「ふーん。そう言えばこの付近住民が言ってたけどこの神木一定周期事に発光するらしい」

「ほう。それは中々興味深いな。その時を楽しみにしておこう」

「でも、木が光るとかまた無茶苦茶だな。そんな発光とかしたら近隣の人達に怪しまれないもんなのか？」

「それどころかこんなでかい木があったら普通にみんな怪しむと思うんだが。」

「それはこの木自体が強力な認識障害を働いているようだ。それによってこの神木は不審には思われないようだな」

「自分の身は自分で守る、か」

そこらの人間よりも余程頭が良さそうな木だ。

「そんなにすごい神木なら他の魔法使い達もこの神木欲しがらんじゃないの？」

「そうだな。その内来るかもしれないが、ここは極東の島国だ。しばらくは大丈夫だろう」

「そっか。じゃあしばらくはゆっくり出来るか」

「そういう事だ」

それからは俺達は特に何もせずにならだらと過ごしていたのだが、これはさすがに自堕落だし、いつお金が無くなるかもしれないので何か仕事をしようと考えた。仕事は裏の仕事、いわゆる

魔法関連の方が収入も多いし手っ取り早く出来るのでそちらを行う事にした。

まず仕事をする前に俺は賞金首なので、この姿のまま仕事をする訳には

いかない。まず顔には白の仮面を被り服は黒のコートを着て、更にエヴァに貰った認識障害で賞金首である俺とは気づかないようにする事に。

幸い資金は旅をしていた時に手に入れた物がいくらかはあるので、それを

軍資金とし宣伝費用にして自分のする仕事について魔法世界、旧世界問わずに

宣伝することにした。宣伝といってもギルドや裏の仕事を扱っているところに対してアピールしただけである。

そんな事を俺がしているとエヴァは仲間はずれにされるのが嫌なのか「私もやるぞ」と

言ってきたが、俺たちが両方共この家を開けると万が一もあるかもしれないので

この家を長期間空ける訳にはいかないので、エヴァにはこの家に居て貰う事にした。

その事を説得するのにかなり時間を必要としたが、基本的には俺が依頼をこなし

魔法的な事に関しては、エヴァに頼むと言うことで何とか折れてくれた。

その後すぐに何か考えたこんでいたようだが、まあ大丈夫だろう。

宣伝内容は、ほぼ何でも屋のような物になっているが、こちらの考えに合わない物は

断る事になっている。例えば子供等を攫って奴隷にするのを協力してほしいや、

薬物の売買に協力してほしい等、そういう依頼は受けないように明記している。

更に言えば今現在こちらで依頼を受けるのは実質俺1人なので

そう多くの依頼は引き受ける事は出来ないという事も書いてある。

相手には悪いと思うが勘弁して欲しい。

依頼の受け方は今の時代に当然ながら電話等はまだないので、宣伝した場所に

エヴァが造った魔法具を仲介する所の奴に預け、魔法具の中に依頼

の概要を

書いた物を入れるとこちらに届くようにしている。もちろんエヴァ特製の防犯魔法を

掛けてあるのでその魔法具が取られたり、壊されたりはしないようにしている。

まあこういう仕事は信用第一なのでそんな事は

そうそう起こるとは思わないが念のためって事だ。

そして最初に依頼の概要を見た後、その魔法具に受けるか否かの返事を入れその返事を仲介人が依頼人に送り届けてもらう事になっている。

その後、依頼主の所に行き依頼の詳細を聞き

そこで依頼にあった依頼料を貰う事になっている。

急ぎの依頼の場合はそちらを優先することにもなっている。

そんな事をしてながら過ごしていると、俺達がここに住んでから、初めて

神木が発光したので、その日は、エヴァとチャチャゼロと一緒に神木を見ながら

酒を飲んで騒ぎながら過ごした。エヴァは1人で何やらしていたようだが

エヴァにもやりたい事もあるだろうから詮索はしなかった。

そんな事もあったが、ついに準備が終えて依頼を開始する日になると

かなりの量の依頼が送られたきたので少しテンションが上がったが、

よく見ると本当に子供でもできるような依頼も多くてがっかりすることになった。

エヴァはそれに対して苛々しており、それを宥めながら依頼を確認していくと

何件かはましな物が書かれていたのでそれをこなしていく事にした。

「さてと、最初はどれにするかな」

「どれでもいいんじゃないか？」

「まあ俺は新参者だからな。どれも大した依頼はないだろうな」

「オイリヨウ、俺モ連レテケヨ」

「チャチャゼロ。お前は一応敵が来た時の為に留守番だ」

「チッ ショウガネエナア」

エヴァ一人でも大丈夫だろうが、やはり敵が大勢で攻めて来た時には前衛のチャチャゼロがいたほうが俺も安心もできるしな。

まともそうな依頼を見回すが、

どの依頼も簡単そうな物ばかりで正直いって

片手間でもできるような依頼ばかりだ。

「おいリヨウこれなんてどうだ？」

「ん〜？ 魔獣討伐か」

「最初だしこんな所が妥当だろう」

「それもそうだな。んじゃ、行って来るな」

「ああ。早く帰ってこいよ」

「はいはい。心配すんなって」

「し、心配なぞしておらんっ！」

転移の腕輪を使いゲート付近に転移してから魔法世界に渡った。

そして、魔法世界に渡った後依頼主の所に向かうと、

そこにはどこにでもあるような、ありふれた村があった。

とりあえず突っ立っていてもしょうがないのでそこらを歩いている村人に依頼主の場所を聞く事に。

「すみません」

「はい？ ……何でしょうか？」

かなり怪訝そうに返されたが、それも仕方無いと思う。

顔に白い仮面を被っていて全身真っ黒のコートを着て、更にフードまで

被っている奴がいたら誰でも怪しむだろうし。

ちなみにエヴァは幻術でどうとでもなるので問題ない。

これからもこういう事はあるんだろうから
一々そんな事は気にしてられない。さっさと用件を済ます事にする。

「依頼を受けたヴォルフシュテインという者なんですが」

ちなみにこの名前は偽名でレギオスのヴォルフシュテインを
そのまま使う事にした。

そう言う并向こうは驚いたようにした後
慌てたように居住まいを正し。

「そ、そうだったんですか。
失礼しました。では、こちらにどうぞ」

そうしてその村人に付いていくとこの村の中では
立派な家がありそこに通されることになった。

中には老人がおり今にもぽっくり逝ってしまいそうな感じである。

そしてその老人から依頼の内容を聞くと、ここ最近村に魔獣が襲っ
てきたらしく、

最初は村の若い者達で撃退していたが、何度も襲撃を掛けてきたので
次第にこちらの被害が大きくなってきて抑えきれないようになって
きたらしい。

幸い魔獣はつい最近追い返したのでしばらくは大丈夫みたいだ。

国に救援を頼もうとしても、こんな辺境の村なので軍が送られてく
るのが
いつになるか分からないので当てにはできないそうだ。そこで、様
々な所に

元々駄目もとで依頼を出した結果来たのが俺と言う訳だ。

説明を受けた後老人は改めて

「報酬はきちんと払いますので
どうか依頼を引き受けてくださらないでしょうか？」

そう必死に聞いてきたので。

「その依頼お受けいたします」

「おおありがとうございます。魔獣はここより西に3kmほど行っ
た所に

ある岩場を住処にしているようですので。どうかお氣をつけて」

こうして俺の初めての依頼を開始した。

余談だがエヴァの造った魔法具が中々便利らしく
いくつかの所から売ってほしいと申し込まれてきたので
その魔法具単体でも結構な額になったようだ。

その話を聞いて

（あれ？ 俺いらなくね？）

そう俺が思ったのは蛇足だ。蛇足といったら蛇足なのだ。

日本に住み始めて50年
原作開始まで後180年
初めての依頼開始。

第十四話『新たな拠点』（後書き）

大きく変わるのは原作に関わってからなので
しばらくはこのままでもいいと思います。

矛盾点やおかしな所もあるかもしれませんが
どうか多めに見てくださいとありがたいです。

そして、これからも更新していきますが
以前に比べたら更新速度は遅いと思いますので
お気を付けください。

第十五話『必然の結果』（前書き）

ついに鋼殻のレギオスの最新刊が発売されました。

もう出てるとは思わなかったので店頭で見つけた時は非常に嬉しかったです。

まだ読んでいませんがすごく楽しみです。

そして総合評価が1000を超えました。

お気に入り登録されたみなさん、小説を評価して頂いたみなさんそしてこの小説を読んでくださったみなさん本当にありがとうございます。

これからやっていこうと思いますのでどうかよろしく願いします。

では、楽しんでいただけると幸いです。

第十五話『必然の結果』

依頼を受けると言った後。老人が一先ず休んだらどうか、と言ってきたが

俺としたらこんな依頼さっさと終わらしたいのでその申し出を断り老人が言っていた魔獣の住処に向かった。

3km何て前世？の俺からしたらかなりの距離なのだが、今現在の俺からすれば大した距離ではないので目的地である魔獣の住処である岩場にはすぐ着いた。

さっそく住処にいるであろう魔獣の気配を探ってみると。

「うわぁ……。めんどくさいなあ」

大量の魔獣の気配があったので初っ端からかなりやる気が削がれてしまった。

気分はいざ部屋を掃除しようと思い部屋を見回すと部屋が汚くなりすぎていて最初から挫折そうになる感じだ。

そんな馬鹿な事を考えていたが。

（まあだからといって）

ボックスから錬金鋼を取り出し。

「レストレーション」

鍊金鋼を復元し終わるとそこには細長い剣。
すなわちレイピアの形になった。

なぜ鋼糸を使わないのかにはもちろん理由がある。

鋼糸は俺達を狙ってやってくる賞金稼ぎや
偉大なる魔法使い達を排除するために俺がもっとも使用した鍊金鋼
である。

つまり何が言いたいかというと。

目立ちすぎたのである。

鋼糸なんて実戦で使っているのなんて少なくとも俺は自分以外見た
ことがない。

なので俺の鋼糸によって敵が裁断される事にちなんで『ジャッジ裁断者』
なんて名前をつけられてしまった。

それを知った時にはしばらく頭を抱えてそこらを転がり回る破目にな
った。

まあそんな理由があり、いくらエヴァ特性の魔法具で
認識障害が効いているからといって鋼糸を使って
わざわざばれる可能性を上げる訳にはいけないので
よっぽどな事態の時以外は極力使わないようにしていくことにした。

ちなみにここで鉄球や弓などの大威力の鍊金鋼を使わないのは
あまり地形を変えるのは村人等にとっても
迷惑がかかるだろうという理由で断念。

そして、鍊金鋼を復元し終えた直後魔獣の巣から気配が慌しく
動き始めた。復元時の発光で気づいたか、今更ながら俺の匂い等でも

嗅ぎ取ったか、はたまた別の理由か。

「やらない訳にはいかないしなあ」

そして、岩場から続々と通常の狼よりは大きいであろう魔獣が飛び出してきて俺に向い一斉に飛びかかってきた。

それに合わせるように俺も舞を踊り始めた。

最初は舞何て物は前世？でやった事などなかったのもまったくできなかったが、教本を参考にしながら地道に舞の練習をやり続けた結果やっと使用することができた。

傍から見ると俺の舞はビデオのように早回しで見ているようにしか見えないだろう。更に俺のレイピアが振られる間隔はほぼない。それほどの速度だ。俺が舞を踊りながらレイピアを一閃するごとに何十匹という魔獣が四散していく。

もちろん俺は舞という特性上そんなに広範囲を動き回っている訳ではない。

動いているとしても精々10mぐらいしか動いていないだろう。それなのになぜ

あきらかにレイピアの届いていない魔獣さえも四散するのか。

——かっけいしやうげんじやうへんげ活動衝動混合変化……ぶがく舞楽・なるかぜ鳴風。

周囲に充満する音すなわち、波動そのものと舞を同化し、舞によって引き込み、

舞によって操り、鍊金鋼を通し散布された俺の膨大な量の剋が波動と混ざり合い主導権を握り操っているのである。

だからレイピアを振る事自体に意味はなくそれによって破壊を任意の場所で行っているだけなのだ。ここら一帯はすでに俺の剋が充満している

ので

逃げようとしても一瞬で四散するし、かといってこちらに向かって突撃してきても結果は変わらない。すなわちこの場所は。

「ようこそ。俺の。俺による。俺だけのための殺戮現場へ」
フィールド

「ふう〜。やっと終わりかな」

舞を踊り始めて（途中テンションが上がって変な事を言ったが。）10分ほど時間が経ったので舞を終えて、周囲を見回してみるとそこには魔獣のものであろう肉片が散乱し、夥しいほどの血があった。

ここにいた魔獣は確かにそこらにいる魔獣よりは強かったが、そこまで騒ぎだてるほどの強さではなかった。

厄介といえば数だけであつたので俺からしたら

めんどくさいだけであつたし、このれぐらいの魔獣ならある程度腕の立つ奴が数人でもいたら大丈夫だろう。

もしかしたら群れを統率していたボスがいるかもしれないが、ざっと周囲の気配を探ってみてもそれらしきものはいないのでたぶん俺が気づかないうちに殺してしまったんだろう。

まあなんにせよ。

「依頼完了っ」と

その後村に戻るとあまりにも俺が戻ってくるのが早すぎたようで、村長は俺が本当に依頼を終わらせたかどうかを疑っていたようだ。だったから確認するように言うと、すぐに使いのものを出したようなので

俺は使いが帰ってくるまで壁にもたれて待つことにした。しばらく経つと

使いの人が若干顔を青ざめさせながら帰ってきた。あんな現場を見れば大抵の人は

顔を青ざめさせたりするだろう。

そして確認が取れたので、村長から礼と初回という事で普通よりも少し少なめにした報酬を貰った後村を後にした。

村を出た後、さっき受けた依頼の他にも受けた物があるが、その依頼にはまだ時間があるので、今日まだ食べていなかった、ご飯を食べるために近くの町に寄る事にした。

俺の格好が格好だから一応酒場に入り
適当に注文を取った後運ばれてきた食事を食べていると、
(ちなみに仮面は口の部位は取り外しできるので
仮面のままでも問題はない。)

「おいおい！ 聞いたか！ あの『闇の福音』と『武芸者』が
何と！ ついに死んだらしいぜ！？」
マーシャル・アーツマスター

「おいおい。その情報本当なのかよ？」

「当たり前だ！ 何せメガロメセンブリアの元老院が公式に発表した事だしな。」

何でもメガロの精鋭部隊が倒したって噂らしいぜ」

「へえーそうなのか。お前にしては
珍しくまともそうな情報じゃないか」

「てめえ！ それはどういう事だ！
俺が持ってくる情報はいつでもまともだっ！！」

傭兵2人のそんな会話が聞こえてきた。

まだ話しているようだが後は騒いでるだけなのでそれ以上の話は聞き流しといた。

それよりも会話の内容に表情などには出さないが少し驚いた。

（ここ何十年と俺達はおとなしくしていたからな、

それによって死亡扱いにしたか、俺達の偽物でも狩ったのか）

俺達のような高額の賞金首を狩ったという事はそれだけで

民衆達から支持を得られる。なにより俺とエヴァは賞金首の中でも、もはや伝説級だ。それに国の場合は倒したという情報が

流れれば他国に対しそれだけの戦力を保持していると示す事も出来るだろうし。

（これでメガロは表向き民衆から信用を得た事になるのか。

なかなか思い切った事するなあ。まあ俺たちに懸けられている賞金が無くなるのはありがたいがな）

ばれた時にはもちろんリスクがあるが、

少なくとも俺はわざわざばらそうとも思えない。

エヴァもそんな事わざわざしないだろうし。

ひとまずはデマだとばれることはないだろう。

その後ご飯を食い終わった後まだ受けていた依頼があるので

その場所に向かい依頼をやったのだが、そのどれもが簡単であった。少し気にかかる事もあったが別段気にせず依頼を終えた。

「最初だしこんなもんか」

今回受けた依頼はすべて終えたので今は山を經由してゲートに向かっているところだ。なぜ転移の腕輪を使わないかというと

魔力を使うという事に俺は慣れていないので使用するとひどく疲れるからだ。

そして家に帰ろうと山道を歩いていると。

「少し待ってくれないかな」

そう平坦な声を掛けられたので後ろを振り返ると、少し離れている所には長身で白髪 of 青年が佇んでいた。そいつを見た時の第一印象はまるで人形のようにだと思った。

「やっと出て来たか。」

このままついてくるつもりならどうしようかと思った」

そういうと向うは表情はまったく変わらないが雰囲気的に少し驚いたようにし。

「いつから気づいてたんだい？」

「最初からだ」

自分で言うのもなんだが、俺は気配を読む事に関してはかなり優れているといってもいい。俺は防御力が普通の奴に比べると極端に低い。だから不意打ちなども、くらう訳にはいけないので自然と気配を読むことは上手くなっていたのだ。

依頼中の気になっていた事はずっとこいつが俺に着いてきたからだ。その時は仕掛けてくる気配がなかったため放置していたんだが。

「これは参ったね。少しは自信があったのだけれど」

「気にすんな。お前はかなり上手かったよ」

これは事実。こいつは今まであってきたやつの中でも頭一つ飛抜けているぐらい上手かった。

そう下手するとエヴァに匹敵するぐらい。

「そういつてくれると嬉しいよ」

「そうかい。で、結局俺に何の用だ？」

「いや、少し君に話があつてね。『武芸者』マーシャル・アーツマスター

その名前を言われたと同時にボックスから鍊金鋼を取り出しいつでも鍊金鋼を復元できるようにし警戒のレベルを上げたが同時に。

（依頼を始めて初日にばれるって……）

少し落ち込む事になった。

こちらが武器を取り出しても青年は特に構える事も表情は変える事もなく、淡々と用件を話し始めた。

「そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。

今日は君をスカウトしに来ただけだから」

（スカウトと来たか）

今までそういう事がまったくなかった訳でもない。

様々な犯罪組織から勧誘を受けたが、そのどれもが

大抵は部下や配下になれなど、あるいは騙し討ちする気

満々な奴らばかりだった。当然そんな奴らの

勧誘なんて断ったら襲いかかってきたので排除することになったが。

とりあえず話を聞くだけ聞くことはするが。

「おいおい。そんな話をするって言うんだから

自分の名前ぐらい名乗れよ。それに勧誘する組織名ぐらい言ってくれてもいいんじゃないか？」

そう言う奴はこれまた表情を変えずに。

「それもそうだね。失礼した僕の名前はアーウェルンクス。

コズモエンテレケイア
完全なる世界のアーウエルンクスだ」

日本に住み始めて50年
原作開始まで後180年

初めての依頼終了。
コズモエンテレケイア
完全なる世界遭遇。

第十五話『必然の結果』（後書き）

鋼糸は少し制限させて貰いました。

鋼糸を使うとすぐに片付いてしまいそうなので、もちろん後々ちゃんと登場させますので。

では、用語説明を

舞^ぶ楽^{がく}・鳴^{なる}風^{かぜ}…周囲に充満する音……波動そのものと

同化し、舞によって引き込み、舞によって操る。鍊金鋼を通して散布された膨大

な量の剉が周囲に充満し、波動と絡み合い、混ざり合い、そして主導権を握って操る。

第十六話『彼にとって』（前書き）

感想で

剽はオーロラ粒子を

剽脈が取り込んで変換されて作られたのが剽なので
ネギ魔の世界にはオーロラ粒子は存在しない。

ということなんで、少し修正します。

とはいってもほとんど変わらないので、見なくても
大丈夫です。

sinさんご指摘ありがとうございます。

話は変わりますが、ネギま！32巻でネギとエヴァが
戦っている最後の場面でエヴァが

「本体に数倍劣る複製とはいえ……この私に一撃するとは」
言っていました。そうすると本体はどこまで強いんでしょうか？
すごく気になりました。

今話はいつもとよりご都合主義があると思いますのでご注意を。

では、楽しんで頂けたら幸いです。

第十六話『彼にとって』

「そうかい。俺も名乗りたいが一応元とはいえ賞金首だからな。悪いけど名乗ることはできないな」

何て、アーウエルンクスには軽く言ったが。

（相手に名乗らせておいて、自分が名乗らないって客観的に見たら俺、かなり失礼な奴なんじゃないか？）

そんな軽い自己嫌悪に陥っていた。

「それは残念だ」

アーウエルンクスは俺が名前を教えなくとも微塵も残念そうじゃなく言い放った。

こいつが表情を変える日はくるのだろうか？

（それにしても完全なる世界、ね。
なんかいかに、悪の組織ですって感じの名前だな）

完全なる世界について考えながら。

「で、その完全なる世界って
奴は何を目的としてるんだ？」

「僕たちはある意味では世界を終わらせ、ある意味では世界を救う事を目的としている」

一気に話がきな臭くなってきた。

こういう事をいう奴は頭のネジが飛んでるか、もしくは本当に世界を終わらす必要があって、それを自分達だけでどうにかしようとしてる奴だ。

そしてこいつはたぶん見る限り後者だろう。

別段俺が見る限りでは狂ってる訳ではなさそうだ。

狂気を押し殺しているのなら別だが。

今はその話は別にいい。問題は。

「何で俺をスカウトしようと思ったんだ？」

これが疑問。

まあこちらは、ある程度は当りをつけているが。

「君は元とはいえ賞金首だ。
だから、世界に憎悪を持っているだろうし、
世界終わらすのに丁度いいと思ってね。戦力としても
申し分ない。それに、今君は死んだことになってるから
その分行動もしやすいだろう」

「なるほど」

俺やエヴァのように理不尽に賞金首にされた
者は別に珍しい訳でもない。謂れの無い罪を被せられたり、
存在しているだけで賞金を掛けられた者もいる。
そういう奴らは大抵世を、世界を恨んでいるだろう。

俺でさえも賞金首にされた時は最初に憤りを少し感じたぐらいだ。
エヴァが真祖の吸血鬼にされた時には俺に何て想像がつかないくらい
世界を憎んでいただろう。

そうだとっても。

「タイミングが良すぎるな。

俺達の賞金が消えた直後にそんな話を持ちかけてくるなんて」

「ああ、それは僕から君への

ささやかな贈り物だよ。『闇の福音』はただのついでだ」

「そりゃどうも」

表面上は軽口をたたいていたが、内面は結構悩んでいた。

（これは……思っていた以上にでかい組織だな。

そんな事ができるってことは十中八九メガロの

元老院も噛んでいるだろうし、もしかしたら他国にも入り込んでい
るかもしれない）

正直いつてかなり驚いた。

そんなにでかい組織とは思っていなかったし

そこまで力があるとも思っていなかった。

正直言って厄介としか言いようがない。

「なるほど。んじゃ何で世界を終わらそうとするんだ？」

「さすがにそこまでは言えないな。」

これ以上は完全なる世界に

コスモエンテレケイア

入ってくれたら詳細に教えよう。それで武芸者^{マーシャル・アーツマスター}。どうするんだい？」

さすがにこれ以上情報を引き出すのは無理か。

出来ればもう少し欲しかったが。

（まあこれ以上は贅沢か……）

これ以上は無理だと判断し、アーウェルンクスに俺の答えを返す。

「悪いが、断らせて貰う」

そう言ってもアーウェルンクスの表情は

まったく変わる事はなかった。

「理由を聞いても？」

「俺は別に世界を終わらそうなんて思ったことなんて欠片もないし、反対に世界を救おうなんて事も思わない。俺は俺の救いたいものだけ救う。」

世界が終わるなら勝手に終わってろ。それだけの理由だ」

そう言った時少し、ほんの少しだけ

アーウェルンクスの表情が動いた気がした。

「人形である僕にはその考えは理解出来ない。
けど、君に少し興味がでたよ」

（人形……ね）

少しずつ周囲の音が小さくなり
そしてついには死んだように静かになった。

「だから残念だよ」

その途端、俺の周囲の地面から鋭い石の槍が
一斉に飛び出て来たが、攻撃を仕掛けてくるのは
分かっていたの事なので、俺に刺さるまでの
コンマ数秒の間に空中に離脱しながら。

「レストレーション」

鍊金鋼を復元し刀を持つ。そして空中で氷を作りだし着地。

「とりあえず理由を聞いても？」

先ほどのアーウェルンクスと同じ
質問を今度はこちらがする。

「君は不確定要素なんだよ。
君はその正体不明の力と武器も持っている」

「これの事か？」

俺が持っている鍊金鋼を掲げるとアーウェルックスは鍊金鋼に視線を向ける。

「それだよ。そんな力は君以外持っていない。それに君が使っている武器はこの世界に存在していない。だから、それを研究すると同時にこちらの戦力を増強するために入ってほしかったんだが」

「なるほどね。それで、組織に入らない俺は邪魔者って事か」

「そういう事だね」

なかなかむかつく理由だったが結局やることは変わらない。

「まあだからといって。はいそうですかってやられる訳にはいかないんでねっ!!」

————がいりきけいしやうけい外力系衝剄らくさんじんの変化……落散刃。

アーウェルックスの上空に斬線の形の剄を放ちそして、上空で拡散。小型の無数の刃状の剄が降り注ぐ。

だが、アーウェルックスはその場から一步も動かず、アーウェルックスが常時張っている障壁だけですべて防がれた。

これで終わるなんて都合のいい事はまったく思わなかったが。

(まさか、障壁だけで防がれるとは……)

辺りは俺が放った攻撃により砂埃に包まれているのでそれに乗じてさせて貰い。

――――内力系活剷ないりきけいかっけいの変化……水鏡渡りみかがみわた。

足を強化。旋剷せんけいを超える超速移動を為し、
アーウェルンクスの背後に一瞬で回りこみ
袈裟がけに斬ろうとするが、

「『石の息吹』」

灰色のガスがアーウェルンクスから
吹き出て来たので咄嗟に。

「はあっ!!」

――――内力系活剷ないりきけいかっけいの変化……戦声いくさこえ。

剽のこもった大声で灰色のガスを吹き飛ばす。

「いい反応だ」

その僅かな間にアーウェルンクスは俺の顎に向かって蹴りを繰り出してきたので、俺はもう片方の空いている手で蹴りを叩き落とし、すぐに攻撃を仕掛けようとするが。

「させないよ」

アーウェルンクスは俺に攻撃をさせまいと

俺にぴったりとはり付き次々と攻撃を繰り出す。

俺はそれを直接受ける訳にはいかないのでアーウェルンクスの攻撃をはたき落とすか、逸らすかして防いでいる。

刀を振ろうとしてもアーウェルンクスとの距離が近すぎて

刀を振る事ができず、かといって空いているほうの手で素手で攻撃しても

アーウェルンクスほどの強固な障壁を抜くことはできないだろう。

「こん……っのおお!!」

アーウェルンクスが攻撃を繰り出している隙ともいえない僅かな間に化鍊によって俺とアーウェルンクスの間に薄い氷の壁を作りだす。

もちろん咄嗟に造った氷の壁で攻撃を防げるなどとは思っていないが、

一瞬でもアーウェルンクスの視界を俺から外す事が出来たら十分なので

その隙にその場から一気に後退し離脱する。

離れた直後、拳により音を立てながら氷の壁は崩れ去り
その中からアーウェルンクスが姿を現した。

「こんなものなのかい？」

いらっと来たがそれもしようがないかと思う。

ここの所ここまで強い奴と言え、たまに模擬戦で戦うエヴァ
以外になかったし、それも所詮は模擬戦だったので、殺し合いでは
ない。

だから勘も鈍ってるかもしれないし、
ここ最近は格下としか戦っていなかったから慢心も油断もしていた
だろう。

「そうだな。悪かった」

そうだ。こんな体たらくじゃ駄目だ。

何も守れやしないし、何も救えやしない。俺の救いたいものすら救
えない。

だから。

錬金鋼の剽を奔らせる。

周囲は錬金鋼にある過剰な剽によって白く照らされている。

今度は油断も慢心もしない。

「……いくぞ」

s a i d ..アーウェルンクス

最初はいつもと同じ任務のつもりで向かった。

今回の目的は『武芸者』をマーシャル・アーツマスター

コスモエンテレケイア
僕達完全なる世界に側に引き込む事。
それが、不可能な場合は排除する事。

マーシャル・アーツマスター
『武芸者』は一言で言うところ不可解だ。

彼は突然世間に現れ瞬く間に高額の賞金首になった。

そして、賞金首になる以前の彼の素性は一切分かっていない。
更に言えば彼の力と彼の武器は『造物主』でさえ分かっていない。

だから、彼を見極めるといふ目的と完全なる世界に引き入れ、
その力を確かめる為ということになった。コスモエンテレケイア

まず、彼に懸かっている賞金を部下に指示し取り下げさせる。
ついでに彼と行動を共にしているであろう

『闇の福音』も。これでこちらに少しでも好印象を
持ってくれるといいんだけど。無理だろうけど。

部下から、彼らしき人物を発見したという報告を受けたので
報告のあった場所にいき、彼を捜していると
高度な認識障害が掛かっているようだが、どうにか彼を見つける事
は出来た。

どうやら彼は正体を偽って、こちらに来ていたようだ。

そして様子を窺っていると、
依頼等を引き受けてこなしているようだ。

彼の正体を知っている身からすれば簡単すぎる
依頼ばかりであったが、それでも彼は着々とこなしていつているよ

うだ。

そして、すべての依頼が終わったようなので
彼が1人になった時に接触しスカウトの話をするが。

「悪いが、断らせて貰う」

半ば予想通りの答えが返ってきた。
彼の断った理由にをついでに聞いてみると。

「俺は別に世界を終わらそうなんて思ったことなんて欠片もないし、
反対に世界を救おうなんて事も思わない。俺は俺の救いたいものだ
け救う。」

世界が終わるなら勝手に終わってろ。それだけの理由だ」

世界から、人々から憎まれて尚まだ誰かを救いたいという
答えが出てくる彼に少しだけ僕は興味が出て来た。

何故人形である僕がそんな事を思ったのかは理解できない。

それでも、興味を持ったのは事実だった。

「だから残念だよ」

それも本心だった。

そこから戦闘を開始したが、

予想していたより強くはなかったの
で僕は少しだけ落胆することになった。

だから普段は言わない、いや言おうと思う事さえ無い。

「こんなものなのかい？」

こんな挑発じみた言葉を発してしまった。
すると彼は。

「そうだな。悪かった」

そう言葉を発した後、

莫大なエネルギーが彼の武器に奔り、周囲一帯が白く照らされた。

それ以外彼には特に変わった事はない。

でも、彼が纏う空気が変わった事だけは確かだった。

「……いくぞ」

そう言うのと高速でこちらに向かってきたので。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト

おお 地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ。『冥府の

石柱』」

大質量の巨大な石柱を複数出現させ、
二つほど彼の前後から放ち更に残りは時間差で彼に放つ。

彼は更に速度を上げる事により、後ろからの石柱を回避し、
そのまま、こちらに直進し前方の石柱と激突する時
彼の手がぶれ、斬線の形の光線が放たれ、その次の瞬間には
前方の石柱だけではなくその後ろにあった、すべての石柱は裂けた。

石柱を斬る事には驚かなかった。それよりも。

(速すぎる……)

さっきとは刀を振る速度が段違いだ。
障害が無くなった彼は刀にエネルギーを纏わせて
こちらに向かってきている。

僕はその間に鉄の剣を作り出し、
背後にも数を重視した普通の物より小さい『「石の槍」』を空中に
待機させる。

そんな事をしている間に彼はもうすぐそこまできているようだ。

さて、どうなる事か。

日本に住み始めて50年
原作開始まで後180年

アーウェルンクスとの戦闘継続中。

第十六話『彼にとって』（後書き）

十三話でもうすぐ大戦編にはいると書きましたが
申し訳ありません。入るのはまだ掛かりそうです。

では、用語説明を

落散刃^{らくさんじん}…相手の頭上から無数の刃状の剄^えを
降らす。（オリジナル剄技）

戦声^{いくさごえ}…威嚇術。剄のこもった大声で大気を震動させ、
相手を威嚇する。また、動かした大気によって細やかな金属片など
を飛ばし、
相手を攻撃することもできる。

第十七話『進む激闘』（前書き）

ついに総合 330,000アクセス 40,000人超えました。
この小説を見てくださったみなさん本当にありがとうございます。
これからもよろしくお願いします。

では、楽しんで頂ければ幸いです。

第十七話『進む激闘』

「……いくぞ」

誰にとは言わずにそう宣言してから、
アーウェルンクスに向かって駆けだした直後。

「ヴィシユ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト
おお 地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ。『冥府の
石柱』」

複数の巨大な石柱を出現させ、その内2柱を俺の前後に
放ってきたので、後ろは更に加速する事によって回避。
前方の石柱と、その後からも来ている石柱に対して刀を薙ぎ払い。

一一一一一 がいりきけいしやうけい 外力系衝剄の化鍊変化…… かれん 裂光斬。

刀に留めていた剄を斬線の形の巨大な光線を放ち、更に
化鍊によって熱を加えることで切断力を上げた物で進路上の全ての
石柱を切断する。

そうして、切り裂いた事によって上空から落下してくる
石柱の破片を回避しながら向かっていると、アーウェルンクスの方も
準備を整えているようで手には鉄の剣と背後に無数の
『「石の槍」』を展開しているようだ。

まあそれでも。

「関係ないな」

――――がいりきけいしやうけい外力系衝剄の変化……ごうけん轟剣。

走りながら刀に莫大な剄を纏わせ、長大な刀を造り出す。
そしてそのまま接近し、アーウェルンクスの胴体に向け
刀を薙ぎ払う。アーウェルンクスは鉄の剣で防ごうとしているよう
だが。

「だから、関係ないって」

「っ!？」

そのままバターを裂くかのように鉄の剣を切断。
魔法障壁も裂き、そのままアーウェルンクスに迫るが
すぐにアーウェルンクスは驚愕を抑え込んで素早く後退し、
腹を浅く裂くだけに留まった。

「どうやら僕は少し君を過小評価しすぎていたみたいだ」

「さっきと一緒とは思わない方がいい」

「どうやらそのようだ」

そしてまた鉄の剣を作り出したようだが
さっきの物に比べれば、気合いを入れて造り
更に魔力でコーティングし硬度を強化したようだ。

そして、俺とアーウエルンクスの姿が掻き消え
次の瞬間、衝撃波を周囲に撒き散らしながら激突した。

アーウエルンクスは剣を中心に攻撃し、それに足技も
混ぜ合わせている。鉄の剣が折れたら、すぐに背後の『「石の槍」
』
で

こちらを牽制し、その僅かな間に新しい鉄の剣を造り出して、
また攻撃を仕掛けてくる。そして攻撃の合間に絶妙のタイミングでも
背後に展開している『「石の槍」』をこちらに放ってきている。

もし、アーウエルンクスの戦っている相手が俺でなく
それなりに強い奴ならば障壁突破が付いていない『「石の槍」』
なんて物は気にせず、自身の障壁なり気の強化によって防げるので
気にせず攻撃に専念する事が出来るだろう。

だが、俺の場合そうはいかない。他の人が無視出来ても
俺にとっちゃ当たったら普通に怪我をする。なので、
避けるなり防がないといけないが、避けるにしても
それに合わせてアーウエルンクスが攻撃を仕掛けてくるので
全部が全部避けれる訳ではない。防ぐにしても、
今回俺が使っているのは刀なので絶対的に手数足りないのだ。

なので、今俺が取った手は。

「へえ。そんな事も出来るんだね」

飛来してきた『「石の槍」』をもう片方の剣で叩き落とした。

別に剄は鍊金鋼を通さねば使用できないというわけではない。もちろん威力はかなり下がるし操作する為の難易度も上がる。だが、出来ないという訳ではない。

なので、もう片方の手に剄を集中させビーム状の剣を出現させ、『「石の槍」』を叩き落とした訳だ。

勿論この剣ではアーウェルンクスの障壁を突破する事は出来ないが『「石の槍」』程度は十分だ。

「だけど……」

アーウェルンクスと斬り結んでいると、左方向から『「石の槍」』が飛んできたので叩き落とそうとしたが。

「ちいっ！」

所詮は付け焼刃。二刀流なんて碌に使った事がないので上手くもう片方の剣を扱えなく、『「石の槍」』を叩き落とす事が出来なかったので、無理やり体勢を変え『「石の槍」』を回避したが。

「くそっ!!」

そんな隙を逃すほど甘い敵ではないので
その隙を逃さず、俺の周囲に『「石の槍」』をまとめて放ってきた。

「舐めるなって！」

————サイハーデンとつぞうじゆ刀争術……円礫。えんれき

自分を中心に衝剄を巻き起こし俺に迫ってきていた

『「石の槍」』を弾き飛ばす。

『「石の槍」』は防いだが、休憩なんてする間もなく
アーウェルンクスが斬りかかってきたのでこちらも応戦。

「やるね」

「そりゃどうもっ!!」

今回は防ぐ事が出来たが、こんな危険な事をずっと
続ける訳にはいかない。

(……短期決戦にするしかないか)

普通の相手なら持久戦でもいけるんだが
時間を掛けて、エヴァに心配を掛ける訳にもいかないし、
何よりアーウェルンクスが疲れるかどうか分からないので持久戦

は却下だ。

それに今はもうアーウェルンクスの背後に展開されている『「石の槍」』はかなり数を減らしている。また新たに補充される前に決着をつけるべきだろう。

そうと決めたら実行に移すために、まずは剄で出来ている剣をアーウェルンクスの眼前で衝剄として爆発させる。

俺もダメージを食らうが、その衝撃を利用してアーウェルンクスとの距離をとる。

（ついでに言えばその衝撃でコートもボロボロになり、仮面も壊れてしまった。まだ初日なのに……。）

その間に何本か『「石の槍」』が掠り、その内1本が足の太股に刺さったが致命傷ではないので無視する。

「！」

そしてその僅かな間に轟剣こうけんを解除し、そのまま刀を左腰に引き寄せ、反対の剄で覆った手で錬金鋼の刀身を掴み抜き打ちの構えをし。

————サイハーデンさいやうてん刀争術……焰切りはむらきり。

手と刀身に纏わせている剄によって

抑えつけられた形になりそれは居合の形となる。

手の剄と刀の剄同士の衝突により、生じた火花が炎に変じ、生み出した炎を切っ先に巻きつけ居合抜きをアーウエルンクスに向けて放つ。

障壁をすぐには張り直せないように斬撃と衝剄による

二段攻撃によって完全に破壊する。

続けざまに。

————サイハーデンとうぞうじゆつ刀争術……焰重ほむかさね。

返す刀で上段から刀を斬り放ち一気に地面まで、振りおろす。

アーウエルンクスは鉄の剣で防ぎ浅くしか入らなかったが、

（予定通りだ！）

そして、アーウエルンクスは鉄の剣が焰重ほむかさねに耐え切れず

破壊され、その僅かな間にアーウエルンクスは身を引き

そのまま俺から一旦距離を取ろうとするが。

「これ……は！？」

アーウエルンクスの足元には俺が地面まで振りおろした刀を通した化鍊によって凍りつかせて動けないようにする。

先ほど焰重ほむかさねを放ったばかりなので

周辺には剄が充満していたので難なく成功した。

最初からやればいいかもしれないが、障壁がある時にやっても障壁に阻まれて足を止める事は出来ないのです、完全に障壁を破壊する必要があったのだ。ついでに言えば鉄の剣もあつたら、その隙にこちらから攻撃しても防がれてしまう可能性があつたので、念には念の為に鉄の剣も破壊する必要があつた。

今現在アーウェルンクスはほとんどが空きだ。障壁を粉碎され鉄の剣も、もうない。あるのはアーウェルンクスの背後に展開されている残り5本の『石の槍』のみ。生半可な防御じゃ俺の攻撃を防げるとも思わない。それが咄嗟にした防御なら尚更だ。なので、刀をすぐに突きの形にし。

「これでどうだっ!!」

「!!」

――――
――がいりきけいしやうけい外力剄衝剄しやうとつの変化……終突。

俺は念には念を入れて切っ先に極限まで剄を収束させた貫通力の高い突きを放つ。

アーウェルンクスは背後に展開している最後の『石の槍』を俺

に向かって

放ってきたが、5本如きもう片方の手で防ぐ事が出来るし、無理ならば致命傷になるものだけを防げばいいので特に問題はない。

『「石の槍」』を放ちながら、アーウェウンスは咄嗟に障壁を張ったようだが、

そんな物で防がれるほど俺の放った攻撃はやわではない。そのまま障壁を

突き破りながら俺の突きはアーウェルンスの吸い込まれるように心臓に向かって突き進み、アーウェルンスの心臓に刺さるかと思ったが、

「なっ!?!」

当る直前にアーウェルンスが放った内の『「石の槍」』の1本が突きを放っている俺の手の甲に刺さり、その衝撃によって

狙いがずれる事になり、心臓を狙って放った俺の突きはアーウェルンスの

脇腹を貫通するに留まってしまった。

（あの時放った『「石の槍」』の本命は俺を殺す為ではなく、こっちの攻撃を逸らすための物か!）

致命傷を防ごうと意識しすぎたのが裏目に出た。

放った『「石の槍」』の内4本は間違いなく俺の急所を狙ってきていて、後の1本は明らかに急所には

向かってきていなかったので放置していたのだが。

（まさかこうくるとは）

自惚れかもしれないが、俺が放った突きの速さは並大抵のものではなかった。その速度で動いている俺の手の甲に正確に当てようとするならば。

（突きの軌道を予測したって事か）

そんな物は至難の技だ。

だが、それでもアーウェルンクスはその至難の業をやったのだ。その結果が今もアーウェルンクスが生きているという結果だ。

アーウェルンクスは即座に自分の足元の氷を破壊しその場から距離をとった。

痛みを感じているかどうかは分からないが、それでも、ダメージはかなりのようで片膝を突いた。

「驚いた。まさかここまでとはね」

「お互い様だ」

本当にここまで強いと思わなかった。

今回俺の武器が刀という事もあるかもしれないが、そんな物はまったく言い訳にはならない。
アーウェルンクスは文句なしに強かった。

（これはもっと修行しないといけないかな？）

そんな事を考えながらまだ油断はできないので

鍊金鋼に剄を溜めながらアーウェルンクスの様子を窺っていると。

「今回は僕の方が少し分が悪そうだ。

それに、ここで僕が倒れるのは計画に支障をきたすからね」

奴は懷から1枚の符を取り出した。その符には見覚えがあった。

「転移符か！」

その瞬間、奴の足元に魔方陣が浮かび上がった。

「くっそ!!」

すぐに衝剄を放つが、咄嗟の反応が遅れてしまったし

何より俺とアーウェルンクスの距離も離れていた事もあり
どうも衝剄は間に合いそうにない。

「今日の所は退かせて貰うよ。『マーシャル・アーツマスター武芸者』」

そう言い残してアーウェルンクスは転移し、その直後衝剄が着弾した。

「やられた……」

ここで、奴は仕留めておきたかった。

そう言えば俺は転移符で逃げられてばかりの気がする。

「まあ逃がしたもんはしょうがないか……」

ここで、うじうじと考えていてもしょうがないので

さっさとここから離れることにする。

誰かがこの騒ぎを聞きつけてこの場所に来るかもしれないし、何より戦闘により俺の姿はほとんど変装の意味をなしていないので、認識障害がまだ働いてるとは見え見つかるのはまずい。

（それにしても、コスモエンテレケイア完全なる世界……ね。

帰ったらエヴァにも頼んで一旦調べてみるか）

もう何かに巻き込まれるのはごめんなので、腕輪を使いさっさとゲートに向かって転移してその後ゲートを使い旧世界の転移した。

「ただいま」

「遅い！！ まったく何し……」

「ん？ どうしたんだエヴァ？」

「どうした？ じゃないわ！！ 何故貴様はあんな簡単な依頼でそこまでボロボロになるんだっ！？」

「あ……」

「ケケケケケ」

その後エヴァにお説教されたのは余談である。

日本に住み始めて50年
原作開始まで後180年
アークエルクスの戦闘終了。

第十七話『進む激闘』（後書き）

では、用語説明を

裂光斬れっこうざん…斬線の形の光線に化鍊で熱により切断力を

高めたもの。（オリジナル剋技）八人目な武器屋さんの考案。

円礫えんれき…自分を中心に衝剋を巻き起こし、相手を吹き飛ばす。

焰切り／焰重ほむらがさね…片手で刀身をつかみ、抜き打ちの形で放つ。居合抜きほむらがさの斬撃と、衝剋による二段攻撃。斬撃で技を無効化、衝剋でその余波を弾き飛ばすことで、相手の剋技を封じることほむらがさも可能。その上で更に一撃を加える二の太刀があり、焰重ほむらがさねと呼ばれる。刃の纏った衝剋と

発射台の役割をもつ腕を包んだ剋とのぶつかり合いによって瞬間的に炎が生じるため、この名がある。

終突しゅうとつ…切っ先に剋を収束させて貫通力だけを極限にまで高めた剋技。（オリジナル剋技）

八人目な武器屋さん剋技考案してくださってありがとうございます。

第十八話『変わらぬ日々』（前書き）

お気に入り登録500件を超えました。
登録してくださったみなさんありがとうございます。

第十八話『変わらぬ日々』

まず先に俺の傷をエヴァに治療してもらった後
エヴァにはこっぴどく怒られてしまった。

そして、しばらく怒鳴っていると怒鳴り疲れたのか、少し
エヴァが荒い息を吐きながら、俺がここまでボロボロになった理由
を聞いてきた。

普通逆だ！！と声を大にして言いたがったが
エヴァが怖すぎて言えなかった。

そうして、エヴァに俺がボロボロになった訳を話し始めた。

俺達が世間では死んだ事になった事。

それを指示したのが完全なる世界という組織だコスモエンテレケイアという事。

完全なる世界はかなり巨大な組織だという事。

その目的はある意味では世界を終わらせ、ある意味では世界を救う
らしいという事。

その組織からスカウトされたが、断ったので戦闘になった事。
アーウェルンクスというかなり強力な魔法使いがいる事。

話していく内にエヴァは俺が見る限りでは落ち着いていき
すぐに真剣な顔になった。また怒られるのは

敵わないので、すぐさま完全なる世界をコスモエンテレケイア

調べてほしいと、エヴァに頼む事にした。

エヴァはとりあえず調べられる限りは調べてくれるらしいのでほっとした。

「さて、チャチャゼロ。ちょっと模擬戦でもしようか」

そう自然な感じでエヴァから離れようとしたのだが、先ほどまでとは表情を一変させ。

「さて、先ほど話の続きだ」

「ケケケ 模擬戦は後デダナ リョウ」

何てこった。

その後、俺は次々と入ってくる依頼を、時には俺も連れてけ、と煩いチャチャゼロを目立たないように連れて行って依頼をこなしていき、時には俺が留守番をし、エヴァが依頼に行く事もあった。そんなこんなで俺達は着々と依頼をこなしていった。

ついでにアーウェルンクスとの戦闘によってボロボロにされたコートと

壊れた仮面を新調する事に。どうせならばと言う事でレギオスに出る狼面衆のコートと仮面にした。狼の仮面は中々格好良く自分では気に入っている。

そうして依頼をこなしていく結果、俺はこちらの姿でも結構有名になり

最初の頃には、比べ物にならない難しい依頼なども

依頼されるようになった。エヴァは元々受ける依頼が少ないし受ける依頼内容もどちらかというと、

地味なのが多いのであまり有名ではないが一部の人には有名だ。

名前が売れるのは嬉しかったが、またもや俺に厨二っぽい二つ名も付けられたので俺の心境はなかなか複雑だった。

（ここの人たちは一々中二っぽい名前を付けないと気が済まないのか？）

そしてエヴァは家にいる時は最初に言っていたようにこの神木を使い魔法具を色々と造っているようである。そしてこの間、造った物の一部を。

「少し造りすぎてしまったのでな。私にはもう必要ないからリョウが持っておけ」

ぶっきらぼうに言いながら色々と魔法具を渡された。

あの一見以来エヴァは何かと俺を

心配するようになったので今回もそのようだ。

その中には明らかに俺用に造ってくれたものがあるので、

俺の為に造ってくれたのが丸わかりなのだが、

わざわざエヴァに言うのも野暮なのでこれだけは言っておいた。

「ありがとな。エヴァ」

エヴァは特に何も言わずにすぐに顔を背けたが耳が赤くなっているので照れているだけだろう。

さてエヴァから貰った魔法具を説明してもらったが、

まず一つが念話をするための符である。

俺は魔法はからっきしで念話すら出来ない。

そうすると緊急の時などに連絡の手間がかかるという事でくれた訳だ。

この神木を材料に造っただけはあって、かなりの長距離まで届くし、エヴァ以外の人にも通じるので結構な優れものだ。

二つ目は周辺に認識阻害と人払いを展開する腕輪である。

魔法（剽）を必死に隠そうとも思わないが逆に、

わざわざ広めようとも思わないので、それを防ぐためにエヴァに造って貰った奴だ。

一応俺自身にも秘匿する手はあるが、秘匿などをするにはあまり使い勝手は良くないものなので、この魔法具は助かっている。

そして三つ目は俺自身の魔法抵抗力を上げる為の指輪だ。

要するに魔法による、石化や毒等に対して抵抗力を上げるものだ。

あくまで抵抗力を上げるだけで、完全に防げる訳ではない。

腕輪の内側に神木の板をいくつか仕込んであるので、これも優れ物

だ。

ただ、エヴァが言うには神木を用いても完全に無効化は不可能らしい。

俺としたら魔法抵抗力が上がるだけでも、かなりありがたい。

後は主に傷などを治す為の魔法薬を大量に貰った。

そして、俺がエヴァに頼んで調べて貰った完全なる世界だが、コスモエンテレケイア
やはり大した情報は集まらず、しいて言えば、完全なる世界は
コスモエンテレケイア
ほとんどの国の上層部に入り込んでいるという事だけだ。俺も直接魔法世界で

調べたが、これといって目ぼしい情報はなかった。

一番重要な事柄の何故、世界を終わらすのか？そしてどのようなにして世界を救うか？等は一切分からなかった。

あと、アーウエルンクス戦で、まだまだ修行が足りないのを痛感したので帰ってきてからは別荘で更に修行をするようにした。

基本的には基礎能力を上げる事に費やし、後は、近接戦闘の技術や武器の扱いを上昇させる為の訓練を増やした。とはいってもだ。

前者はともかく後者を1人でやるのは効率が悪いので、この訓練はエヴァに頼んで2人で時たまチャチャゼロを交えて組み手をしてもらうことにした。エヴァもその事については異存はないらしく快く頼みを引き受けてくれた。

エヴァと俺の体術は少し似ている。基本的に俺達は相手の

攻撃を防ぐのではなく、受け流すか回避する事になっている。
もちろん俺は刀ならばそれで防ぐ事もするが、基本徒手空拳ではない。

俺は単純に防御力が低いので相手の攻撃を食らってやる訳にはいかないから。

エヴァはちいS「何か言ったか？」……非常に小回りの効く
体型をしているので、リーチが足りないからカウンターの方が効率
がいいのだ。

だが、いかんせんエヴァは体術が上手く出来なく、
近接戦の対処の仕方に困っているようだ。

大抵の奴ならエヴァ自身の吸血鬼としての身体能力で大丈夫だが、
近接戦闘が凄腕の奴が仕掛けてきたらエヴァはたぶん負けるだろう。
いつでもチャチャゼロや俺がいる訳ではないのだから
何かしら対策を持った方がいいのかもしれない。

そして、エヴァはここ日本の文化が気に入ったらしく色々調べたり
している。

俺の知らない間にエヴァ自身が造った魔法具を売った事によって稼
いだ

お金で買っているようで、家には俺の見覚えのない物がちよくちよ
く増えている。

今は茶道に嵌っているようで茶道専用の部屋もいつの間にか
家に造っていた。もし暇があれば今度京都にでも連れていこうかと思
う。

そして、今現在俺は魔法世界のヘラス帝国で
依頼受けていて、魔法薬になる植物をさがしているのだが。

「わかんね〜……」

依頼人の言う植物は、その地に伝わる珍しい代物らしく、
その依頼人もその薬草の形状は知らず、『パテカトル』という
名前とそれの製法の仕方だけ知っていた。
それだけじゃ、間違えて違う物に間違えてしまうかもしれないが、
その製法の過程でその植物特有の反応を示すらしいので大丈夫らしい。
い。

なので自分の足を頼りにひたすら
地道に情報収集を行う事になったのだ。

幸い依頼人が持っている情報によれば
依頼人の住んでいる場所からその植物の大まかな場所が
書いてあるのが幸いだが。

「『パテカトル』なんて植物どこにあるんだよ……」

それでも、かなりの広さだし、
『パテカトル』の情報を持っている人にも会う事が
出来ずに一先ず休憩している訳だ。

（エヴァに任せた方が良かったかな？）

街のベンチに座ってどうしようかと考えていると。

「おや？ お困りですか？」

声を掛けられたので顔を上げると

そこには、これこそ魔法使いという感じのローブを着ていて、顔には胡散臭い笑みを浮かべているイケメンがいた。

「いきなり何ですかあなた？」

「いえ、先ほどあなたが呟いた言葉で

あなたが『パテカトル』お探しているようなので
お声を掛けさして貰ったのですが」

「知ってんのか！？」

やっと手に入れられた情報だったので
敬語が崩れてしまったが、まあ問題ないだろう。

その後『パテカトル』の詳しい形状や生息している
場所などを教えて貰った。まあ、もしかしたらデマかもしれないが
それでも俺には他に一切情報がないので行くしかないだろう。

一通り『パテカトル』について聞き終えたので。

「いやあ、助かった！ 中々情報が
見つからなくて困ってたんだ」

礼の言葉を言っておく。そう言うとき目の前の男は最初と変わらずに胡散臭い笑みを浮かべ。

「いえ。かの『黒の死揮者』が困っているようだったので、私からのほんの親切心ですよ」

（こいつに親切なんて言葉似合わね）

なんて、失礼な事を初対面ながらに思った。

ちなみに『黒の死揮者』とは黒色の服を着ている俺が舞ながらレイピアを振っている姿が指揮者に見えて、なお且つレイピアが振られる度に次々と命が死んでいくからだそう。

その名を呼ばれて、俺の口の端が引きつったが仮面によって顔は見えないので、その顔を見られる事はなかった。

「と、とりあえず、そういう呼ばれ方は好きじゃないんでな。勘弁してくれ」

ちゃんと仕事の時にはヴォルフと名乗っているから、そっちの名前も普通に広まっているので今度こそ呼んでくれるだろう。

「そうでしたか。では『ハウンド・ドッグ獵犬』と」

（うざっ！！）

明らかに俺が二つ名で呼ばれるのを嫌がっているのに
わざわざその名前を選ぶなんて性質が悪い。

ついでに『ハウンド・ドッグ獵犬』とは俺の仮面が犬（正しくは狼だが）
それを付けているのに加え、獲物は逃がさないという事で付いたそ
うだ。

アーウェルンクスは逃してしまっただけど。
あれはターゲットじゃないしな。

だが、それで目の前の男の思惑通りに怒ってしまうのも
癪なので、さっさとこいつに教えて貰った所にいく事にする。

「じゃあな。情報ありがとな」

そう礼を言ってから男の横を素通りし
目的地にむかい歩を進めていると俺の後からさっきの男が声を掛け
てきて。

「いえいえ。こちらこそあなたと話せてよかったですよ。
次に会う時は是非。是非ともお連れの方に会いたい事です。
………『マッシュタル・アーツマスター武芸者』」

バツと振りかえると男はもう転移した後のようで
そこには僅かに転移魔法の行使による魔力残滓が残っていただけだ
った。

どうやら奴は最初から俺の正体に勘づいていたようで
正体を知りつつ、尚俺に接していたようだ。

（というか何でそこまでエヴァに会いたいんだろうか？）

それにしてもあいつ。

「ほんつとに、性格が悪いな」

その後、名前も知らない男が言っていた場所に向かうと
言った通りの物があったのでそれを依頼人の所に持っていくと
目的の物だったらしく依頼を達成出来た。

ちなみに『パテカトル』で出来た物はアルコールを含む
魔法薬、まあいわゆるお酒だったので報酬のお金の代わりに
その魔法薬を分けて貰うことになった。

帰ってエヴァとチャチャゼロにその魔法薬を
渡してその日は飲み明かす事になった。

日本に住み始めて85年
原作開始まで後145年

胡散臭い男に邂逅。

第十九話『旅行』（前書き）

総合PV・ユニークアクセスPV ユニーク

累計 410,000アクセス 50,000人超えました。

この小説を読んでくださったみなさんありがとうございます。

これからもちよくちよく更新していきますのでよろしくお願いします。

第十九話『旅行』

俺が方々から送られてくる依頼をこなしている間に外ではどんどん時代が動いていき、瞬く間に街並みも俺の知っている物に変わっていった。

年代的には、今はもう明治には入っていると思う。生憎俺は歴史の偉人やら出来ごとにはまったくといていいほど興味がなかったので誰一人として接触しなかったが。

この頃は、俺の正体に対しても様々な憶測が飛び交いはじめている。半世紀以上も活動が続けているので仕方のない事だろう。

実は精霊だとか悪魔だとか、死んでも複数のホムンクルスですぐに補充しているだとか、もう先代は引退してその弟子が継いでいるとか等々。

世間ではそんな感じに色々言われているが、それでも俺に対して依頼は途絶える事は無いので特に困る事はない。

「んゝ……。今回は良さそうな依頼がないなあ」

今回来ている依頼の数は少なく

その少ない依頼の中にも中々よさそうな物もない。たまには仕事の休暇が出来たという事でポジティブに考えたらいいだろう。

(そういう事なら)

「何をしているんだ？」

そう俺が考えているとタイミング良く

ひょいっとエヴァが茶室から顔を出してきたので。

「いや、少し暇が出来たんでな、

エヴァさえ良ければ久々に一緒にどこかに出かけようかと思ってな」

依頼のように長期間ここを空ける訳でもないしおそらく大丈夫だろう。

そう言うときエヴァは驚いた顔をした後すぐに嬉しそうな顔
とはいっても見た目頬が緩んでいるだけなのだが。

「そ、そうか。リ、リリョウが誘うなら行ってやらん事もない。

(……はっ！ これはもしやリョウと、ふ、ふ2人で旅行だど!?)
くふ、フフフフフフ」

仕方なさそうに言った後、何故か急に不気味に
笑い出したが、嫌がってはなさそうだ。

エヴァの許可も取れたのでどこに行こうかと悩んでいると
ふと、さっきエヴァが出て来た茶室が目に入ったので、

(そう言えばエヴァを京都にまだ連れて行ってなかったな)

そう思い出したので

丁度俺の都合もいいので京都にするかと思ったので。

「んゝ。じゃあ京都にでも行くか」

「何っ!？」

「うお!! 急にどうしたエヴァ?
何か良く分からんが少し落ち着け」

京都に行くといった言った瞬間、
目がくわっ!と開き猛烈な勢いで俺に距離を詰めて来た。

「そんな事はどうでもいいっ!!
それよりもリョウ! 貴様京都に行くつもりなのか？」

「あ、ああ俺はそのつもりだけど。
もしエヴァが嫌ならべ、別の場所に変えるけど……」

エヴァは気にしていないか、それとも
現状に気づいていないかは分からないが。

エヴァと俺との顔の距離が非常に近い。近すぎる。

漫画などでもこういう場面を見るが
実際ここまで女の子に接近されたら女の子にあまり慣れていない人は
かなり緊張すると思う。それに加えエヴァは俺による多少の
身内最親はあるかもしれないが客観的に見ても
十分可愛いとされる部類にはいるだろう。

そんな女の子に吐息が掛かるほどの距離で

詰め寄られたら誰だっでもったりするはずだ。

エヴァはと言うと、余程京都に行けるのが嬉しくて、興奮しているらしく、俺に対して次々と言葉を捲し立て。

「嫌な訳あるか!! あゝ京都だぞ! 京都!! 絶対に行くぞ! 他の場所なぞ却下だ!!」

俺はというともう恥ずかしいやらなんやらで既にいっぱい、いっぱいだったのだ。

「わ、分かった。分かったって! だ、だからさ、エヴァ! 少し離れてくれよ!!」

そう言うときエヴァはきよとした顔をし。

「?? 何を言ってるんだ?」

まじまじと俺の顔を見た後すぐに固まり、次第に現状を理解したようで徐々に顔が赤くなっていき。

「――ッ!!??」

周囲一帯に響くほどのエヴァの言葉にできなさそうな絶叫が響きわたった。

今はエヴァが絶叫をあげた後エヴァが、ちょっぴり暴れたのでその片づけをしている途中だ。エヴァはと言うとまだ赤い顔でぶつぶつと呟いている。まだ怒っているようだ。

「ま、まったく!! リヨウときたらいつもいつも!!」

「何故!? 今回は俺のせいじゃないだろ？」

「いいや! 何もかもリヨウのせいだっ!!」

「理不尽じゃね!? ていうか何でそこまで怒るんだよ! 確かに俺も悪いかもしれないけど別にそこまでエヴァが怒らなくてもいいじゃないか」

「そ……それは……その……だな」

「それは？」

「っ~~~~」

俺が文句を言うと、エヴァは赤い顔で唸りながら涙目で睨んできたのだが、身長の関係上。上目づかいなのでそんな

顔で睨まれても

当たり前のように怖くはないので、俺がどうしようかと考えていると。

「そ、そんな事よりも！

私達がこの家を空けてもいいのか？」

あからさまに話を逸らしてきたが、

話題を掘り返すと、またエヴァが怒り兼ねないのでそのままエヴァの話題に乗る事にする。

「別に依頼のように長期間家を空ける訳でもないし別に大丈夫だろ」

エヴァはもういつもの調子に戻ったようで。

「だが、もしかしたら私たちのいない間に偉大なる魔法使い共が来るかも知れんぞ？」

「そう言われちゃったら、それまでなんだが……」

返す言葉がないので俺が困っていると。

「ふむ。私としても京都には是非とも行きたいのでな」

そう言うときエヴァは懷から四つの橙色の宝石のような物を取り出した。

一見何て事はない宝石だが、これ一つ事に

凄まじい魔力が込められているのが俺でさえ分かる。

「これは……？」

「この神木が発光する時に放出される

マジック・エレベーター

魔力の一部を私の闇の魔法を応用して圧縮し、凝縮したものだ。

一回の発光におき一個ずつしか取る事は出来ないし、

神木の発する魔力を圧縮するのに手間どるがな」

そう言えば発光する度にエヴァは何かしていたような。

それにしても、かなり時間と手間を掛けて造った物のようだ。

何せこの四つを造るだけでも80年以上も時間をかけているのだ。

「それをこの家の四隅に埋めて、この宝石の魔力を用い

フリスト

今現在貼ってある結界を強化させて

範囲は狭いが、今までのより一段と強力な結界を張る事が出来る。

フリスト

まあ結界が神木に負担を掛けるから、あまり長期間強化させる事は

出来ないのだが、

強引に破ろうとすれば私でさえも少々手こずるだろう」

「相変わらず、とんでもない物造るんだな……」

「これぐらい容易いものだ」

「そうか。それで、この神木が発光する度に

1人で何かやってたんだな」

「そういう事だ」

エヴァでさえ手間取る結界だ。

これなら並みの魔法使いが来てもよっぽどの事が、
無い限り大丈夫だろう。

「だが、私が言うのも何だが本当に京都でいいのか？」

「どういう意味だ？」

そう言うときエヴァはめんどくさそうにし。

「あそこには関西呪術協会があるだろう」

関西呪術協会は俺達が、ここ日本に来る以前から存在しており日本独自の魔法「陰陽道」を基本とし魔力を用いて使用している。昔は今ほど巨大な組織ではなかったが。

「陰陽道」とはエヴァの使っている

呪文詠唱をしてから使用する魔法とは違い、

呪符に予め術式を刻んでおけばいざという時に

そこに込められた術をすぐに発動する事が出来る。

要するに初めから拳銃に元々弾丸が装填しており、

使用する時には引き金トリガーを引くのみである。

もちろん詠唱する物もある。エヴァが使用する魔法にも無詠唱と言う物もあるが。

それに俺が最も厄介と思うのは呪術である。呪いたい相手の一部爪や髪の毛等を使って対象を呪う事だ。

今の所、呪われた事はないのであまり詳しくはないが。

事前に符を造る時に手間も掛かるが、これは結構なメリットだ。戦闘において攻撃の出が早いという事はかなり有利になる要素だ。更に妖怪等呼び出し、自分の味方にし手早く数を揃える事が出来る。

エヴァの使っている魔法でも悪魔等呼び出せるがそこまで手早く呼び出せる訳ではない。

その代わりと言っては何だが、直接的威力において基本的にはエヴァの使用している西洋魔法の方が総じて威力は高いし、応用力も高い。俺個人の意見だが。

結局はどちらもメリット、デメリットがあるという事だ。

だが、関西呪術協会だが、どうもきな臭くなってきている。俺の前世？でも明治に入ると急に西洋化が進みだしていったのだ。それに合わせてかどうかは分からないが、魔法もだんだんと西洋化の波が押し寄せてきているようだ。

今はそれほどでもないが
もしかしたら近い将来いずれ西洋魔法によって
衰退していくのかもしれない。

とりあえず、今この話題は関係ないので置いておく。

「まあ俺達から手を出さない限り
関西呪術協会も何か手を出してくる訳ではないだろ」

「それもそうか」

そうと決めたらさっさと出かける準備をする。
とはいってもボックスに荷物を入れていくので
俺とエヴァは一見どっちも手ぶらだ。ついでに依頼を一週間程
休業するという旨を各所に伝えてく。

「エヴァ。もう他に必要な物はないのか？」

「ないな」

俺も準備が出来たのでエヴァに声を掛けると
エヴァも準備が出来たようだ。後はここの結界を強化するだけだ。

「チャチャゼロ。準備終わったぞ」

「ヤットカヨ 待チクタビレタゼ」

そう言うときチャチャゼロはとことこ、と俺に
寄ってきて俺の頭によじ登ってきた。

（これだけ見ると可愛いんだけどな……）

「ケケケ 妖怪トカ向ウニイルノカ？ 早く斬り刻ミタイゼ」

（これだからな）

これさえ無ければいいんだが。
まあチャチャゼロはこういう性格なので早々に諦める事にする。

そんなやり取りをしているとエヴァが
怪訝な顔をして見ていたので。

「ん？ どうしたエヴァ？」

「おい。何故チャチャゼロを連れて行く？」

何故か、変な事を聞いてきたが

別に俺はやましい事をしている訳ではないので正直に答える事に。

「何故って。チャチャゼロも京都に

行くんだから連れていけないだろう」

俺は普通に返したつもりなのだが、俺の返答を聞いた後

エヴァはピシッと固まってしまった。

「くうっ！ 分かっていたはずだ。リョウが！

あのリョウがそんな気の効いた事をするはずなんて無いのだから」

途端に、どんよりとした雰囲気を出しながら

俯いてぶつぶつと言いだめた。傍から見てもエヴァは普通に怪しい。

「な、なあエヴァ急にど、どうしたんだ？」

「だが、それでも、それでもだ！

万が一という事があるかもしれないから

愚かにも期待をしてしまった結果がこれだ……」

エヴァは俺の声何てまるで聞こえてないように呟いている。

呟きはもはや呪詛っぽい感じにまでなっている。

「チャ、チャチャゼロ！」

急にエヴァはどうしたんだ!？」

「気ニスルナリヨウ 御主人モ難シイ年頃ナンド」

「そ、そうなのか……。てっきりそういう

年頃は過ぎたものだとはかり思ってたんだけど。

……やっぱり男とは違うのか」

(ケケケ 俺ヲ置イテ行コウトスルカラダゼ御主人)

その後エヴァが復活するまで時間が掛かり

更にしばらく暗いままだったので、中々つらい旅路になる事になった。

日本に住み始めて115年
原作開始まで後115年

京都に向けて出発。

ラカン式強さ表（前書き）

感想でありましたので、現在の黒宮の強さをラカン式で表しました。自分では考えてこの位置にしたつもりですが、あまり自信がありませんので

皆様方が不愉快に思いかも知れませんがご了承ください。

ラカン式強さ表

クラス—数値—該当者・該当物

— 15000

（ 黒宮 涼（錬金鋼有。錬金鋼の種類によって変

— 13000

— 12500 エヴァンジェリン

SA — 12000 ラカン（自称）

— 11500 アーウエルンクス（黒宮と戦闘した者）

— 10500 エインシタジタサゴサージヤ
古龍龍樹（遺跡で戦闘した龍）

— 8000 リヨウメンスクナノカミ

雷の上位精霊

— 7000 黒宮 涼（錬金鋼無）

AA — 3200 フェイト・アーウエルンクス（数値は数

倍の可能性有）

[illegible]

ラカン式強さ表（後書き）

鍊金鋼無の黒宮が低いかもしれませんが
鍊金鋼がないと、どうしても攻撃力の面でかなり劣るので
この位置にさして頂きました。

また京都に行くまでの強さなのでストーリーが進むと
強さが変動する可能性があります。

本編は近日中に更新予定です。

第二十話『古都―京都』（前書き）

総合評価1500超え、お気に入り登録600を超えました。

さすがレギオスとネギま！ですね。自分でもここまでいくとは思いませんでした。

みなさんこんな稚拙な作品を読んでもうござります。

原作に入るのはまだ時間がかかりますがどうかよろしく願います。

第二十話『古都―京都』

やはり旅行という事で、魔法を使い移動するのは無粋だと思うので俺達は一般人と変わらない方法で行く事にした。

エヴァは最初原因不明の落ち込みを見せていたが

蒸気機関車に乗ると今までの態度は何だったんだ！と言いたくなるほど上機嫌になった。

俺も蒸気機関車なんて初めて乗ったので

若干テンションが上がったが。

そんなこんなでついに京都に到着。

「フ、フハハハハハハハハハハ

ついに。ついに！！ 私は京都に来たぞー！！！！」

「やめろ！ エヴァ！ 嬉しいのは分かるが普通に恥ずかしいって！？」

京都の駅に着いた後、急にエヴァが叫んだので早急に止める事にする。

ちなみに俺達に認識障害は働いているが

それは賞金首に結び付かないようにするのと俺達の容姿にしか

働いていないので会話は普通に周りに聞こえている。まあ

チャチャゼロだけは完璧に認識障害で隠しているので心配は無い。

「何を言ってるんだ!!　これぐらいしないと京都に失礼だろ!!」

「ええ!?　京都に失礼って何!?」

「まったく。これだからリヨウは……」

「やめろ!　その聞き分けのない子供を見るような目は!!」

「落着けヨ　リヨウ」

「くっ!　俺まで騒いでしまった……」

頭の上からチャチャゼロの呆れた声を聞いて、今の状況を客観的に認識した。

注意するつもりが、エヴァ独自の理論に振り回されてしまい
周りの人達から見たら2人して、はしゃいでいるようにしか見えな
いだろう。

「ほら何してるリヨウ!　さっさと行くぞ!」

エヴァは、と言うと周りなんぞまったく気にせず
これから心底楽しみ、というような笑顔で俺を誘ってくる。

(まったく……)

エヴァに言うとは間違いなく怒るだろうが
その子供そのものの笑顔を見て怒る気も失せたので
俺も気分を持ち直して、エヴァの手を握り歩きだした。

「む?　な、何だこれは?」

「このままじゃエヴァが迷子になりそうだからな」

「ならんわ!!」

エヴァと手を繋いで意気揚々と歩きだしたのはいいが
特に行く所は決めていなかったので京都の観光名所を三人で回る事
にした。

とりあえず、初めに京都で俺的には有名な清水寺に行くことにした。

「ここが清水寺か」

前世でも思ったのだが、清水の舞台から飛び降りて
生存率8割以上って結構な生存率じゃないだろうか？

エヴァはというと、目をキラキラと輝かせながら
清水寺の周りを歩き回りながら熱心に見ていた。

「こらこら。エヴァあまりはしゃぐなよ」

「分かっている！ それよりもリョウ！
さっきから私を子供扱いするな！！」

「はいはい。分かっている分かってる。エヴァは子供じゃないよな」

「その言い方はやめろっ！！」

俺としてはおちよくっているつもりは無いが

エヴァには御不満のようだ。これ以上言い続けるのも藪蛇なので、

「そう言えばエヴァって京都の事って事前に調べたりしたのか？」

少し興味もあったので話を逸らすのと一緒に聞いてみる。

「京都に来るのならそれぐらい当然だ」

そう自信満々に答えられたので試してみる事に。

「じゃあ、この清水寺について教えてくれよ」

俺も大して知らないので

実際に知っていたらついでに教えて貰う為だ。

「ふふん。いいだろう。」

まず清水寺の始まりだが、

778年に、大和国興福寺の僧で子島寺で修行していた賢心という男は、

夢のお告げで北へ向かい、山城国愛宕郡八坂郷の東山、つまり今の清水寺の地である音羽山に至ったのだ。

そして、金色の水流を見つけ出した、賢心がその源をたどっていくと、

そこにはこの山に籠って滝行を行い、千手観音を念じ続けている行叡居士という白衣の修行者がいたのだ。そいつは年齢200歳に、まあ私達より年下だが、なるという行叡居士は賢心に

「私はあなたが来るのを長年待っていた。

自分はこれから東国へ旅立つので、後を頼む」と勝手に言い残して、去っていったのだ。行叡は観音の化身であったと何故か悟った賢心は、

行叡が残していった霊木に千手観音像を刻み、行叡の旧庵に安置したのだ。

これが清水寺の始まりだ」

エヴァは饒舌に話したが、正直言って俺にはもう最初から意味不明だった。

そして正解かどうか分からないが、ここまで調べてるとは思いつた。なかった。

「そして、次だが「も、もういい。もういいって！　もう十分。十分！　分かったから！」

む？　そうか。まだまだ続くのだが、そこまで言うのなら仕方ない」

まだ、続けようとするエヴァを遮りこれ以上話しを続けさせないようにする。

あのままだったなら清水寺が今に至るまでに説明されてただろう。考えるだけで恐ろしい。

「さ、さゝて。チャチャゼロ！ エヴァ！
そろそろ違うところに行くか！」

「ソウダナ ココニハ何ニモ斬レル物ナイシナ」

「何を言っておるのだ！ まだ、全然見ていないではないか！
あ、おい！ 引っ張るな！ 手を離せリョウ！！」

また、何か話し出すのは勘弁なので
強引にエヴァを清水寺から連れていく。

エヴァには京都の事で説明を求めるのはやめておこうと硬く心に誓った。

清水寺から出た後このまま他の有名な
場所に行く勇気が無かったので京都独自の品等が
売っている所に行く事にした。

「まだ見終わってなかった」

「悪かったって」

やはり、俺が強引に清水寺から
連れて来た事によりエヴァはご機嫌斜めだ。

(どうしよう……)

今回は全面的に俺のせいなので頭を悩ませていると。

「お」

様々な店が立ち並ぶ中で一つの店にある綺麗な黒の簪が目にとまったので
エヴァに一声掛けてからその場で待ってもらい簪を買いに行く。

「オイ リョウ俺ニハ何モノイノカヨ？」

「チャチャゼロには後で京都にある
お酒買ってやるからさ。今は待ってくれよ」

「シヨウガネエナ ソレデ勘弁シテヤルヨ」

「はいはい。ありがとう」

傍から見たら独り言にしか聞こえないので
店主には変な顔で見られたが、気にしない事にする。
お酒の事はチャチャゼロにも後で買ってあげるつもり
だったので、別に問題はない。

簪の値は張ったが、依頼などでお金を稼いでいる
俺からしたらまだまだ余裕なくらいだ。

そうして簪を買い終えたので、エヴァを待たせている所に戻るとエヴァと、何故か知らないおっさんがいて、2人で言い争っているようだ。

「だから、さっきぶつかったのは悪かったと言ってるだろ！」

「何じゃその謝り方は！　もっと目上の者に対して敬意を払わんかっ！！！」

「はっ！　何故貴様見たいな、ちんちくりんな爺に敬意なんぞ払わないといけんのだ！　大体貴様こそしつかりと前を向いて歩け！」

「何だと！！　この小娘めが！」

「何だ！！！」

どうやら、俺がエヴァに待っている間にエヴァがおっさんにぶつかってしまったようだ。大方俺が待ってろって言ってもじっとするのが嫌で、ふらふらと動いてたんだろうけど。

というか爺って、まだそこまで言ってなさそうな感じなんだがな。

（そう言えば昔は俺が知っているのよりかなり寿命が短かったらしいから、この時代で言うともう爺さんなのか）

何にせよ止めないと。

「エヴァ。そこまでだ」

「む？」

声を掛けてみると

どうやら俺の事には気づいていなかったらしい。

「すみません。連れが御迷惑をお掛け致しました」

「リョウ！？」

目の前のおっさんに対して頭を下げる。

「エヴァ。ちんちくりんはどう考えても言い過ぎだって」

「ぐっ！」

さっきの清水寺の件で気が立っていたかもしれないが
おっさんからしたら関係ない話だ。

俺が謝るとおっさんも毒気を抜かれたのか
これ以上何か文句を言ってくる事は無かった。

「まあいいじやろう。そこの小娘！その男に感謝するんじゃない」

「何だも「エヴァ」……ツチ」

おっさんにまた食ってかかろうとした
エヴァを止め、そのままおっさんを見送る。

それを見送った後エヴァに向きおなる。

「ここを離れて悪かったなエヴァ。
さっきのお詫びって訳じゃないんだが」

今回は俺がそもその原因だったので

エヴァに謝りながら先ほど買った黒の簪をエヴァに渡す。

エヴァはまだ機嫌が悪かったが俺が簪を見せると呆けたようにし。

「これ……は？」

「いや、エヴァに似合うと思ってなさっき

店で買ってきた物何だけど。もしかして気に入らなかったか？」

俺は服等の選ぶセンスがはっきり言って無い。

この簪を買ったのも何となくエヴァに合うと思って買った物だ。
なので、エヴァが気に入ってくれるかが不安なのだが。

「そ、そんな事はない！！」

わ、私はこれでいい！ いや、これがいい！！」

エヴァは簪を素早く俺の手から取り簪を手に取りじっと見ている。

どうやら気に入ってくれたみたいだ。

「そっか。良かった」

一通り簪を見終わった後エヴァが
下に俯きながら少しもじもじし始め。

「リ、リヨウ。そ、その、あの、あのな。
……あ、あありがと……な」

「お、おう」

「……」

「……」

エヴァにしてはかなりストレートに言われたので
何故か俺も照れてしまい、俺とエヴァの間に変な空気が流れ始めた
時。

「二人トモ 俺ノ事忘レテネェカ？」

「っ！ いやいや、

まったくこれっぽっちも忘れてないって！」

「そ、そうだ私がチャチャゼロの事を忘れるなんて
そんな事があるはずなからう！」

「マア 忘レテイナインナライインダガ」

（危ねえ！！）

すっかりチャチャゼロの存在を忘れていた。
まあチャチャゼロの御蔭でエヴァとの間に漂っていた
変な空気を払拭出来たのは良かったが。

《ケケケ 残念だったな御主人》

《な、何を言っているんだ!!》

私は残念などとは微塵も思っただいじゃない!!》

《ソウカ? ソレナライインダガサツキリヨウト

イイ雰囲気ダツタノニ邪魔シテ悪イト思ッテタンデナ》

《なっ!? 貴様分かっていながら!》

《別ニ 御主人ニ迷惑掛ケテイナインダカラ イイダロウ?》

《ぐぐぐつ……。まだ根に持っているのか。

何て言う従者だ!! このボケ人形め! 貴様帰ったら覚えていろよ!!》

《ケケケケケ》

何故かエヴァが1人でころころと表情を変えていて、
チャチャゼロは頭の上で愉しそうにしているが
主従同士で何か話す事でもあったんだろう。

その後は京都の甘味を回ったり、
エヴァが気に入った物を買っていたりしながら観光を続けた。
そうして、次はチャチャゼロに買う為のお酒を探していると。

「おい爺。あんまり調子に乗ってるといてこまずぞ!」

「痛い目に合う前に早う謝った方がいいで爺」

何か騒ぎが聞こえたのでそちらに視線を向けると。

「あの爺！」

先ほどエヴァと言い争っていたおっさんが数人の若者に絡まれていた。

まあエヴァは不機嫌そうに見ていたが。

（今時まだこんなのあるのか？ いや、そういえば今はまだ俺の知っている時代じゃなかったな）

とりあえず周りの野次馬にこうなつた訳を聞いてみると。

何でもお酒を飲んで酔っていた若者が、暴れて周囲の客に迷惑を掛けていた若者達に向かって爺さんが注意したが、当然あの手のタイプの者は正論を言われるほど反発する訳だ。今はお酒も入っているようだしな。

「な、なああんた見る限り強そうだしあの爺さん助けてやってくれよ」

俺が事情を聞いた野次馬の男がそう言ってきたが。

「別に必要ないだろ」

「え？」

「まあ見てたら分かるよ」

まだ、疑問があるようだが
とりあえず俺の言われたように見る事にしようだ。

「ふう〜やれやれ。近頃は老人に対して
敬意を払わん者が多いのう」

その言葉にはたぶんエヴァの事も含まれているだろう。
そう溜息を吐きながらおっさんは懷から鉄扇を取り出した。

「ああ！？ 何言ってるんだ爺！」

「いや、何。今の世の中お主のような馬鹿が多いという事だ」

「てめえ！！」

爺さんの言葉について男が切れたように
暴れていた時に使っていた角材のような物を爺さんに向かって薙ぎ
払う。

周りは悲鳴を上げたり目を逸らしたりしているが。

「なっておらんな」

おっさんは右手に持った鉄扇で角材を防ぎ、
そのまま男の角材の持っている手に鉄扇を持った自身の右腕を

絡め、更に男の上腕部に膝を乗せて。

「っ!!」

驚愕の声を出す暇もなく、男はそのまま地面に叩きつけられ意識を失った。

（へえ……。確かあれは合気柔術いや、鉄扇があるから合気鉄扇柔術か？）

周りは啞然としているが、俺は最初からこのおっさんの実力が大体は分かっていたので、その事については特に驚いてはいない。

エヴァはおっさんに対して周りとは違う意味で少し驚いているようだ。

（まあ。こんな武術今まで見た事が無いだろうしな）

そんな事を考えている間にもおっさんは気を取り直した若者達を次々と投げ飛ばしては、気絶させている。

（これは……。もしかしたらエヴァに合ってるんじゃないか？）

以前。エヴァは中々上手く近接戦が出来なくて困っていたが、これならエヴァに合うかもしれない。

「エヴァ。あのおっさんがやっている戦い方やってみたら？」

「何？ それは、あのちんちくりんな爺に私が教えを乞えと言う事か？」

「そうだけどさ、実際あの戦い方はエヴァに合ってんじゃない？」

「ぬ……」

エヴァにも思う所があるようで少し言葉に詰まったようだ。

柔術をやってみたいが、エヴァはプライドが高いので中々素直におっさんに頼むと言う事は難しいのだろう。

「大丈夫だって。俺がどうにかするからさ」

「ちょ、ちょっと待て！ リョウ！

まだ私はやるとは一言も言っておらんぞ！」

エヴァが後ろから何か言っていたが、無視する。

その時、ちょうどおっさんがすべての若者を倒し終わったので話しをする為に向かう。

「やれやれじゃ……」

「すみません。私は黒宮と言う者ですが」

「ん？ おお。お主はさっきの」

声を掛けると先ほどの出来ごとを覚えていたようで俺の事はすぐに分かったようだ。

「先ほどの凄かったですね」

「なくに。あの程度ならお主でも簡単に出来るじゃろ」

（予想以上に鋭いな……）

こちらがおっさんの実力を見抜くのと同じで、
向うもこちらの実力がある程度は見抜いているようだ。

「いえいえ。それより先ほどの実力を見込んで
少し頼みがあるのですが。よろしいですか？」

「用件を聞いてみない事には分からんが
お主のような若者は珍しいのでな一先ず聞いてみよう」

とりあえず話は聞いてくれるようだ。

「ありがとうございます。実は貴方様が
先ほど使っていた武術をご教授して頂きたいのです。
もちろん、ただでとは言いませんので」

そう言うとおっさんは少し驚いた後、
考え込んだようだが、すぐに元に戻り。

「ふうむ。お主程の力の持ち主に
必要なかは分からんが、別に構わんよ」

（良し。言質は取ったな）

内心で上手くいったと思っていると。

「だから、リョウまだ私は！

「では、この子をお願いしますね」え、なっ!？」

後ろから追いかけて来たエヴァが丁度良く俺に追い付いてきたのでおっさんに紹介する。

おっさんはエヴァを見ると露骨に表情を歪めた。

「そんな小娘に教えるわk」先ほど教えてくださると言いましたよね?」……むぐう」

「おい、リョウ私は「エヴァもわがまま言わない」ぐっ! ……くそう」

2人とも、項垂れてしまったがエヴァも合気柔術を教えて貰えて、おっさんもお金を稼げて結果オーライだ。

「ケケケ 案外 黒イナリヨウ」

日本に住み始めて115年
原作開始まで後115年

エヴァ合気柔術を習う。

第二十話 『古都—京都』 (後書き)

京都編はまだ続きます。

第二十一話『宣告』

俺が話を付けてからというと、二人して、文句をぶつぶつと呟いていたがしばらく経つと、二人とも開き直ったようである。文句の言い合いをしながらもすぐに修行を始めた。

やはり合気柔術はエヴァに合っていたようである。めきめきと実力を付けていった。相変わらず二人とも喧嘩は絶えないが、

それでもおっさんはエヴァに教え続け、エヴァはおっさんの教えを受け続けているのだから案外この二人仲がいいのかもしれない。

翌日そう、エヴァに言ったら
苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

俺はというと最初の三日程はおっさんが所有していた道場でチャチャゼロと一緒に二人の訓練を見ていたり、たまに組み手等をしていたが四日目の訓練を見ている時に。

「エヴァ。少し俺は外を散歩してくるな」

少し気になる事があるのでエヴァ達に声を掛け
道場にチャチャゼロを置いて京都の町に出る事に。

「待てリョウ！ 私と一緒に「小娘。お前は鍛錬じゃ」
くっ……この爺め！」

振りかえらずとも後ろからエヴァの

すごく恨みがましい視線を感じるが、それをあえて無視して外に出る。

そのまま京都の町並みを見ながら徐々に人気の少ない所に向かって進む。辿り着いたのは周囲に建造物等一切ない広い空き地であった。そして、俺はエヴァに貰った認識障害と人払いの腕輪を起動させ、

「出てこいよ。わざわざ俺の方から場を整えてやったんだからさ」

周囲に声を掛けるも出てくる気配はない。

気づかれていないとでも思っているのか

それとも、あえてこちらを無視しているのかは分からないが、どちらにしろこのままじゃ埒があかない。

「はあゝ。しょうがない。レストレーション」

鍊金鋼を復元し弓の形になった瞬間。

衝刺を凝縮して矢の形になった物を弓の鋼の弦を引き

俺達が京都に来て少し経った頃からずっと俺達を監視

していた奴に向けて一瞬で矢を放つ。

矢は音もたてずに突き進む。間にある障害はすべて貫通していき監視していた奴の顔のすぐ横を貫通させる。まだ敵対とは決まっていないのでとりあえずはこの程度で済ましておく。

「今のは警告1。警告3になったら……。まあそこは警告3になってからののお楽しみって事で」

攻撃を終えてしばらく向うの動きを待っていると前方から、こちらに向かつて転移してくる気配がありそちらを見てみると陰陽師風な奴が四人。

剣士が四人。明らかに、こちらを警戒した様子で出て来た。内。俺が弓で射った陰陽師風な奴の内一人の顔が若干青いがあの矢で殺されてないだけ御の字だと思ってほしいもんだ。

それに、先ほどのはただ単に弓で衝剄の矢を射っただけだ。

剄技ですらない。ただ単純な、それこそ剄があれば威力や速度、命中率、技術等を

度外視したら誰でも出来るようなものだ。

それすら捉えられないのなら俺との殺し合いに出てこない方がいい。

「やっと出て来たか。さっさと出てきたら何もしないのに」

そう言うのと全員が渋い顔をし、特に青い顔の奴が憎しみを込めて睨んできた。そして、その内のリーダー各と思しき一人が。

「どうやって我々に気づいた？」

「ん？ 何が？」

「とぼけるな！！ 我々は貴様から優に10kmは離れていた！その距離で何故我々に気づいたっ！」

普通こちらを監視していた怪しい奴にこんな事を聞かれても答える義務なんてないんだが、その所ちゃんと分かってるのだから

うか。

(困る事でもないか)

聞かれても俺にとって痛くも痒くもないので
気まぐれに答えてやる事にする。

「普通に気配を察知しただけだけど」

「なにっ!？」

あちらさんはこちらの索敵範囲にかなり驚愕しているようだが
現在の最大索敵範囲は15kmほどなのでこれぐらいで驚いて貰っ
ても困りものだ。

こちらに対して式神で遠方から監視するのはいいが
それに合わせてある程度の距離を保ちながら本体も移動してくれば
すぐに気づく事が出来る。一般人と戦闘する者では魔力及び気の質
は明らかに違う。

一般人が宝石の原石としたら戦闘者は研磨された原石だ。
それくらい違う者の気配を読み違う何て事は普通はありえない。

エヴァは気づいていなかったようだが、エヴァは元々索敵等は得意
ではないので

こいつらには気付かなかったようだ。魔力を探知するのは
ずば抜けて上手いが、それもそれほど広範囲は索敵出来ない。
それに加えて京都に来てからはかなりはしゃいでいたようだし。

(まあ俺ぐらい索敵範囲が広いのも稀か……)

「今度はこっちから質問。あんた達関西呪術協会の者だよな？
ああ、その事は大体分かったから別に答えなくてもいい。会って
みて

確信に変わったから。肝心の質問は何で俺達を。特にエヴァを監視
していた？」

こいつらが関西呪術協会の者なのは十中八九分かっていたので
一々聞く事はせず、肝心の部分のみを聞く。

「決まっておるだろう！ 京都に魔の者が侵入したのだ！
それを何もせず放置等出来る訳がなからう！！」

(あれ?)

魔の者というのはエヴァの事だろう。チャチャゼロは人形だし、
俺は一応、たぶん、ぎりぎり、おそらく人間だろうし。

でも、俺達には認識障害働いているはずなんだが。

(……あ)

確か俺達に掛けていた認識障害は容姿と

賞金首である『不死の魔法使い』マガ・ノスフェラトゥ『武芸者』マッシュタル・アーツマスターと

俺達が結びつかないようにする物だ。

ようするに顔を見られても賞金首の俺達にそっくりさんって思われ
るだけである。

だが、エヴァが吸血鬼だと気づかないようにする認識障害は一つも
張っていなかった。

ここ最近エヴァが吸血鬼だと気づく者がいなかったかの、二人

ともすつかり

忘れていた。一目見ただけでは、エヴァは普通に綺麗な少女にしか見えないので

すぐにエヴァが吸血鬼だと分かる者はいない。

だけど、ここは退魔専門の場所だ。吸血鬼とは分ならずとも魔の者ということぐらいすぐに分かるだろう。

（これはめんどくさい事になったなあ）

俺とエヴァもすっかりその事を忘れていた。

京都に魔の者が堂々と入ってきたのだ、

これなら関西呪術協会も警戒せざるえないだろう。

「あゝそれは悪かった……。

別に俺達はそちらと敵対するつもりはないからさ」

俺が頭を掻いてそう告げると

先ほどまで顔の青かった奴が怒りだし。

「ふざけるな！！ 貴様のような魔の者と

一緒にいる者の言う事なんぞ信用できるかっ！」

先ほどの事を根に持っているのか

こちらの事を最初から疑って、いやもう確実に俺達が何かすると決めつけてるようだ。

魔を退治する組織には大別すると二通りの人間がいて魔であれば、それが何であれ問答無用で退治する奴と人に害さなければ退治はしない奴だ。

他にも細かく別かれるが、大きく別けてこの二つだろう。

そして、少なくともこいつは前者なのだろう。

（穏便にいききたいんだけどなあ）

基本俺はこちらに対して危害を加えるまたは、危害を加えようとする者以外は殺そうとは思はない。

それが、日本において最大の影響力がある組織なら尚更だ。

（どうしようか？）

そんな事を考えていると、先ほどの男が言ってはならない事を言った。

「今すぐにあの魔の者は始末すべきだ！！」

本山に連絡して早急にあの魔の者w「駄目だ」————い、ぎっ
！！??？」

それだけは駄目だ。

刹那の間に弓を構え男の四肢の肘、膝を弓で射抜き

それ以上話さないように言葉を遮る。

弓で射抜かれた男は糸の切れた人形のように崩れ落ちた。さすがに悲鳴を上げるような無様な真似はしないようだ。体を弓で射抜かれた痛みで呻いているようだ、耳障りな言葉を発しないようになったのなら、十分だ。

こちらの注意不足がそもそもの原因だが
エヴァに危害を加えるとなると、自分勝手と言われようとも関係無い。

「今ので警告2。ギリギリだが」

俺がそう奴らに告げたが奴らは
何やら驚愕しているらしく、あまり俺の忠告を聞いていないようだ。

（まあ関係ないが……）

自身の顔から表情が無くなった事が分かる。

エヴァに関する事では自分の纏う空気が変わるの自分ですえも分かるが

それをやめる必要もないし、やめようとも思わない。

「何その顔？　もしかして自分達が関西呪術協会だから攻撃されないと思っただけ？」

それとも、この距離で弓だから攻撃できないとでも？

もしくは、俺から攻撃されても自分達なら対応出来るとでも？

ハッ！　もしそんな事を思っていたのなら樂觀視しすぎて笑えてくるね。

俺を舐めるのも大概にしろよ」

俺から漏れ出した殺気により足元の地面にびしっ！っと亀裂が奔る。どうにも殺気が漏れる。さすがに到が漏れる等は無いが、この辺の感情を

制御出来ない辺り俺もまだまだ未熟なのかもしれない。

そして、奴らは俺の殺気によって顔色はどんどん悪くなりもう顔面蒼白だ。

「経験も年季も技術も速さも力も俺の方が上なんだからどれだけ用心しても、足りないと思うほど用心ぐらいしろよ。さすがに実力差も分らないほど役立たずな訳じゃないだろ？ それすら分らないのならさっさと死ねよ」

俺が吐き捨てた時、既に陰陽師の奴らは顔を土気色にまでになり腰を抜かしてへたり込んでいる。中には白目をむいて気絶、あるいは嘔吐しそうな者までいる。さすがに剣士の四人は足を震わせ、刀を支えにし

立っているが、とても今から戦闘が出来そうな状態じゃない。

それを見て少しだけ頭が冷えた。

（やりすぎた……）

つい頭に血が上ってやってしまったが

ここまで来たら関西呪術協会に対して敵対行動に取られかねない。

そうなると思わぬので、釘だけは差しておく。

「ふう。信じるかどうかはあんたら次第だが俺達は京都にそこまで長く滞在するつもりはない。そちらに対して敵対行動もしないし、一般人に危害を加えるつもりもない。まああんたら下っ端に言ってもどうしようもないと思うが。だけど、これだけは言っておく。そうだなそのあんた。帰って関西呪術協会の長に一字一句完璧に伝えろ」

リーダー格の男にそう伝えてから
俺自身に掛かってる認識阻害をすべて解除し
ボックスから依頼の際に着る狼面衆の着替えに変える。

「あの子達に手を出すな。もし手をだしたその時は俺が関西呪術協会に関係する奴は全て殺す。そこに一切例外も特例も温情もない。

男も女も老人も子供も赤子も病人も誰であろうと殺す。逃げたいなら逃げればいい。

だが、どこまでも追い回して確実に食い殺す。
そう『ハウンド・ドッグ 獵犬』が言っていたと伝えろ」

ようするに脅迫だ。

自分でも言うのも何だが、俺のこの姿は魔法の世界、すなわち裏では有名であり、そして、それと同じくらいに恐れられている。いくらここが極東にある島国、日本だと言っても西洋魔法の事を何も知らないと言うのは、ここまで巨大な組織ではありえない。

実際数こそ少ないが、関西呪術協会から依頼を受けた事はある。

だからこそ俺の実力も知っているだろうし、少なくともいきなり俺達に襲撃を掛ける事などないだろう。

「覚えたか？ 覚えたよな？ っていうか覚えろよ。覚えたならさっさと長に伝えに関西呪術協会に帰れ」

そう伝えると剣士達は焦躁と敵意、そして恐怖の顔を浮かべながらまだ満足に動かないだろう身体を必死に動かして、陰陽師達を一か所に集めて

懐から人数分の転移符を取りだした後まとめて転移していった。

「はぁ。やってしまった……」

周囲一帯の気配を探り特に反応が無いのを確認してから錬金鋼をしまい。少々反省。

今回の事で関西呪術協会とめんどくさい事になるのは確かだろうが、別に後悔しているわけではない。

エヴァに直接伝えるのは気恥かしいから言わないが俺はエヴァを大切に思っている。もちろんチャチャゼロもだが。

今この世界で一番大切だと言ってもいい。

エヴァ達を守るためなら先の言葉は脅しのつもりだがもし、それを実行しなければ、守れない状況なら躊躇わずに実行する。

全て殺し、障害があるのなら全て潰す。

例えそれで、エヴァから憎まれようと嫌われようとも。

俺は組織という物を侮っている訳ではない。

ただ単純に出来ないとか、やらないとかじゃなく

エヴァ達の身を守る為に必要だからやるだけだ。

そこに組織の大きさも強大さも自身の身の安全も関係はない。

他人から見たら自己中心的な考えなのかもしれないが

殺し合いも、戦争も、闘いも、所詮は私の通し合いだ。

どんな綺麗な言葉や汚い言葉を並べ立てようとも、結局は勝った方だけが

自身の意思を通す事が出来る。だから俺の考えをどうこう

言われる筋合いは誰にも無い訳だ。

別に俺がエヴァを守るために関係の無い奴を殺した事によつて自身の手を汚すなんて事は思わない。

人を殺すのなんぞ今まで数えきれないくらいやってきた。

命を奪うのにあまり感慨を抱かなくなったのはいつの頃だったかすら覚えていない。

それを、今更自分に都合のいい綺麗な事で飾りたくは無い。

そして、このエヴァを守ると言う行為さえ俺のただの自己満足だ。

自身の命に変えても守ると言う行為は他の人に言わせればそれは逃げだ。と

言われる考えかもしれないが、俺は逃げてるつもりは微塵もないし俺自身も進んで死のうとも思っていない。ただの優先順位の違いだ。

俺自身よりもエヴァが大切。ただそれだけの事。

きっと、エヴァはこんな事を望んでいないだろう。

エヴァは何だかんだいってその根底は優しい。

だから、エヴァは自身は不死だから必要ないのに

きっと俺の為に苦手な回復魔法等の補助系統の魔法も覚えてくれている。

俺の行為はそのエヴァの気持ちを裏切っている形になるのだろう。

(それでも……俺は……)

この気持ち、異性に対する恋なのか家族愛なのか、はたまた別の感情なのかは俺にはまだ分からない。どちらにせよ、まともではないと思うが。それでも俺のやる事は変わらない。

(全てに変えてもエヴァ達を………)

そう改めて決意をし、空を見上げると。

血のように紅い満月が夜の暗闇を照らしていた。

日本に住み始めて115年
原作開始まで後115年

関西呪術協会と邂逅。
決意を新たに。

第二十一話『宣告』（後書き）

今話はシリアスかな？

黒宮の考えの部分は自分の勝手な解釈ですので
読者様達の考えと合わない事もあると思いますが
気にしないで頂けるとありがたいです。

それと、もし誤字脱字があつたのなら報告してくださいと
ありがたいです。

第二十二話『少女の想い』（前書き）

今回は少し長いです。そして、若干エヴァのキャラが違うかもしれません。

それと、言葉づかいなどは気にしないで貰えるとありがたいです。

第二十二話『少女の想い』

狼面衆の服と仮面をボックスに入れてから、元の服に戻し、腕輪の認識阻害を起動しなおす。そして、京都の夜の町並みを眺めながら、時間を掛けて歩きながらエヴァ達の居る道場に向かう。

先の一件の影響で少し感情がざらついているので、このままエヴァの元に帰る訳にはいかない。他の人なら気づかないかもしれないが、エヴァとはかなりの長さの付き合いだからもしかしたら、違和感に気づいて問い詰められる可能性がある。

先ほどの事を言うつもりは絶対ないがそれでもエヴァにばれるかも知れない。

ばれる可能性は少しでも可能性は減らしておくべきだ。

そんな事を考えてる間に道場に着いたようだ。もう大分感情も落ち着いたので、引き戸を引いて道場に入る。

「ただ「遅い」……せめて最後まで言わせてくれよ」

引き戸を開けて、すぐの所にエヴァが

腕を組み不機嫌な様子で仁王立ちで待っていた。

不機嫌と言っても、怒り等ではなくどちらかというと拗ねているというのが一番合っているだろう。

「私がああ忌々しい爺の教えを受けていたというのにリョウは……ん？」

また愚痴を言われるのかなと思っていると
エヴァが急に言葉を止めたので、怪訝に思っ
て俺が顔に疑問符を浮かべると。

「リョウ。何かあったか？」

「何か？ んー月が綺麗だった以外特に何も無かったけど？」

この事態はあるかもしれないと考えてはいたので
エヴァの問いに対して予め考えておいた言葉を淀みなく答える。

「急にどうしたんだ？ エヴァ？」

エヴァはすぐに頭を振って。

「いや、気にするな。」

それよりも先ほどの事だが————」

そう言うってから、またさっきの愚痴の続きを
しばらく聞かされる事になったが、ばれなかったので良しとしよう。
その後は、チャチャゼロに付き合っ
て酒を飲んでから就寝する事にな
った。

（そういえば……。いつもなら酒盛りに付き合うのに
何でエヴァは今回来なかったんだろ？）

s i d e ..エヴァンジェリン

深夜。道場にある離れの部屋の床に着く。

この部屋にチャチャゼロは居ない。

リョウの部屋で酒を飲んで、そのままリョウの部屋で夜を明かすそうだ。私も誘われたが、あいにく今日は酒を飲む気分では無かったのでこうして一人で居る訳だ。

そんな気分になった原因を思い出して苦々しく。

「馬鹿者め……」

布団の中で呟いた。

爺と鍛錬をしている時、リョウはいつも見ているか一緒に鍛錬するかなのだが。

「エヴァ。少し俺は外を散歩してくるな」

今日は珍しくリョウが外に出ると言った。
私も仕方ないから一緒に行こうとしたのだが、あの忌々しい爺に阻まれてしまった。

リョウはというと私を置いてそのまま外に出て行ってしまった。
だから、帰ってきたら文句の一つでも言ってるやろうと思い
玄関で待つ事にした。べ、別に置いてかれて寂しかった訳などではない。

そうして待っているとリョウが帰ってきたので文句を言おうとしたのだが、その途中リョウに少し違和感を感じたので言葉が止まる事になった。

いつもと変わらないように見えるが少しだけ違う気がしたのだ。

「リョウ。何かあったか？」

率直にそう尋ねるとリョウはいつもと変わらないようにし。

「何か？ んゝ月が綺麗だった以外特に何も無かったけど？」

そう答えた。

だが、私は何かあったとすぐに分かった。

僅かにだが、リョウの雰囲気がいつもと違い少し張り詰めているのが分かった。

こう言うては何だが、いつものリョウの雰囲気はだらけている。

リョウはめんどくさがりだから、自分から厄介事に関わるのは極力避けている。

私を助けてくれた時はリョウ曰く。

ただの自己満足であり気まぐれらしいが。あの時私はリョウに助けられた。

それが、あの時の純然たる事実である。過程はどうでもいいのだ。

話が逸れた。だからそれ以外の時との

雰囲気の違いが激しい。だから、今回もリョウの違和感に気づいた。

（何年一緒に居ると思っているのだ……）

リョウに聞いてもきつと何も答えはしないだろう。

言わないと決めた事は決して言う事は無い。
普段は押しに弱いくせにこんな時だけしっかりしている。

何かが起こったのかは分かる。
でも、何が起こったのかは分からない。

だが、何が起こったのかは分からないが想像はつく。

どうせまた、一人で無茶な事をしたのだろう。
リヨウと旅をして、分かった事だがあいつは基本的に誰かに頼る事をしない。

何でもかんでも自分でやろうとする。そして、なまじ力があるせいで大抵の物は解決する。私から何か言わないと本当にリヨウだけでやってしまうので気をつけないといけない。

その事が私にはもどかしい。

(……私に少しは頼れ。リヨウ)

私はあいつと共にありたい。
いつその感情が生まれたと、問われれば分からない。
だからといってこの感情が変わる事など無い。

だが、きっかけは、きつとあの日あの場所でリヨウに
助けられてからなのだろう。

(くく。我ながら単純な事だ)

助けられたからといってこんな風になるとは、童話に登場するヒロインと大して変わらないではないか。存外私は自身が思ってるより私惚れやすいのかもしれない。だからといって、リヨウ以外と、何て事は毛の先ほども有り得ないが。

この想いを伝えねばならぬ事は分かっている。だが、想いを伝えてこの関係が壊れるのが怖いのだ。中途半端だが、この暖かい関係が。

最初からずっと不幸なのと
幸福を知り、また不幸になるのは違う。

リヨウに会う前の私ならばそんな事を気にしないだろう。私が吸血鬼だと分かった途端に離れて行くのは確かに悲しいと思うだろうが、それだけだ。
良くある事だと、納得し、しばらくするとその事に対して何も思わなくなるだろう。
だけど。

(いやだ……。いやだいやだいやだ！！！)

リヨウと離れるなんてそんなの……耐えられる訳がない！)

リヨウと離れると考えるだけでどうしようもない不安がこみ上げる。体が震え、思考定まらなくなり、嫌な汗が全身から噴き出てくる。寝巻は体から出た汗でじつとりと濡れている。

少しでも、不安を紛らわせようとし布団握りしめる。

このまま考え続けると自分がおかしくなりそうなので無理やり嫌な考えを振り払う。

「はあっ、はあっ、はあっ……っ。

私は………弱くなったな」

無論、魔法的な面では昔とは比べ物にならないくらいに強くはなっただろう。

だが、心は脆くなってしまった。

リヨウに会う以前の私ならこんな風に取り乱す事など無かった。以前の私が今の私を見たら、嘲笑うだろうか？侮蔑するだろうか？失望するだろうか？それとも

羨むだろうか？

「だが、これは……この想いは私のものだ。誰にも渡さん」

リヨウと居る時の感情^想を幸せと呼ぶのなら
誰であろうとこの感情^想は渡さない。

吸血鬼になってから手に入れるはずがないと思っていたものだ。
それが手に入れられたのだ。手放しなどするはずがない。

吸血鬼ともあろう私が

情けないがリヨウに直接想いを告げる勇氣は今はない。

だから。

「……好きだぞ。リヨウ」

いつの日か想いを伝える。

そう決意を込めて布団の中で呟いた。

―――数分後

「くうあ~~~~~っ!! な、何ださっきのは!?!
は、恥ずかしいにも程がある! この年にもなって何処の乙女だ!!
そして、何を言ってるんだ私はっ!!!」

side..黒宮

翌朝もエヴァは鍛錬をいつもと変わらず始めた。
しいて言えば、何故か俺と顔をまったく合わそうとせず
顔が合おうものならすぐに顔を赤くして逸らす。

訳を聞いても何でもないの一点張り。

その割には挙動不審で情緒不安定だが。

チャチャゼロに訳を聞いても愉快そうに笑うだけ。

その事がいつもと変わっていたと言えば変わっていたが。

俺はと言うと今日は特にやる事もないので

ぼーっとエヴァの鍛錬を見ていた。

「すいませ〜ん」

「……………んあ？」

危うく寝てしまいそうになり、うとうとしていた時に玄関の方から
扉を叩く音が聞こえたので鍛錬をしているエヴァ達の代わりになる

事に。

玄関の前には飛脚らしき男が立っており。

「お届け物です」

懷から出した手紙をこちらに渡すとすぐに立ち去っていった。

「手紙？ おっさんのか？」

受け取った手紙を何気なくひっくりかえす。

『関西呪術協会 長 近衛文衛門』

差出人の所に、みみずのような字で短く書かれていた。

昨日の今日にこの手紙が、ここに送られてくるというのは

明らかに俺宛の手紙だろうという事で勝手ながら手紙の内容を読んでみる事に。

中身を要約すると

昨日の件についての謝罪及び今後の事について話し合いの為に一度本山の方に出向いてほしい。

（ん）。本山にはあんまり行きたくないが

こうして呼ばれてるんだし、無視するのもまた

めんどくさい事になりそうだから行くしかないか）

わざわざ敵地ともいえる場所に乗り込みたくはないが

一組織の代表ともいえる人物からの連絡があったのだ
出向かわない訳にも行かないだろう。それに、依頼の際に
少し見た限りでは関西呪術協会の長は比較的人格者の
ようなので、そうそうひどい結果にはならないだろう。

行くのならさっさと行くのがいいと言う事で。

「エヴァー！ 少し外出てくるからなあー」

道場の方に戻りエヴァに声を掛ける。

「なにっ！？ またか！ またなのか！？ 連日こうも出かけるとは
なにごと——はっ！！ まさか……女か！ 浮気なのか！？
私と言う者がありながらそんな……。それならば
いっそ。私がリヨウを一生閉じこ——」

それ以上エヴァの言葉を聞く事は無かった。

俺がその場から逃げたからだ。それはもう恥も外聞も知らずに。必
死で。

エヴァが非常に嫌な方向で時代の先取りをしそうになったので
それ以上先は怖くて聞く事が出来なかったのだ。

「やばかった。

何がやばいか分からないが、今のは絶対にやばかった」

とにかく距離を取る事だけに専念していたので
どこに逃げていたか分からないが、周りに丁度良く人が
居ない場所なので、ボックスから狼面衆の服と仮面を出し着用。

「エヴァも鍛錬で疲れてたんだな。

うん、そうだな。そうに違いない」

自分自身に言い聞かせるように呟きながら本山に向かった。

そして、鳥居が連なる本山への入り口に到着すると。

「お待ちしておりました。長よりあなた様を案内するように仰せつかった宮根と申します。では、こちらへ」

大和撫子という言葉を体現している巫女姿の女性が立っておりこちらを案内してくれるというので付いて行く事に。

さすがに向うも、こちらに対して敵意を見せる事もなく特に何もせず案内していった。

季節が春ならば桜が咲き誇り、さぞ綺麗であろう道を進みいくつもの鳥居を潜りぬけ、立派な門を潜ると

広大な敷地にある関西呪術協会総本山が見えて来た。

何回かここには来ているので、景色を見る事はせず

案内役の巫女に付いて行くと一つの広間に通されたのでその部屋に入る事に。

「お久しぶりですね、ヴォルフシュテイン殿。ようこそいらしてくださいました。改めて関西呪術協会 長 近衛文衛門です。この度はわざわざご足労をお掛けしました」

長にしては若い部類に入るだろう壮年の男性が
姿勢を正して待っていた。

「いや。別に大した手間じゃないから構わない。
それより用件の方をさっさと済ませよう」

近衛の対面に座って俺が用件を切り出すと
近衛は少し驚いたような顔をした。

「どうした？」

「いえ。私は特に構わないのですが
以前のような喋り方ではないのですね」

「ああそれね。敵の代表ともいえる
人物に敬語で話すのもどうかと思ってな」

「これは……手厳しいですね」

（まあ実際はめんどくさくなったからただけけど……）

近衛は罰が悪そうにしたが、すぐに真面目な顔をし、

「この度は私が監視を指示したとはいえ
下の者が勝手な行動をしてしまい誠に申し訳ありませんでした」

頭を下げる事はしなかったが
それでも謝罪の意は伝わってくるものだった。

「平時はこんな事をしないのですが

何分。西洋魔法使いとの問題で皆少々気が立っておりまして。いえ。これは言い訳ですね。組織の長である私の実力不足ですね……。重ねてお詫びします」

「いや。その事は別にいいさ。こちらに問題がないとも言切れないしな。問題は肝心の今後の事だ」

前の一件は俺達にも負い目があるので謝罪云々はそこまで気にしていない。

でも、今後の事は結構重要な事だ。

「あんたは俺をどうするつもりだ？」

ここに呼んだ時点でいきなり俺を殺す何て事はないだろう。もちろん罠の可能性もあるかもしれないが襖の前に護衛の人がいるだけで他の気配は、ばらばらに散っているのでその可能性も低いだろう。

「その事ですが、こちらとしてもあなたと事を荒立てる事はしたくありません。特に今は西洋魔法使いとの事がありますので」

「そっちがそういう事なら俺も異論はない。だが、今回の事を鑑みるとその結果に下の者の中に納得しないのもいるんじゃないか？」

その時に迎撃して関西呪術協会と敵対。何て事になったら元も子もない。

「無論私が抑えます。が、こうして抑え切れていないのが現状。なのでその者達はその時点で除籍としますのでそちらにお任せします」

「俺としては連れの子達に手を出さなければ関西呪術協会にまでどうこうしようとは思わないが、随分身内に厳しい事だな」

俺がそう告げると近衛は疲れたような顔で溜息を吐いた。

「あなたは分かっている。それほどまでにあなたとは事を荒立てたくないのですよ」

えらく高く買われているようだ。

依頼の際に世間では達成が不可能だと言われている

依頼もいくつかこなしているからかもしれないが

俺としたらこの結果に満足なので今回は有名なのが功を奏したよう
だ。

「そんな物なのか。まあいい話し合いも終わったし

俺はそろそろ帰らせて貰う。京都にいてもそっちに迷惑が

掛かりそうだから明日辺りにはここを出るよ」

少し、いや大分あのエヴァの元に帰るのは怖いが

ここにいてもしょうがないので、早々に立ち去る事にする。

「ご迷惑をお掛けします」

「気にするな」

そんな言葉を最後に俺は関西呪術協会を出た。

恐る恐るエヴァの所に帰ったが、俺が見た時と違い随分落ち着いているようで普段と変わらないエヴァがいた。

「も、もう大丈夫な、なんですか？」

「何だその喋り方は？ 気色悪い」

（良かった！ 本当に良かった！！ いつものエヴァだ！！）

幼女に罵倒されているのに喜んでいる俺は傍から見たら危ない人だが、今はそんな事気にならないくらい安心していた。

「いや。今朝何か変だったから心配でさ」

そう言うとエヴァは顔を赤くしたが今朝のような状態にはならなかった。

「私も色々あるのだ！ 今朝の事はさっさと忘れろ！」

「りょう〜かい」

今朝の事は俺も忘れたい事だったので素直にエヴァの言う通りにする。

「そうそうエヴァ。急だけど明日には京都に帰らないか？」

エヴァが京都から素直に帰るか分からないが

近衛にそう言ってしまった以上帰らない訳にもいかない。

それに、休業していた依頼もそろそろ再開しなければならぬし。

「ふむ。そろそろ結界の方も限界だろうし、そうするか」

意外にもエヴァは帰る事に対して特に文句を言う事もなく
京都に帰る事に納得してくれた。

「おっさんの鍛錬はいいのか？」

「一通り習ったからな。」

後は繰り返し鍛錬すれば問題ない」

恐ろしい程の習得速度だ。

余程エヴァに合っていたのかもしれない。

s i d e ..???

長は京都にきていた高位の魔の者とそれと
同行する者達に手を出す事を禁じた。

更に手を出した場合は関西呪術協会から除籍すると。

（ふざけるなっ！！）

危うく怒鳴りたくなったが向うは長だ。

下っ端である自分が怒鳴る訳にもいかない。

（あのような者達放置しておけるか！！）

長はこちらから手を出さない限り害為す事は無いと言っていたがそんな事信じられるはずがない。

（即刻滅さなければっ）

きつと長もあの者達を滅する事が出来れば我等を除籍等はしないだろう。

私は自分と同じ考えの者達を集め翌朝本山を後にした。

side..黒宮

翌日。おっさんに別れとお礼を告げた後家に帰る為に駅に向かってしていると。

「はぁゝ。さっそくか……」

こちらに向かい接近する複数の気配を感じたので溜息を吐く。

「どうしたんだ？ 急に立ち止まって」

「悪いなエヴァ。ちょっと先行っててくれないか？」

自分でも少し強引だと思ったが、他に適当な理由が思いつかなかった。

エヴァは少し複雑そうな顔をした後俺と同じ様に溜息を吐き。

「はぁゝ。さっさと来いよ」

チャチャゼロを連れて駅に向かい歩いて行った。

「これは感づかれたかなあ……」

全部が全部ばれている訳ではないだろうが
これから俺がする事ぐらいいは分かっているそうだ。

「まったくタイミング悪すぎだろ」

周囲を見まわしその中でも高い建物の上に飛び乗り
ボックスから鍊金鋼を出す。

「レストレーション」

弓を復元。そして活剷で目を強化し
こちらに迫ってきている気配の主を見ると。

「ん？ 一昨日の奴らじゃん」

一応前回の事を鑑みてか気配は消しているようだ。
が、その程度では俺からしたら一昨日と何も変わらない。

「この前言ったろ？ 警告3になったらお楽しみって」

奴らには聞こえていないだろうが、関係なく言葉を続ける。

「これがその答えだ」

———がいりきけいしやうけい外力系衝剄の変化……珊瑚。さんご

剄を凝縮した矢を一息に八つ放つ。矢は吸い込まれるようにそれぞれの標的に進みそのまま奴らの腹に命中。本来なら貫通させるのも容易いが。

「お楽しみなんだ。それだけじゃ味気ないだろ？」

奴らは腹に矢が当たった事により元から苦しんでいたが突然、更に激しくのたうち出しそして体の至る所から枝のような物が体を食い破り穴だらけになり絶命した。

かろうじて人の形を残しながら、奴らはそのまま地面に落下した。今頃あの辺りは急に降ってきた惨殺死体で大騒ぎだろう。だが、見せしめには丁度いい。

「どうだ。俺のお楽しみは楽しめたか？」

その後エヴァの元に向かい蒸気機関車にのり家に帰宅した。

日本に住み始めて115年
原作開始まで後115年

関西呪術協会との話し合い終了。
京都の旅終了。

第二十二話『少女の想い』（後書き）

今回は色々ご都合が働いたと思います。

自分でもちよつと無理があるなと思いましたが
投稿させていただきました。もっと上手くなれるように
頑張りたいと思います。

では、用語説明を

珊瑚^{さんご}…対象の内側にある矢から幾本もの剄で出来た枝に
より対象の内側から体内を刺し貫く。

今日はクリスマスイブですね。

まあ彼女もいない自分には大して関係ないですが。

感想などお待ちしております。

では、みなさんメリークリスマス。

第二十三話『再開』（前書き）

今年の投稿はこれが最後になります。

第二十三話『再開』

京都から帰る途中寄り道等をしていると
一日経ってしまったので、家に帰ってくるのは
実に一週間ぶりになる。

「エヴァ。何か問題はあるそうか？」

魔法の事は最低限の事しか知らないの
ここに張っていた結界の事を聞くと、
エヴァは周囲に張っていた探知用結界から俺達が京都に
行っていた間の読み取ったらしく、

「ふむ……。別段攻撃されたような跡はないが
何者かがこの辺りに来た痕跡はあるな」

「ここに来た？ 侵入って訳でもないんだろ？」

「ああ。どうやら、ここら一帯を見て回っていたようだ」

「それって……」

「ここに気づいたのだろうか」

今現在日本に魔法使い達が来ていると同時に
奴らはここ日本にも勢力を広げる中心となる拠点を搜索しているよ
うなのだ。

そして、ここほどその条件に当て嵌まる場所もないだろう。

「まあ奴等も、ここの他に日本の隅々まで探すだろうからすぐに来る事もないだろうさ」

エヴァの言うとおりだが、それでもあって後2〜3年ぐらいだろう。だが、ここに住んだ時点でいつかその類の輩が来るのは分かっていたので、

その時が来たら相手の出方次第でこちらの対応を変えるだけ。別段この事について心配はしていない。

それから、エヴァと他愛もない話しをしながら家に入り

エヴァは強化^{ブースト}していた結界がそろそろ限界なので

結界を通常の状態に戻しに、俺はというと今日から仕事を再開するので

来ている依頼の確認へ。

「うわぁ。かなり来てるな」

休み明けだからと言う訳なのか、通常よりも来ている依頼の数が多かった。

「文句言っても依頼の数は変わらないし、やるしかないか」

とりあえずは長期の依頼以外はこの場で受ける事にしてまずは依頼の総数を減らす事にした。

服装を依頼用に変えた後、エヴァに声を掛けてから魔法世界に移動し、早く終わりそうな依頼から片づけて行く事にし

た。

さすがに一日で、すべての依頼は終わらなかったがそれでも二日目には、来ていた依頼をほぼ完了した。

「最後は……っと。研究施設の破壊か」

メガロメセンブリアにいる高官と思しき人物から送られてきたものだ。

「メガロはどうもな」

メガロメセンブリアにはコズモエンテレケイア完全なる世界が確実に

入り込んでいる事が分かっているので、あまり気が進まないのだがメガロメセンブリアの高官ともなると報酬がいいはずなので受ける事にした。

額を指定しなかった俺が悪いのだが、あのおっさんは合気柔術をエヴァに教える為の授業料と言う事でかなりの額のお金をむしり取られたので、今現在は俺のお金が著しく減っているのだ。それでも、まだ余裕はあるがお金はあるに越した事はないのでこの依頼を引き受ける事にした。

（それに……調べたい事もあるしな）

そうしてメガロに着いた後、依頼人の家に行き

家の前いる使用人に用件を伝えたと案内すると言われたので着いて行く。

「こちらになります」

そう言われて目の前の豪華な扉に通されたので入ってみると、見る限り人の良さそうな爺さんが出迎えてくれた。

「おお。此度はよくぞ来てくださいましたな。

私はナツインⅡナウトと申します。

此度の件どうか宜しく願いますぞ。ヴォルフシュテイン殿」

仰々しく挨拶されたが、そんな挨拶されても困るだけなのでさっさと本題に入る。

「これはご丁寧に。知っているようですが此の度

依頼を承りましたヴォルフシュテインです。では、さっそくですが本題に。

依頼には研究施設の破壊、と書いておりましたが？」

そう話を切りだすと、目の前の爺さんは表情を沈痛そうに歪めたが俺から見ると何処か焦っているように見える。

「え、ええ。この研究施設は人体実験や違法な実験等

数多くの事をしておりまして、その施設を早急に破壊もしくは殲滅してほしいのです。研究施設側からの妨害もあると思いますが

……」

別段珍しくも何ともない話だ。

「この事はもうメガロでは確認しているのですか？」

さすがに勝手に研究施設を破壊して

犯罪者になったりしたくはないのでこれは聞いとかないと。

「はい。すでに確認はとれているのですが、あいにく

我が軍はヘラスとの小競り合い等で立て込んでおりまして」

メガロとヘラスは昔から小競り合いが絶えない。

ヘラスには亜人や獣人が多く、反対にメガロは、ほぼ人間だけだ。

お互い種族が違うのが受け入れられないらしくそれが原因で争っているようだ。世界は違っても種族が違うという理由で争うのは結局変わらないと言う事だろう。

微妙に怪しいが、虎穴に入らずんば虎子を得ずって事で。

「了解しました。その依頼お受けいたします」

そう言うと言爺さんは、ほっとしたようで、

「ありがとうございます。ではこちらを。研究所の位置が記している地図です」

爺さんから受け取った地図を見てみると、

目標の研究施設は首都より大分離れた郊外にあるようだ。

場所も分かったので、さっそく向かおうとすると。

「では、御武運を」

「ありがとうございます」

そう言われたので一応義務的に言葉を返しておく。

そして現在目標の研究施設に到着したのだが。

「ちっさ！」

研究施設はかなりの小規模であった。

「別に俺に頼む必要なかったんじゃない？……ん？」

愚痴を零していると、研究施設の地下から

いくつかの人の気配を感じたので、殺到をしてから

目の前の研究施設に潜入してみたが、一見して地下に入る為の入口のような物は無い。

「気配があるから、下に何かあるのは確実何だが……」

つま先で地面を突きながら思案する。やはり魔法的な

仕掛けで開けるのか、移動する必要があるのかどこをどう探しても

見つからない。

（エヴァなら簡単なんだろうけどな）

軽く現実逃避したが、ここにいない人物を頼ってもしようがないので俺なりの方法で潜入する事にする。

もう一度周囲に人の目がないか確認してからボックスから鍊金鋼を取り出す。

「レストレーション」

鋼糸を復元させ、研究施設の地面を俺が入れるくらいの大きさに円状に刳り貫く。

ある程度の深さまで地面を刳り貫いたなら、それを地上に取りだす。その作業を何回も繰り返すと、ついに下に繋がる通路が開通した。我ながら原始的な方法だとは思う。

「良し行くか」

鋼糸で刳り貫いた穴に向かって軽く跳躍し重力に逆らわずそのまま落下する。

300mぐらい落下していると、地面が見えて来たので鋼糸を数十本周りの壁に刺し込み落下の勢いを殺す。

（到着つと）

地面に音も立てずに降り立った後。鋼糸を数百本ここに居る連中に見つからないように注意しながら周辺に向かわせこの地下施設の大きさを調べる。

そうすると、ここから更に深さ200m、横幅500mくらいの大
きさの

地下施設である事が分かった。

本来ならこのまま鋼糸で、この施設を破壊するのだが、
それならわざわざ俺が地下に下りてくる必要はない。

安全な地上から鋼糸を向かわせて、破壊すればいいだけだ。

（まあ爺の早急が、俺の早急と同じとは限らないんでね）

研究所に巡らせておいた鋼糸を回収したが、待機状態には戻さず
鋼糸は出さないで、手袋の状態のままにする。そして、
殺到で気配を消して、何か情報が無いか地下施設を探索する事に。

先ほども思ったが全員が全員完全なる世界に所属している訳でもな
いだろうが、

俺はアーウエルンクスに完全なる世界の事を聞いてから
基本メガロは信用していない。それがお偉いさんとかになれば尚更。

だが、逆に言えば完全なる世界に繋がる可能性があると言う事だ。
そういう訳で、この地下施設を探索して完全なる世界に繋がる物を
探しているのだ。

そして、周囲を探索しながら進むと前方の扉から二つの気配を感じ
るので

近くにあった柱に隠れる。するとその扉から2人の男話しながら出
て来たので

2人の会話を盗み聞く事に。

「たくよー。いつまでこんな事やればいいんだよ」

「しょうがないだろ。上からの指示なんだからさ」

（バックに何かの組織ありか……）

この施設の規模を調べて分かった事だが
ここはかなりでかい。これだけの大きさならバックに
何か組織がいても不思議ではないだろう。

「分かってるんだがな。それでもぼやきたくなるってもんだ。
来る日も来る日も、人体実験ばかり。それも、失敗しては
死体が増えていくばかりだ」

「まあそうだがな。ああそういえば唯一
生き残っているあの実験体はどうしてるんだ？」

「どうしたもこうしたもねえよ。
あいつ人形みてえでさ気味が悪いんだよ。
一応利用価値はあるって事で、まだ生かしてあるが
俺としたらさっさと処分してほしいね」

（一体何の研究をしているんだ？）

だが、俺の期待むなしく2人は別れてしまい
話しが続けられる事はなかった。

（しょうがない）

あんまり得意ではないが

脅して話を聞くしかないだろう。

そして、先ほどの幾分か落ち着いている男の方に向かい近くに気配が無い事を確認してから。

「喚くなよ。後、俺の質問だけに答えろ」

「っ!!」

男の後ろから首を掴み喋れないようにする。

男は俺がいきなり来た事で、パニックを起こしているようだが俺には関係ないのでそのまま聞く。

「ここで何の実験をしている？」

喋れるくらいに首を絞める力を緩めながら聞いてみる。

「あ、あんたいった「喚くなつて」————っ!」

余計な事喋り出したので首を絞める力を強める。

首に指が食い込み満足に息は出来ないだろう。

「質問だけに答えろと言ったはずだ」

「う、がはっ! げほっ!。……はあー。……はあー」

そう言いながら首を絞める力を緩める。

「で、ここは何の実験をしている？」

「こ、ここは、せ、精霊と人を融合させ
新たなものを生み出す実験をしている……」

（また無茶な事を……）

この実験はエヴァの固有技法の闇マギア・エレベアの魔法に若干似ている。
いや、似ているといっても取り込むという部分だけが
難易度と危険性はこの実験の方が上だろう。

マギア・エレベア
闇の魔法は一時的に取り込み自身の霊体と融合する物だ。
それでさえ闇マギア・エレベアの魔法の適正がなければ
死んでしまうか、エヴァのように魔の者ではない
人間がやれば魔族になってしまうものだ。

ここでの実験は人を別のモノに変質させるものだ。それも一時的で
はなく一生。

そんな実験で適正がある者がいたとしてもその確立は限りなく0に
近いだろう。

「誰の指示で動いている？」

「そ、それ……は……」

少し首を絞める力を強める。

「わ、わかった！ 言うから！ 殺さないでくれっ！
お、俺達に実験の指示をだしているのは
メガロ高官のナツインⅡナウトって奴だ！」

（あの爺か）

別段あの爺がこういう事をしてたのはどうでもいい。
まあ依頼内容を偽るのはいただけないが、
爺が何をしようとこちらに害が無ければ関係ないし
依頼だから引き受ける。問題なのは。

（何でここの破壊を俺に頼んだのかって事だ）

わざわざ自分が所有している場所を
好き好んで破壊する何て事しないからな。

「な、なあ質問に、ここ答えたんだから
もういいだろ？ いい加減離してくれよ！」

「いや。もう一つ聞きたい事がある。
まだ生き残っている実験体はどこだ？」

こいつから聞いた情報が正しいとも限らないので
この実験を受けて尚生き残っている奴にも聞いとかないと。

「そいつなら、こ、ここの南ブロックにある
部屋に隔離している。これでいいだろ！？
だから、さっさと離してくれ！」

「そうだな」

もう必要な情報は聞き終えたので、
首を絞めていない方の指先に剉を集中させ男の後頭部に指を置き、

――――がりきけいしゅうけい外力剄衝剄の変化……忘剄。ぼうけい

脳に直接剄を送り込み、ついさっきまでの数分の記憶を奪い去る。

一応これで魔法（剄）の秘匿も出来る事は出来るが、記憶を奪い取れるのは数分前までが限界なので、使う場合は手早くしないといけない。

なので、魔法の事あるいは裏の事を説明したりするとすぐに時間切れになるから

もし使うのならば問答無用しかない訳だ。

まだ、この施設でする事があるのでこいつをここで殺して、騒ぎになるのは

めんどくさい事になる。なので、意識と記憶を奪いとりあえず近くにあった部屋に放り込んでおく。

（確か南ブロックだったな）

鋼系を巡らした時にここは把握しているので

南ブロックが何処にあるのかも分かるので、唯一生き残っている実験体とやらの

場所には迷わず行くことが出来た。

（さて、どんな奴がいるのやら）

目的の場所に着き中から気配を感じるからここで間違いなさそうだ。そして、鋼系はいつでも出せるようにしたまま

目の前の扉を開けるとそこには。

「何か用ですか？」

銀の少女がいた。

日本に住み始めて115年
原作開始まで後115年

銀の少女を発見。

第二十三話『再開』（後書き）

今回オリキャラを出させて貰いました。

モデルはまんまあの人がですが別に関係があるという訳ではありませんのでご了承を。

では、用語説明を

忘^{ぼう}到^{だい}…物理的な衝撃ではなく、脳の記憶を担当する部位に到^{いた}を流し込み少し前の記憶を奪い去る。原作では名前はないので勝手ながら

付けさして貰いました。そして、原作とは少し違うと思います。

来年も少しずつ更新していきますので

どうかよろしくお願いします。

では、みなさん良いお年を。

第二十四話『進展』（前書き）

あけましておめでとうございます。

新年早々風邪にかかりました黒谷です。

風邪自体は四日ぐらいで完治したのですが

しばらくは何もやる気が起きず少し更新が遅れました。

では、本年度初の投稿です。

第二十四話『進展』

「何か用ですか？」

部屋にはベットがあるだけで他には何もない。本当に何も無い部屋だ。

そしてベットに居たのは、白いベットに座っている、病人が着るような白い服を着て

白銀の髪、銀の伏し目がちな瞳、色素の抜けたような白い肌を持つ、エヴァとは

違った人形めいた美しさを持つ小柄な少女が、こちらを無機質な瞳で見つめていた。

少女に少し見とれていたのと、少女の容姿に対してほんの少しの既視感を

感じていたので言葉を返すのが遅れてしまった。慌てて言葉を返す。

「あ、ああ悪いな。君はここの実験を受けている者なのか？」

直接「君は実験体か？」と聞く訳にもいかないのので少し言葉を濁して聞く。

「はい」

あの男の言っていた事は間違いではなかったようだ。

「ここの実験は精霊と人を融合させる事だよな？」

「はい」

俺みたいな侵入者に対してここまで素直に答えてくれるのは
ありがたいが、ここまで無反応とは。

（人形か）

ふとその単語が思い起こされた。

俺が人形と思ったアーウェルunksでもここまで単調じゃなかった。

「君は実験が成功した子なのか？」

「いえ。私は粗悪品です」

「粗悪品？」

失敗作は分かるが、粗悪品ね。

「はい。私は精霊と融合する事は成功しましたが、
融合した精霊の力を発揮する事が出来ず、それどころか自身の魔力を
行使する事も出来なくなりました。この実験の本来の目的は
精霊と融合し個人の魔力及び火力を爆発的に高めるものであります
ので

融合は成功しましたが、力の向上が見られない私は粗悪品という事
になります」

本来の実験目的にまで辿り着かなかったが、一応精霊とは融合出来
たから

ここの居る研究者の奴らも、この子をまだ生かしているのか。

「君以外で実験を受けて生き残った子はいるのか？」

「いえ。私以外の被験者は実験によって全て死亡しました」

そんな何人も生き残ってる訳ないか。

この子が生き残っているだけでも本当に奇跡みたいな事だ。

「君がいつからここにいるのか分かるか？」

「私には過去の記憶がありませんので
いつからここに居たのかも分かりません」

ここに連れてこられた時に記憶を失ったのか、どうかは分からないが
俺にはそれを確かめる術は無いのでどうしようもない。
記憶が無いようならしょうがない。

大体は確認はし終えたが、一応ダメ元で
もう一つの事も聞いておく。

「この研究所に指示を出していたのは
ナツインⅡナウトって奴なのか？」

「はい」

知っていればいいかなって、程度で聞いたのに
まさか知っていると。

「それは、どこで手に入れた情報なんだ？」

「この研究員達の会話を聞いた結果です」

「なるほどね」

まあそれなら信憑性が高いだろ。

「俺が言うのも何だが知らない奴である俺に、ここまで素直に答えていいのか？」

相変わらず少女は温度を感じない瞳で俺を見据え。

「聞かれましたので」

「……そうか」

研究や実験による苦痛か。精霊が融合した結果か。

周りが次々と死んでいくこの環境か。もしくは生まれつきか。

何がこの少女をこんな風ににしたのかは俺には分からない。

だから、俺はこの少女に対して掛けるべき言葉が分からなかった。

「ここはもうすぐ破壊されるからな」

この場所で得られそうな情報は集め終えたので

本来の目的を果たす事にする。ついでに、この少女に一応警告を出しておく。

俺としては、どちらかというと被害者である少女まで殺そうとは思わない。

だが、俺がそう言っても少女はその場から動こうとはせず。

「そうですか」

そう呟いて天井をぼーっと眺めているだけであった。
俺としてはここから逃げてくれる方がありがたいのもう一度警告しておく。

「ここに居たら死ぬって事なんだが」

「そうですか」

（まさかここまで無関心とは……）

俺は中々めんどくさい状況になってきたので
頭を掻こうとするが仮面とフードを付けていたので
掻く事が出来ず、余計にいらいらする事になった。

こうなりや最終手段って事で。

「じゃあ俺がここから連れていくぞ」

「そうですか」

（耐えろ耐えるんだ！ 俺！！）

こんな少女に怒りをぶつけるのも大人気ないので必死に我慢する。
それに、怒りをぶつけたとしても何も変わらないだろうという理由もある。

「んじゃ、背中に乗ってくれ」

背中の方が何かあった時に
こちらにも動きやすいので少女の前に背を向けてしゃがみ込む。

「分かりました」

やっと少女は最初の位置から動き出し、
ゆっくりと俺の背中に乗りその華奢な腕を首に回した。

「ちゃんと掴まっとけよ」

「はい」

少女の腕に力が入ったのを確認して
俺からすれば、重さを感じない少女の重みを感じながら
扉を出て、俺が潜入に使った穴の所まで向かう。

少女を背負っているので、俺自身が
殺戮をしても少女の気配は消せないのです。

「！ 貴様！ 何をS———」

もはや、殺戮をせずに進んでいくと、ここの奴らに見つかる訳だが
見つかった瞬間に
鋼糸で切断。通路に血が飛び散り、分断されたいくつもの肉が耳障
りな音を
たてながら地面に落ちた。もう見つかったとしても、大して問題な
いので
奴らに見つかり次第排除していく事に。

「平気か？」

「何がですか？」

「いや、平気ならいいんだ」

目の前で人間が一瞬で肉塊になったのから
一応心配して少女に聞いてみたんだが特に何もないようだ。

この後も何名かに見つかったが、見つかった瞬間に
鋼糸で切り裂いて行っているので問題はない。

そして、逃走するのと平行に幾万本もの

鋼糸をこの研究施設に張り巡らす作業も進める。

この技は派手なのであまり目立たないように
地上にある施設のすぐ下の辺りだけを鋼糸の網で囲っていく。

施設内が騒がしくなる頃になって、ようやく
俺が割り貫いた天井に到着した。

「顔は下向けとけよ。上に上る時に風が当たるからな」

「はい」

穴から地上に向けて鋼糸を伸ばしていき、
地上の穴の縁に引っ掛け身体を一気に引き上げる。

「っ……」

少女がつらそうにしたので、上がる速度を
少し落としながら地上に戻る。

地上に到着したので、次はこの施設を破壊に移る事に。

崩壊に巻き込まれる訳にはいかないので
まず研究施設から1 k mほど離れた森まで退避する。

ちなみに今現在の鋼糸の最大操作可能範囲は自身から半径20 k m
だ。

逃走していた時に事前に準備は整えていたので後は起動するのみ。

――――がいりきけいしやうけい外力剋衝剋の変化……そうげんきよく操弦曲・ほうらく崩落。

鋼糸に充填されていた剋を剋剋へと変化し内向きに大規模な
衝撃波を放ちながら、同質同量の剋を鋼糸に流し込み圧力を内部に
収束させると

同時に光以外を外に漏れ出さないようにする。中に居る奴らは悲鳴
どころか、

こちらの攻撃を感知する間もなく剋剋によって破壊される。
本来なら多量の光が漏れだすのだが、今回は地下で放っている為そ
の心配はない。

その代わりに、ここら一帯に地響きが起こっているが。

数秒経つと地下施設は跡形もなく破壊され、上にあるダミーの施設は下の地面が破壊された事により、自重に耐えれなくなり落下していき、

後に残ったのは穴の深さ、広さ共に500m以上はありそうなぽっかりと開いた暗い穴だけだった。

「こんなもんか」

鋼糸を待機状態に戻しボックスに仕舞う。
とりあえず爺の依頼は完遂できたのだが。

（この子どうしようかなあ）

少女は長い事俺の背に掴まっていたせいなのか顔は無表情なのだが、掴んでいる腕がプルプルと震えている。
今まであんな所にいたのだ。まともに運動をしていないからもうそろそろ腕が限界なのだろう。

「もう降りていいよ」

「分かりました」

少女も疲れていたのかすぐに俺の背から降りてそのまま地面に座り込んだ。

「これから君はどうする？」

俺ではいい案が思いつきそうにない。
なので、少女の問題は少女自身に聞いてみるって事で聞いてみたの

だが。

「どうするとは？」

「いや、もう実験を受ける必要がないんだから君は好きに生きていいって事。だから、どうするんだって聞いたんだが」

「分かりません」

やはりというか何て言うか、予想通りの答えが返ってきた。勝手に連れてきて、そのまま放置って言うのは些か俺の気分が悪い。

「どうすっかな」

改めて言葉に出して悩んでいると。

「ん？」

ここから12kmぐらい離れた所から高速で接近する多数の気配を感じたので、その方向を活剽で目を強化して見てみると。

（あれは確か……。メガロの正規兵か？）

ここの惨状を知ってから来たのなら、いくらなんでも早すぎる。ここは郊外であるので少なくともここまで早いのはおかしい。いや、それどころか何故ここにメガロの兵がここに来るのか。あの爺はメガロの兵は来れないと言っていた。だから、俺に施設の破壊を頼んだのだ。

（だが、実際にメガロの兵は来ている）

あの爺にとってここを知られるのは、まずいはずだ。

メガロのお偉いさん全員が完全なる世界な訳じゃないんだから

こんな違法な研究を知られたらお終いだ。となると俺に依頼を頼んだ訳は、

（証拠の隠滅か？）

たぶんこれだろう。

ここをメガロに知られる前に証拠諸共俺に破壊を頼んだんだろう。

あの時爺が焦ってたのもメガロの兵がここに来るからだ。

だが、ここで俺が見つかる下手すると俺が疑われる事になる。

メガロメセンブリアが調べようとした矢先にここを破壊されたのだ。

それを破壊した人物を疑わない方がどうかしている。

仮に俺がここであの爺からの依頼でやったと言っても

あの爺は俺に頼んでいないと言うだろう。

何故ならあの爺にとって表向き俺にここを破壊を頼む理由がないからだ。

ここがメガロメセンブリアに調べられる事ぐらい事前に

メガロメセンブリア各所に伝わっているだろう。

そこで、わざわざ俺に頼んで自身が疑われる事などしない。

いくら俺がこの爺に依頼されたと言っても、片や有名とはいえ一介の何でも屋。

片やメガロの高官。証拠等がない限り俺が依頼を受けたと証明する

のは無理だろう。

俺とは圧倒的に立場も発言力も違う。それに、何でも屋だから時にはメガロメセンブリアに恨まれる事もしているから尚更だろう。

（それか、実は罠とか？）

コスモエンテレケイア
完全なる世界は俺を排除したいのだから

このヴォルフの時である俺に賞金を懸けて排除するぐらいはやりそうだが、

罠であったとしても、もう俺はここから離れる事が出来るので別に問題はない。

とりあえずさっさとここから離れないといけないので。

「悪いな」

少女に断りを入れてからいわゆるお姫様抱っこで抱え上げる。さすがに背負うのは少女の腕がもう限界だと思うので勝手ながらこうする事にした。

お姫様抱っこで移動していると下から視線を感じたのでその方向を見てみると少女がこちらをじーっと見つめていた。

「何をしているのですか？」

「いや、ここから少し移動しようと思ってな」

「そうですか」

（本当にこの子は分かっているのだろうか？）

そんな事を思いながら俺は目的地に向かって移動した。

「さあ。答えて貰おうか？」

「ぐっ……」

俺が向かった目的地とは俺に依頼した爺の所だ。

この依頼の報酬と真意、それと、とある事を聞く為だ。

報酬を貰った後、半ば脅すように依頼の真意を問い質した。

最初は答えるのをしぶっていたが、先ほど研究者に聞いた方法で少し痛みを与えるとすぐに依頼の事は喋ってくれた。

元々前線に出るタイプではないので、痛みには慣れていないからだろ
う。

聞き出した内容は案の定証拠に隠滅だったらしい。もう一つ懸念し
ていた

罨かどうかも聞いてみたが、こちらは知らないらしい。

そして、こちらこそが本来の目的なんだが。

「あの研究所を支援していた組織は何処だ？」

こちらが本題だ。こいつ個人でやるのはいくらなんでもあの研究所はでかすぎる。何より理由がない。

やはり、答えるのに躊躇したが、痛みには耐えられないのか、

「……コズモエンテレケイア完全なる世界だ」

そう答えた。

（ビンゴ！）

いくらなんでも都合が良すぎる気がしたが
コズモエンテレケイア
せつかく手に入れた手掛かりなので完全なる世界について聞けるだけ聞く事に。

「コズモエンテレケイア完全なる世界とやらは何を目的にしている？」

「く、詳しい事は知らん。ただ、この魔法世界から我々を救うという事だけだ」

アーウェルンクスから聞いた情報と同じであったのでこの情報には意味が無い。気落ちしたが諦めずに詳しく聞いて行く事に。

「我々とは、魔法世界全員の事なのか？」

「いや、わ、我々メガロメセンブリアのみだ」

（全員じゃない？）

これは、アーウェルンクスからは聞き出せなかった情報だ。奴はこの世界をある意味では世界を終わらせ、ある意味では世界を救うとしか言っていないかった。メガロだけでは世界と言う事にはならない。

肝心な所は。

「何故メガロメセンブリアだけなんだ？」

これが分かれば一気に真相に繋がるはずなんだが。

「そこまでは知らない！ 嘘じゃない！ 本当に知らないのだ！！」

（駄目か……）

本当に知らない様子の爺を見て
これ以上の情報は望めないと判断する。

――――がりきけいしやうけい外力系衝剄ぼうけいの変化……忘剄。

素早く意識と記憶を奪い爺をそこらの椅子に寝かしておく。
そろそろ記憶を奪える限界時間まで迫っていたので
急ぐ必要があった。限界時間以上の記憶を消すと
下手したら廃人になってしまうかもしれない。

もし、この爺を殺したり、廃人にしてしまったら
直前に会った俺が疑われてしまうのでそうする訳にはいかなかった。

すぐに爺の部屋を出る。俺は建物の出口には向かわず
屋上に向かう。そこには。

「待ったか？」

「いえ」

先程の少女が屋上から町を見下ろすようにして待っていた。
あのまま爺の所に連れていく訳にもいかないので
とりあえず屋上に待ってて貰ったのだ。何かあれば気配で
すぐ察知できるので危険はない。

さて、先送りにしていたが。

「で？ 結局君はどうするんだ？」

肝心のこの少女の問題が解決していない。

「分かりません」

さっきと同じ返答だったので
俺が頭を悩ましていると。

「ただ」

「ん？」

俺に会ってから初めてこの少女が
自発的に言葉を発したので、聞き逃さないようにし
少女を見てみると。

「生きてみたいです」

そう言った少女の眼は

この少女に会ってから初めて見たような眼だった。

「生きてみたい？」

「はい。あなたを見て、そして街を行き交う人達を見てそう思いま
した。

あそこに居て、何もせず、何も見ず、何も感じず、何も考えず、
ただ日々を無為に過ごしていた私とは違い、あなたもこの町を行き
交う人も

方向は違えども生きているように感じました。

だから、私もあなた達のように生きてみたいです」

「そっか……」

少女は夢、あるいは目標が欲しいのだろう。

それは人間が持つ事の出来る当然の権利だ。

誰しも大なり小なり持っているものだ。無論俺にもある。

だが、この少女には無かったもの。あの施設から

俺が連れだした事によって芽生えたもの。

（俺のせいだろうし、このまま放置って言うのもなあ）

だからだろうか。

「じゃあ、その何かが見つかるまで俺の所に来るか？」

こんな事を俺が言いだしたのは。

色々ぐだぐだと考えたが、結局の所俺の気まぐれなのだろう。

エヴァには言っていないが何とかなるだろう。

「いいのですか？」

少女は特に変わった様子もなく、ただ眼だけは元に戻り無機質な瞳でこちらを見つめながら聞いてくる。

「ここまで連れてきた、

俺の責任もあるから別にいいさ」

「では、宜しく願います」

「いやいやいや！ あっさりしすぎだろ！！」

少女があまりにも即答すぎたので

こちらから誘ったと言うのに思わずツツコンでしまった。

「もっとこうさ、俺が君を実験材料にするかもしれないとか、君に何か変な事をするかもしれないとか、少しぐらい危機感持てよ！？」

「以前の研究のように肉体的苦痛が続くか、それに変わって

性的苦痛に変わるだけの違いなので構いません」

（まずは一般常識からか……）

そんな事を考えていたが、ふとまだ聞いていなかった事を思い出し。

「そういえば君の名前は？」

これをまだ聞いていなかったので聞いてみる事に。

「研究所ではNO. 57と呼ばれていました」

「それは名前じゃないんだが」

いくらなんでもこの名前じゃ駄目なので。

「俺が名前を付けてもいいか？」

「構いません」

本人から許可を頂いたので、とりあえずは変じゃない名前を考える事にする。

「んゝ。そうだなゝ。」

フェリエ・エトスって名前はどうだ？」

感覚的に決めたが別に変ではないと思う。

「構いません」

「もっとこうさ。感想とかないの？」

「嫌々ですが仕方ありません」

「嫌なのかよ!？」

「冗談です」

「……早まったかもなあ」

そんなこんなでまた一人お供が出来た。

日本に住み始めて115年
原作開始まで後115年

新たなお供ゲット。

第二十四話『進展』（後書き）

オリヒロになります。

この少女も物語には関わってきますので。

では、用語説明を

操弦曲・崩落ほうらく…鋼糸の網の中に対象を閉じ込めたのち、鋼糸に充填
していた剷を衝剷に変化させ、内向きの衝撃波として放つ。衝剷を
放つと同時に同質同量の剷を流し込んで鋼糸の結界を保つことによ
って衝撃波の圧力をすべて内部に収束させる。

感想はいつでもお待ちしております。

第二十五話『交渉』（前書き）

駄文です。

いえ、いつも駄文ですが、今回はいつもより駄文です。
それでも読んでくださると嬉しいです。

第二十五話『交渉』

これから一緒に暮らすのだから俺の事について簡単に自己紹介をした後。

周りを物珍しそうに見ているフェリエを連れていき、病院で着るような服のままなものも

何なので、そこらでフェリエの服を何着か適当に買い揃える。

一通り終えたので、旧世界に帰る為フェリエと共にゲートで転移する。

道中はフェリエが色々なものに対して質問してくるので、特に退屈する事は無かった。

そして、やっとこさ自宅付近まで帰ってこれたのだが。

「この先に探知用結界があるようですがいいのですか？」

「ああ。それは俺の身内が張った物だから問題ない」

質問に何気なく答えて、先に進もうとしたが。

「ん？ ちょっと待て」

「どうしたのですか？」

この先の対魔・対物の結界はともかく探知結界はエヴァが周り、すなわち他の魔法使い等に気づかれないように張ったものだ。

そこらの魔法使いならともかくエヴァが張った結界だ。

そう易々と誰かに見つかるような物じゃない。

「何でこの先に結界が張ってあると分かった？」

フェリエは雰囲気でしか分からないが

不思議そうに首を傾げながら。

「？ 何でと言われましても。私は精霊と融合した事により
私自身の魔力は行使出来ませんが、周囲の魔力を介して
今現在で最大周囲25km以内の事は観測しようと思えば観測でき
ますので。」

現在は1kmほどこか広げていませんし、魔力探知のみですが」

フェリエは何ともないように言ったが、それは尋常じゃない事だ。
こと、索敵に限れば今現在でさえ、エヴァは元より俺でさえ軽々超
えている。

しかも、魔力を介してだから魔力的な物で、出来ている以上
どれだけ魔力などで隠蔽しようが関係ないと言う事だ。

「どんだけだよ……」

軽く眩暈を覚えて俺は額に手を当てて空を仰いだ。

ちなみに仮面はもうはずしてある。

外した時フェリエに「あれが、素顔じゃなかったんですね」なんて
真顔で言われたが、問題ないだろう。

「どうしたのですか？ 急に額を押さえて。頭が悪いのですか？」

「おーけー。それは、フェリエの言い間違いって事にしとく」

何かフェリエから不名誉な事を言われた気がするが、そこは、華麗にスルーする。

「ちなみにその能力はあそこの研究者達は知っていたのか？」

「いえ。聞かれませんでしたので」

そんな事を話しながら結界の中に入って行ったのだが、

（そういえば俺は大丈夫だけど、フェリエは……）

何て事を考えていたら。

「前方より超高魔力個体が高速で接近してきます」

そんな警告じみた事を聞いた瞬間。

『氷爆！』

いきなりフェリエの目の前で凍気と爆風が発生したので咄嗟にフェリエを抱え上げて後ろに跳躍し回避する。

「エヴァ！ 俺だって」

このままエヴァに攻撃され続けられたらたまらないので、フェリエを降ろし

誤解を解く為に声を掛けながらエヴァの方に向かう。

「結界に反応があったのだが。何だリョウだったの……か……」

追撃がないので助かったと思っていると、煙の向うからエヴァが姿を現したが

俺の姿を見た後、正確には俺の後ろに居るフェリエを見た後何故か固まった後急に無表情になった。

どうしてか分からないが

エヴァから並々ならぬ威圧感が放たれているので、

(え？　もしかして助かってない？)

嫌な考えが浮かびあがった。

「リョウ……………その女は何だ？」

「な、何だとい、言われましても……」

非常に嫌な間の空け方をしながら京都の時にも若干感じた雰囲気で、俺の後ろにいるフェリエの事を聞いてきた。何となくなのだが、ここで

答える選択肢を誤ると色々と俺が終わりそうな気がする。何が、とは分からないが。

俺が大量の冷や汗を流しながら、周囲に目を泳がして、どう質問に答えるか必死に考えていると。

「いや、リョウは答えなくていい。

おいそこの小娘。貴様は何故リョウと一緒にいる？」

いつまでも答えない俺よりフェリエの方が手っ取り早いと考えたのか質問の対象を変えたようだ。

「何故と言われましても。この人に連れてこられただけですが？」

どこことなく誤解を招きそうな言い方をフェリエがすると
今まで無表情だったエヴァの口の端が若干ひくつと引き攣った。

「ほ、ほほう。どうして連れてこられたのだ？」

（頼む！ まともに答えてくれよ！！）

もうエヴァが色々と限界を超えてしまいそうなので
フェリエに対して必死に祈っていると、フェリエは淡々と。

「責任を取る為との事です」

（あ、終わった……）

何がかは分からないが直感的に感じた。

確かに俺がフェリエに言ったので別に嘘ではないが、その発言は
完璧に誤解を招く。エヴァを見るのも怖いが見ない方が
もっと怖いので恐る恐るエヴァに視線を向けると。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

（うん。キレちゃってるな）

もはや俺は諦めの領域にまで来てしまったので
慌てずにエヴァを観察すると、目が反転してしまい
周囲に魔力が吹き出ている。完全にキレてしまっているようだ。

「来たれ氷精、闇の精」

「さてと……。逃げるか」

「前方より高魔力収束中です」

「闇を従え吹けよ常夜の氷雪」

「うん。冷静に言ってるけど

明らかにフェリエの発言のせいだからな」

『闇の吹雪』

そうして、フェリエに向けて黒い渦状の吹雪が放たれたので、フェリエを抱え上げて横に大きく跳び回避する。フェリエが居た場所は黒の奔流に深く挟まれ、進路上の物を軒並み破壊しながらそのまま突き進んでいった。

「そいつを離せリョウ。でないと殺せない」

「まず落ち着こうエヴァ。エヴァは色々誤解しているからちゃんと話せば分かる」

内心、浮気がばれた時の言い訳みたいだな
と思いつながらエヴァを説得する。

「大丈夫だリョウ。私は分かっている」

「エヴァ……」

俺の説得が通じたのかと思ひ動きを止めエヴァを見てみると
エヴァはひどく優しい聖母のような笑みを浮かべ。

「分かっている。すべてその泥棒猫のせいなのだろう？
大丈夫だ。すぐにその泥棒猫を片づけるからな。
その後でゆっくりと。そしてじっくりと話をしよう」

「良し。逃げるぞフェリエ」

これっぽっちも俺の話が通じていなかった。
それどころか、怒りが増しているような気がするので、
逃走を再開する。

「なるほど。これが俗に言う修羅場なのですね」

フェリエはこんな状況でも焦る事などなく勝手に納得している。

「非常にむかつくから冷静に考察するな。
そして、何故そんな言葉を知っている？」

「先ほども言った通り私は周囲の観測が出来ますので
ここに来る道中それを用いて様々な人々を観察したままです。
疲れるのであまり多用はしません」

「そういう訳だったのか」

最初に会った時に比べて方向性はともかくとして
少しずつ人間味が出てきていると思っていたら能力を駆使していた
ようだ。

「先ほど言ったばかりなのにもう忘れているとは。
やはりあなたは頭が悪いんですね。端的に言うとも馬鹿なのですね」

フェリエが心なしかこちらを小馬鹿にしたような
顔をしながらストレートに馬鹿と言ってきた。

「こ、この野郎……」

「私は野郎じゃありません」

「リョウ！ 私を目の前にそいつと仲良く話すとはいい度胸だ！
『魔法の射手・連弾・氷の333矢！』」

「もう色々限界だあああ！
チャチャゼロー！ 頼むから助けてくれえ！！」

後ろから迫ってくる魔法の射手から必死に逃げ、周囲を破壊しながら
ただ一心にこの状況から助けてほしいという思いを込めて
今までの人生で一番と思えるぐらい叫んだ。

「俺トシテハ モウ少シ眺メテイタカッタガ

マア 京都デノ酒ノ事もアルシナ 今回ハココラデ勘弁シテヤルカ」

俺の思いが届いたのか、この状況を助けてくれるであろう
チャチャゼロ
救世主が近くの木の上から跳び降りてきてくれた。

「助かる！ でも、あのエヴァを止められるのか？」

呼んでおいて何だが、俺から見てもあの状態のエヴァを

止めるのは困難っていうか無理な気がする。

「伊達ニ御主人の従者ヲ長クヤツテナイカラナ」

チャチャゼロはそう自信あり気に言うど黙り込んだ。

（まあ今の状態のエヴァに直接声を掛けても届かないだろうしな）

チャチャゼロは念話でエヴァを止めるようだ。

《御主人。ソノ辺リデヤメトケヨ》

《何だ？ チャチャゼロ私は今忙しいのだ。

お前などに付き合ってる暇は無い》

《御主人イイノカ？》

《だから、今は忙しいと《コレ以上スルト

リヨウニ嫌ワレチマウゼ》なん……だと……》

《ココハ一旦落チ着イテ

リヨウノ話シヲ聞イテミロヨ》

《だ、だが……》

《嫌ワレテモイイノカ？》

《そ、それはいやだ！！》

《ナラ 話シヲ聞イテミロヨ》

《……わ、分かった》

チャチャゼロが黙ってからしばらくすると
次第にエヴァがしょんぼりしていき

やがてしゅんと俯いてしまい動きを止めてくれた。

「チャチャゼロすげえ……」

初めてチャチャゼロを尊敬したかもしれない。

「やっと終わりましたか。あなた達の修羅場に
私を巻き込まないでほしい物です」

（ツッコまない！ 俺はツッコまないぞ！！）

今まで、抱え上げていたフェリエを降ろしてから
落ち着いているであろうエヴァの所に向かう。

「エヴァ大丈夫か？」

襲われていた？俺が言うのも変だが一応聞いておく。

「あ、ああもう大丈夫だ。先ほどは悪かったな」

少し気まずそうだが、目も通常の状態に戻り
もう大丈夫のようだ。

「いや、急にフェリエを連れて来た俺も悪かったしな」

「それは……あいつの事か？
ただの人間ではなさそうだが」

「ああ。それを含めて訳を話す」

フェリエ本人はというと、どうやらチャチャゼロの方に興味津津のようで碌にこちらを見ていない。

その間にフェリエの事について説明する。

「なるほど。大凡の事は分かった。まったく私といい、こいつといい犬猫のように拾ってきおって。まあ私も似たような者だから文句は言えんが、こいつに危険はないのか？
コスモエンテレケイア
完全なる世界に関係のある組織で見つけたのだろう？」

フェリエの事を説明すると

前半は愚痴のようなものを言っていたが後半になると神妙な顔をしながら聞いてきた。

「スパイとかの線はないと思うな。

俺が見る限り本当に記憶がなさそうだし。

んゝ心配なら一応、エヴァが記憶を見るっていう方法もあるけど」

「私は構いませんが」

エヴァと話し合っていると

チャチャゼロの観察し終えたのか

いつの間にかフェリエがこちらの会話に加わった。

「いいのか？」

「はい。見られたとしてもこの人と会うまでは
私が実験を受けている記憶しかありませんから」

普通記憶を見られるのは

嫌なはずなんだがフェリエは特に気にしないようだ。

「なら遠慮なく見させてもらうぞ。少し屈め」

フェリエが少し屈みお互いに額をくっ付けながら

エヴァの吸血鬼としての目による暗示と

同時に魔法を併用して記憶を覗き見る。

しばらく待っていると記憶を見終わったのか

ゆっくりお互いに額を離した。

「どうだった？」

「ふむ。……いや、こいつの

言っただ通りの記憶しかなかったな」

「何だ。エヴァにしては少し歯切れが悪いな」

エヴァは少し眉を顰めて。

「あれは記憶が無いというよりむしろ……」

そこまで言った後エヴァは言葉を切り、

「いや、私の考えすぎだろう。気にするな」

言葉の続きが気になったが、エヴァが話さないというのなら無理に聞く必要はないので、本題について聞く事に。

「それでさエヴァ。チャチャゼロ。
フェリエはここに置いてもいいのか？」

俺が本題を切りだすとエヴァは難しい顔をした後
何故かあーとかうーとか、どこのゾンビだと言いたいような
うめき声を出しながら長い間唸っていたが。

「私も文句は言えん、か。はあ……いいだろう」

「御主人ガイイナラ俺モイイゼ」

最初の様子からエヴァにもう少し洩られるかと思
ったが何とかなったようだ。

「そっか。ありがとなエヴァ。

フェリエ。まだちゃんと紹介してなかったからな
俺と一緒に住んでるエヴァンジェリンだ。

んで、こっちがエヴァの従者のチャチャゼロ。
まあよろしくしてくれるとありがたい」

「エヴァンジェリン・アタナシキテイA・K・マクダウエルだ。
仕方ないからよろしくしてやろう」

「ケケケ チャチャゼロダ ヨロシク頼ムゼ」

俺達がそう言うとなんかだが

フェリエは困ったようにし。

「どうしたんだ？ フェリエ？」

「いえ……。こういう時にどうすればいいのか」

「変な事ばっか覚えたのに何でそんな事は覚えなんだよ」

少し軽口を言ってみたが、今回は真面目に困っているようだ。

「別にそんなに難しく考えなくてもいいのに」

口で説明するとめんどくさいので手っ取り早い方法を取る事に。

フェリエに向かって手を伸ばす。

俺がそうすると何故かエヴァがむっとしたが理由は分からないので気にしない事に。

「これは？」

「エヴァも似たような感じだったなあ。

仮にも一緒に暮すんだ。これからよろしくって意味を込めた握手だよ」

「そういうものなのですか？」

「そういうものなんだよ」

本来は握手に色々な使い方があってと思うが
それを説明するとややこしい事になるので省く事に。

フェリエは俺が差し出した手をじろじろと観察した後、
恐る恐る手を出して俺の手をゆっくりと握った。

「ま、よろしくな」

「……よろしくしてあげましょう」

そうして握った手は人形では決して
感じられない温もりがあった。

日本に住み始め115年
原作開始まで後115年

改めてお供をゲット。

第二十六話『偉大なる魔法使い』（前書き）

総合評価2054。お気に入り登録819件。

正直言ってこんなにも行くなんて全然予想していなかったのですが、すごく驚きました。こんな駄文ですが今後ともよろしくお願いします。

第二十六話『偉大なる魔法使い』

まずフェリエに一般常識を教えていかないと色々心配なので、教える事になったのだがこれがもう反則的に飲み込みが早い。

大抵の事は一回聞けば覚えるし、理解する。

だったらという事で言語も教えてみたが

これもまた大して時間が掛からずに覚えた。あいにく俺は日本語以外に

喋れる、または理解出来るのは英語ぐらいだったのですぐ教える事は終わったので後はエヴァが教える事になったが。

だが、これだけ物覚えが良くて、理解力も高く、自慢したくなる程優秀なフェリエだが、それでも声を大にして言いたい事がある。

「どこで間違ったんだ!!」

「いきなり叫んでどうしたのですか？
ついに気が触れたのですか？いえ、そういえば元からでしたね」

「……」

とにかく口が悪い。いや、言葉遣いは丁寧なんだが
出てくる言葉が一々心に突き刺さる。

最初に、ここに来てからもその兆候は見られていたが
時間が経つにつれて確固たるものになってしまった。

この言葉遣いは俺に対してだけじゃない。なのでそれによりエヴァと良く喧嘩をするようになり、家が以前に比べてすごく騒がしくなった。

さすがにエヴァもフェリエが戦える訳ではないので魔法を使う事はしないので、辺りに被害が出ない事が幸いなものかもしれない。

ただ、家の一室で勉強を続けているとフェリエが唐突に。

「私に稽古を付けて欲しいのです」

いつものように辛辣な言葉を混ぜる事無く真剣に、
といっても表情はいつもと変わらないが言ってきた。

「何でまた急に？」

「私自身が特異な存在である事は私が一番分かっています。
私がおかを為そうとする時に邪魔されたら困りますので。
それに、あなたも私とは違う意味で随分特異なようですし」

こちらをじと目で睨むように告げた。

フェリエの存在を考えると確かに力はあった方がいいだろう。

俺が特異と言うのは。

「俺が裏で何してるのか調べたのか？」

「ええ。最もあなたのあの時の姿を中心に少し調べたら
あなたの事は山のように出て来たので。大して苦労はしませんでし

たが」

さすがに詳しい事は乗ってないだろうが依頼の時の俺が裏ではどんなものなのかを調べるのなら苦労はしないだろう。

「そっか。ある程度知識を付けたら言おうと思ったんだが先を越されちゃったな。でも、それを知ってもまだここにいいのか？」

そう言うと、途端フェリエは冷めた目でこちらを見て。

「初めにあなたが言ったのでしょうか？」

「いや、そうなんだが……」

「なら、最後まで責任を持ってください」

どうも分かりにくいのが、ここに残ると言う事なんだろう。

「それもそう……だな。俺から言ったくせにそういうのは無責任か。良し。今度こそ最後まできっちり責任持つさ」

「期待せずに待ちます」

「そこは期待しようぜ。でも、どんな風に鍛えるか……」

「なら、私が稽古を付けてやろう」

どうやってフェリエに稽古を付けるかと

悩んでいると、エヴァが扉を勢いよく開け腕を組みながら出てきた。見た目子供が背伸びしているような感じで少し微笑まじさが感じられる登場の仕方だ。

「エヴァが？ 別に俺はいいけど珍しいな。

エヴァからそんな事言うなんて」

エヴァは何故か黒い笑みを浮かべながら。

「あのちんちくりんな爺に習った物なら

こいつでも大丈夫だろ。それに日頃のうら……ゴホン、日頃のお礼をしてやろう思ってたな」

（意味ほとんど変わってなくね？）

この二人の喧嘩は大抵はフェリエが勝ち、エヴァが悔しがるという構図になる。

エヴァの頭が悪い訳ではないのだが、エヴァは別段口が立つという訳ではない。

そして、フェリエはとにかく相手のペースを崩すので、そのままフェリエのペースで負けてしまう。実際俺も口ではフェリエには敵わないと思う。

（ていうか、こんな短期間で口で負けるって……）

俺が内心愕然としてみると、フェリエは胡散臭い物を見るような目でじろじろとエヴァを見た後、こちらに視線を戻し。

「では、稽古を付けてください」

無かった事にして話を進めた。

「おい」

「私自身の魔力は使えませんが
気という物なら私でも使えるはずです」

「おい！」

「ふえ、フェリエ。あのエヴァ……」

「何ですか？ そんな者はここにはいません」

「私を無視するなあああ！！！！」

ついに我慢の限界が来たのか、エヴァが
それはもう凄まじい速さで、フェリエの前に立ち
強制的に視界に入るようにした。

フェリエはめんどくさそうに、それでいて
仕方なさそうに視線をエヴァに合わせる。

「今は忙しいので後にしてください」

「だから、私が稽古を付けてやると言っているだろう！」

「あなたが？ ……………ッフ」

「き、貴様！ 今鼻で笑いおったな！！」

「失礼しました。つい本音が」

「ぬぐぐぐぐ……こいつ」

このままではまた喧嘩に発展、いや、もうしているかもしれないが、これ以上ひどくなっても困るので。

「二人ともストップ。エヴァは落ち着け。フェリエは言い過ぎ」

「……」

「ぬ」

二人の仲裁に入り喧嘩を止める。

二人とも不満がありありと顔に現れているが（フェリエは微妙だが）
、
どうやら今はこれ以上喧嘩するつもりは無いようだ。

「フェリエ。実際エヴァの体術はお前に結構合ってるんじゃないかと思う。」

俺が見た所気は確かにあるにはあるが、多い訳ではない。

まあかといって少ない訳ではないけど。鍛えていけば

ある程度増えるだろうが、そこまで劇的に増える訳じゃないな。

それに、エヴァの使っている体術なら近接なら大体対応出来るだろ。

そんで、エヴァ。俺からも頼むわ」

また二人して喧嘩を再開されても困るので

矢継ぎ早に言葉を続けて言う。

フェリエは俺の説明を聞いて納得したのか

今度はしっかりとエヴァに視線を向け。

「そうですか。では、よろしく願いします」

確かにフェリエは口は悪いが

ちゃんと言う事は言うので余計対処に困る。

そして、エヴァはどちらかというと熱しやすく
冷めやすい性格なので、フェリエのお願いを聞いて
怒りは冷めたようで、すぐに得意気な顔になり。

「そこまで言うのなら稽古を付けてやろう。

だが、せいぜい死なんように気をつけろよ」

「ふう……。中々苦痛な行動でした」

「よし。表に出ろ」

ちゃんと言う事は言ってる……。よな？ な？

こうして始まった二人の鍛錬だが

さすがに今までしていた勉強のようにすんなりと覚える事は
出来なかったが、原理等はすぐに理解するので別に遅い訳でもない。

修行の方向性としては肉体の運動能力を高める事になった。

フェリエが精霊と融合した事により得た、反則的探知能力は

やはり反則的なようで、魔法であればどんな魔法か？ どれぐらい
の威力か？

どれぐらいの規模か？ どの方向に放つか？ がすぐに分かるのだ。簡単に言えば魔法に限っての未来予知的な物に近い。それに、魔法じゃなくても

観測を全開にすれば全方位見れるし、魔法程ではないにしろ、相手の挙動をある程度予測出来る。

これを知った時は何てチートだと思わざる得なかった。その代わりと言っちゃなんだが、遠距離攻撃の手段が一切無いのが問題だが、逃げるだけならあまり問題ないだろう。

そしてある日の事。

「む？」

「どうしたエヴァ？」

エヴァに付きあって俺が茶道の練習をしている最中にエヴァが怪訝な顔したので聞いてみると、

「結界に反応があった。だが、侵入者にしては妙だな一人だ」

「一人……ね」

ちなみに、フェリエは魔法球の中でチャチャゼロと模擬戦をしている。

フェリエがいれば侵入者なんてすぐに分かるのだが

いつもフェリエがいるとは限らないので、家の周りに張ってある
結界は変わらず起動してある。

「俺が出るから、エヴァは後方から様子見といてくれ」

「気を付けろよ」

「分かってるよ」

そうエヴァに言った後、服を依頼の時に切り替え、そして
一つの推測を立てながら結界の反応があった所に行くと、
こちらに向かって壮年の男性が辺りを窺いながら歩いてきているよ
うだった。

もし、俺を殺しに来たんならその男性は確かにそこらの奴に
比べると割と強いと思うが、それでも一人で来るのは正直言って
役不足としかいいようがない。だからといって、わざわざこれ以上
進ませる必要もないので、とりあえず男性に声を掛ける事に。

「その男性。そこで止まってください」

まだ目的が分からないので攻撃は仕掛けず

気配を消し、姿を隠しながら声だけを男性に掛ける事に。

男性は一瞬驚いたが、すぐにその場に立ち止まったので。

「この場所に何の用ですか？」

「私はメガロメセンブリアの者です。この土地を
所有している方にお願いがありましてお話がしたいのです」

その言葉を聞いた時に俺の推測が当たったのだと確信した。
ついに魔法使い達がこの神木目当てにここに來たのだと。

（でも、ここに來たのがメガロとはな……）

俺の正体を知っている可能性はあるので

排除するのも手だが、ここでこいつを排除したとしても、
仲間の連絡が途切れたとして応援が来るだろう。

そして、それを排除したら次は本格的にここに攻めて来るだろう。
無論負けるつもりはないが、めんどくさい事になるのは確実なので
それも出来ない。

そして、下手に断ると俺が賞金首である事を盾に攻めてくる。

（出来がいい頭じゃないんだ。ぐだぐだ考えてもしようがないか）

「それでしたら私ですので私が話を聞きましょう」

これといって打開策が浮かばなかったので、思い切って
その男性の前に姿を現した。男性は急に現れた事にも
驚いているようだが、それよりも俺の姿を見ての驚愕の方が大きい
ようだ。

（誰が所有しているまでは調べていなかったのか……）

そう考えながら向こうの出方を窺っているが
向こうは体を強張らせはしたが、いきなり
攻撃などを仕掛けてくる様子はないようだ。

「意外ですね。メガロメセンブリアには中々

恨まれていると思うので、こちらに攻撃でもして来るかと思いました
たが」

一応鎌をかけながら問うと、男性は苦笑して。

「あなたが本物なら、いえ十中八九本物の『ハウンド・ドッグ獵犬』なのでしょう。
それでしたら私如きがあなたに敵うなどとは思っていません。

それにここで私が攻撃すると、あなたによって

私は確実に消されてしまうでしょうしね」

（俺を油断させるため……って訳じゃなさそうだな）

こいつに限っては俺の正体を知っている訳ではないようだ。
それに、頭の固い奴ではなさそうだから話やすそうだ。

「それで、改めて私に、正確にはこの土地に何の用ですか？」

「単刀直入に要件を申させて貰いますが、

私達西洋魔法使いの勢力圏を広げたいのです。

その為にこの地、日本に私たちにとって拠点となるものを
造りたいのです。そして、その為にはここにある神木を

用いて結界を展開するために使用したいので

この土地をお譲りしていただくか、あなた達に

この神木を使用する許可を貰いたいのです」

ふむ。まあその件は別に俺は構わない。

別にここを独占したいなんて思っていないし。だけど。

「では、私の事はどうするんですか？」

もし、俺達を排除するなら、めんどくさい事になろうがここで排除しておかないと。

そんな俺の不穏な考えが伝わったかどうかは分からないが男性は慌てたようにし。

「も、もちろんあなたをどうこうする何て事は致しません。

あなた達の要望を最優先で且つこちらが可能な限り通すように私が尽力します」

物騒な事には一先ずならなさそうだ。とりあえずエヴァに相談してみるか。

《エヴァ！ 聞いてたんだろ？ で、どうする？》

《こちらに対して過度の干渉をしなければ私は構わん》

《了解。後はこっちで決めとくな》

《ああ。だが、リョウ。前々から言おうと思っていたのだが……》

《ん？ どうした？》

《お前………恐ろしく敬語が似合わないな》

《気持ち悪いですね》

《2人して大きなお世話だ！！ そして、いつの間にフェリエ戻ってきてるんだよ！》

《先ほど。としか言い様がありません。》

それぐらい分からないのですが？》

《ぐっ。……………そ、そうだ！ あんまりこの人を待たせる訳にはいかないし、そ、そろそろ念話を切るぞ！》

《逃げたな》

《逃げましたね》

《き、切るぞ！！》

まったく何て失礼な奴らだ。先の俺の敬語が似合っていないっていうのも失礼だが、この俺が反論に困って逃げたなんて、そんな馬鹿な事あるはずないのに。

さて、とりあえず許可も取ったしこっちの条件を伝えるか。

「では、こちらからは、

- ・こちらに対して敵対行為又はそれに準ずる行為を行わない。
 - ・過度の干渉を行わない。
 - ・俺の正体は限られた人物にのみ明かす。
 - ・そちらから敵対行動を取った場合そちらの生死は問わない。
 - ・こちらの行動の制限をしない。
- ただし、こちらからそちらに対して先制して危害を与える事はしな

い。

・あくまで神木の土地の権利はこちらにある。

・上記の条件はいくら時が経とうと順守する。

前提として確実に守って貰いたい条件は以上の七つで」

別に無理な要望を言っているつもりはない。

まあ厳しいとしたら四番目だが、関西呪術協会の件もあるし部下が全員上の言う事を聞くななんて事はないと分かっているのでこの条件は通って貰わないといざという時に困るしな。

「少しお待ちください」

男性は念話をし始めたが、それを見て俺は今更ながら少し焦った。連絡しているのは、たぶんこの人の上司だと思うが、それだと俺の正体を知っている可能性がある。それによってここに攻めてこられるのは勘弁だ。だが、ここでこの人を殺しても不信に思っただけでまた誰か送られてくる。

どっちに転んでも困るので、俺がどうするかを悩んでいると男性は念話を終えたのかこちらに向き直り。

「はい、その七つで大丈夫です」

（通っただと？）

いくらなんでも上手くいきすぎている。

俺の事を伝えたのなら俺の中身が賞金首であるという事がすぐに分かるはずだ。なのに、容認した訳だ。

（まあここで掘り返して問題になるのもあほらしい……。それに、本格的に敵対したら全部排除するか）

実際こちらに敵対してきたら即時抹殺する事はできる。鋼糸ならどれだけの人数でこようが、間合いに入った瞬間すぐに切断する事が出来る。

（とりあえずは油断しないようにするか……）

「では、契約成立という事で」

その後細かな条件を決め契約書を書き契約は完了した。

後に麻帆良学園都市と呼ばれる
超巨大学園都市の始まりである。

日本に住み始めて120年
原作開始まで後110年

麻帆良学園建設開始。

第二十七話『人の性』（前書き）

ぐだぐだ感があるような気もしますが
投稿させていただきます。

第二十七話『人の性』

交渉が終わった後。男性は一旦本国に帰還し、しばらくすると多くの同僚であろう

魔法使い達がこの地に集まりだし、あつという間に自分達の拠点を造り始めた。

この拠点は複数の学校を主にし、その周囲にも様々な建物を造るようである。

何故学校なのかは気になったが、そちらの方が多くの人達も集まるんだろうと、適当に理由を考えてみた。

ちなみに依頼の方は再開日未定で休業する事にした。

この魔法使い達を信用何て事は出来るはずもないので何かあってもいいように常時ここにいる事にしたのだ。

幸いお金は無限という訳ではないが、莫大といってもいいぐらいあるのでしばらくは問題ない。

そして、彼らはここにある神木の元々あった認識障害を利用し

その内容を少し改変する事で学校をまとめて覆う結果を展開した。

要は異常を異常と認識出来ないようにするものである。

これによって魔法の秘匿するようだ。

見ようによっては洗脳に近いものがあるが、こうでも

しなければ、こんな大々的に拠点を造るのだ魔法を秘匿なんて出来ないだろう。

逆に言えばこんな目立つ所に造るなと言う事なんだが

ここを管理する訳でもないのにそんな事を俺が考えても仕方がない。

ついでに探知の結界を張り侵入者対策もするようだ。

そうして、着々とこの学校が出来ている途中に向うから要望があり、曰く、この結界に魔を抑える為の結界と直接ここに転移するのを防ぐ結界も

組み込みたいと提案してきたが、フェリエは魔というより精霊なので問題は無いが、エヴァは完全に魔に属するのでそんな物張らす訳にはいけないので

拒否するしかない。だが、一般人もいるので守る為にどうしても必要だと

何度もそれこそ、鬱陶しくなるほど説得してきた。何度もくるといい加減

辟易してきたので、とりあえずエヴァに相談してみると。エヴァは神木で造った指輪と

以前造った橙色の宝石を一つ嵌めた指輪を付ける事によってエヴァは結界の対象から外れるようにする事で問題を解決し魔を抑える結界を展開出来るにした。

エヴァ曰く、どれだけ結界の内容を変えようとも、所詮神木を利用し展開する物である以上この神木で造った指輪を付けていれば問題無いらしい。

それよりもあちらがこちらに対して無断で結界を展開しなくて良かった。

もしやっていたら本当に排除しなければなら無かったので、めんどくさい事をせずに済んだ。

そして月日が経ちついに1890年に超巨大学園都市『麻帆良学園』が創設された。

もう大分薄れているというか、無いに等しい前世？の記憶でもここまですで、大きい

学園は見たことも聞いたこともなかったと思うので、この大きさに呆れるばかりだ。

そして俺達は麻帆良学園が出来たついでに俺達の家も古くなったし、フェリエ

という新しい住人も入ったので家を改装する事になった。いや、改装というより

もはや新しく建て直したというのが正しいだろう。何せ和風だった家が

洋風の木で出来たログハウスになったのだから。もはや改装どころではないだろう。

元の家は魔法球の中の草原の方に移す事にしてそのまま置いてある。部屋割は一階にリビングやキッチン、風呂や洗面所等全員が共有で使う部屋が

あり、地下に物置部屋。二階はそれぞれの部屋と空き部屋がいくつかという感じだ。

そして、一番の問題とも言える関西呪術協会との関係だが。それはもう

揉めに揉めたようで、この土地で両勢力の小規模な殺し合いが頻発している。

現在は西洋魔法使い達の方が数が多いので向うも大規模な攻撃を仕掛けて

こないが、いつ関西呪術協会が爆発するかは分からない。

エヴァはといえば静かな方が割と好きなので、こんな近所に巨大な学校が

できて周りが騒がしくなってきたので、顔を少し顰めていたがもう俺達は契約してしまったので直接文句を言う事はなかった。良く俺に対して愚痴を零すようになったが。

フェリエは人が増えたらそれだけ様々な人を見れるらしいので不満などを言う事は無かった。ちなみにチャチャゼロは麻帆良学園という拠点が出来た事によりこの地に様々な敵対組織がここを攻めてくるというので上機嫌だった。

そして、フェリエと暮らしていて新たに分かったのだが

フェリエはどうやら年を取らないらしい。エヴァのように不死ではないが、俺と同じ様に不老のようだ。原因はフェリエが

覚えてないので、いまいち分からないが恐らく

実験のせいらしくそれにより不老になったらしい。

本人は別段困っていないようなので、それならばと言う事で皆早々にその事について気にしなくなった。

「いや〜あっという間だったな」

頂上近くの神木の枝に腰掛けながら俺、エヴァ、フェリエ、チャチャゼロ。

要するに全員で夜の麻帆良学園を眺める。本体の大きさが大きなので
枝も普通の木と比べるまでもなく大きいので問題なく全員で座れる
のだ。

麻帆良学園も、時代が進めば人工の光が灯りだし、さぞや綺麗な景色になるだろう。

「そうだな。少々喧しいがな」

「もういい加減諦めろって。

賑やかになって俺はいいと思うけどなあ……。

そうだ！ ついでだからエヴァもこの学校にでも通って見たら？」

「くだらん。私に今更学ぶ必要なぞないのに
何故私が行かなければならない」

「そう言うなって。楽しいかもしれないじゃん。

それにエヴァだったらしょ「何だ？」……何でもないです。はい」

（早すぎだろう！ まだ「しょ」としか言ってないのに！）

俺のちょっとした冗談だったのにエヴァに

滅茶苦茶怖い眼で見られた。あんな眼でみられたら誰だって

びびってしまう。とりあえずこの話題はやめといった方が

よさそうなので俺が他の話題を搜していると。

「あなたの容姿なら小学生でも大丈夫です。

遠慮なくこの小学校に通ってください」

あくまで淡々とフェリエがエヴァに告げた。

「ほう。この私に喧嘩を売ってるのか？」

「いえ、ただの事実です」

「そうかそうか。そうだフェリエ。久しぶりに稽古を付けてやろう。うっかり別荘が壊れてしまうかもしれないが何も問題あるまい」

「嫌です。めんどくさい。一人でやっててください」

フェリエが分かり切っている地雷を思いつきり踏みつけるという恐ろしい事を普通にやっているので、俺は二人に気づかれぬようそっと静かに枝の端に移動する。

以前に比べてフェリエもそれなりに戦えるようになったので、いつエヴァの魔法が炸裂するのか分からないのだ。下手に間に入ると俺にも被害が及ぶのでどうしようもない。

そうして戦々恐々の思いで睨みあっている

二人を見ているとエヴァが一度溜息をつき視線を逸らした。

「やめだ。今日くらいは静かに酒でも飲むぞ」

何かエヴァがちよっぴり大人になったように見えるが麻帆良完成にかこつけて酒を飲みたいだけな気がする。フェリエはというと、珍しくエヴァが掛かってこないのでちよっと拍子抜けしているようだ。

そうしてフェリエは静かにお酒を飲み、チャチャゼロは俺の頭の上に

乗りながら、エヴァと俺で酒を飲んでいると、エヴァがふと思い出したように。

「そういえば。ここの学園長は誰になったんだ？」

「ああそれは最初に俺達に交渉しに来た人の上司がなったみたいだ。交渉しに来た人はその下に着いたみたいだ」

「そうか」

「あの人がいるならあんまりこっちに
対して下手な事はしないと思うけどな」

「あいつも人間だ。どうなるかは分からんさ」

「そう言われちゃそれまでなんだが」

もしそんな事態になったら、こちらもそれなりの対応するだけだ。

「ってその言い方はまるで俺が人間じゃないみたい言い方だな？」

寿命等は確かに違うと思うが他は人間だと

自分では思っているのでエヴァに軽い感じ聞いてみると。

「お前が人間？」

エヴァがこちらの正気を疑うかのような、というか
阿呆を見るような顔でこちらを見てきた。それどころかチャチャゼ
ロも

あのフェリエでさえもそんな感じで見てきた。

そして、三人は顔を見合わせた後こちらに顔を戻し一斉に声を揃え。

「はっ。そんな訳ないだろ」

「あり得ませんね」

「ケケケ ネエナ」

断言された。どうやら俺は人外認識をされているみたいだ。

自分がこうも思っているにも周囲の評価は違うものだと思えて実感した日だった。

そしてまた時が経ち最初に学園長に着いた人も

老いには勝てないので、引退し次の代に変わることにしたようだ。

その人も前任の人と同じく今の所はこちらと事を構えるつもりは無いようなので特に問題はなかった。そう、その人は特に問題はなかった。

いや、纏め上げていない時点で責任者として問題があるかもしれないが、少なくとも性格的に問題はなかった。

俺の正体の事は麻帆良でも、学園長とほんの一部の人間しか知らない

いが

その中で俺の事を気に入らない

（何か色々理由があったらしいが、そこは聞き流したので知らない）
人物がいたらしく自分の手勢を引き連れてこちらに来ていてと
先ほど新たに継いだ二代目学園長が慌ててこちらに連絡してきたの
だ。

明らかに契約違反だが、独断専行らしいので、その襲撃者だけを
排除する旨を伝える。勿論後でちゃんと調べさせてもらうが。

向こうは殺すという事に難色を見せたが、

契約に記してあった事だし文句を言う事はなかった。

あえて言えば、言い方は悪いと思うがそんな独断専行している
奴らの為に、やっと出来たこの地自体を危険に冒す事は出来ないの
で見捨てたということになる。でかい組織ならよくある事。とかげの
尻尾切りだ。

「で、どうするよエヴァ？」

たくさんの人形に埋もれながら寝巻を着たままの
エヴァは、気だるそうに目をゆっくりと開けてこちらに視線を向け
た。

「知るか。リヨウに任せる」

短くそう言うときエヴァはうつらうつらと舟を漕ぎ始めた。
今は朝早くなので、エヴァには中々つらい時間帯だ。
仕方ないと思うが、もう少し何かないんだろうかと思う。

（これは信用っていうよりただ眠いから俺に全部丸投げのような？）

「しょうがない。さっさと行って来るか」

エヴァをわざわざ戦いに行かせる事もないし
ということに承諾する事に。

「ついでにチャチャゼロも連れて行ってやれ。
ここ最近こいつも退屈しているだろうしな」

「ケケケ 久々ニ生身ヲ斬レルナ」

チャチャゼロはどこからかその身に合わない刃物を取り出し
嬉々としながら振りまわしている。

ほんとに物騒な奴だ。そして、俺とチャチャゼロが迎撃に向かおう
とすると。

「それと、こいつも連れて行け」

エヴァは億劫そうなまま、階段の方に視線を向けた。

そこにはいつもの普段着とは違い模擬戦や鍛錬の際に着る服である
黒と白で構成されたモノトーン調の服を着たフェリエが居た。

言われたフェリエはいつもと変わらないように
見えるが、なんとなく緊張しているようだ。

「フェリエを？ まだ早いんじゃない？」

「誰が鍛えてやったと思っているのだ。それに、リョウ」

そこまで言った後エヴァは俺に向かって
先ほどの気だるそうな目とは違った射抜くような目を向け。

「お前は過保護すぎだ。これは私に対しても言えるのだが
こいつに対してはそれが顕著だ。こいつは、いつも誰かに
守ってもらわないと何も出来ないような子供ではないのだぞ。
そして、戦うと言った以上遅かれ早かれこの道は通る。」

いや、こいつはその中でもかなり遅いほうだ。

一人で戦場に赴くような奴は腐るほどいるのはお前も分かっている
だろう。

それに比べれば、今回はチャチャゼロやお前がいる。こいつはよほ
ど恵まれている」

「それは……そうなんだが」

正に凶星としか言いようがない言葉だったので

俺はエヴァに返す言葉が思いつかなかった。

最初に研究所からフェリエを連れ出した時に思った事だが

フェリエは自身の命を失う事を恐れていない。

いや、それ以前に興味すら示していない。それは覚悟とは違うのだ。
そんな状態で戦場に出れば、いつフェリエが命を落とすのか分かっ
た物じゃない。

今フェリエがどう思っているかを聞けばいい。

そんな簡単な事なのに、今も興味が無いと言われるのが嫌で、
いや、情けない事に俺は今までの生活に意味がないと言われるよう
で怖いのだ。

そうやって先延ばし先延ばしをした結果が今の現状だ。

「大丈夫です」

俺が言葉に詰まって俯き、答えに窮していると
いつの間にかフェリエが俺の目の前まで来ていた。

「あの日あなたに稽古を付けてほしいと

言った時から、この道を通るのは

覚悟、いえ理解していましたから。それに……」

俺はその時確かに、そして初めて見た。

フェリエが意図してしたのかは分からないが確かに見た。

「責任。持ってくれるのでしょうか。涼？」

フェリエが微かに、本当に微かに淡く笑っているのを。

その笑みは油断すると見逃してしまいそうな

それほど儂い微笑だったが。その笑みは今まで見た

フェリエの様々な表情の中で一番見惚れるような表情だった。

陳腐な例えだが華が咲いたようなと言うのが一番合っているだろう。

「くくくっ、あはははは」

「何を突然笑っているのですか？」

「いやいや。ただ自分の馬鹿さ加減に対してにな」

「今更気づいたのですか？」

「そうかもな」

「？」

うじうじしていたのが、馬鹿らしくなってしまい
思わず笑ってしまったが御蔭ですっきりした。

（結局エヴァの時と変わらない。俺のやる事は何も変わらない。
フェリエが自身の命を守らなくとも。意味が無いと言おうとも。
俺が勝手にフェリエの命を守ってやればいい。それだけだ）

今は迫る敵を排除するのが先だ。

だが、フェリエにはその後で今どう思っているか聞く。
今後の事を考えてもそうするべきだ。

「んじゃ行ってくるわ」

やる事は決めた。後は実行するのみ。

服を着替えてから今度こそ家の外に出る事に。

「うむ。それとリョウ」

「ん？ どうした？」

「帰ってきたら先の話。聞かせて貰うからな」

「……了解です」

そうして俺とチャチャゼロ。そしてフェリエは
敵を迎え撃つ為に扉を開け家を出。朝日が差し込む森に駆け出した。

麻帆良学園が創設されて40年
原作開始まで後70年

フェリエのデビュー戦開始。

第二十七話『人の性』（後書き）

服の描写をしたいのですがこれが全くとっていいほど出来なかったので苦肉の策で見た印象だけ表現さしていただきました。

実力不足で申し訳ありません。

番外編『何でもない日』（前書き）

今話は全編三人称もどきです。

時系列は二十六話と二十七話の間です。

番外編『何でもない日』

太陽の光が差し込む暖かな午後。

麻帆良学園にあるとあるログハウスのある一室。

「キスとはなんですか？」

「へ？」

フェリエの勉強はそんな唐突な一言から始まった。

少し大きめの机を挟み礼儀正しく正座で座っているフェリエ。

足を崩しながら座っている黒宮と対照的な二人が、

机に向かい合い勉強を始めようとした矢先にフェリエの言葉だ。

「ですからキスとはなんですか？ 別の言い方をすれば接吻。

口づけといたします。まったくその耳は何の為に付いてるのですか？

飾りですか？ 取り外し可能なんですか？ そうなのですか。とても便利なのですね」

「聞き返しただけでえらい言われようだ……。

いや、ちゃんと聞こえてたよ。ただ急に何でと思っただけ」

黒宮もフェリエの辛辣な言葉には慣れた物で

少し落ち込みながらもすぐに持ち直すようになった。

フェリエは自分のポケットからあまり装飾を施されていない

焦げ茶色の本を取り出して、黒宮に本の表紙を向けたが

題名は日本語でも無く英語でも無かったので黒宮には読む事は出来

なかった。

「悪い読めねえ」

「でしたらこの本は恋愛物と呼ばれる類の本だと理解して頂いたら結構です」

「恋愛物かあ……」

「何か？」

「い、いや何か意外だなと思ってな」

フェリエは知識を得る為に様々な本を読んでいた。

黒宮も当然その事は知っていたが、読んでいる本全てを把握している訳ではないので

黒宮にとってフェリエが恋愛物を読んでいるとは今初めて知った事なのだ。

「何か失礼な感じがしますが、まあいいでしょう。

キスの他にも疑問はありますが、そちらは時間が掛かりそうなのでまたの機会で構いません。それで、キスとはなんですか？」

「んーフェリエ。答えるにしても

質問が漠然としすぎて答えに困るんだが」

フェリエは考え込むように少し目を伏せたが、然程時間も経たずに考えが纏まったようですぐに視線を黒宮に戻し。

「それもそうですね。では、何故人はキスをするのですか？」

「そ、それはだな……」

改めてフェリエの質問を聞き
答えようとした黒宮だが早々に言葉が止まる事になった。

「どうしたのですか？」

「い、いや……」

「？」

フェリエが不思議そうな顔をしているが
反対に黒宮は

（やばい……）

額から一滴の汗が滴り落ちた。というのも黒宮自身前世の世界では
どうか覚えていないがこの世界ではした事は一切無い。

（というか良く考えなくても俺ってまずいよな？）

自身の年齢を考え更に焦りだす。

黒宮自身まったくそういう出来ごとに縁が無かった訳ではない。
外の世界では基本的に仮面を被っているが、それでも、もの好きと
いうのは
どこにでもいるもので彼に声を掛ける人もいたのだ。だが、彼は元
来賞金首だ。

それにより良く知りもしない人に対しては一定の警戒を示すのです

げなく断るのだ。

だが、どれだけ理由を取り繕うとも、

（全然分からねえ）

体験した事の無い物は憶測で考える他なく、それでも分からなければ、

答える事も出来ずそこでお終い。現実は無常である。

「答えられないのですか？」

「悪い……。俺もした事が無いんでな」

色々と考えてみるもしつくりくる答えが出ず、結局正直に白状する

「困りましたね」

「……面目ない」

困った風には見えないフェリエが悩み、黒宮が項垂れる。

そんな構図がしばらく続いた後、フェリエが名案を思いついたと言わんばかりに無表情でぽん！と手を叩き。

「では。実際にしてみましようか？」

「は？」

そう言われた瞬間ついフェリエの鮮やかな桃色の唇に視線を向けてしまった

黒宮は間違っているだろうか？ いや決して間違っていないだろう。

「分からない物事は実際に確かめてみる物です」

「た、確かに。ま、間違っではないけどさ。

少し落ち着こうぜフェリエ」

「私は落ち着いています」

フェリエは行儀悪く間にあった机を乗り越えながら、日の光を反射する滑らかな銀髪を

掻き上げて、徐々に黒宮との距離を詰めてくる。

一歩一歩距離が縮まる度に戦闘状態でもないのに黒宮の心臓が跳ねる。

普段はエヴァンジェリンがこんな事を許すはずもないが、今現在は自作の人形を作る為の材料をチャチャゼロと買い出しに行っているので不在。

あまりにも唐突すぎる展開で、黒宮もそれに合わせて後ろに下がったが、部屋である

以上広さに限界はある。然程時間が経たずに黒宮の背は壁際にまで追い詰められる。

もはや黒宮とフェリエの顔の距離はもはや数十？にまで縮まった。

フェリエの女の子特有の甘い匂いがし黒宮は不覚にも喉を鳴らしながら唾を飲み込む。

「どうしたのですか？ そんなに顔を赤くして？」

「う……」

フェリエは微塵も動じる事無く銀の瞳をこちらに真っ直ぐに見据えながら

黒宮の頬に白く細い手を緩やかに伸ばし、壊れ物を触る様にそっと触れた。

きめ細やかな指が黒宮の頬を撫で黒宮は体を僅かに震わせた。

「大丈夫です。優しくしますから」

（普通立場逆だろ！ 何だ俺は乙女か！？ 一体誰得何だよっ！！）

内心絶賛混乱中の黒宮だがフェリエはそんな内心を知ってか知らずか、瞳は

閉じることなく黒宮を見つめながら確実に黒宮との距離を詰める。

もはや互いの距離は数十？どころではなくお互いの息が頬を撫でる距離にまで

縮まり、ついに距離がゼロになろうとする瞬間。

「やっぱりストップ！！」

黒宮は顔を横に背けながらフェリエの両肩を押し瞬く間に二人の距離は遠ざかる。

「どうしたのですか？」

心底不思議でならないといった様子でフェリエが

問い掛けたが、黒宮自身も何と答えたらいいか纏まっていなかった。

「いや俺も上手く言えないんだけどさ

確かめる為にするのは違うんじゃないかと思っ

純粹にしくなった相手にしてみたらいいんじゃないか？

……駄目だ。俺も何言ってるか分かんなくなった」

顔を逸らしたまま自身の思った言葉を出したが、纏まっておらずぐだぐだであった。

黒宮自身フェリエとするのが嫌な訳ではない。だが、フェリエは女の子だ。

いずれ好きな人が出来た時にもしかしたら氣に病むかもしれない。そんな思いはして欲しくなかったのだ。

「要領は得ませんが、言いたい事は分かりました。つまりしたくなったらしろという事ですネ？」

「うん。……うん？」

二人の間に認識の齟齬があるが黒宮は無理やり納得する事に。

言いたい事は言い終えたのか、黒宮は体を起こし部屋の出口に向かう。

フェリエの方には一切視線を向けずに。

「悪いけど勉強はここまで。ちょっと別荘に居るわ」

用件だけ伝えてそそくさと部屋を出て、魔法球がある場所に向かう。黒宮hあんな事があった後に何事もなく過ごせるような精神ではないのだ。

要するにへたれ。またはチキンなのだ。

「行ってしまいました」

黒宮が部屋を出ていってしまい、残ったフェリエは誰もいない部屋で、先ほどまで黒宮が居た場所に座りながら一人ぼつりと声を漏らした。

フェリエに肝心の勉強を教えてくれる人物も居なくなったので手持無沙汰になったフェリエは先ほどの行為を思い出し。

「何て顔をするんですか」

あのままキスを行っていたらどうなっていたのか？そんな事神ならぬフェリエに分かるはずもない。それでもifを想像してしまうのはフェリエが人間だからなのか。

「帰ったぞ」

一人思案していると、黒宮と入れ替わる様に買い出しに出ていたエヴァンジェリンが扉を開ける音と共にチャチャゼロを伴い、いくつもの紙袋を抱え帰宅した。

「お帰りなさい」

「ああ」

二人で短く言葉を交える。エヴァンジェリンは荷物を机に置き部屋を軽く見回し目的の人物が居ない事に首を傾げる。

「リヨウはどうした？ この時間帯ならお前と勉強をしている時間だろう」

「先ほど逃げるように魔法球に向かいました」

「何だそれは……」

「ナラ俺モ魔法球へ行ッテクルゼ」

先ほどの出来ごとを見ていないエヴァンジェリンに何故そうなったのか分かるはずもなく、疑問は深まるばかりであった。

チャチャゼロは疑問に思う事もせず意気揚々と黒宮の元に向かう。大方黒宮に模擬戦でも申し込むのだろうと二人とも容易く想像がついた。

「まあいい。だがそれよりもフェリエ」

「何ですか？」

いつもの事なので自分の従者の事を気にせずエヴァンジェリンはこの部屋に入ってから気になっていた事がある種の確信を持って尋ねた。

「お前。顔が赤いぞ」

エヴァンジェリンの言った通り元来白い肌のフェリエには
分かりやすいほどに頬は淡い桜色に染まっていた。

もし先ほど黒宮がフェリエの顔を見ても一目で分かるような変化だ。

「……え」

普段のフェリエでは考えられない蚊の無くような声を上げ思わずと
言った装いで右手で自分の頬に触れた。触れてみると微かに、だが
確かに

フェリエの頬は熱を持っていた。

だが、フェリエには分からなかった。自身の頬が熱を持っている理
由が分からなかった。

「ふん。まあいいさ。だが、これだけは言っておく」

フェリエが自身の感情を持て余している事に、エヴァンジェリンは
気づいていながらも

あえて無視し、瞳に強い意思を宿す。それは確かな圧力を生みだし
ながら、

「あいつは渡さんからな」

絶対の意思を持って告げた。

あいつという言葉が誰を指しているのかはフェリエには容易く予想

がついた。

だが、その言葉がフェリエには何故かとても重く、物理的な衝撃を持つように感じた。

「何を……何を言っているのですか？」

胸の内に渦巻く不快感のまま、知らず知らず刺々しい言葉が口から出る。

フェリエさえ自覚せぬままエヴァンジェリンを微かに眦を

つり上げ睨むも、全く動じることなくエヴァンジェリンは愉快そうに表情を歪めて容易く受け流した。

「何。分からないならいい。それは私にとって都合がいい。

……ただでさえあいつは鈍いのだ。これ以上めんどろな事になってたまるか」

前半は愉快そうに話し出したが、後半は愚痴のような呟きになっていった。

それっきり両者は口を閉ざしてしまい部屋には重苦しい沈黙が降りる。

「……失礼します」

フェリエは硬い声で一言だけ発した後腰をあげ部屋の出口に向かう。特に目的が

あった訳ではないが、それでも何故だか今はこの部屋にいたくはなかったのだ。

エヴァンジェリンもフェリエを引き止める事はせず、無言でフェリエの背を見送る。

「不愉快です」

家の廊下を当てもなくゆっくりと歩きながら呟く。

その言葉がエヴァンジェリンに対してなのか、それとも自分自身に対してなのかはフェリエ自身分かっていなかった。

自身の把握出来ていない感情が原因だと分かっている。だが、どんなに

考えようともその答えが見つからない。

その結果に更に不快感が増す。悪循環が続き自身でもどうしようもないのだ。

「……不愉快です」

自身の苛々に任せるように壁を蹴る小さな音が周囲に響いた。

フェリエがその答えを知るのはまだ先の話。

第二十八話『何が為』（前書き）

今までで一番文字数が多いです。どうも文章量が安定しなく申し訳ないです。

情景描写や心理描写をしようとすればどうしても文字数が多くなります。

そして、こちらの都合で悪いと思いますが次話は時間が一気に飛ぶことになります。

第二十八話『何が為』

side…フェリエ

「レストレーション」

敵の迎撃の為自宅から涼、チャチャゼロと三人で生い茂る木々の枝を跳躍しながら進んでいると、涼が手の甲から白い棒状の物を取り出し、そう呟くと白い棒状の物は光に包まれ、光が収まると白い杖の様なものが現れました。

涼は謎です。

以前魔法球の中でエヴァンジェリンとの模擬戦を見た時に率直に思いました。

何て出鱈目だと。

涼は強化をせずとも身体能力が有り得ないほど高いです。

私もあまり世界を知っている訳ではないので

断言は出来ませんが、それでもそう確信が持てます。

さすがに真祖の吸血鬼のエヴァンジェリンには及ばないですが、それでも私が

下手に強化した時よりも高いような変態的な身体能力なのでから。それが平均であってたまりますか。

そして涼の力なのですが、これもまた良く分からない物です。

以前涼について調べた時に力についても調べましたがその結果は正体不明という何の益にもなら無い結果でした。

本人に聞いてみるとその力の名前は剋という物らしいです。

気に比べるとこの力は攻撃に特化しています。それも気より遥かに高い攻撃性です。更に鍊金鋼という武器を通して使うともう手がつけれません。

その代償なのかは分かりませんが、防御力は極端に低いです。気とは違って常時防御する事は出来ず、防御専用の技を使用していない時は少し体が丈夫なくらいの防御力しかありません。

力について聞く時に涼についての事も聞いたのですがある程度は聞けましたが、出生等を聞いた時は困った様な顔するので、それ以上聞くのは仕方ありませんから断念してあげました。

「そんな難しい顔してどうしたんだ？」

「ケケケ 怖気ヅイタノカ？」

涼について考えていると、その本人である涼が先導しながら顔だけをこちらに向けて問いかけてきました。チャチャゼロは明らかにこちらを馬鹿にしているので、放っておきます。

「問題ありません。それよりも私がそんな顔していると良く分かりましたね？」

自慢ではありませんが私は表情が動きません。

これが生まれつきなのか他の要因なのかは分かりませんがとにかく動きません。駆け引き等をする時は役に立ちますが。

「そりゃフェリエとも結構長い事一緒に暮らしてるしずっと見ているからそれぐらいは分かるって。

それより、もうそろそろ目的地に着くからそのイヤリング付けとけよ」

そう言われた時に何故か少しむず痒い感覚がありました。がもう少しで目的の場所に着くので一先ずその事は置いておく事に。

私は魔力が使えないので、魔法具を使う事も出来ません。なので、エヴァンジェリンから預かった魔法具は

予め魔力を込めておいて、身に付けたらその魔力分だけ発動する物です。

この魔法具の効力を見る人によって私の顔は違う顔に見えるようになります。

もちろん魔法で遠方から私を見てもその結果は変わりません。

さすがに性別や種族が変わる事はありませんが、それでも充分すぎる効力なので問題はありません。

そして、枝をしならせながらひと際大きく跳躍すると開けた場所に出ました。

この場所なら周囲に人の気配も建造物も無いので、確かにここなら戦闘に支障が無さそうです。

私達がここに着いて、さほど時間が経たず続々と学園側の魔法使い達がこの場に現れてきました。

やはりこの襲撃の首謀者はそれなりの立場の人なので数も中々多く私の能力で確認してみると33人はいるようです。

そしてその先頭にいた魔法使いの男が私達を
正確には涼の事を見て、口を開こうとした瞬間。

涼の頭上に巨大な光球が出現し、涼の周辺いえ、辺り一帯が
鮮烈な光に包まれました。そして、今まさに口を開こうとした
魔法使いの顔が真紅染まったかと思うと瞬く間に燃え上がりました。
そして、周りにいた魔法使い達も同様の事が起こりそれは、肩であ
り、胸であり、
頭であり体の一部分から火が噴き出し、そして瞬く間にその高熱で
炎塊になりました。

「眩しいです。始めるなら始めると先に言ってほしいです」

相変わらずの威力に対し呆れながら
光が眩しいので目を細めます。

「悪い悪い」

見ようと思えば仮面の下の涼の表情も見れますが、今その
必要はあると思えませんのでしませんが、見えなくとも涼が
苦笑しているというのは分かります。

（本当なら今ので終わっているんでしょね）

以前この技を見た時はこんなに速度は遅くはありませんでしたし
射程範囲も狭く、威力も緩められています。

涼はどうやら随分手加減をしてくれているようです。

残りの魔法使い達はいきなりの事で茫然としていた

様ですが、現状を理解すると皆一様に怒り、ある者は魔法で身体強化を唱えこちらを打倒せんと駆けだし、またある者はこちらを破碎せんと魔法の詠唱を始めました。

「ケケケ 少しハ楽シマセロヨォ！」

チャチャゼロは余程楽しみだったのか嬉々と刃を振り回しながら敵方と同様駆けだしました。チャチャゼロが接触した周辺の敵はすぐに阿鼻叫喚になってしまい、殺し合いが始まったと嫌でも実感するのものです。

（私も……）

知らず手を固く握ります。

人の命を奪う事に対しての忌避はないはずですが。そんな感情は初めから無いのですから。

（では、この感情は……？）

今このような場で考える事ではありませんがそれでも考えてしまいました。何かとても大事なそして、私にとって必要な感情のような気がするのです。

今現在私は間違いなく緊張あるいは何か別の感情が出てきています。他の俗に言う楽しいや怒りなどは些細な事です。感じた事があります。が、こんな感情は今まで

感じた事はありませんでした。それどころか、模擬戦の時さえこんな胸が重くなるような感情はありませんでした。

以前に感じた事のある分からない感情とはまた違う感情。

（何故？ どうして？ これは一体？）

「フェリエ」

私が自身の感情について考えていると

敵の攻撃を適当な感じであしらっている涼が少しだけこちらに顔を向け。

「俺はこれからあまり手は出さない。俺は気を付けろとも頑張れとも言わない。でも、責任は持つから。フェリエの好きなように、思うがままにやればいいさ。それで、さっさと終わらして、家に帰ろう」

ぶっくら棒に、されど心配そうな感情の込められた言葉を聞いて私は今現在の心境を漠然と理解しました。

（ああ……そんな感情など無いと思っていたはずなのにどうやら私は意外にも……）

——死にたくないのですね。

命ある存在なら必ずしも持っている感情。

正確にはあの人達と過ごす生活が続けられないのが、嫌な様ですが

死んだらそれも続けられませんかのでどちらでも同じ事です。

（存外気にいっていたようです）

涼と会った頃の私なら自身の命に興味など示さないでしょう。

ですが、今私は生きたいと思っている。

あの騒がしくも何でも無い日常を過ごしていきたいと思っている。

その為に障害なる壁を排除する。至極簡単で単純明快の事。

（……感謝します）

本人に直接言うのは何だか憚れるので

胸の内でここに連れてきてくれた人物に感謝を示します。

「では、行きます」

体から余計な力も抜けたので、自身を鼓舞しながら

観測能力を全開にし、瞬動を使い一気に

こちらに向かって来ている敵に接近します。

その行動の合間に家を出る時に持って来たある物も開きます。

魔法使いも瞬動を用いているので、今現在は直線的な動きしか出来ません。

なので、能力で相手の動きをある程度予測しながら、こちらもそれに併せて

攻撃を回避し、そして、ある物で相手の首を撫でるようになぞります。

何が起こったのか分らないかと思っっているような表情を張り付けたまま

鮮血を散らしながら首が宙を舞います。胴体は首の切断面から勢いよく鮮血が噴出しながら、瞬動の勢いのまま大きな音をたて木に激突しました。

若干返り血が付きましたが、今はそんな事一々気にしていられないので

近くにいる敵に注意を向ける事に。

（後で綺麗にしませんと）

周りにいた魔法使い達は私に対しての認識を改めたのか
三人でそれぞれ三方向から時間をずらしながら攻撃を仕掛けてくる
ようです。

私はエヴァンジェリンから貰った桜を
あしらった扇子用い迎撃します。

この扇子はエヴァンジェリンから合気柔術を習う際に頂いた物です。
材質は神木を削りだして造つてあるので、そこらにある金属よりは
余程頑丈ですので、壊れるような心配はほぼ無いでしょう。

そして、先に私に辿り着いた魔法使いが瞬動で背後に回り頭に向けて
風を切るような音を響かせながら、拳を出してきたので
頭を少し傾けて回避。突き出された拳の手首を掴み
その勢いのまま、こちらに向かって来ているもう一人に
向かって自身の力を加え投げ飛ばします。

それなりの速度で来ている中、突然正面から来た物に
対応出来るはずもなく、かといって味方なので撃墜する訳にもいか
ず、

その速度のままもつれ込む様に衝突しました。かなりの速度だった

ので

二人して意識を失っているようです。

「君は何故あのような者の元に居るんだ!？」

君は知らないかもしれないが、あいつは女子供でも

容赦なく殺すような危険で冷酷無比な男なんだぞっ!！」

「私がいつどこで、誰の元に居ようとも

あなたには一切関係ありません」

そのまま私に攻撃を仕掛けるとあの二人の

二の舞になると思ったのでしょうか、残りの一人の青年が

攻撃するのを止め言葉を掛けてきたので、そのまま返答する事に。

「君の様な少女がそんな所にいるべきではない!

何と言われてその男の場所に居るかは分からないが

きっと君は騙されているんだっ! 今ならあの金を貰えば何でも

やるような薄汚い男とも距離は離れている! さあっ! こちらに

来るんだ」

(あの人にとってこんな距離あって無いような物ですけどね)

内心嘆息しながら先の青年の言葉を反芻します。

あの人にとって私は涼に騙されている、もしくは

脅されていると思われるようです。どのようにあちらに

私の顔が見えているかは分かりませんが、私が見た目が少女なのも
影響しているのでしょうか。

(冷酷無比……………ッフ)

いつもの涼を思い浮かべてどうしてもそのイメージと繋がらなかったので、思わず心の内で失笑してしまいました。確かに戦闘時等になると、それに近い雰囲気にはなりますが他の時は大体どこか間が抜けている感じがするので私では冷酷無比と涼を結びつける事が出来ませんでした。

ですが、世間での評価は逆。大概は悪い言える評価ばかり。

（まあそんなものですね）

その世間での評価は別に間違っていないと思います。そして、目の前の青年の評価も。世間や青年から見たらあの人はお金を貰って何でもする外道で冷酷無比で残酷な人。そんな評価も涼の人となりを良く知れば変わるかもしれません。

（ですが、無理ですね）

いくら根が良くとも誰が好き好んで危険人物と話してみようと思えますか。

ものの好きはどこにでもいるので、少しはいるかもしれませんが、多くの人はそんな、自身を危険に晒す真似はしません。

仮に涼の事に対して私が涼は悪い人ではありません。

と、世間に訴えたとしても何ら変わる事は無いでしょう。

だから、この人達が涼を恐れる或いは、排除しようとするのは当たり前の事です。

ですが、どれほど正しくとも間違っていないくとも、

「だからといって何も思わない訳ではありませんので」

それに私の感情が納得するかと問われると別問題です。

世界にとっては犯罪者扱い。私にとっては日常。たったそれだけの違い。

「何を言ってるんだ！！ 早くこちら——うぎいああアアああ」

されどそれは大きな違い。

胸の内にある不快感に任せるがまま扇子で眼前の青年の目を叩き潰します。どうやら幾分か力が足りなかったようで、まだ生きています。

このまま放って置いても死んでしまうでしょうが、それでは私の気が済みませんので、目を潰したその流れのまま青年の首を、

「なので、それ以上口を開かないでください」

軽い音を立てながら折りました。

首が歪な形のまま青年は重力に引っ張られやがて地に伏しました。すぐに気が晴れる訳ではありませんが、それでも幾分かましになったのでよしとします。

「ふう。こんな事で感情を乱すとはまだまだです——っ」

青年に対して意識を裂きすぎたようで、私に向かって弾幕ともいえる量の気弾が飛来しているのに気づくのが遅れてしまいました。

魔法ならもっと早く気づきますが、今はそんな事を考えても仕方ありません。

幸い、まだ急げば間に合うようです。

（遠距離攻撃手段があればっ）

自身を不甲斐なく思いながらも、その弾幕の中でも薄い箇所から跳躍し強引に脱出します。幾つか体に当たり鈍い痛みが体に伝わりますが、ある程度は気による防御で威力が削がれますので、そのまま脱出します。

（これは……）

私が居た場所に幾つもの気弾が着弾し、土煙をあげながら小さなクレーターを無数に造り上げます。

私は地面に向かって落下しながら感知してみますと気弾からは無事逃れる事が出来ましたが、その場には多くの魔法使いが集まっていました。どうやら私が跳躍する場所を予め読んでいたようです。やはり経験というものは何事も必要な事です。

（本当に……まだ駄目駄目ですね）

私を囲んでいる魔法使い達は近接では分が悪いと判断したのか、距離をあけて多数の詠唱魔法で一気に仕留めるようです。

虚空瞬動が出来れば問題ありませんが、生憎それは後回しにしていたので、まだ習得出来ていません。

着々と詠唱は完成に近づきます。これだけの数に加えて自身の運動能力優先で鍛えて、まだ不安が残る気の防御。

これでは魔法を防ぎきれず、私の身は容赦なく破壊され命を刈り取るでしょう。

だというのに私に死の恐怖はありませんでした。

あるのは少しの自責の念だけでした。別に自身の命を諦めてしまった訳ではありません。

そして、私の命を刈り取る魔法が完成しようとした刹那。

（あの人に迷惑を掛けているようでは）

私を囲んでいた魔法使い達の地上、空間わず、足元から全てを焦がすのではないかと思える程の円筒状の業火が激烈な勢いで噴出し一瞬で魔法使い達の身を包みこんでしまいました。

そして数秒後。炎が消えた時には先ほどまで居た魔法使い達は誰も存在せず、残るのは円筒状に消失した地表と元人間だった灰だけでした。

（……相変わらず何と言いますか）

馬鹿みたいな威力に呆れましたが、これを誰がやったかなんてすぐに分かるのでその事は気にせず、戦闘区域の全域を能力で見ると

敵の数はもう随分減っておりもはや四分の一以下しかいません。チャチャゼロが羽目を外しているので、かなりの人数を減らしてしまったようです。涼も何だかんだいいながら数を減らしてしまったので、ここまで減ってしまったようです。

「……私のデビュー戦なのですが」

あの二人はその所をちゃんと分かっているのでしょうか。

敵方はここまで来て私達に敵わないというのを

悟ったのか、残った数人で散開しながら逃走を始めました。

大方学園側に救援を求めるのでしょうか。

「今更ですね」

近くに居る男性の逃走先に

瞬動で先回りし、これ以上進ませないようにします。

「こちらで運が良かったですね。

他の方達に比べて逃走出来る確立は高いですよ」

謙遜でも、挑発でも、皮肉でも、嘲笑でも無く、

——ただただ、厳然たる事実を。

一瞬私を見て怯んだようですが、それでも止まる事は

せず雄叫びを上げながら私を打倒或いは抜いて逃走をしようと
こちらに駆け出しました。

「まあいくら確立が高かろうとも

何事も当らなければ意味はありませんが」

こちら地面を抉って加速します。

あちらもこちらに向かって拳を繰り出してきたので私も速度が乗った掌底を相手の顎に向けて放ちます。

そして、両者の攻撃が交錯し。

「お疲れ様でした」

そう、もう終わってしまった人に告げます。

相手の拳を完全には避け切れず頬を切ってしまいましたがこちらの攻撃は相手の顎を捉える事が出来ました。あの速度が乗った、

更に言えば気も乗っている掌底の直撃ですので魔法の障壁も抜き完全に入りました。元の顔の面影は今ももう見る影ありません。

周りを観てみますと、他に逃走した者は全てあの二人に打ち取られてしまっているようなので今回の戦闘はこれで終わりのようです。

「お疲れさん」

二人と合流してみると、チャチャゼロの体には傷らしい傷はまったく見当たりませんでした。少々の悔しさを感じながらも

どうせ涼も同じ状態だと思い見てみると、

「珍しいですね。あなたが攻撃を避け切れないなんて」

涼の被っているフードの横が浅く裂かれていました。

本当に珍しい事です。涼は少し肩を竦めて、

「妙な奴がいてな。たまにいるんだよ、あえて気配を弱くみせて不意打ちを狙う奴。今回の奴はそれがかなり上手かったけどな」

「そうなのですか」

「だけど、偉大な魔法使い^{マギステル・マギ}にしては変なやり方だな
普通奴らはこんな手は使わないんだが。まあいいか」

やはり世の中色々な人がいるようです。

もっと実戦経験を積まなければなりません。

「それはともかくとして、今回は私のデビュー戦でした」

今回私が倒したのは片手の手で足りる程の人数です。

それ以外はすべてこの二人が片づけてしまいました。

これでは経験が積めたとはいえません。

「確かに私も情けなかったです。ええ、情けなかったですともそれは認めます。ですが、それでもやりすぎです」

「わ、悪かったって。だが！ 確かに俺も半数以上は殺ってしまったが、チャチャゼロだって

結構な人数を仕留めてたよな？」

「マアナ。アンマ斬リゴタエは無カツタケドナ」

「ほら！」

「そんな子供みたいな言い訳はいいです」

「子供って……」

「ケケケ」

何やら涼は落ち込んでしまいましたが、これだけは言っておきたかったのです。

チャチャゼロはまったく応えていませんが、まあこの狂人形に何を言っても無駄なのはいつもの事なので気にしません。

「今度からは私一人でやります。もし付いて来るんだとしても手は出さないでください」

この人達と一緒に戦っていたらあまり経験は積みそうにないのですし。

涼は私がそう言った途端先ほどのしょぼくれている感じから一転し、緊張した感じが伝わってきます。

「どうしたのですか？ 似合わない雰囲気を出して？」

「似合わないって。いや、今はそんな事はいいんだ。あの、さ。フェリエ変な事聞くんだけど……。ん。何て言えばいいか」

「はつきりしませんね」

「ああ悪いな。何か言葉にしにくくてな。あゝぐちぐち
悩むのもめんどくさいし、この際端的に言うけどさフェリエ。
お前は今の生をちゃんと生きているか？」

字面では意味不明な問いを涼に投げかけられました。

自宅を出る時に何やら落ち込んでいるというか

何かを考え込んでいたようですが、どうやら私の事だったようです。
そして、涼は私が自身の命に関心を示さないのが、心配のようです。

「まったく。その事で悩んでいたのですか」

「……」

私自身さえも戦闘が始まる間近で

気づいたので偉そうなことは言えませんが。
お人よしといふかなんと言いますか。

「そうですね」

面と言うのは何がとは言いませんが負けました気がするので
涼に背を向けて、自宅に向かってゆっくりと歩き出し。

「少なくとも私は今の日常を。あなた達との何でも無い日常を続け
たいと

思っていますので。ちゃんと生きてみたいと思います」

少し歩く速度を上げながら家に帰ります。

後ろに追いかけてくる人達の実在を感じながら。

こうして私の日常は過ぎていく。

麻帆良学園が創設されて60年
原作開始まで後50年

フェリエのデビュー戦終了。
フェリエ。生を望む。

第二十九話『変化の時』（前書き）

少し間が空いての更新になりました。

そして、ユーザー名を変更させていただきました。

特に深い意味はありません。何となくです。

では、黒谷改め錬金鋼です。よろしくお願いします。

今回はちょっと時間の飛び方が無理やりな感じがしますが
自分の力量では、その間を埋めるのは難しすぎたので
飛ばさせて貰う事になりました。

第二十九話『変化の時』

その後、学園側と話し合って今回の襲撃の件についてどうするかを話し合った。要するにこの件の落とし前をどうつけるかってことだ。さすがに何も無しという事には出来ないので話し合う事になった。

その話し合いの結果だが、いくらかの金とここ麻帆良学園の図書館の

（この前見たの다가何故か上ではなく広大な地下が広がっていた）禁書ともいえる魔道書の閲覧許可を貰っただけで、特に他は何もなかった。

もちろん謝罪はきちんとしてもらったが。

そんな結果になったのは、俺自身がそれだけでいいと言ったからだ。

魔道書の件はエヴァが言ったのだが。何故これだけで済ましたのかはもちろん理由がある。

実際にエヴァと俺で生かした襲撃者に色々と話を聞いてみたり、調べたりしたが

今回は本当に一部の者達による独断専行だったからだ。

調べたといっても、ほとんどエヴァ頼みだった。

勿論組織の長として組織をきちんと纏めないとはいけませんが、その事が、土台無理な話なのは最初から分かっていたのでそれについては俺は特に気にしてない。あまりにもこんな事が続いたら少し考えなければならぬといけないが。

次が一番大事な事だが、こちらに被害が無かった事だ。

これがもしエヴァやチャチャゼロ、フェリエに被害があれば確実に学園と手を切っている。少なくとも魔法関係者は須らく居なくなつて貰っているだろう。

それに、これだけで済ましたのは何だかんだいってこの学園が気に入っているという理由も少しあるのだろう。

この三つが俺が金だけで済ました理由だ。額が額なんで俺は結構得を

したと思っている。エヴァも元々こんな事にはなるって事は分かっていたみたいだから別に何も言わないようだ。ただ、臨時収入が入つたし、

ここにある魔道書も見れるという事なので少し上機嫌だった。フェリエは

少なからず実戦経験が積めたので逆にあれで良かったようだ。

チャチャゼロは不満を漏らしたが、それはまだまだ斬り足りないとの事なので、いつも通り無視する事に。

それから俺達は、時たま麻帆良に侵入してくる奴が、こちらに来たりするので、

そいつらを排除したりと麻帆良と敵対勢力との争いに巻き込まれた。そして、

運悪く手錠が複数で来て、それにより俺が、かすり傷でも負うとエヴァのお説教や

フェリエの容赦ない毒舌という中々に理不尽なコンボに合ったりしたが、

概ね問題無く日々を過ごした。

そんな事を俺達がしている間にも、時間はお構いなしに進み
麻帆良学園のお馴染みともいえるお祭り『麻帆良祭』が開催された。
創設から30年ぐらい経ってから毎年ここで開催されている学園
祭で、これまた
馬鹿みたいな規模で行われている。今回で開催40回目は超えてい
るだろう。

この祭りには俺達も参加させて貰っている。
そのまま仮面のまま出ても仮装と思われて問題無いのだが祭りの
時にまで
そんな窮屈な事をしたくないので、そこは認識障害で誤魔化して表
に出ている。

そして現在『麻帆良祭』初日。

「相変わらずの大きさだなあ。
というか年々規模が大きくなっている気がする」

俺達は基本的に暇なので祭りには参加させて貰っている。

「ふん、毎年飽きもせず良くやる」

「俺達も毎年飽きもせずに来てるけどな」

他愛もない話をしながらエヴァと
仮装をしていたり、親子連れだったり、カップルだったり

様々な人が行き交う大通りを一緒に歩いていた。
言い方を変えればデートと言えるかもしれん。

俺達の学園祭の回り方と言えば三日ある内の
二日をエヴァ、フェリエと二人で回り、残り一日を
全員で回ると言う感じだ。なので、ここにフェリエとチャチャゼロ
はいない。

今頃二人は家に居るか一緒に『麻帆良祭』を回っているだろう。
一応何かあったらいけないので念話をする為の物は
持たせてあるので一先ずは大丈夫だろう。

エヴァの服装は所謂ゴスロリ。全体的に白を基調とした可愛らし
い物だ。

服の事は全然分らないので陳腐な言葉でしか言えないが、エヴ
アには
すごく似合っている。行き交う人の多くは一度は振り返って見るぐ
らいの可愛さだ。

俺はと言うと相も変わらず無難な格好。

「ええい！ 細かい事を気にするな！ さっさといくぞ！！」

「そんな引っ張らなくても店は逃げんのに」

エヴァもこの祭りを何だかんだ言って楽しみにしているのだろう。
そうじゃなければ毎年出たりもしないだろうし。

エヴァは人を掻きわけながら俺の腕の袖を引っ張って意気揚々と
歩き始めたが

少し進むと、エヴァのお腹から可愛らしい音が鳴った。

「っ」

普通ならこの祭りの喧騒では聞こえないレベルの音だが生憎俺は普通では無いのでばっちりと聞こえてしまう。

エヴァは恥ずかしいのか赤い顔で黙り込んでしまいその場から動けなくなった。

エヴァも俺が聞こえるのは分かっているだろうから誤魔化すのは無理なので、頬を指で掻いて、一先ずの提案を出す事に。

「まずは腹ごしらえからだな」

「……そうだな」

エヴァは最初の勢いは瞬く間に無くなってしまい、俺が先導する形になった。

「とりあえずそこらにある所でいいか？」

「ああ」

しばらく道なりに進むと学生がしている出し物であろう喫茶店があったのでそこに入る事に。中はそれなりに繁盛しているようであらかた席は埋まっていたが、まだ開いている席もあるようだ。

「いらっしゃいませ」

学生の声に迎えられながら店の中に入り、適当に開いていた席に二人して座る。

テーブルに向かい合わせで座り机の上にあるメニューを二人して見てみると、

「カップル限定セットか、値段の割にはお得だな」

さすが『麻帆良祭』と言えるのか、かなりべた？なメニューが置いてあったが、値段の割には中々中身が充実していた。その代わりこのメニュー以外は頼む事が出来ないようだが。

その中にはやはりというべきか、一つのグラスに入っているジュースをストローで二人で飲むという物が当然のように含まれていた。

「ま、俺達には関係ないか、なあエヴァ」

やたら目立つようにメニューに書いてあったので気になったが俺達には関係ないかと思いつき何気なくエヴァに話を振ったが、

「……」

エヴァは何故かそのメニューを穴が開くんじゃないかってぐらいに凝視していた。

目は見開き何やら声を掛けるのに躊躇うぐらいだ。

だが、声を掛けないと始まらないので、声を掛けようとするが、

「これは仕方ないんだ。お金を必要以上に使うのはもったいないからな。それに、中身も十分お得だ。なので、これは必要な事なのだ。うむ。そうに決まっている」

唐突に顔を上げた後何故か誰に言ってるか分からない
言い訳じみた事を述べながら、うんうんと一人頷き始めた。

「急にどうし」「その店員！ このカップル
限定セットを頼む」えっ！？ 俺の意見は！？」

何故かカップル限定セットをエヴァが頼んでしまった。
残念ながら俺の意見は最初から無いようだ。

「カップル限定セット入りました」

わざわざ繰り返さんでもいいのに、注文を受けた店員は大声で注
文を

繰り返したので別に俺は悪くないのに居た堪れない気分になった。

「お待たせしました」。カップル限定セットです」

そんないつもより長く感じる時間を居心地悪く
待っていると、これまた大声で注文を繰り返しながら
注文した物を持ってきた。

（恨みでもあるのか？）

やつ当りなのだが、そう思わざるを得なかった。

そうして店員が持って来たカップル限定セットは
色んな具が入った六つのサンドイッチとスープが二つ。
ショートケーキが二つそして、あの飲み物である。

来てしまった物は仕方ないので極力あの飲み物を

意識からはずしながらサンドイッチを食べる。

学生が作った物だろうから滅茶苦茶うまい訳ではないがかといって、特別まずい訳ではないので不満は無かった。

エヴァはというと、食事に手を付けようとせず黙ったままお盆を見つめている。

ある程度サンドイッチ食ったので次はスープを飲もうとスプーンを捜すが、

「あれ一つしかない？」

机を見回してもスプーンは一つしかなく更に言えばケーキを食べる為のフォークも一つしかない。

「おい、これ一つしかないんだけど」

店員を呼びつけて聞いてみると、

「このメニューはそれぞれ一つずつしか食器が付いていまして間違いないです」

店員に涼しい顔でそう言われたので、改めてメニューを見てみるとあまり目立たない所に書かれていた。

「まじか……」

スプーンが無くてもスープは飲めない事もないがそれは些か行儀が悪い。ケーキなんてもっと悪い。

俺がどうしようかと悩んでいると、

「ん」

今まで沈黙を保っていたエヴァがスープを掬ったスプーンをこちらに突き出してきた。心なしか爛爛と目を輝かせている気がする。

「えーっとエヴァ？ そんな事をせずとも」

「ん！！」

こうされたら、どうするかは俺でも分かるが、それでも中々勇気が出ない。

エヴァはというと顔は真っ赤だが一切退く気は無いようだ。

「ふう〜分かったよ」

食べる以外に選択肢は無いようなので

早々に覚悟を決めて食べる事に。俺としても恥ずかしいから嫌なのであって、エヴァにされるのは俺としても嬉しい事だ。嬉し恥ずかしというやつだろう。

「んじゃ貰うな」

「……あ」

さすがにあ〜ん等と言いいながら食べるのは俺では難易度が高すぎなのでそのまま食べる。

「ど、どうだ？」

「美味しいよ」

エヴァは嬉しそうに小さく笑い、空になったスプーンでまたスープを掬い上げて、

「そ、そうかそうか。で、では、あ……あゝん」

今度は少し難易度が上がった気がするが、一回やったら何回やるのも同じという事で、しばらくはエヴァにスープを飲まさせて貰うという光景が続いた。

その後、俺達はケーキ等も食べさせ合う行為まで及び周囲から見れば俺達はさぞ

バカップルに見えただろう。だが、麻帆良の雰囲気のせいかな、それほど周囲から

注目される事は無く、二人して全ての料理を食べ終えた。

「ふう、ごちそうさま。さてそろそろ出るか」

席を立ちあがり会計を済まそうとするが、エヴァは席を立つ事はせずある一点に視線を向けたままだ。

「待て、まだ残っているだろう」

「……必死に無視してたのに」

諦めてエヴァのしている物に視線を移す。

そこには、あのドリンクが最初と変わらないまま静かに鎮座していた。

放置しすぎて、氷が溶けてしまい味が薄くなってるのは誰が見ても分かるのだが、

「本当にこれ飲むのか？」

「食べ物を粗末にするのはいかんからな」

（そういう割にはご飯の時にニンジン出たら食べないけどな……。ニンジンって吸血鬼の弱点だったけ？）

何かエヴァが言うのと矛盾している気がするが確かに言う事はもっともなので腰を椅子に戻す。

「一応聞くけど……別々に飲むっていうのは」

「無しだな」

「ですよねえ」

そんなやり取りをしながらお互いにストローに口を付けたのだが、

「……美味しいか？」

「……うむ」

気まずい。かなり気まずい。ただドリンクの量だけが徐々に減っていく。

さっきので慣れて大丈夫だと思ったのだが、これは先ほどとは

違う恥ずかしさがある。まだまだ俺の認識は甘かったようで、視線が泳ぎまくっている。

（こういう時って視線は何処に向けるべき何だ？）

初めての事なので、何処に視線を向けたらいいのか分からず、ちびちびと

ドリンクを飲む。とりあえず、正面に視線を向けてみると、何とエヴァは顔を赤くしながらも、こちらに真っ直ぐ視線を向けているではないか。

もしかしたら、飲み始めた時からこちらに視線を向けてたのかもしれない。

目と目が合ったので、こちらから目を逸らすのも何か負けた気がするから

視線を逸らしたくなる気持ちを抑え込んで、負けじと俺も見つめる。

「……」

「……」

何か余計に気まづさが増加した気がする。

この睨みあい？はドリンクが底をつくまで続く事になった。

結局ドリンクの味は分からず、美味いもまずいも関係は無かったみたいだ。

「ありがとうございました」

間延びした学生の声の背に聞きながら店を後にする。

「何かどつと疲れた……」

「何だ？ 文句でもあるのか？」

「いや無いけどさ、何でエヴァはそんな上機嫌なんだ？」

「気のせいだ」

エヴァは下手すればスキップしそうなま前を歩いている。

誰が見ても上機嫌な状態でいっても説得力が皆無だ。

どうやらエヴァにとって、先ほどの出来ごとはいいい事だったよう
だ。

いや、俺も嫌だった訳では無いんだが。

「そんな事よりさっさと行くぞ」

エヴァはくるっと片足を軸に髪を翻して回転し、楽しそうに笑っ
た。

それから俺達は祭りを存分に遊びつくした。

出店で買った物で食べ歩きたり。

エヴァが茶道部主催の茶会に参加して
部員や顧問よりも上手くて指導を頼まれるとか。

一部の出し物が明らかにこの時代より
少し進んでいる物があって俺が驚いたり。

ただ普通に平凡に祭りを楽しんだ。

「いやあ、随分遊んだな」

空には幾つもの星が浮かび、辺りはすっかり暗くなってしまった
が、

祭りは終わる気配は見せずまだまだ活気に溢れている。

さすが麻帆良。やたら元気な集団だ。

「……」

エヴァは高台から麻帆良を見下ろしている。

エヴァに連れられてここに来たが、ここに近づくにつれてエヴァの
口数は徐々に減っていった。今は何も喋る事無く、麻帆良を眺めて
いるエヴァが

その心中で何を思っているのかは分からない。手持無沙汰な俺はエ

ヴァの隣に立ち
一緒に麻帆良を見下ろす。ここからでも所々で人々の楽しそうな声
が響いて来る。

「なあ、リヨウ」

「……ん？」

どれくらい時間が経ったのか、
エヴァは静かな口調で話を切りだした。

俺は目線だけをエヴァの方に向けるも、エヴァは
麻帆良を眺めたままだった。

「ここは……平和だな」

「そうだな」

「ここは……暖かいな」

「そうだな」

「私は」

そこで、言葉を切りエヴァは穏やかな笑みを浮かべ、

「幸せだな」

本当に幸せそうに言った。

「……そっか」

エヴァは多くは言わなかったがそれだけでも俺は十分だった。

エヴァが居て、チャチャゼロが居て、フェリエが居て

ただ話したり、一緒に祭りを楽しんだり、馬鹿な事したり

そうやって普通に日々を過ごす。それで、みんなが幸せなら俺も幸せだ。

「私がこんな気持ちになるなんて、あの男にこの体にされた時には日々を生き抜くのに死に物狂いだったあの頃には想像もつかなかった」

エヴァの過去を知っていればすぐに分かるが、当の本人は

別に悲観的に語っている訳では無く淡々と事実を語っているだけのようだ。

そして、エヴァは麻帆良から俺に視線を移しその深い青色の宝石のような瞳を向ける。

喫茶店の時のように視線は逸らさず、今度は俺もただ真っ直ぐに瞳を見つめ返す。

「私は今の幸せが無くなるのが堪らなく怖い」

瞳は不安げに揺れ、いつものエヴァからは考えられない瞳だった。

俺の知っている限りでも、エヴァが弱音を吐くのは初めてかもしれない。

少なくとも人前ではそんな事を言う事は無かった。

「だから」

そこまで言った瞬間、唐突に俺の足元が淡く光ったかと思うとそこに魔方陣が浮かび上がった。

「エヴァこれ」

害はまったくないようだが、それでも疑問に思うので聞こうと思ったのだが、俺が足元の魔方陣に気を取られている間にエヴァは俺のすぐ傍にまで来ていて、そのまま俺の襟を掴み俺の体を自身に引き寄せ、エヴァの顔が急速に接近してきたかと思うと、

「楔を打たせて貰うぞ」

湿っぽい物が唇に触れた。

初めてのキスは歯が当たるといふ決して上手い物では無かったと思うが、それでも俺に与えた衝撃は大きかった。

あまりに唐突すぎたので、避ける事も離す事も出来ずエヴァにされるがままだった。

「ん、はぁ」

実際には五秒にも満たない時間だったが、俺にはそれ以上に感じた、時間が終わり甘ったるい声を出しながら、エヴァは舌で俺の唇を

なぞった後唇をゆっくりと離した。

「えっと……エヴァさん？」

口調が可笑しい気がするがそんな事すら気に
ならないくらい俺は衝撃を受けていたし、混乱していた。

「ふむ、いつもと変わらん様に見えるがな」

そう言ったエヴァの手には一枚のカードが握られていて
そのカードを首を捻りながら眺めていた。

少し顔が朱に染まっているが、俺の様に慌ててはいないようだ。
何だか俺だけが慌てて馬鹿みたいだ。

「ほれリョウ」

手品のようにカードがもう一枚増え、内一枚を投げ渡されたので
受け取る。

「仮契約カードだ。用途は私には分からんが
リョウの役に立たん事はあるまい、無くすんじゃないぞ」

「は、はあ」

何だか気の抜けた返事が出てしまった。

仮契約は俺も知っているの、このカードが何の為にあるかも分
かる。

さっきの行為の意味も分かる。だから、損をする物ではないのだ
ろうが、

(普通に勘違いしそうになるんだがなあ)

俺がそんな事を考えていると、そんな考えが顔に出たのか
エヴァは心底呆れたように首を振り、

「お前は言っておかなければ勘違いしそうだから

ここできっちり、はっきり言っておくぞ、私が仮契約したのは…
…」

(だよなあエヴァが俺の事を)

「お前を愛しているからだからな」

「好きなはずがな……………へ？」

当たり前の出来ごとの様に告げられた。

だが、俺にとっては当たり前では無く、初耳もいい所だ。

しかも、俺個人の考えだが、好きより上の感情だった。

エヴァは赤い顔でやはりとも言うように溜息をつき、

「まったく、やはりお前は阿呆な勘違いをしていたか、

これは言っておいて正解だったな」

というか口に出されて言われているが、それでも予想外すぎる。

「い、いつから？」

「さあな。初めはただお前と共に居られるだけで良かったんだがな、お前と一緒に居る内にも欲が出た。クク」

エヴァは可笑しそうに喉を鳴らしながら笑った。

自分の事なのに何処か自分を馬鹿にしているような笑いだった。そして一頻り笑った後、口角を吊り上げ、

「どうしてもお前が欲しくなってるな」

「っ！」

さっきとは質が違うぞつとするような笑みを浮かべた。

エヴァの容姿とはアンバランスな大人っぽい笑みだった。

もっとも目がこう肉食獣が獲物を見つけた時みたいな目だったので早々に身の危険を感じて、それどころでは無かったが。

とはいえ俺は告白されたのだ。返事をしようと思ったのだが、

「エヴァ、俺は」

「今は答えんでもいい。」

どうせ明確な答えも出ていないのだろう」

まるでこちらの考えを見透かすようだ。

「そ、それは」

だが、その指摘は見事に的を得ていた。

俺はエヴァの事が大切だ。それは俺の今の根幹であって違える事の無い事だ。

でも、その感情がどこから生まれてきたのかは分からない。

それに、俺が今まで深く考えず、ただ漠然と大切だと思っていたのも原因だ。

「悪いと思っているのなら現在の曖昧な

答えよりも、未来で明確な答えを示してみせろ」

「……悪い」

普通なら愛想もつかれるぐらいのへたれっぷり

だったのだが、エヴァはいつもと変わらない自信に溢れた笑みを浮かべ、

「気にするな。お前がめんどくさがりで、甲斐性無しで、優柔不断でへたれなのは最初から分かり切っているからな、気長に待ってやるさ」

「随分な言われようだ……」

苦笑いしか返しようがない。

本当に自分が情けなさ過ぎて落ち込むばかりだ。

「……だから」

また表情が変わる。今日一日だけでエヴァの様々な表情を見ている気がする。

だけど、今のエヴァの表情は俺が二番目に嫌いな表情だった。だ

から、

「居なくなるんじゃない……無いぞ」

「……はいよ」

俺は笑って頷き、エヴァの望むであろう答えを返した。

それで、彼女の表情が変わるなら。彼女の顔を晴らす事を出来るなら。

例えそれが確約出来ない事でも。

「では、そろそろ帰るか。

あいつらも待っているだろうしな」

「だな」

そして、俺にとって一大事ともいえる出来ごとがあった麻帆良祭初日を終えた。

麻帆良学園が創設されて63年
原作開始まで後25年

エヴァ想いを告げる。

第二十九話『変化の時』（後書き）

今回は日常回何ですが、あれですね面白いかどうかはこの際自分の安寧の為に置いときまして、戦闘シーンの方が書きやすいです。

もうちょっと上手くなりたいものですね。

そして、自分の語彙力の無さにも絶望しました。

何だが同じような単語を使っていますね。書けば書くほど自分の実力の無さが浮き彫りになる気がします。

第三十話 『答えは出ずとも夜は明ける』 (前書き)

またまた遅らせならばの投稿です。

遅れたのは事実なので余計な言い訳はしないでおこうと

思います。申し訳ありませんでした。すこし文体が変かもしれません
んが

目を瞑ってくださいとありがたいです。

第三十話 『答えは出ずとも夜は明ける』

「ふわあゝあ……………ねむ」

一人悶々とした麻帆良祭初日が終わり、夜も明け麻帆良祭二日目。昨日は衝撃的な事があり

満足に寝る事が出来ず、実質徹夜をしてしまった。

そんな、寝不足の俺が今居るのは巨大な時計塔の前。二日目はフェリエと麻帆良祭を回るので、ここで待ち合わせだ。

何故同じ家に住んでるのに、待ち合わせなのかは俺も良く分からないが、フェリエ曰く「基本です」と返されてしまい基本ならしょうがないかと承諾した。

（しかしこれでいいんだろうか？）

時計塔の壁にもたれ、目の前の喧騒を聞きながら思う。

俺は昨日エヴァに告白を受けた身だ。そして、答えを待ってもらっている身だ。それなのに、その次の日には違う女性、つまりフェリエとデートをする。…………何だろう。

何だか昨日から俺のクズっぷりが加速しまくってる気がする。

一応エヴァにこの事を聞いてみたが（聞いている時点であれだが…………）

「何だそんな事か。以前からの事だ今更気にはせん。それに、お前は最終的に私が貰うのだからな」

告白をしたからか、エヴァは吹っ切れたようで色々と直接的に言うようになった。この言葉を聞いて俺は申し訳ないやら恥ずかしいやらで、いっぱいだったが今回もエヴァの言葉に甘えさせて貰った。

（でも、いつまでも待って貰う訳にはいかない）

無理やり吸血鬼にされた子。そして、世界から忌み嫌われた子。この世界での初めて出来た繋がり。初めて守りたいと思った子。昨日からずっと頭の中を巡ってる言葉を浮かべる。さて、

エヴァは俺にとって何だろうか？

他人。知り合い。友人。戦友。親友。恋人。家族。
掛け替えの無い人。大切な人。必要な人。

様々な言葉を並べるが、自分ではどの言葉が合っているのか良く分からない。普段頭はそんなに使わないから、考えすぎで混乱してしまいそうだ。

（そういえば、フェリエはどうなるんだろうか）

もう一人の同居人についても考える。

俺が依頼の際に拾ってきたも同然な子。
記憶が無く、無表情な子。実験の結果半精霊な子。

彼女についても思考を進めるが。

（駄目だ。結局分からん……）

およそエヴァとそう変わらない結果が頭の中に浮かび出た。
なんだか、言葉遊びみたいだ。こういうのはエヴァとか
フェリエが得意何だけどな。

（恋とは、愛とは何なんだろうか……）

これだけ年を取ってるのに分からないのに、俺の
歩んできた年月に到底及ばない人間がその答えに辿り着いている。
やっぱり俺は馬鹿なのかも知れない。

「ああゝ駄目だ。年を取ると何だか余計に色々考えちまう」

「何を年より臭い事を言っているのですか」

愚痴を零していると、この喧騒のなかでも良く通る
聞き慣れた涼やかな声が聞こえた。壁から背を離し声の
聞こえた方に体ごと向けてみると、俺は少し溜息をつきたい気分にな
った。

「……何でそんな服？ いや、似合ってるし大体何でも分かるん
だけど」

視線の先に居たフェリエだが、その姿はいつもより大分異なっ
ていた。

フェリエが普段着る服とは方向性のまったく違うピンクのフリフ
リの服を
着て、いつも流したままの銀の髪は後ろで高く括られている。その

括っている

のが、ピンクの大きなリボンだから尚更いつもと違う感じを受ける。

「これですか？」

フェリエはこちらに服を見せるように軽く両手を広げる。

改めて見ても随分派手な服だ。今が祭りでは無かったら確実に浮いてるだろう。

（いや、麻帆良なら問題ないか？）

想像してみたが、案外問題無さそうだった。

「これはエヴァンジェリンに勧められたのです。何故か無駄に機嫌が良く、あれよあれよと言う間にこの服に着替えさせられました」

「やっぱり……」

一目見た時から誰の趣味なのか丸わかりだったからな。っていうかエヴァそんなに機嫌が良かったんだ。一緒に居る時はそこまで思わなかったけど。

「ごほんっ。そんな事はどうでもいいです」

フェリエは話を仕切り直すように、咳払いをした。というか普通に声に出して言っているが。そして、心無しかいつもより輝いている目をこちらに向け、

「すみません。待ちましたか？」

「んゝ少し待ったかな」

事実待ち合わせ時間からは少し過ぎているので

正直に告げる。別に待ってたのは苦でも何でも無かったが。

だがどういう訳か、フェリエは俺の返答を聞いた途端に

目の輝きを消失させ、俺の事を虫けらでも見るような目に変えた。

小さな子が見たらそれだけで泣き出してしまいそうだ。

「……ちっ」

「まさかの舌打ち!? 何か下手な事言われるより傷つく!」

「ふうゝ。……そうでしたね。あなたに少しでも期待をしてしまった

私が愚かでした。すみません先ほどの事は忘れて貰えますか」

「毎度の事ながら俺の精神は鋼じゃ無いんだから

いい加減にしないとぽつきり折れちまうぞゝ」

どうやらフェリエの機嫌を損ねてしまったようだ。

相変わらず女心とやらは良く分からない物だ。

そこまで言った後、フェリエは虫けらを見るような目を

やめ、普段通りの冷静な目に戻した。

「冗談です。遅れてしまってすみません」

「いや、とても冗談には……」

「そんな。いくらあなたがおもしろ……ごほん。ゆか……ごほん。

ぶぎ………とにかくこの私がそんな事をする訳無いじゃないか」

「言っとくけど微塵も誤魔化せてねえからなっ!!」

そして、誤魔化そうと思うなら言葉を選べっ! どんどんひどくなってるじゃねえか!」

「何を言ってるのですか? 誤魔化そうと思ってるなんて

私がそんな後ろ暗い事しませんよ」

「そこはせめて誤魔化せよっ!」

相変わらずひどい言い草だ。

「はあ。それで、どうする? 何処に行きたい所でもあるか?」

とりあえずさっきの事は早々に忘れて、これからの行き先を決める。昨日はどちらかというトエヴァ先導だったので

今回も相手の意見を聞いてから場所を決める事に。

「あなたさえ良ければ私はここがいいのですが」

フェリエもさっきの事はもうどうでもいいらしく、懷から麻帆良祭で

配っているパンフレットを取り出した。フェリエは多くの出し物が点在する

パンフレットの中から迷う事無くある一点を指差した。

「映画か。何となくフェリエっぽいな」

「そうですか？」

「ああ。じゃあそこに行くか」

目的地も決まったので、二人揃って目的地に向かって歩き出す。色々考える事はあるが、とりあえず今はフェリエとの祭りを楽しもう。ただの問題の先送りなのかもしれないが。

「そういえば、フェリエが出る時にエヴァとチャチャゼロはどうしたんだ？」

「私が家を出る時はまだ家に居ましたが、出かける準備はしていたようです。どこに行くかまでは分かりませんが」

「そっか」

人ごみを避けながら二人して、進んでいくと麻帆良唯一の神社。龍宮神社の前を通りかかった。いつもの風景では考えられないかなりの行列が出来ている。

これから何かのイベントでもあるのかもしれない。

「やけに人がいるな」

「今日ここ龍宮神社ではまほら武道会の本戦が開かれるそうです」

「武道会か」

少し興味が湧いたので、会場内の気配を探る。

どうやらこの大会は表の人だけではなく、裏の人達も混じっているようで幾つかの

気配を感じる。それでも大した使い手はおらず、大体の力量を見極めて行く中

（おいおい何だよこれ……）

およそ人間が持てるとは思えない程の魔力を感じた。

さすがにエヴァには及ばないが、正直言ってこれだけの魔力を持つてるのが、人間

とは思え無い。が、気配は人間そのものだ。まだまだ荒削りだが、この魔力量

だけでも相当な武器になるだろう。他にもトップクラスだろう気の質が優れている

持ち主や、隣にいる馬鹿でかい魔力には及ばないが、その代わり、魔力の質が

洗練されている魔力の持ち主もいる。

どういつもこいつも世界で見かけるのが、珍しい程の実力者だ。

（何だ？ どっかに戦争でも仕掛けんのか？）

少し冗談気味に思ったが、この三人ならあながち冗談では無いかもしれない。さすがに大国は無理だろうが、小国なら充分に落とせるだろう。

「どうかしたのですか？」

「……悪い行こうか」

少し気配を探る事に夢中になりすぎたようだ。今はあまり余計な

事は

考えないと決めた直後なのに、すぐに違う事に気を取られてしまった。

会ってみたいと思わない事もないが、今回は諦めるとしよう。

そして、龍宮神社を通り過ぎ、幾つもの出店を通り過ぎて目的の場所に辿り着いた。

映画館の代わりに使っている場所は体育館らしき建物で、外装に飾り付けを施してあるようだ。入口の前に受付があり、その横に中で上映しているであろう映画の紹介ポスターが置いてある。

上映しているのは恋愛物、ミステリー物、コメディ物の三つ。

「どれ見るかは決めてるのか？」

フェリエに聞いておきながら、俺はフェリエがこの中からどれを選ぶのか大体予想が付いていた。

「これにします」

そして、フェリエは俺の予想に違わず恋愛物を指差した。

上映時間まで少し間があったので付近の出し物を二人で少しだけ楽しんだ後、上映時間間近になったので体育館に戻る。

映画を見るついでに映画と言えばポップコーンなので一つ購入。

中に入ってみると、いくつものパイプ椅子が並んでいるが、まだ人はまばらで少なくとも俺達が席を選ぶのに苦労はなさそうだ。その中から俺達は真ん中辺りの席を確保する。

「これって学生達が自分で作ったんだよな？」

まだ時間があるので声量を抑えながら雑談をする事に。ついでに脇にあるポップコーンを摘む。

「ええ。そのはずです」

「だよな。でも、学生が自分で映画とか作れるか？」

未来ならまだしもこの時代では無理なんじゃないだろうか。

「さあ？ 麻帆良生なら出来るんじゃないですか？」

「そんな馬鹿な……いや、出来るか？」

何だか不思議と説得力のある言葉だった。

俺達二人が話している間に席も埋まりだし、もう九割ぐらいは埋まっているだろう。この時代学生が映画をするのは珍しいというのもあるのか中々盛況しているようだ。

俺達の雑談もそこそこにブザーが鳴り、体育館内が暗くなり始め映画が始まった。フェリエはどうやら映画を見てる間は喋らないらしく、すぐに画面に視線を向け口を閉じた。

俺もそれに倣い画面に意識を向ける。

当たり前だが、場面はまだ序盤でヒロインらしき女の子を主人公らしき男の子が仲良く二人して喋っている所だ。

（それにしても……）

ぼんやりと目線だけを映画に向けて、意識はフェリエに向ける。

（いつからだっけな。フェリエがこんなにも恋愛物とかを熱心に見るようになったのは）

元々そのジャンルについて興味が無かった訳では無いようだけど、いつからか、恋愛物を積極的に見たり聞いたり読んだりするようになった。

今もこの映画を真剣に見ていて、周りには意識は向けてない感じだ。

（んー………ああそーいやあの時からだったかな）

きっかけを思い出そうと過去の記憶を探っていると、ふとそれらしい出来ごとが思い起こされた。

いつだったか、フェリエに勉強を教えていた時の事。キスとは何だ、と聞かれて慌てまくって情けない醜態を晒したのは俺の黒歴史に入る。

（ということはあれか？俺みたいな事にならない為に真剣に恋愛物を勉強してるのか）

もしそれが理由なら複雑な思いだ。

（あゝ眠いからか、今日はほんとに良く気が逸れる）

無論やろうと思えば、それなりの食糧と水があれば二週間程度は眠らずにぶっ通しで戦闘を行えるが、今日のような普通の時ぐらい健康的な生活を送りたい。

だから、極力劉で眠気を覚ます事はしたくないが、これは使った方がいいかもしれん。

そんな至極どうでもいい事を考えてる間に、映画はもうクライマックスらしく、いつの間にか主人公とヒロインは結ばれたようで、キスの場面だ。どうやら予想以上に俺は考え込んでいたみたいだ。というかほとんど見てない。

そして、映画は終わりスタッフロールが流れはじめた。

ここまで来ると席を立つ人も出始め、騒がしくなる。

「学生にしては中々でしたね」

フェリエが人や作品を褒めるのは珍しいので、本当に良く出来ているようだ。それを見逃した俺は少し勿体ない事をしたかもしれない。

「うん。そうだなすごかったな」

まあそれはこの際置いといて、とりあえず話を合わせる事に。

幸いフェリエはこちらを見ていないのだから、俺が碌に

映画を見ていないのは、ばれていないはずだ。

「ああ、あなたが見ていないのは分かっていますので知ったかぶらなくていいです」

「な、何故ばれてるし」

「少し観測を展開しただけです。一つの事を認識、理解しながら他の事も認識、理解する事も私の能力には重要ですし」

フェリエは暇があれば自身の能力の鍛錬に努めている。

さすがに、いつもやっている訳ではなからうが、それでも生真面目な事だ。その鍛錬の御蔭で、観測の範囲も最初と比べ広がり今じゃ50km以上も観れるそうさ。それに加え並列思考とやらを

使えるそうで、ますます能力が人外染みてきている。

「あなたの情けない顔が観えてしまったのです。

なので、損害賠償を請求します」

「俺の顔は法律で違反なのかっ!!」

どちらかというところが請求出来るんじゃないだろうか？
いや、しないけどさ。

映画も終わったので、体育館を出る時にごみを捨てる。

空は朱に染まっており、なんだかセンチメンタルな気分になりそうだが、そこは麻帆良。そんな事になるはずも無く馬鹿騒ぎを続けている。

俺達は目的も無く歩いていたが、途中で広場を

見つけたので、とりあえずベンチに座ってから目的地を決める事に。

「何か飲み物買ってこようか？」

「では、お茶で」

「あいよ」

近くに氷水に色んな飲み物を浸している出店があったので、そこでラムネとお茶を購入。氷水に浸されている。当然ながら水で濡れているので容器を服の袖で付いてる水分を拭き取る。

出店とフェリエが座っているベンチはそこまで距離は無いので、すぐに辿り着く事が出来た。

「ほいお茶」

買ってきたお茶を差し出すも、フェリエは反応しない。

もしや銘柄が気に入らないのか。と思ったが、そうではなくフェリエはずっと同じ所に視線を向けていて、そちらに夢中のようだ。

俺もフェリエの視線を追ってその先を見てみるとそこには学生であろう仲睦まじいカップルが居た。

「……」

「なあフェリエ」

「……何ですか？」

「何でそんなに熱心なんだ？」

今まではフェリエが言わない限り、こちらから聞こうとは思わなかった。フェリエは女の子だし、俺には分からない悩みもあるだろうと思うからだ。だけど、ここまで熱心になられたらさすがに俺も気になる。

「……」

俺が聞くと、フェリエは俺を見上げながら口を小さく開いては閉じ、開いては閉じを幾度か繰り返した後要約本題を口に出した。

「……恋とは何ですか？」

ざあっとひと際大きな風が俺達の間を通り過ぎた。

フェリエは、その言葉を発した後俯いてしまい、今表情は見えない。

（……まいった）

どんな質問でも答えてあげるつもりだった。悩んでいるものがあるのなら、一緒にそれをどうにかするのを手伝うつもりもあった。障害があるのならそれを叩き壊すのもやぶさかではなかった。だけど、

「どんなに調べても、どんなに知識を獲得しようとも

どんなに観察しようとも、まったく答えが観えないのです。
他の事は何でも観えても、それだけはどうしても観えないのです」

これは答えられない。

何故なら今まさに俺もその答えが出ずに悩んでいるのだから。
これじゃいつかのキスの疑問の時の焼き増しと変わらない。

(どうするべきか……)

俺が答えに窮していると、

「教えて……ください」

声を震わせながら、そこでやっとフェリエは顔を上げた。

「恋とは愛とは何ですか？」

その顔は他人が見てもいつもと変わらないように見えたと思う。

煙に巻いても良かった。適当な言葉を並べ立ててそれらしい
答えにしても良かった。

だけど、俺はフェリエの顔を見てそんな選択肢はすぐに放棄した。

すぐにそんな表情を晴らしてやりたかった。

表情を晴らしたいけど、適当な事は言えない。けれども、俺は答

えを持ち合わせてもいない。

(情けないなあ……ちくしょう……)

昨日といい今日といい。この自己嫌悪だけで自分を呪い殺したくなる。

だけど、そんな自己嫌悪何てフェリエには関係無い。ただの俺自身の問題。

「フェリエ——」

自分でも何の言葉を発するのかは分からなかった。
それでも、俺は何か言葉を発そうとして、

「待ってください」

だけど、俺の口から言葉は発される事無く、他ならぬ
フェリエの言葉に遮られた。さっきの頼りない声では無く
凜とした声に。そして、フェリエに数瞬遅れて俺も気づいた。

「ここを中心として数kmに渡り人払い及び認識阻害の
魔法が展開されました。隠密性はかなりの高さです。
それと、今現在監視の目はありません」

先ほどまで賑やかだった広場には俺達以外には誰も
おらず、ただ嫌な感じのする沈黙が広がっているだけだった。

日常が非日常に引きずり込まれるのは、いつも突然だ。

「了解っと」

飲み口を手刀で切断。一気にラムネをぐっと飲み干す。
炭酸がきついが眠気覚ましには丁度いいだろう。

容器から零れ出たビー玉が虚しく地面に落ちた。

「……っふう」

意識を切り替える。

体内の到の密度を跳ね上げる。眠気を払い戦闘態勢に移行する。
ボックスから鍊金鋼を取り出し、

「レストレーション」

復元。手甲と脚甲を装着。

この学園にこうも堂々と侵入してくるのだ、並大抵の
実力者ではないはず。フェリエの方も準備が出来たようで、体に充
分な

気の量を纏っている。先ほどの雰囲気は微塵も感じられない。

これならそこまでの心配はいらなさそうだ。

「来ます」

フェリエの宣言通りに転移の魔方陣が広場の中央に刻まれ、徐々
に輝きを増す。

こんな祭りの日に仕掛けてくる無粋な奴はどんな奴かと
気になりながら、見ているとそいつは魔方陣の中から姿を現した。

「おいおい……お前かよ。意外にも程があるだろ」

思わず俺の口からそんな言葉がもれた。

「知り合いですか？」

「まあ……な」

フェリエの問い掛けに対し俺は少し苦々しく言葉を返した。
ある意味会いたく無くてまた、ある意味会いたかった奴。

「君は昔と変わらないね」

憎たらしい程に整った顔。凍りついたような表情。
夕焼けの光を照り返す白髪。人形のような白い青年。

コスモエンテレケイア
完全なる世界所属。

そして、俺が初めて仕留めそこなった敵。

「お前には言われたくねえよ。アーウェルンクス」

マーシャル・アーツマスター
「久しぶりだね。武芸者」

麻帆良学園が創設されて63年
原作開始まで後25年

白き青年の襲来。

第三十話 『答えは出ずとも夜は明ける』 (後書き)

この先少し展開に無理が出るかもです。

自分でも無理かな〜と思いますが、もうこのまま進めてしまおうと思います。

第三十一話『選択の誤り』（前書き）

今さらですが文章にするのは難しい。

頭では思いつくんですが、文字にするととなと中々出来ないです。そんな悩みがある錬金鋼でした。

今話は少し短いかもしれません。

第三十一話『選択の誤り』

日の暮れた広場。茜色に染まるこの広場では本来ならば多くの人々が

集い、笑顔が溢れる場所だったが、今はその見る影も無く緊張した空気が漂っている。

その緊張感を醸し出しているのは三つの人影だった。

広場に広がる沈黙の中。俺はフェリエを庇う様に少し前に出る。

侵入者がアーウェルックスだと分かった今。元から

どんな相手でも手を抜くつもりなんて無かったが、尚更意識を集中させる。

「せっかくの祭りの日に無粋な奴だな」

とはいってもだ。あのままフェリエとの会話が続いていたら

俺も結果がどう転がっていたのか分からない。結局何を言ったらいいのか

俺自身さえ分かっていたいなかったのだから。その点だけは少し助かったのかもしれない。

だからといって感謝する事は未来永劫有り得ないがな。

「そういうものなのかい？ それは悪い事をした」

奴。アーウェルックスは誰が見ても分かるぐらいに、誠意の欠片も籠っていない形だけの謝罪をした。昔と変わらず表情の乏しい奴である。

「どうやってここに入った？　って聞くまでも無いか」

「愚問だね。ここに学園を築いたのは誰かと聞くまでも無く分かっているだろう？」

最初にここに住んでいたのは俺達が先だが、ここに

麻帆良学園を築いたのはメガロメセンブリアだ。そして、メガロメセンブリアには

コズモエンテレケイア
完全なる世界が多数入り込んでいる。

内側から手を引き、結界を誤魔化すぐらい造作も無い事だ。

（それに合わせて、麻帆良からの接触はないか）

麻帆良側といえば、今代の少し変わった学園長が頭に浮かんだが、それも

すぐに頭を振って打ち消した。あいつにも色々立場があるだろうし、仕方ない。

《フェリエ。エヴァの方の状況は確認出来るか？》

アーウェルンクスに向けて意識は集中しつつ、気づかれないように注意しながら念話で後ろにいるフェリエに連絡を取る。

俺が気配を探って捜す事も出来るが時間も掛かるし、フェリエの方が確実だ。

フェリエも突然の念話に対して目立った行動を
アクション
起こす事無く、念話に応じてくれた。

《……現在大多数の敵に襲撃を受けているようです。
マッシュ・アーツマスター
チャチャゼロも一緒に居ます。それと、武芸者とは何ですか？》

やっぱりそこに食いついてきたか。別に改めて言う必要も無いかと思って今まで何も言わなかったんだが、これはまた後で小言を

言われるだろうな。

《そうか。それと、その事については後で教える》

《分かりました。それとここから数キロ離れた場所に敵と思われる者が二名。現在は行動を停止しています。そちらへの対処はどうしますか？》

《そっちは一先ず放置する。先にこっちをどうにかする》

その二人は気になるが、まずはこちらだ。

エヴァの方にもやはり襲撃はあったようだ。

何も無ければそれが一番良かったんだが、現実はそのままで甘く出来ていないか。

《エヴァ！ チャチャゼロ！ そっちは大丈夫か？》

《そんな慌て無くても聞こえている！！》

《ヨウ ソッチハ楽シンデンノカ？》

どうやらそこまで、切迫した状況では無いらしい。

念話をした直後にエヴァの機嫌の悪そうな声と、いつも通りのチャチャゼロの声が頭に響いた。

エヴァの機嫌が悪いのは、大方機嫌良く祭りを回っていたのに

どこぞの輩に邪魔されたせいだろう。

《悪い。で、そっちの状況は？》

《どうもこうも無いわ！ 人がせっかく気分良く回っていたのに
ゴキブリのように急に湧いて出てきおって！！ ええい！

四肢を引き裂いて、そこらの鉢に活ける程度で済むと思うなよっ！
！》

《ケケケ 御主人ハ今機嫌ガ悪リイカラナ》

訂正。滅茶苦茶機嫌が悪かった。この戦闘の後、もしかしたら
麻帆良に奇怪なオブジェクトが新たに出来るかもしれん。

《ま、まあ程ほどにな。それと、俺達は悪いがそっちには行けそう
に無い》

本当ならすぐにでもエヴァ達を助けに行きたいが、目の前の奴が
そう易々と行かせてくれるとは思わない。それに、フェリエも
傍にいる。フェリエとアーウェルンクスとの相性は正直言って悪い。
フェリエの

気の総量ではアーウェウンクスの障壁を完璧に抜く事は厳しいだろ
う。それに、その事

を差し引いてもフェリエには悪いがまだ、実力ではアーウェルンク
スには及ばない。

だから、殊更エヴァを助けに行けそうに無い。

《それは、こいつらの出方を見れば分かっている。
だから、お前達はそちらに集中しろ》

《というと?》

《連中、明らかにこちらの足止めが目的だ。なるべく手早く片づけるが

こいつらを排除するのは時間が掛かりそうだ》

エヴァが敵を排除するのに時間が掛かると言う事は、その言葉通りなんだろう。

足止めが目的。相手が大多数。という点を除いてもあのエヴァとチャチャゼロ相手に時間を稼げるとは、並大抵の敵では無いのだから。

その襲撃者達は充分称賛に値する。

《気を付けろよ。本命はお前達だ》

《ケケケ 俺が行クマデソツチノ獲物ハ残シトケヨ》

《そっちもな。チャチャゼロはあんまり期待するな》

そう言い残して念話を終えた。あちらも戦闘中だから長時間の念話はやめた方がいいだろう。

「相談は終わったかい?」

どうやら俺の配慮はまったくの無意味だったみたいだ。

念話に気づいていたのに見逃したのは何か理由でもあるのか。

「わざわざ待ってくれてどうも。というか今更俺に何の用だよこっちが捜しても現れなかった癖にこんな時に出てきやがって」

完全なる世界の手掛かりを探していた時に勿論俺は

アーウェウunksも搜した。アーウェウunksが情報を吐くのかと、問われれば

可能性は低いと答えざる得ないが、それでも、下手な情報よりこいつの方が

完全なる世界の核心に近いはずだからだ。

だが、俺の搜索も空しくアーウェウunksを見つける事は出来なかった。

見つける事が出来たのは、完全なる世界に関する複数の下部組織や武器商人ぐらいだ。当然その程度の奴らは大した情報も持っていない。

その二つは幾つも破壊してきたが、実際完全なる世界に影響があつたかは定かではない。

そして、今日。俺の搜索を嘲笑うかのようにアーウェルunksはあっさりと俺の前に姿を現わした。愚痴の一つや皮肉の一つぐらい言いたい物である。

「僕が君達に接触せざるえなかったのは、他ならぬ君達自身のせいだよ」

「は？」

「やれやれ。その様子だとこちらの刺客は本当に無駄だったようだね」

どうやら完全なる世界は俺達に対して刺客を送り込んでいたらしい。ここに住んでから襲撃を掛けてきた奴といえ、麻帆良の

敵対組織と麻帆良勢の過激派の連中ぐらいだ。言われてみればたまに襲撃者の
中でも他の周りの奴らと比べて気色の違う奴がいくらかはいた気は
するが……。

残念だが詳しく思い出せそうにない。

「だけど……」

そこで、言葉を切り何故かアーウェルンクスは俺と
後ろにいるフェリエに交互に視線を向けた。何処となく
フェリエに似ている眼が俺達両方を射抜く。

「何ですか？」

フェリエは視線を受け目を不愉快そうに目を顰め、
アーウェルンクスは少しだけ目を細めた。

「他の事は無駄では無かったようだ」

「何言ってるんだお前？」

「いや、何でもないさ」

その無表情からアーウェルンクスが何を考えているのかを
窺い知る事は出来そうに無い。だけど、さっきの視線。
どう考えてもいい予感はない。

《フェリエこれ付けとけ》

エヴァに造ってもらった魔法抵抗力を上げる腕輪を

後ろ手でフェリエに渡す。アーウェルンクスの得意魔法は土。そして、奴が良く使う魔法に石化魔法があるので、これがある方が色々助かるはずだ。

フェリエは無言で俺の腕から腕輪を外し、腕に付けた。

《先の二名と眼前の一名魔力値上昇。展開する魔法は広域結界のようです》

「そろそろだね……さて」

アーウェルンクスが静かに言葉を切り出すのと、フェリエが俺に念話を出すのは、ほぼ同時だった。

「問答はここまでにしようか」

そして、世界は異界に切り替わった。比喩ではなく本当に世界は変わった。

最初に感じた印象は物寂しいというものだった。空はどこまでも灰色に染まり、灰色の空には幾つもの巨大な石柱が浮かんでいる。

地面には足首まで水が満ちていた。この程度の水量なら行動に支

障は
無さそうだ。

《結界の効果は術者の補助。こちら側への干渉は見られません》

上空にある石柱の使い道があるのは分かる。だが、奴の得意魔法は土。

なぜ、自分の益にもならない足元に水があるのかが分からない。でも、

（嫌な予感がする……。時間は掛けない方がいいか）

こちらへの悪影響が無いのならそれで充分。

（どんな補助なのかは分からないが……）

無言で体中の剄の密度を高め、身体能力を跳ね上げる。

自身の体に先ほどとは比べ物にならないほどの力が湧き出しているのが、自分でも良く分かる。

一一一一一 ないりきけいかっけい 内力系活剄の変化…… せんけい 旋剄。

足元の水を跳ね上げる。

初動も予備動作も無く一気にトップスピードにまで加速する。移動した軌跡に沿って激しく水飛沫を上げながら、

アーウエウンクスの眼前へと移動する。

《補助の効果は――》

フェリエが結界の説明を始めたが、俺が
アーウェルンクスの方に先に辿り着くのが早い。

（一撃で潰してしまえば関係無い）

前回の戦闘でアーウェルンクスの障壁の硬さは身に染みて理解している。

だから、今回は最初からその硬さを踏まえて、その上で尚、障壁ごとアーウェUNKスを叩き潰せる程の剋技を繰り出す事にした。

がいりきけいしょうけい
はじょうい

外力系衝剋の変化……破城槌。

限界まで引き絞った力を解放するようにアーウエルンクスに打ち付ける。引き絞った弓を放つようにその拳は一氣にアーウエルンクスの体ごと障壁を破壊しようと直進する。そこまで来て、遅れてフェリエの説明が聞こえた。

《——》 転移魔法と幻像です デコイ 《——》

フェリエの念話がやけに遠くに聞こえた。

「君の方から離れてくれるとはね。手間が省けたよ」

アーウェルンクスの声がひどく耳障りだった。

拳が直撃すればアーウェルンクスの体は四散し、骨は砕け内臓はミンチになるだろう。だが、現実はそうはならなかった。

確かに拳は直撃した。拳は呆気無くアーウェルンクスの体を貫通。アーウェルンクスの体は破壊した。だが、破壊した割には余りにも呆気無さ

過ぎて有り得ない感触だった。そこで、アーウェルンクスの体がぐにゃりと

形を崩し、次の瞬間には体が飛び散った。飛び散った物は肉片でも骨でも無く、ましてや血でも無かった。

「水っ!?!」

アーウェルンクスの幻像デコイを破壊した程度では剄の籠った拳は勢いはまったく殺せず、そのまま拳は突き進み地面に衝突。初めは小さなクレーターが

地面に出来、次に連続して破壊音を響かせながらクレーターを拡大していく。

「しくじったっ!!」

だが、そんな事はどうでもいい。焦躁に駆られながら慌てて後ろに振り返る。

俺が剄技を放ち、そして、地面に叩きつけ、後ろに振り返るまでの時間はおよそ一秒も掛かっていない。

もしアーウェルンクスが、幻像デコイを破壊している隙を突いて俺に対して、攻撃を仕掛けてきていたら、それに俺は難なく対応しただろう。

そんな程度で死ぬ様じゃいくら命があっても足りない。

「相手が複数の場合まず敵を分断する。基本中の基本だ」

「涼！」

だけど、フェリエにはまだ無理だ。

アーウェルンクスにとって、フェリエを拘束するには、それだけの時間があれば充分だった。アーウェンクスは後ろからフェリエの腕を捻り上げ拘束している。

（どうする！？ 衝剄を放つか？ 駄目だ。生半可な衝剄じゃアーウェルンクスは動じない。それに、アーウェルンクスとフェリエを、盾にするように拘束している。仮にフェリエに当たらない様に撃った

としてもアーウェンクスが対応しない訳が無い。どう考えてもフェリエに

当たる危険の方が高い。……直接近づいて助けるしかないか）

瞬間的に頭の中で対応を弾き出した後
俺はフェリエを助けに足に剄を込め駆けだそうとしたが、

「……っ」

アーウエウンスに腕を強く捻られ痛みに顔を歪めた
フェリエを見て、一瞬だけ俺は足が止めてしまった。

それが致命的な遅れだった。

「そして、先に弱い者を倒す。これも基本だ。
先にこちらから片づける事にするよ」

アーウエウンスとフェリエの周りに、じわじわと薄い膜が
浸食し始め風景が歪みだし、二人の姿を覆い隠そうとする。

（別の結界！？）

その事象を認識した瞬間に止めた足を
前に出してフェリエに向かって走った。

「フェリエ！！」

フェリエまでの距離が遠いのが煩わしく
思いながら必死にフェリエに向かって手を伸ばす。
だけど、その手は、

「りよ——」

掴む手は何処にも無く、俺の手は虚しく空を掴んだだけだった。
二人の姿は幻だったかのように掻き消え、後には灰色の世界が広がるのみ。

結局の所俺は選択を誤ったのだ。

相手が何か行動をする前に潰す。この戦法は別に間違っていない。
そう。間違っていないだけだ。正しい訳ではない。

「くそがっ!!」

半分はアーウェルクスへの敵意と殺意。もう半分は自分自身への
憤りの籠った声は誰にも聞かれる事無く異界の世界に響いた。

麻帆良学園が創設されて63年
原作開始まで後25年

分断される仲間達。

第三十一話『選択の誤り』（後書き）

人の話は良く聞きましょうってことですね。

では、用語説明です。

破城槌はじょうづい…劉を乗せた拳を対象の同じ箇所^{はじょうづい}に連続で当てる。後になればなるほどその威力は上がる。（オリジナル劉技）

ネギま！の原作を読んで思ったのですが、フェイト水の幻像デコイって初っ端なら不意を付けれますよね。というか何故使えるのかが分かりませんが。

それと、この話を除いて少し加筆修正をしました。
暇があれば読んでみてください。

第三十二話『祭りの終わり』（前書き）

本当に文章の量が安定しない。今回は結構長いかも。そして、主人公を少し頭悪く書きすぎたかもです。そこは生温かい目で見てください。

第三十二話『祭りの終わり』

「っ……。焦ってもしょうがない。落ち着け俺」

焦りは思考を鈍らせる。焦っていい事など何もない。
一つ息を吐いて頭を冷やす事に努める。

アーウェルンクスの得意魔法は土。これは間違いない。

昔殺し合ったあの時も、アーウェルンクスに手を抜いた

様子は無かったし、そんな余裕も無かったはずだ。第一手を抜く理由が無い。

だけど、先ほどアーウェルンクスは実際に水の幻像デコイを使用した

（この結界のおかげか？）

いや、それは無い。フェリエがこの結界の効果は補助だと

言っていた。となるとアーウェルンクスは元から水の幻像デコイを

使えたのだろう。そして、おそらく水の転移魔法も。だが、これだけの結界を

一人で展開しながら、戦闘を行えるとも思えない。フェリエが言っていた

敵らしき二名の協力ありきでの展開だろう。

（くっそ……何してんだよ俺は）

戦場で有り得ない事なんて無いのに、あらゆる可能性を考えなければならぬのに、

型に嵌った考えをした結果がこの様だ。その代償が、自分の命なら構わない。

戦場で、知らなかったから死にましたは言い訳にすらなっていない。

ただの自業自得だ。だけど、この結果は認められない。こんな結果は。

「認めてたまるかつ！」

一つ声に出して、目を瞑り頭の中をクリアにする。

意識を先鋭化する。いつもより周囲の気配がはつきりと分かる。

一片もの取りこぼしすら無いように、自身の索敵範囲の限界まで、隅から隅まで念入りに探る。一秒一秒がひどく長く感じる中、俺は遂に一つの手掛かりを見出した。

「あそこか！」

――――ないりきけいかっけい内力系活劉みかがみわたの変化……水鏡渡り。

景色が高速で後ろに流れていくのを視界の端に収めながら超高速移動を為し、見つけた手掛かりまで跳ぶ。

結界を展開するのは元となる基点が必要だ。アーウェルンクスが、最初に張った物を現実との位相を分断する結界としたら、次に張った結界は位相をずらす結界だ。エヴァに習ったのだが、この類の結界には基点があるらしい。それを破壊しない限り結界から解放される事は無いが、逆に言えばそれさえ破壊してしま

ええ。

（フェリエに辿り着く事も出来る！）

辿り着いた場所は先の場所とさほど変わらない場所だったが、俺はその場所から微かな違和感を感じた。

「ここで間違い無いか」

エヴァ達魔法使いならば、基点に術式介入をして楽に破壊するんだろうが、もちろん俺にはそんな知識も無ければ、技術も無く、ましてや魔力すら無い。

そんな俺に取れる手段と言えば唯一つ。

「力尽くのみ」

魔法と剋。

扱う力の中身は違えど、所詮どちらもただの力。ならば力の大きい方が打ち勝つ。当然の事。

基点を破壊する為に衝剋を放とうとしたが、その途中でじろりと空中に目線を向ける。何でこう次から次へと来るのか。

「あのさあ……今俺急いでんだよ。だからさ」

俺は結界の基点所か、何も無い見当違いの場所に向けて腕を振り衝剋を放った。衝剋はそのまま進んだが、突如放った衝剋は何も無い空間で弾かれたように進路を変えた。

「邪魔すんなよ」

虚空に声を投げ掛けると、空間から滲み出すかのように二人の男が姿を現した。

一人は背の高い痩せている長髪の白い髪の男。下に黒いズボンを履き、上は白い

ローブを着ている。もう一人も似たような体型だが、こちらは長い髪を後ろに

流しており、袖は肩口までしかなく、腰の辺りに二つにわかれている長い布のような物が付いている。

（こいつらがフェリエの言っていた二人か）

だとしたら、こいつらを戦闘不能にしたらこの結界を維持するのは難しくなるだろう。

「ここから先は「邪魔」――！！」

一歩で空中まで跳び上がり、宙でくると体を回転させる。その勢いの

ままローブを着ている男を言葉の途中で蹴り落とす。

（今は口上何て聞いている暇は無い）

咄嗟の反応は間に合ったのか、間に腕を挟んでいるが、蹴り落とした

感触からして骨が砕けているだろうから、もはや片腕は使い物にならないだろう。凄まじい速度で地上に向かって落下していく

男を気に掛ける事なく、俺はボックスから一つの鍊金鋼を出す。

「レストレーション」

軽く鍊金鋼を握り復元。光が収まると、そこには、長い柄。その先に湾曲した

幅広の刃が付いた武器。青龍偃月刀が現れた。俺は復元してすぐさま青龍偃月刀を半回転させ刃を下にし、柄尻を上にする。そして、柄を握っている手を離し、それに合わせて、俺も足から衝剄を放ちもう一回転。

「……………くたばれ」

青龍偃月刀の柄尻を自身の鬱屈な感情を加味して蹴り飛ばした。空気を引き裂きながら、先の男を追うかのように青龍偃月刀は地面に急降下していき、地面に着弾。激しく水をぶちまけた。

「やるな」

男の生死を確認する前に、もう一人の男が殴り掛かってきたので、手の甲で外側に弾くように拳を受ける。がら空きの腹に拳をいれようとしたが。

「……！」

直後悪寒を感じたので、その直感に従う。脚で男を蹴り飛ばし距離を取る。距離を取った刹那。目の痛くなるような光が男から発生し、無造作に電気が撒き散らされた。

下は一面水。水は電気を通す。

そんな事小学生だって知っている事だ。

（降りる訳にはいかないか）

空中に氷の床を出現させ、その場に着地したが、

「『水精大瀑布』」

休む間もなく、数十トンはある大質量の水が上空に発生し

降り注いできたので、大きく前方に跳んで回避する。背後で水が落下する

音を聞きながら、地面に突き刺さった青龍偃月刀を回収。切っ先を見てみると

少量の血が付着していた。先の攻撃で分かったが、手傷を負わせる事は

出来たが、仕留める事は出来なかったようだ。

（鬱陶しい……）

内心苛々しながらも、背後から飛来してくる電気を纏った

多数の水の槍を、空中に氷の床を造り避け続ける。宙を跳び回りながら

回収した青龍偃月刀を待機状態に戻し、ボックスに仕舞う。

敵二人の状態を確認してみると、それなりの傷を負ってはいるが、まだ

戦闘続行は可能なレベル。実力はアーウェルンクスより少し劣る程度だが、

幾ら二対一だからといって勝てない相手ではない。

だけど、この時間が無い時には限りなく邪魔だ。

（使うか？）

昨日エヴァと仮契約した時の手に入れた仮契約カードの使用を検討する。だけど、まだ一度も試していないから、どんな効果のアーティファクトなのか分からない。こんな事になるのなら昨日の内に別荘でも使って一度試しておくべきだった。とりあえず今は保留にしておく。

思考を進めながら、回避から一転攻勢に出る。

まずは片腕が使えない男から片づけようと思ったが、間にもう一人の

男が入る。拳による鋭い突きを、破裂音とともに片手で受け止め、相手の

脇腹に向かって蹴りを入れようとするが、こちらも鈍い音を響かせて腕で止められる。ならば、

「っ」

男の手を掴んでいる手に力を籠める。万力のように

拳に力を加えていくと、骨の軋む感触が掌から伝わってくる。

男は必死に離れようとしているが、その腕はぴくりともそこから動かない。そもそも力で俺と張り合うのが間違いだ。

「くっ」

拳の骨が碎ける直前。力で敵わないと悟ったのか、男は腕を

外す事を諦め、先ほども使用した体から電気を撒き散らそうとしたが、そんな事を二度もさせる訳にはいかない。口を開き呼気を吐き出しながら。

「かあっ!!」

――――外力系衝剄がいりきけいしゅうけいの変化……ルツケンス秘奥ひおう・咆剄殺ほうけいさつ。

口内から分子構造を崩壊させる振動波を吐き出した。

咆剄殺ほうけいさつは男の体から出掛かっていた電気を

散らし、さらに突き進み男自身をも破壊するかと思ったが、男の上半身は

破壊される事は無く、替わりに凄まじい勢いの水流が横から男を攫っていった。

少し抵抗があつた後ぶちっと、何かが千切れる音と共に掴んでいる腕が力を無くした。

「予想以上ですな……」

助ける為とはいえ、間接的に仲間の腕を引き千切ったとは

思えない程の冷静さだった。助けられた側の男は肩から先が無く、肩口は少し焦げている。水だけの影響で千切れた訳では無いようだ。

それに、あれ程の勢いの水流だ。当たった事による体怪我も軽く無いだろうに

男はまだ戦闘態勢を取っている。

「ほんつとに……邪魔くさい」

本当に厄介以外の何者でもない。

時間を掛ければ掛ける程苛々が増していく。

唇を少し噛み、掴んでいた腕を男達に向かってぶん投げ、真正面から敵に飛びこんだ。

傷こそちらは負っていないが、この状況はよろしくない。

あちらの目的は俺を殺す事では無く、俺をフェリエの所に行かせない

為の足止めだ。そして、今の所それは成功している。

ここに入ってから十数分。外部からの接触は依然無い。エヴァが来る気配も無い。それどころか念話すら出せない。完全に外部への干渉を遮断している。

敵は満身創痍と言ってもいい状態だが、防御と回避に専念して、こちらからの攻撃を耐えている。普通なら動くだけでも激痛が走るのだが、こいつらもアーウェルンクスと同じで痛みは感じないのか。

（それも時間の問題だが、今は時間が惜しい。一秒でも早く片付けるには……）

そこまで考えて俺は、自分で思った事に引っかかりを覚えた。

（外部との干渉を遮断……）

こちらからも干渉は出来ないが、外側からの干渉も出来ない。
ここには奴らしいかない。すなわち他の人の目も監視の目も無い。
ここが麻帆良だろうが、何処だろうが俺が賞金首だとばれる心配も無い。

「ああゝくそ。ついさっき考えを改めばっかりなのに
さっそくこれか……。つくづく自分が嫌になる」

冷静だ冷静だと思っていたのは、ただの俺の勘違いで
傍から見ると冷静でも何でも無かったのかも知れない。

「何を」

――――
――がいりきけいしょうけい外力系衝剋かれんの化鍊変化……ふうれつけい風裂剋。

疑問の声に言葉を返さず、代わりに剋技を返す。周囲の風を
巻き込んだ剋の弾丸は、腕を交差させ防御した男達を容易く吹き飛
ばした。

少しの時間を稼ぎ終えたので、手甲と脚甲を待機状態に戻しボツ
クスに仕舞う。

「初めからこれを出しとけば良かった」

もう何度目か分からない愚痴を零しながら、入れ替える様に
一つの鍊金鋼をボックス出す。実戦でこの鍊金鋼を見たのは本当に
久しぶりだ。

かれこれ一世紀近くは出していないかもしれない。

「マッシュアル・アーツマスター
武芸者が有名ならしい」

けどさ、遺憾な事にもう一つ俺には二つ名があるんだよ」

そこまで告げて、ようやく向うも気づいたようにで
慌てて攻撃を仕掛けてきたが、少し遅かった。

「ジャッジ
裁断者とかさ。レスレーション」

鍊金鋼は爆発的に質量を増し復元する。

革製の手袋が現れ、その指先から数えるのも馬鹿らしい
程の鍊金鋼製の糸が溢れ出る。鍊金鋼の復元より少し遅れて、
水の槍と雷の槍が飛来してきたが、指先をぴくりとも動かさず
鋼糸を縦横無尽に動かして攻撃を全て叩き落とす。

諦め悪く次々と飛来してくる攻撃を捌きながら、
上空に着実に陣を構築していく。空が鋼糸に纏っている剽の光によ
って
照らされていき、やがて空を埋め尽くす程にまで鋼糸は広がってい
く。

「久しぶりだから、多少のやりすぎは大目に見てくれよ」

———がいりきけいしやうけい外力剄衝剄の変化……そうげんきよく操弦曲・けんらんぶどう絢爛舞踏。

そして、天から鋼糸の雨は降り注いだ。

地面に無数の穴を開けていきながら、鋼糸は全てを蹂躪していく。人が豪雨を避ける事を当たり前のようにならないように、これもまた

当たり前のように避けられない。男達は避ける暇どころか、迎撃も防御もする暇も無く鋼糸の雨に飲み込まれていった。

「ん？」

順調に相手を鋼糸で刺し貫いていたのだが、唐突にその感触が無くなった。索敵するのと平行に鋼糸を周辺に広げて探してみるも、周囲には影も形も無い。

「……逃げたか」

あれ程痛めつけたのだ、しばらくはまともに戦闘等出来るはずもないだろう。

だが、俺にとっては実際の所どうであろうと僥倖。消え去った敵に構う事無く、鋼糸を動かし結界の基点を破壊する。

ガラスが割れるような甲高い音を響かせて、空間ががらがらと崩れ落ちていく。状況が違えば、中々に綺麗な様子だったが、今の俺に景色を楽しむ余裕は無い。

そして、全てが崩れ去った瞬間。気配を探る必要も無く俺の視線は一点に集中した。いや、したというよりなったと言った方がいいだろう。

――所々に傷を負っているが、人差し指を突き出しているアーウェルリンクス。

――目に見える傷は無いが、アーウェルリンクスに膝を着くように項垂れているフェリエ。

――がいりきけいしやうけい外力剽衝剽の変化……そうげんきよく操弦曲・なだれくず雪崩崩し。

思考なんて必要無かった。
必要だったのは己の体だけだった。

――ないりきけいかっけい内力系活剽の変化……みかがみわた水鏡渡り。

意識の外の動作で行われたそうげんきよく操弦曲は正しくその

役目を果たし、フェリエの周囲に蜘蛛の巣状に鋼糸を張り巡らした。

剽技を極短時間で連発したせいで、体に負担が掛かるかもしれないが、そんな事知った事じゃない。

左手でフェリエを守り、両足で二人に接近する。

鋼糸を円錐状に組み上げて相手に投射。

「無様に裂けてろ」

――――がいりきけいしやうけい外力剽衝剽の変化……そうげんきよく操弦曲・は跳ね虫。

そして、右手でアーウエルンクスを殺す。

円錐がアーウエルンクスに向かって疾走する。

円錐はアーウエルンクスの体に突き刺さり、体内に潜り込んでいく。

完全に鋼糸が体内潜り込んだ時に変化が起き、円錐の形が凄まじい速度で

解きほぐされていく。斬線も何も無く無秩序に体内から切り裂いていく。

「あの二人でも傷一つ付けられないとは。ますます君は手に負えなくなってきたね」

またもや水の幻像デコイが崩れ去り、その後方の

水面からアーウェルンクスが草木が生えるかのように出てきた。アーウェルンクスの戯言を無視し、前方の空間一体を鋼糸で薙ぎ払うが、結果は変わらず。本体を捉える事は出来なかった。

フェリエの前に立つが、念には念を入れて雪崩崩しは解かない。なだれくず
これがあれば生半可な攻撃を通す事は無いからな。

「あの二人は片づけた。この結界はいずれ解ける。
解けた瞬間にお前は殺す」

現に灰色の結界には罅が入り始めている。長くは持つまない。
この結界が解ければ水の幻像デコイの連発は出来ない。
その時に鋼糸で一氣に畳み込む。

「それは怖い。じゃあ僕はそろそろ引く事にするよ」

「状況分かってんのか」

自身の危機に瀕してるのに、まるで他人事のように
言葉を続ける。今回はフェリエもいるのに転移で
逃げ切れるとも思ってるのか。

「それもそうだね」

アーウェルンクスはおもむろに右手を上げ、

「なら、これはどうだい」

軽く振り降ろした。

何処も変わった所のない動作。だが、変化は劇的だった。

目に見える範囲に浮かぶ巨大な石柱全てが、音も無くこちらに向きを変え、落下してきたのだ。上空から巨大な石柱が視界を埋め尽くす

程の本数で落下してくる光景は、異常を通り越して笑えてくる。

「いや、笑えないか」

一一一一一 がいりきけいしやうけい 外力剋衝剋の変化…… そうげんきよく なぎぐも 操弦曲・薙蜘蛛。

長大な網目状の鋼糸を展開し空を一閃する。

石柱を鋼糸であえて切断せず、こちらに飛来してきた石柱を残らず掬いあげていく。鋼糸の網に掬われていく石柱は瞬く間に数を増していき、最後には出来の悪い積み木のように石柱は網の中で積み上がった。

「潰れろ」

そこから更に遠心力を加えた出来の悪い積み木を高速でアーウエルンクスに叩きつける。鋼糸の網と石柱は圧倒的な重量と範囲、速度でアーウエルンクスを押し潰そうと殺到するが、

「ここまでだね」

世界は崩壊し幻想の石柱は姿を消した。

石柱は消えたが鋼糸は勿論健在しているので、このままでは麻帆良に甚大な被害が出る。瞬時に鋼糸の形態を変え、アーウェルリンクスを逃がさないように隙間無く球状に囲みこみ一気に範囲を狭め圧殺。予想通りアーウェルリンクスの本体は球体の中には無く転移した後だった。

「フェリエ！ アーウェルリンクスの場所は何？」

以前は逃がしたが、今回はここで仕留める。
もはやあいつの行動は看過出来ない。

「……」

「フェリエ？」

だが、フェリエはいつものように淡々と言葉を返す事は無く、沈黙を保っているだけだった。

「どうしたんだ？」

「そんな——していい——たい——ぜ。私が——」

常人離れた俺の聴力でも擦れてしか、聞こえない程の音量でフェリエが何かを呟いた。独り言って訳でも無く本当に無意識で漏れてしまっているようだ。

「おい」

フェリエの周囲に張っていた鋼糸を解除し、鍊金鋼も待機状態に戻す。

様子のおかしいので、フェリエの肩を揺そうとし肩に触れる。

「————っ!!」

反応は早かった。肩に触れていた手は乾いた音を響かせて素早く払われた。こちらを意識してというより反射的な行動のようだ。

「あ————っ」

フェリエはすぐに自分の行動を後悔したように顔を伏せた。手を叩かれたのは気にしないが、それとは違う所に眉を顰めた。

《リョウ！ 聞こえるか！？》

様子の違うフェリエに対してどうするかと悩んでいるとエヴァから念話が届いた。

《良かった。無事だったんだ》

《良くないわ!! 二人程仕留めそこなった。ちっ！ 思い出しても忌々しいっ！》

《俺ハ結構楽シカッタケドナ》

《何はともあれ二人とも無事で良かったよ》

《ふん！ それで、そっちはどうなんだ？》

《あゝ》

念話をしながらちらっと視線をフェリエに向ける。

この様子じゃとてもアーウェルンクスを追える状態

じゃないな。悔しいが今回もアーウェルンクスを仕留める事は出来なさそうだ。

《悪い。こっちは一人も仕留められなかった》

あの二人は瀕死に追い込めたが、殺す事は出来なかった。
今回の成果は散々たるものだ。

《お前が仕留めそこなうとはな。

明日は魔法の射手の雨でも降るのか》

《そんな天変地異が起きてたまるか！

とにかく、今から俺とフェリエは家に戻るわ》

《ああ分かった。私も活け終えたら戻る》

《マタ後デナ》

そこで念話は切れた。というかエヴァ敵を

活けるの本気だったんだ。これはまた後処理や隠蔽に
学園長が苦勞しそうだ。

「フェリエ。今日はもう帰ろう」

「……………はい」

俺が二人と念話している間に少し落ち着いたのか
間が空きながらも返事をしてくれた。

ゆっくりと立ちあがりフェリエは足取り重く家に向かって歩き始めた。

その少し後ろを歩幅を合わせて歩く。周囲はもう人払いが解けた
ようで
活気が戻ってきている。俺達はいにく今祭りを楽しめる気分ではないが。

「……………今更。……………もう今更なんです」

俯いたままフェリエはまた何事かを呟いている。
ここからでは表情は見えない。

（何であんなに…………）

さつき垣間見たフェリエの瞳を思い浮かべる。
あの目は腐る程見た事がある。敵に止めを刺そうとする時。
圧倒的な力を見せつけた時。
だけど、フェリエにあの目を向けられたのは初めてだった。

（怯えた目をしてたんだろう）

ぴしっと何処からか、ひびが入るような

音が聞こえた気がした。

麻帆良学園が創設されて63年
原作開始まで後25年

二度目の逃亡を許す。

第三十二話『祭りの終わり』（後書き）

厨二的な文章を書いてみたいです。

さて自分の戯言は無視して

用語説明を。

風裂剄ふうれつつけい…脚で周囲の風を巻きこんで剄の弾丸として放つ。本来は型の最後に放つ技だが、単体でも繰り出せる。

操弦曲そうげんきょく・絢爛けんらん舞踏ぶたう…空から鋼糸による無数の刺突の雨を降らす。（

オリジナル剄技）

操弦曲そうげんきょく・雪崩崩しなだれくず…防衛対象の周囲に蜘蛛の巣状に鋼糸を張り巡らし、その表面に膜状に張った防御剄とともにあらゆる攻撃を散らす。

操弦曲そうげんきょく・跳ね虫はむし…鋼糸を円錐形に組み上げて相手に投射、体内に潜り込んだところで形を解き、体内から切り裂く。

操弦曲そうげんきょく・薙蜘蛛なぎぐも…本来は飛来する攻撃を搦めとして軌道を変更させる。本作品では少し違う用途で使用した。

今さらですが原作レギオスの文を少し引用しているのは、やはり記載しておくべきでしょうか？ご指摘があれば記載しようと思います。

第三十三話『再び』（前書き）

前話は不評だったようで、みるみるとお気に入り登録が

減っていききました。前話は鋼糸を活躍させたかったという錬金鋼の願望がもろに出てしまった話でして、展開に無理があったと思います。

まあもう投稿してしまった物はしょうがないのでこのまま進めようと思います。

相も変わらず話の展開が遅いですが、読んでくださると嬉しいです。

誤字・脱字があればご指摘お願いします。

第三十三話『再び』

梅雨の季節だというのに珍しく快晴の今日。

俺は朝早くからログハウスの裏手にある広場の

切り株の上で目を瞑り座禅を組んでいた。

「ふうー」

深く息を吐き集中する。殺^{さつけい}剄を行いながら剄を練る。殺^{さつけい}剄をして

剄を練るということは、風船に空気を入れるのに似ている。殺^{さつけい}剄が

風船で、剄が空気だ。風船の強度が

許す限り、空気はそこに入り続ける。つまり、簡単に言えば風船を割らずに

どれだけ空気を入れていくかという事。この剄の流れを体外に一切漏らさずに

剄を練るのは最上級の効率的な錬剄法だ。

(にしてもな……)

三日間の祭りが終わって翌日。麻帆良祭二日目俺とフェリエが自宅に

着いてすぐに、フェリエは自室に籠ってしまい俺達は会話を交える事は無かった。

何故そんな状態なのか聞きたくもあったが、その度にフェリエのあの怯えた目が頭にちらついて結局聞き出す事は出来なかった。

俺達が帰って来てから間を置かずに、エヴァとチャチャゼロも帰宅。

二人とも衣服が少し擦り切れている程度で、大きな怪我は無かった。

二人の無事にほっと一息を付いていた矢先に学園長から襲撃に関する事を聞きたいという旨の連絡があったが、その日は色々あったので

簡単に報告だけして、後日改めてそちらに伺う事にした。

フェリエはあれから顔を一切見せず、飯の時間になっても、翌日になっても

部屋から出てくる事も無かった。エヴァに訳を聞かれたが、そんなの俺自身も知りたい事だったので、正直に分からないと答えるしかなかった。

とりあえず飯は食べて貰わないと、心配なので飯は扉の前に置いておいた。

時間が経てば綺麗に無くなっているんで食べてはくれているのだろう。

ちなみに三日目の祭りは行かなかった。エヴァとチャチャゼロはともかく

フェリエは部屋から出てこないし、俺もそんな気分ではなかったのだ。

「つと。そろそろ時間か」

今日の八時頃に伺う予定なのだが、少し早くに目が覚めてしまった。時間が余っているならば、鍛錬でもするかと思って、今の今まで鍛錬を

やっていたのだが、いい具合に時間は過ぎ、ボックスから出した懐中時計の

針は気が付けば六時半を指している。殺剄^{さっけい}を解き、今まで

練り上げていた剉をゆつくりと空に向かって放つ。こうしておけば放出する

しかない剉を誰にも気づかれることなく処分出来る。

腰を上げ、ズボンに付いている木屑を手で払って家に向かって歩き出す。

とはいってもここは裏手にある広場なので家は目と鼻の先。

一分も掛かる事無く着くのだが。

「ただいまっ」と

まだ二人とも寝ているかもしれないので、静かに扉を開け

ゆつくりと扉を閉める。そのまま、台所に直行し念入りに手を洗う。

手を洗い終えたら、地味な色のエプロンを身に着け三人分の朝食の調理を開始する。

今日は白米と味噌汁と青菜のおひたし。簡単な物だが、こんなもんでいいだろう。

「ごちそうさま」

出来はまずまずと言った所。自身の分は食べ終え、後の二人分はラップを

してテーブルの上に置いておく。時間が経つと朝食が冷えてしまうかも

しれないが、そこはエヴァの魔法で温め直してくれば問題解決だろう。

魔法様様である。

食器を洗っていると、二階へと昇る階段から誰かが降りてくる気配があった。時間的に言えば、エヴァが起きてくるはずは無

い。

チャチャゼロにしては足音が重い。ということは当然ながら、

「おはよう御座います。今日は早いのですね」

降りてきたのはやはりフェリエだった。フェリエにしては珍しく目の下にうっすらと隈を作り、眠そうに目を擦っていた。

服装は最後に見た時と違いちゃんと寝巻に変わっている。

「おはよ。今日は午前中に人と会う約束があつてな。

飯はそこに置いてあるから」

「分かりました」

二日振りに会ったというのに特にいつもと変わらないやり取り。だけど、俺はそのやり取りに違和感を感じざる得なかった。

だが、その事をフェリエに指摘せずに、着々と片付けを進める。

聞いてもいいのだろうか。理由を聞けば何か変わるのだろうか。

それはいい方向に変わるのだろうか。でも、フェリエが自分から言わないのは言いたく無いからじゃないのか。無理して聞く必要はないん

じゃないだろうか。でも、もしかしたら聞いて欲しいじゃないだろうか。

遅々として進まない思考に囚われながら、片付けを進めているとあつという間に全てが終り、その頃にはそろそろ家を出なければいけない時間になっていた。

「はあ……んじゃ行ってくる。エヴァが起きてきたら

飯は温めるように言っといてくれ」

時間も来たので一先ずこの事は置いておき、外出の準備を手早く済ませて、ドアノブに手を掛けながら後ろを振り返ながら言う。

「はい」

結局フェリエは俺と目を一度も合わさなかった。

麻帆良祭が終わり通常通りに登校中の学生達に混じりながら学園長室に向かって歩く。これが遅刻間際なら、それはもう人の洪水と言って

いいぐらいの学生が登校しているが、今はまだ時間に余裕があるので、割と

穏やかだ。道中に学生相手に軽食を売っている人がいる為、その人から

サンドイッチを購入。もともと食いながら歩いていると、次第に俺に向かって突き刺さる視線が増え始めた。

（相変わらず慣れない……）

極力視線を意識しないように目的地に歩を進める。

何を考えたのか、今の学園長は女子中等部に学園長室を構えている。いや、本当に何を考えているんだろう。

仮にも関東魔法協会の理事長なのに女子中等部に居るとは

いいのだろうか。

女生徒達の視線に晒されながら、やっと女子中等部にまで辿り着いた。

受付の人に用件を告げ、入校許可証を貰い校舎に足を踏み入れる。あまり慣れたくは無いが、それなりの頻度でここに来ているので学園長室への道順は大体覚えてしまっている。

「入っていいか」

校内でも不審人物に向けるような視線をうけながら、他の扉とは違う重厚な扉の前に立ちノックする。付き合っても割と長いので、敬語も

いつの間にか取れてしまった。

「うむ」

了承の返事を貰ったので、扉を開ける。

部屋の奥には窓から差しこむ光をバックに黙々と書類を片づけている

人影がある。その人物こそ、ここ麻帆良学園最高責任者であり、関東魔法協会の理事長。近衛^{このえ}近右衛門^{このえもん}だ。

「久しぶり、元気そうだな」

「今回の件が無ければもっと元気じゃったがの。」

それと、奇怪なオブジェが無ければもっと元気じゃったが」

「前半は同感。後半は……………正直すまんかった」

世間話を交えながら来客用ソファに腰を降ろす。

近衛という名字から分かる様に近右衛門は本来なら関西呪術協会に所属する人物だ。それも、長を継ぐ立場にあった程だ。その立場を放り投げ

て、ここ関東魔法協会に所属し、一生徒から学園長まで昇りつめた。その努力と才覚には一目置かざるを得ないが、それに加えて変わり者だ。

関東魔法協会のトップにいながら、俺達と関わりを持とうとする。それも、押しつけがましい物では無いので嫌では無い。そこが、

先代

学園長達との一番の違いだ。

もっとも容姿でも、先代の学園長より飛びぬけて変わっているのだが。

「少し待って下され。もう少しで終わりますので」

「わかった」

ソファに体重を預けながら、相変わらずだなど思いながら横目で近右衛門を見る。顎髭は胸のあたりまで伸び、目は眉毛で覆われており、こちらからはほとんど目が見えない。それだけでも十分特徴的だが、それを遥かに上回る特徴がある。

さて、近衛近右衛門を見た時の最初の印象は大体二つ。

人間か？と疑問に思うか。長いと驚愕するか。

何やら失礼な感想だとは思うが近右衛門を見た率直な感想だ。

何故なら近右衛門の後頭部は長い。すごく長い。ビックリするほど長い。

ギネス記録に乗るのではないかと思われるほど長い。昔見かけた時は

普通だったのだが、ある年を境に徐々に伸び出したのだ。何かきっかけが

あった訳でもなく、伸び出したのだ。近右衛門の先祖は別に普通だった覚えが

あったのだが、何故こうなってしまったのだろうか。人体は不思議だとしみじみ思う。

「待たせたの」

「長いな」

「それは申し訳無かったのう」

ぼんやりしていたせいか、自身の思考が垂れ流したままの返事をしてしまった。

だけど、上手い事会話が繋がっているのです、そのままにしておく。

「さて……。以前の件じゃが聞かせて貰ってもいいかの」

学園長室周辺に魔力が満ちる。どうやら認識障害と盗聴防止結界を発動したようだ。俺も少し姿勢を正し、近右衛門に向き直る。

「話してもいいが、その前に一つだけ聞きたい」

目を細めて近右衛門の目を真っ直ぐ見る。

一切の動揺も見逃さないように。

「何じゃ？」

「率直に聞く。お前は敵か？ 味方か？」

ここに来たら聞こうと以前から決めていた事だ。

昨日の件はどう考えても内部からの手引きがある。でなければ麻帆良に

感知されず侵入だと無理な話だ。近右衛門とは割と付き合いもあるし、それなりに

信用もしている。だが、それはそれ。これはこれだ。近右衛門は俺から目を

逸らさず、真っ向から俺の視線を見つめ返し、

「わしは麻帆良に住む者へ牙を剥く者の敵で、それ以上もそれ以下もありはせんよ」

そう言い切った。

麻帆良の責任者の鏡とも言える言葉であり、綺麗事でもある。だが、近右衛門が

伊達や酔狂で言ってる訳ではない。それぐらいは目を見れば大体分かる。

「……」

「……」

視線が交錯する事数十秒。

「……まあそれで十分か」

ふっと力を抜く。

「やれやれ。年寄りには先ほどの空気は堪えるわい」

「お前はまだまだ現役でも大丈夫だよ」

「ふおふおふお。お世辞でも嬉しいのう」

「ぬかせ、学園最強」

「黒宮殿から言われると嫌味にしか聞こえんの」

さっきまでの空気は何処へやら。学園長室には和やかな空気が流れていた。誰も好き好んであんな空気にはしたくないので俺はこの感じが丁度いいのだ。

「んじゃ聞きたい事も聞けたし、前回の件を話しておくか」

「うむ」

空気も和んだ所で俺はアールウェルクス襲撃の顛末を話した。

話している最中近右衛門は顎髭をさすったりしながら静かに話を聞き続けた。

「俺がわかってるのはこれぐらいだ」

「なるほどのう」

話を聞き終わった近右衛門は顎髭をまた一つ撫でた。
顎髭をさするのは近右衛門の癖なのかもしれない。

「こちらでは結界に反応は感知出来なかったからの。黒宮殿の話を聞く限り

考えたくはないが内部からの手引きで間違いなさそうじゃの。
あい、わかった。すぐにこちらでその者を捜しだそう」

現在の近右衛門の中では様々な感情が渦巻いているのだろう。
自身の陣営が侵入者を招く。そういったの考えや思惑があったとは組織内での独断行動。近右衛門からすれば裏切り行為も同然だ。

「ま、それもメガロメセンブリアからの指示だろうな。
もつと正確に言うコスモエンテレケイアと完全なる世界の指示だが」

沈痛そうな近右衛門とは対照的に軽く言葉を返す。

「完全なる世界か……。
メガロメセンブリアに指示出来るとは一筋縄ではいかなさそうじゃの」

「そうだな」

情報統制も完璧。組織の規模もでかい。
優れた術師を多数抱え込んでいる。資金も資源も潤沢。
我ながら厄介な組織に目を付けられたと思う。

「さて報告も終えたし、今日はそろそろお暇させて貰う」
だが、さすがに見過ごせない所まで来た。

ずかずかと人の領地にまで踏み込んできやがって。あまつさえ三人に手を出しやがって。ご立派な目的があるうが知った事か、絶対に叩き潰す。

（それに、フェリエともしばらく距離を置いた方がいいだろうしな）

ぱっと見はいつも通りだが、フェリエは確実に俺の事を避けてる。長年感情が無かったが故の弊害かは分からないが、あの子は内面、自身の感情を処理するのがものすごく下手だ。

二日間で自身の頭の中で何らかの結論は出したのだろうが、感情がそれにまったく追いついていない。どれくらいの時間になるかは分からないが、しばらくは俺から離れておいた方がフェリエもいいだろう。

なに、俺達は不老だ。数日だろうが、数か月だろうが、数年だろうが

そんなに変わらない。

ここに残していくのに不安が無いわけではないが、少なくとも魔法世界に連れていくよりは危険は無いはずだ。

その二つの理由から魔法世界に行く事にした。

改めてやる事を確認し終えたのでソファから腰を上げ、家に帰ろうと

すると近右衛門が少し慌てたように俺を呼びとめた。

「ちょっと待ってくれんかの」

「ん?」

「無理を承知なんじゃが、わしからの依頼を受けてくれんかの」

「無理。じゃ」

結論は出たので扉に向かう。

「即答！？ と、とりあえず話だけ聞いてくれんかの。
魔法世界でやってほしい事があるんじゃが」

近右衛門が捲し立てるように言った言葉に足を止めた。
くるっと反転しソファに座り直す。

「魔法世界か。俺もあちらに用事があるから
あまり手間が掛からない物ならいいぞ」

俺もこれから魔法世界に行くつもりなので、この依頼は渡りに船だ。

関東魔法協会理事長までになれば色々融通も聞くだろうし可能な限りは受けておきたい。我ながら見事な手のひら返しだ。

「おおそれは良かった。依頼の件なんじゃが」

近右衛門は懷を漁り一枚の写真を取り出した。

「この者を護衛してほしいのじゃが。
名はナギ・スプリングフィールド」

写真の中には赤髪の勝気そうな少年が元気よくこちらにピースしている。年のころは十歳に届くかどうかといったぐらい。将来は格好良くなると断言出来るぐらいに顔は整っている。

「この子供を？ 何でまた」

「古い知り合いの息子なのじゃが、世界を見たいと言い出してメルディアナ魔法学校を飛び出しおってのう。方々を旅しておったらしいの

じゃが、この前突然祭の日にここにきおっての。その時にNGO団体悠久の

風に所属したから魔法世界に行ってくるなどと言っておって……」

疲れたように言っているが、その顔はまるで

近所のいたずら好きの子供を相手にするかのようだ。

「それはまた……」

俺はと言うと関心するやら呆れるやらでいっぱいだったが。

無謀というか行動力があるというか。

「だけど、実力が無けりゃ裏方に回されるだろ」

「そうであれば良かったんじゃが、あ奴には幸か不幸か

その力があるのじゃ。こと魔力量だけでいえばわしをも凌いでおる。それに、従者かどうか分からぬが高位の魔法使いと神鳴流剣士も付いておるようじゃったし」

「とんでもない子供だな」

決して近右衛門の魔力量が少ない訳ではない。

むしろ通常よりかなり多いといっている。それを上回る子供がいるとは

世の中理不尽なものだ。人望もある。才能もある。スペックの高い子供だ。

悠久の風がこの子を入れた事も納得する。

「それに、近頃は魔法世界も怪しいしのう」

厳しい顔をして近右衛門から発せられた言葉に俺は頷かされた。

「みたいだな」

いくら俺が依頼業を休止しているからといっても

定期的に世界情勢は調べている。それによると、この頃

魔法世界がきな臭いのだ。どうも何かが起こる気がしてならない。

「今回の黒宮殿の話聞いてますます心配での。

今回の依頼を頼むにいたったのじゃが、受けてくれるかの？」

腕を組んで近右衛門の依頼をどうするか考える。

メリットは色々と融通が効く事。そして、組織の方が
コズモエンテレケイア
完全なる世界などの情報が集まる事。

デメリットは護衛に時間が割かれる事。

二つを天秤に掛ける事数秒。組んでいた腕を解く。

「付きっきりは厳しいが、それでもいいなら

受けてもいい。無論その分報酬は少なくして貰って構わないし俺もなるだけその子供の護衛に付けるようにはする」

依頼を受ける事にした。今まで一人で探していた結果が大して進展の無い現状なのだ。打破するには今までとは違った

アプローチにする必要があるだろう。

「駄目で元々だったんじゃないからそれだけでも儲け物じゃよ。では、少し待ってくれるか書状を書くのでな」

依頼を受けた途端に厳しい表情を崩し好好爺の雰囲気を漂わせる。まあ近右衛門だから、引き受けたという理由も無きにしも非ずだが。

「では、これをナギの奴に渡して下さい。こちらは悠久の風に。可能な限り情報を渡してくれるはずじゃ。ナギの場所もその時に聞いて下され」

達筆な字で書かれた書状を受け取る。みみず見たいな文字だ。この文字が子供に読めるか不安だが。ま、なるようになるか。

「確かに受け取った。じゃあ今度こそ家に帰らせて貰う」

「ナギの奴を頼みます」

「ああ」

改めて出口に向かい、ドアノブに手を掛けた所でふと、もう一つの大事な用件を思い出した。

「そうそう。コズモエンテレケイア 完全なる世界を手引きした奴が分かったら連絡してくれよ」

背後で近右衛門が重苦しい溜息を吐くのが、分かったが無視して扉を閉めた。

「で、一人で魔法世界に行く？」

「はい、そうです」

「それも長期間？」

「たぶんそうなると思います」

「なあ貴様はあれか？ 唐突に物事を決めないと死んでしまう病にでも罹っているのか？」

「いえ、そんなことないです」

今俺は正座をしている。何故こうなったかというと家に着く↓エヴァが一人でリビングに居た↓丁度いいのでさっきの事話しておくか↓正座。別に端折っている訳ではない。魔法世界に行くと言ったら流れるような自然さで正座する事になった。

唐突すぎて俺もびっくりしている。

「驚くのはいつも私の方だ」

「ナチュラルに心を読まないで欲しいです」

エヴァは苛立たしく足で床を叩いている。俺が知らず敬語になってしまっているのは仕方ない事だと思う。

「勝手に決めた事は不問にしよう。リョウに言ってもどうやら脳がその事を認識しないようだからな。だが、私達を連れていかないのはどうしてだ？」

前半に色々言い返したいが、何度言われても繰り返しているので何も言い返せない。だが、後半の事はちゃんと言い分がある。

「エヴァ達を置いていくのは心配だけど、魔法世界に連れて行くよりは安全だと思うから。昔に比べたら麻帆良も安全になってるし」

「お前は……前にも言ったが、過保護過ぎだと「それに」」

エヴァの言い分も分かる。分かるが、分かった上で言葉を遮る。

「今のフェリエは不安定だ」

「……」

エヴァは俺の言葉に押し黙った。エヴァだって当然フェリエの様子が変なのは当然分かっている。逆に分からない方が不自然だ。

「そういえばフェリエは？」

「今はチャチャゼロと共に別荘だ。先ほど入ったばかりだから最低でも一時間は出てこまい」

この家に居ない事は分かっていたが別荘だったのか。俺が帰ってくる直前に別荘に入るとは、避けられてると考えるのは俺の深読みしすぎなのだろうか。

「そっか、話を戻すけどあんな状態のフェリエは連れて行けない。今回は以前のように過保護云々ではなく、客観的に見てどう考えても危ない」

これも理由の内に入るが、もう一つは元から決めていた理由のフェリエと距離を置く事。だが、これは別にエヴァに言う事は無い。何かの拍子でフェリエに伝わってフェリエが気に病む事になってしまったら困る。

「なるほど大体分かった。すなわちリヨウは私にフェリエの面倒をみると言う事か」

「理解が早くて助かる」

「ふむ却下だ。と言いたい所だが、他ならぬリヨウの頼みだ。仕方ないからその頼み聞いてやろう」

「ありがとな」

やっぱりエヴァは優しい。身内にしかその優しさは向けられないが、

俺達はみ出し者が外側に優しさを向ける必要もあるまい。

「もつとも、リョウみたいにちゃんと

面倒を見るかは約束しかねるがな」

「エヴァなら大丈夫だよ。信じてる」

「……………き、急にそんな事言うんじゃない」

もごもごと聞きとりづらく言葉を発した後顔を逸らした。

告白をした時の方が照れると思うんだが、女心はやはり分からない。

ところで、正座はいつ解いていいんだろうか。

「今日も快晴か」

俺が魔法世界に行く決めて翌日。

魔法世界に行くのならばしっかりと準備しろとエヴァに言われたので、

一日を準備に費やした。準備といっても俺のボックスの中には常に一定の水も

食料も入ってるし、道具も入ってる。何かあった時の為に備えてい

るので、
改めて準備する必要何てほとんどなかったのだが。

「鍊金鋼は持ったか？ 魔法薬は持ったか？ 水は持ったか？
食料は持ったか？ 寝袋は持ったか？ 後それに……」

「そんなに心配しなくても大丈夫だって」

エヴァの言葉に思わず苦笑する。

まったく過保護なのはどっちなのやら。

「何ダヨリヨウ 俺モ連レテ行ケヨ」

「お前はエヴァの従者だろ」

腰を屈めて文句を言うチャチャゼロの頭を撫でる。

仕方ないので、帰ってきたら模擬戦にでも付き合ってやろう。

「……精々気を付ける事ですね」

「ああ、そうするよ」

やはり、何処かぎこちなさを感じる。

情けないが、これは時間とエヴァに頼るしかないようだ。

「そろそろ行くか」

一通りみんなと挨拶を済ませたので、そろそろ向かう事にする。
最初の目的地はゲートか。その後は悠久の風か。

「なるべく早く帰って来るんだぞ」

「クタバルンジャネエゾー」

「……」

「行ってくる」

そうして俺は魔法世界に旅立った。

黒宮が旅立つ前日の深夜。

麻帆良学園屋上で頭部を粉碎された遺体が発見されたがその件と彼が関与しているかは定かではない。

麻帆良学園が創設されて63年
原作開始まで後25年

魔法世界に赴く。

第三十三話『再び』（後書き）

やっと次回で紅き翼に接触出来そうです。大体三十話使ってまだ大分裂戦争にまで到達していません。原作はいつになるのやら。

第三十四話『紅き翼』

「魔法世界も久しぶりだな」

転移の終えたゲートポートに降り立ち、ゲートポートから何十年振りかの魔法世界の空気を吸う。何となくだが地球より魔法世界の
方が空気がうまい気がする。地球の様に機械に頼らずとも、魔法で世の中が回っているお蔭だからなのか。

「失礼。少し伺いたい事があるのですが」

「は、はい……」

幸いにも昔と変わらずゲートポートの構造は変わって無いので迷う事無く窓口に向かう事が出来た。本来ならこのゲートポート内では武器の
携帯が禁止されており、転移前に専用の封印箱に武器類を預けなければいけない。

その上ゲートポートを出ても、メガロメセンブリアでの武器類を携帯するには、手続きをし許可証を手に入れなければならない徹底ぶりだ。だが、

俺にはボックスがあるのでその必要は無い。手の甲も黒の革手袋で隠してあるし、

探知魔法程度で見つかるような、やわな術式でもないので心配ない。なに、ばれなきや問題無いのだ。

そんな俺がわざわざ窓口に寄ったのは他の理由がある。

「悠久の風の本部か支部。どちらでも構わないので、ここから一番近い所を教えて下さいませんか？」

肝心の場所を近右衛門から聞いていなかったのだ。

名前は知っているし、どんな活動をしているのかも知っていたのだが

何処にあるかは知らないのだ。何せ俺とは正反対の位置にあるような組織なのだから。そんな訳で地理にも詳しいだろう受付に聞いたのだが、

「え、えっと、その、あの、そのですね……ゆ、悠久のか、風はこここ、ここから、ひいひい!? ごごごめんなさい!! すみません!!」

許して下さい!! 私今度結婚するんです! 苦節三十年! ようやく掴んだ幸せなんですっ! だ、だからどうかい、いい命だけは!!」

(びびりすぎだ……)

断じて俺が何かした訳ではない。むしろ俺は精一杯落ち着いて、仮面の中で笑顔を

浮かべてゆつくりと話しかけたはずだ。なのにこれである。何とひどい仕打ちなのか。

受付の女性は生まれたての小鹿のように震え、顔も気の毒になるぐらい真っ青。

そして、そんな唐突な結婚報告を俺にしなくてよろしい。

(この格好そんなに怖いのか?)

勿論今の俺は依頼の時に着る狼面衆の格好だ。これを着るのも

数十年振りなんだが、存外魔法世界でもまだまだ有名だったらしい。だからといって俺は何もしていないのに、ここまで怯えるのもどうかと思うのだが。

ちなみに女性が悲鳴を上げたのは、俺の体が少し動いた時である。

「あゝそちらの方。代わりに答えて貰ってもよろしいですか？」

俺が最初に尋ねた女性はまだ、がたがたと震えていて、これでは話が進まない。

ここまで怖がられると何故か俺が悪い気がするから不思議だ。なのでこの女性の上司なのか、今まさにこちらに声を掛けようとしていた女性に改めて質問する。

「げ、ゲートポート出口から道なりに進んでいたけど、あ、案内がありますので、そちらに従って進んで頂ければ悠久の風支部に辿り着けます」

幸いにも次に尋ねた女性は怖がってはいえるようだが、最初の女性のように会話が成立しない程じゃないので、場所は問題無く聞き出せた。

「ありがとうございます」

俺がこの場に居てもいい事は無さそうなので、礼を述べて早々にその場を離れた。

言われたとおりにゲートポート出口を出ると、地球では絶対にお目にかかれない光景が飛び込んできた。空には鯨や鯨、はてにはアンモナイトの様な物まで飛んでいる。他にも小型・中型・大型と大きさは

様々だが、戦艦もそれに混じって飛んでいる。地上には全体的に丸っぽい形を

している建物が連なる様に建っている。未来的な雰囲気を感じるデザインだ。

ゲートポートはあまり変わっていなかったが、やはりメガロメセンブリの

都市は昔に比べて随分様変わりしまっているようだ。

「変わらないものと変わっていくもの……か」

メガロメセンブリアの街並みに何だか感慨深いものを感じながら、道中にあった案内に従って歩く。魔法世界は現在梅雨の地球の様に蒸し暑く無く、むしろ過ごしやすいぐらいの温度だ。

「ん、ここか」

案内通りに進んだ先には立派な門構えの白い建物があつた。

受付の女性は支部と言っていたが、それにしても大きなものだ。

中では大小様々な魔力量の人間が忙しく動いているのを感じる。

周囲を見回しても門番が居ないので、門を通り抜け重厚な扉を両手で開く。

その途端に先ほどまで騒がしかった悠久の風支部は水を打ったように静まり返った。

（何処も大して変わらないな）

仮面の下で淡泊に思う。向けられる視線のほとんどは敵意と警戒、それと僅かな怯え。この三つの割合が違うだけで

向けられる視線は一般人だろうと裏の人物だろうと、身近な人を除いて
俺の事を知っている人物の反応はどれも同じ。いい加減この反応にも飽き飽きする。

周囲から突き刺さる視線を無視して受付に向かう。
近づくごとに受付にいる男が緊張していくのが分かるが
こちらとしたら、勝手に緊張されているだけなのでどうしようもない。

「失礼。悠久の風所属ナギ・スプリングフィールドの場所を教えてください。
頂きたい。」

関東魔法協会理事長近衛近右衛門からの書状もここに」

懐から近右衛門に書いて貰った書状の一つを差し出す。
どうでもいいが懐に手をつ込んだ瞬間に敵意を上げるな。めんどくさい。

窓口の男性は疑いながら書状を受け取り書状の中身に目を通す。
読み終わったら次に魔法で書状を精査する徹底ぶりだ。そこまでして

漸く書状が本物だと分かったのか、こちらの用件に応じてくれた。

「……現在ナギ・スプリングフィールド、及びその
従者アルビレオ・イマ、青山詠春を含む紅き翼は
アルギュレー大平原で魔物が異常発生したのでその魔物の殲滅に赴
いています」

所属早々裏方ではなくいきなり実戦か。よっぽどナギ少年が
優秀なのか、ただ単に人手不足なのか。いや、両方かもしれないか。
魔法によって作り出された立体の地図を見て、ナギ少年が

赴いている地域を確認する。

「もう一つ。現在の世界の情勢について詳しく」

「目立った変化はありません。しいて言えばヘラス帝国との
争いが数年前に比べて少々増加している傾向がある程度ですかね」

嫌そうな顔をしながら答えてくれた。もう少し表情を
隠せといたい。気の短い奴ならクレームものだぞ。

勝手に接客？態度に評価を下しながら、こちらも魔法で作られた
ここ数年のヘラス帝国との小競り合いの推移を見る。受付が言っ
ているように

確かに少し増加の傾向はあるがそれだけだ。怪しいと言えば怪しい
し、怪しくないと言え

言えば怪しくない。何とも判断に困る結果だ。

「情報ありがとうございます。では、これで失礼します」

もう少し詳しく調べるべきだが、まずはナギ少年に会っておいた
方がいいだろう。

入れ違いになったら余計に手間が掛かる。

「……いえ」

あからさまな侮蔑の目に送られて、悠久の風支部を出る。

家から外に出たらこれだ。数十年経っても俺の外側を取り巻くも
のは

何一つ変わっていない。いや、コズモエンテレケイア完全なる世界に目を付けられたのだ

から

悪化したのかもしれない。とにかく、こうも行く先々で敵意や殺意を向けられると

さすがに鬱陶しくなる。例えるなら耳元で常に蚊が飛び回っている感じだ。

（あれ？ それは想像以上に鬱陶しくないか？）

自分で思い浮かべた想像を受けて、余計に鬱陶しく感じるようになる。そんな自身に不利益しかもたらさない自問自答を繰り返しながら悠久の風入り口で教えて貰った場所に転移する。

僅かな間の視界を包む光と微かな浮遊感の後、俺は

アルギユレー大平原に着いた。大平原と名が付く通りここには都市も無ければ、村も無い。当然店も無い。広がるは見渡す限りの平原と所々に

生えている木のみのも辺境だ。昔ここに來た事があって本当に良かったと思う。

でなければ、かなりの距離を移動しなければならなかったからな。

「さてと、ナギ少年は――」

何処かなっと言葉を続けようとしたが、その時

数？先で大規模な雷が炸裂してるのを目で捉えて言葉を止めた。

「……探すまでもなかったな」

少し探ればその周辺に呆れる程の馬鹿魔力が一つ。それより劣るがトップクラスの魔力量が一つ。洗練されている大きな気の持ち主が一つ。後は

夥しい数の魔物の気配。

（んゝどっかで感じた事のある三人組だな）

喉に引っかけた思いをしながら、数百mずつ跳躍しつつ必死に思いだそうと頭を捻る。

俺が向かっている間にも戦況は刻々と変化し、その三人に群がる大量の

魔物が次々に削られていく。随分数が多いと思っていたがなるほど、悠久の風がこの三人だけをここに遣わせたのも分からんでもない。

「大したもんだ」

後一？と来た所で足を止める。強化された視力で捉えた光景は正に圧倒的。白のローブで全身を覆っている男が手を振れば、数十匹の魔物が黒い球体で押し潰され圧死。眼鏡を掛けた生真面目そうな男が野太刀を振れば眼前の魔物が千切れ飛び斬殺。そして、赤髪の男の子が杖を振れば周囲一帯の魔物は粉碎され爆碎。魔物側も必死に反撃しているが、大した意味をなしていない。

（ああ何処かで感じた事のある気配だと思えばまほら武道会に居た一際異彩を放っていた三人組か）

不思議な縁だなと思いながら、少しの間三人と魔物との戦闘を眺める。そうすると自然と今回の護衛対象の赤髪の少年、ナギに視線が移る。

あの年で雷系最大呪文を放つのは感心を超えて驚嘆に値するが、

「荒いなあ」

ナギ少年に才能はある。それもとびつきり。どうやら魔法の才だけではなく

格闘の才もあるようだ。現在の戦闘を見ても、その才能が光っているのが良く分かる。

だが、いかんせん実戦経験が少ないのか、まだまだ荒い部分が目立つ。

それに加えてどう見ても我流で戦っていて、魔法は分からないが格闘の

師匠はいないようだ。

（まるで昔の俺みたいだな）

エヴァ達と出会う前。賞金首になった俺は

外敵から身を守る為に力を付けなければならなかった。

そんな俺に師匠がいる訳無く、今の戦闘スタイルは実戦で全て叩き上げて

創り上げた物だ。既存の物では無く最初から創り上げるのだから数

十年程度では

形になるはずも無く、当然最初の頃は上手くいくはずも無かった。

武器を操り損ねて

怪我を負ったり、刺客によって普通に命の危険に晒された事もある。今では若かりし

頃の懐かしい思い出だが、当時は自分なりに必死だったものだ。

「あ、レストレーション」

昔を懐かしんでいると、ナギ少年の背後から猫型の魔物が野生で鍛えられた

その牙で、首に噛みつくようとしている。白のローブの男が気づいているようだが

どうにも距離的に間に合いそうに無い。ナギ少年にも当然ながら障壁が

あると思うが万が一の事もある。護衛なのだし万全を期しといった方がいいだろう。

（ついでに少し手伝うか）

弓を展開。一歩間違えばナギ少年に中り、その体に風穴を開けてしまうが、たかが一？。この程度の距離で仕損じる訳無い。

――――がいりきけいしやうけい外力系衝剄ぼたんの変化……牡丹。

弦を引き絞り衝剄の矢を射る。通常時放つ矢より二回り程大きい矢は

アルギュレー大平原を突き進み寸分違わずナギ少年に食らい付こうとしていた

魔物の頭部を貫いた。矢は速度を衰えさせる事無く、そのまま魔物の後ろにいる

別の魔物、その次、その次へと容赦無く穿っていく。魔物毎に違う箇所箇所に穴を開けた

矢は一際魔物が密集している場所で収縮し一気に弾けた。数百もの

これ以上警戒されると困るので三人から見える所に降り立ち両手を上げる。

「何だデメエは!？」

俺の姿を認識して、すぐにナギ少年が少年特有の高い音の声を上げて食ってかかってきた。俺が写真から見た印象は間違ってたなそうさ。

「おやおや、これはまた」

白のローブを着ている優男は俺を見て警戒を解き、変わりに口元を隠して胡散臭い笑顔を浮かべた。その反応に片眉を上げる。何だこの反応は。

「お前はっ」

眼鏡を掛けた生真面目そうな男は眼鏡の奥にある目を見開き、一層俺への警戒心を上げた。一見すると今までの奴らとあまり変わらない反応だが、少し違和感を感じる。

三者三様の反応を見終えて、とりあえず俺は自身の用件を伝える為口を開く。

「突然失礼。私はヴォルフシュテインと言う者です。先ほどの攻撃は私自身の物ですが、こちらに敵対する意思はありません。この度は関東魔法協会理事長

近衛近右衛門の要請でナギ・スプリングフィールドの護衛に着きに来ました」

「麻帆良のじじいが!?　　たく余計な事しやがって!
来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐。『雷の暴風!
!』」

ナギ少年は眉間に皺を寄せて渋面を形造りながら、電撃を帯びた竜巻を放ち射線上の魔物を消し飛ばしていった。

話している最中にも魔物はこちらの事情関係なく襲い掛かってくる。ここで

鍊金鋼を出してナギ少年達に刺激を与えたくないので出す事は出来ない。背後から

大型の猿が剛腕振ってきたので垂直に跳び回避し、衝剄を上向きに放ち急降下。

加速させた足で頭部を踏み潰す。何やら色々と飛び散ったがそれを気にする事無く、

頭部を潰した事により空いた穴につま先に引っ掛けこちらに襲いかかろうとした

一団に向かって、猿の魔物を放り投げる。巨体は放物線を描く事無く、その巨体から

出るとは思えない程の速度で魔物の一団に衝突。ボーリングのピンを散らすように衝突した魔物は吹き飛んだ。

「ナギ。そう邪険に扱うものじゃありませんよ。近右衛門はあなたの事を心配して護衛を頼んだのでしょから」

「だから、それが余計だって言ってんだよ!」

会話を続けながらも、俺達は魔物を排除を続ける。鍊金鋼が無くともこの程度の輩ならどれだけいても、障害にはならない。ついでに魔物を排除しながら常に彼ら三人の視界に入るように行動する。こちらの方が向うも安心するだろうからな。

てか、ナギ少年はまだ幼いから仕方ないとして、この優男は何でそんな簡単に俺の言葉を信じているのか。自分でも書状を見せていない現状では俺の言葉を信じて貰えると思わなかったのだが。

「お前らこの状況下でこいつの言葉を信じるのか!？」
「どう考えても怪しいだろう!」

眼鏡を掛けた男が俺に厳しい視線を投げ掛けたまま二人に声を荒げる。

そうだ、その反応が正しいぞ。不覚にも数十分前まで鬱陶しいと思ってた視線にほっとしてしまった。

「何だよ詠春、こいつがそう言ってるんだからそうなんだろう」

「それはお前が鳥頭だからだっ!! 大体アルもアルだ! そんな簡単に

警戒を解いて一体何のつもりなんだ! こいつが誰なのか知ってるのか!？」

「ええ、知ってますよ」

「だったら!」

「私は知っていて尚大丈夫と判断しましたから」

「ほら、アルもこう言ってるぜ？」

「しかしっ」

俺を放置して三人の話し合いは進む。それにしても、こうも断言するとはやっぱりあの優男俺と会った事があるな。

「こちらとしても落ち着いて話し合いたいので先にここ一帯の魔物を片付けませんか？」

犬型の魔物の頭部を握りつぶしながら三人に提案する。今も話しながら敵を片づけているが、この状況じゃ騒々しくて落ち着いて話も出来ない

「それもそうだな！ 後その話し方似合っていないぜ」

ナギ少年はいち早くこちらの言葉に反応し、さらりと俺の心を抉っていき、魔物が大量に居る所に向かって飛び去った。エヴァといいフェリエといい、そして、ナギ少年といいそんなに俺の敬語は似合っ

いや、そんな事は無いはずだ。三人が変わっているだけだ。

「自覚していなかったんですか？」

俺が仮面の下で悩んでいると、まるでこちらの

心を見透かしたかのように優男が声を掛けてきた。

「……そんなに似合っていないませんか？」

優男、ナギ少年はアルと呼んでいたので、この男がアルビレオ・イマ

なのだろう。アルビレオは俺の問いに胡散臭い笑顔を引っ込め、

「ええ。とても」

にっこりと擬音が付きそうなぐらいの笑顔を浮かべて俺の一縷の希望を打ち砕いた。

「はぁ……認めないといけないのか」

色々と打ちのめされながら敬語を崩す。似合っていないと言われて続けられるほどの俺の精神面メンタルは強く無いのだ。

「なあお前俺と会った事あるのか？」

ショックから立ち直りアルビレオに気になってた事を聞く。

会話を続けるうちに何となく会ったような気がするが、良く思いだせない。

「覚えて無いのですか？」

「覚えて無いな」

「お連れの方を私に下さると言う事も？」

「それは言って無い。断言出来る」

この男しれっと何言っていやがる。でも、この話し方。
この胡散臭い笑顔。やっぱり会った事があるな。それに連れって。

「おい！ 自分から言っておきながら何アルと話してるんだよ！！」

思い出せそうになった時に通りかかったナギ少年に注意されてしまった。
また。

確かに自分から提案しておきながら会話を続けるのは良くないな。

「悪かった、俺もちゃんとするよ」

「おお！ やっぱその方が似合ってるぜ！」

「そりゃどうも」

ナギ少年の無邪気な言葉に苦笑を浮かべるしかなかった。
まあ俺としても好き好んで敬語で話したいとは思わないしな。

「フフ……」

アルビレオの事はまた後でいいだろう。そんな重要な事でも無さそうだし。

さて、俺も本格的に魔物掃討に参加しないといけないんだが、

「そんなに睨まなくても危害なんて加えないよ」

「……」

安心させるように言葉を投げ掛けたが眼鏡を掛けた男。青山詠春は尚も

俺を無言で睨みつける。さすがにそんな簡単に警戒は解かないか。

「心配なら背後から見ればいい。んで俺が怪しい動きを見せたらその野太刀で斬り捨てたらいさ」

「……」

だんまりか。ま、今は仕方ないか。書状を見せれば、この警戒心もある程度は緩和出来るだろう。その為にはこいつらを全部片付けな
いと。

「さてと行きますか」

後の経過は語るまでも無く魔物側の全滅という結果で終わった。

麻帆良学園が創設されて63年
原作開始まで後25年

紅き翼に接触。

第三十四話『紅き翼』（後書き）

主人公は大抵の人に嫌われています。

では、用語説明を。

牡丹^{ぼたん}…通常よりも大きめの矢を放ちある程度突き進んだ所で数百物矢に別れ辺り一帯を貫く。尚分裂する場所は矢を放つ前に決めておく必要がある。（オリジナル劉技）

第三十五話『最強』（前書き）

人数が増えると会話が難しい。ナギと詠春の口調が難しい。話の展開考えるのが

難しい。何だか主人公がぶれている気がする。文が安定しない。話の展開遅すぎ。

変な所で終わりすぎ。と四苦八苦していますが何とか出来ました。相変わらず駄文ですがよろしくお願いします。

それと、あまり大したことでは無いですが黒宮の偽名をヴォルフからヴォルフシュテインに変える事にしました。今さらですが何だかしっくり

こなくて……。ストーリーにはまったく影響は無いです。

誤字脱字、又は言葉が正しく使われていないなどがあれば指摘してくださるとありがたいです。

第三十五話『最強』

「ほら、これが近右衛門から預かった書状だ」

魔物の殲滅戦も終わり、今は戦闘を行った場所から数十？離れた場所にて

野宿をする事になった。さすがにもう夜も遅い事だし、俺とアルビレオ、青山は

まだいいがナギ少年はまだ幼い事もあり、本人が大丈夫と言っても護衛の立場から

しても無理はさせられない。もしかしたら俺の腕輪だったら複数転移も出来る

かもしれないが、現在俺の魔法技術では無理だ。碌に鍛錬してないしな。

（暇が出来たらやってみるか）

かといってナギ少年かアルビレオに腕輪を貸して、やって貰うなんて

ナンセンスだ。そんな、ほいほい自身の持ち物を貸せる訳が無い。では、報告は

どうするのかというと、何の因果か昔エヴァの造った転送魔法具に簡易の報告書を

入れておくそうだ。正義の魔法使いが賞金首であったエヴァの造った魔法具を

使うってのも奇妙な話だが。

「えーっとなになにに……何だこのミミズみてえな文字。こんなの読めねえよ」

そして、現在は中央のたき火を三人が囲み、俺が三人から少し離れている

切り株に座っている構図だ。今夜の晩飯は近くの川に生息している魚型の魔物で、

見た目はあれだが、それなりに美味い。食事をしながら近右衛門から預かった書状を

ナギ少年に渡したのだが、最初の懸念通り読む事は出来なかったようだ。10歳の

少年にあのミミズみたいな文字は難しいよな。俺でも読むのに苦労するし。

「貸してみろ」

書状を読む事に悪戦苦闘しているナギ少年を見るに見兼ねたのか横から青山が

書状を受け取り、上から下に目を通していく。あの文字をそんなに早く読めるのは

素直に感心する。二、三分経つと書状から目を離してアルビレオに視線を移した。

「アル、これは本物なのか？」

「ええ、魔法による関東魔法協会理事長の焼印も

押してますし間違いなく本物ですよ」

「……そうか」

アルビレオの言葉を受け青山は複雑そうに顔を歪めた。俺も嫌われたもんだなあと思ふ。魚を齧りながらしみじみ思う。

（おおこの魚、塩味が聞いててうめえ……）

仮面は当然ながら口の部分は取り外し可能になっている。

「なあ詠春結局何て書いてあったんだ？」

俺が魚の味に満足していると、ナギ少年は口の周りを魚の脂まみれにしながら青山に手紙の内容を興味津津な様子で聞いた。

「ん、ああお前に分かりやすく内容を伝えるところ……ヴォルフシュテインって人が護衛に着く事になったって事だ」

初めに比べると青山の態度はましになったが、まだまだ抵抗があるようだ。最初に感じた違和感の事もあるし、もしかしたらこいつもアルビレオと一緒に会った事があるのかもしれない。機会があれば聞いてみるか。

「へーそうなのか。というか二人はそいつの事知ってるみたいだけどよ、そんなに有名人なのか？」

「お前そんな事も知らなかったのか……」

ナギ少年が俺の事を行儀悪く指を差しながら聞いてくる。それを聞いた

青山が呆れた様に言ってるが、別に俺の事を知らなくても普通じゃないの

かなと俺は思うんだが、そうでもないらしい。

「現在所謂何でも屋で有名なのは三人います」

アルビレオは口の周りをハンカチで拭いながら指を三つ立てて、徐に二人の会話に口を挟んだ。

「一人は南で有名な性別男。名前はジャック・ラカン。活動地域が主に南のせいであまり詳しい事は私もわかりませんが、何でも己の力で奴隷剣闘士から解放され今の立場にまで昇りつめたそうです。もっともこの男は何でも屋というより傭兵剣士というのが正しいかもしれませんがね。戦闘方法は魔法を用いないらしく、気を用いるようです」

当たり前だが、俺がいない内に何か色々変わってるんだな。

昔はそんな男の名前聞いた事も無かったし。

「もう一人は性別不明。名前はアリウス・フォロル。見た目は黒髪・黒目で少年のような容姿をしているそうです。実力は申し分無いですし、他の二人と違って文字通り依頼は何でも引き受けます。ですが、性格は惨忍で、肉体的・精神的に人を痛めつけるのが好きという難があり、さらに少々行き過ぎた行動を取る傾向があります。例えば護衛依頼や人攫いの依頼なのにその対象を故意で殺してしまう事も時たまあるみたいです。戦闘方法は闇と火の魔法を主に使うそうです。他にも様々な魔法にも精通しているそうですね」

「何でえそれ。良くそんなのでやっていけるな」

不満がありありと見える表情でナギ少年がアルビレオにストレートに疑問をぶつけた。

「世の中それでも力を借りたい人がいるのですよ」

「うゝん俺には良くわかんねえや」

「今はそれでいいですよ」

アルビレオは普段の胡散臭い笑顔を崩し、優しげな笑みを浮かべた。

そこら辺はまだナギ少年も分からないようだが、アルビレオの言葉に

一先ず納得したようだ。世の中藁にも縋る思いで地雷と分かっている

それに手を出す人は後を絶たない。人間がいなくならない限りその行為が

無くなる事は絶対にあり得ないだろう。

「そして、最後の一人はおそらく性別男。名前はヴォルフシュティン。世間に

出たのは今から150年以上も前。この三人の中では一番の古株です。依頼の際は

狼の面に黒のコートと決まった格好で行い、その仮面の下素颜を知っている者は、

ほとんどいないと言われています。受けない依頼もありますが、大

抵の依頼は

引き受け依頼達成率はほぼ100%。討伐、殲滅、破壊に至っては100%という結果を

叩き出しています。戦闘方法は気でも魔法でも無く、彼唯一の力らしくどのような力

かは不明ですが、主にその力と幾つかの武器を用いるようです。ですが、1890年頃に

依頼業を突然休業。そこから今に至るまで表舞台に一切姿を見せる事は無かったのですが」

ここでアルビレオから視線を向けられたので、口の中の魚を飲み込んで口を開く。

「わざわざ紹介ありがと。少しだけ再開する事になってな、それが今回の依頼って訳」

アルビレオは中々の事情通のようで裏から離れてた俺としては今現在で有名な裏の人物を教えてくれるのは助かる。俺を除いた二人の事は頭の片隅に置いておこう。

「今まで依頼を受けなかったのにナギの依頼で再開か？」

「まあね、色々あるんだよ」

青山に疑り深く問い掛けられたが、そこは疑われてもしょうがないので適当に誤魔化しておく。実際ナギ少年の依頼はついでに近いものがあるかな。

「なあなあアンタ！」

「ん？」

俺と青山の間に流れる空気を見殺してナギ少年が喜色満面な様子で話しかけてきた。どうやら魚はもう食べて終わってしまったようだ。

「アンタって強いのか？」

「んゝそれなりかな」

俺の答えを聞いてナギ少年は眼を輝かせ始めた。その眼からはあまり良い予感はない。

「じゃあさ俺と勝負しろよ！」

「ごめん、話の繋がりがまったく見えない」

子供は良く分からないものだ。もし今仮面が無かったら眉間を押さえてる所だ。

「だからさ護衛なんだから俺より弱かったら意味が無いだろ。それを確かめる為の勝負だって！ だから勝負しようぜ！！」

「ふむ」

ナギ少年の言葉に納得する。確かに護衛対象より弱い護衛なんて笑い話にもならない。

「いきなり何言ってるんだこの鳥頭は。明日は悠久の風に正式に報告に向かわなきゃならないのに」

「心配しなくても予定より早く終わったので少しの遅れぐらいは大丈夫ですよ」

アルビレオの言葉を聞いて青山はもう色々と諦めたように溜息を吐いた。

俺はというと当初はめんどくさいと思っていたが、今はこの一回程なら

問題ないかと思いはじめた。こちらも一度手合わせしてナギ少年の正確な実力や戦い方、性格を見極めるのに丁度いい機会だし。

「……いいよ別に、勝負しても」

「本当か！？　じゃあさっそく」

「ナギ、今日はもう遅いですから明日にしましょう」

アルビレオは窘めるようにナギ少年に告げた。俺も万全なナギ少年の実力が見たいので異論は無いのだが、言ってる事がまるつきり母親だ。

「そうだな。時間も時間だし、そろそろ俺は寝るから明日にしよう」
ナギ少年を説得するついでに仮面の下部を取り付ける事も忘れない。

「しょうがねえなあ」

俺が思ったより駄々をこねずにナギ少年は就寝の準備を始めた。
ナギ少年はまだ10歳程だ。何だかんだ言って眠いんだろう。
俺も寝ようと腰を浮かせるとそれに続いて他の二人も寝る準備を
始めた。

「おや、あなたはこちらで眠らないのですか？」

「一人の方がよく眠れるんだよ」

三人から離れた位置で眠ろうとする俺にアルビレオが声を掛けて
きたので
適当な言い訳を述べておく。ちなみにナギ少年はもう横になってい
びきをあげながら
眠っている。その隣で青山は木に腰掛け野太刀を抱くように眠るよ
うだ。

「そんなに私達が信用ならないですか？」

アルビレオに背を向けている俺にアルビレオがどんな表情を
してその言葉を俺に掛けていているのか分からないが、振り返る事は
せず丁度いい岩があったので、そこに腰掛けながら言葉を返す。

「そんなことないさ」

嘘だ。信用何てしてる訳が無い。いくら口調が親しげでもそれは
形だけで

俺がこの三人を信用している事にはならない。青山は勿論の事アル
ビレオだって

俺の事を信用している訳は無いだろう。ナギ少年は良く分からない
が。

俺が他人で信用しているのは今は近右衛門のみ。信頼している者に至っては誰も居ない。用心しすぎだろうが、もう昔からの俺の性分なので変えようがない。エヴァとチャチャゼロとフェリエは信用や信頼何て言葉はもうとっくに通り過ぎて、もはや俺が精神的に依存している形に近い。彼女達の事を疑う事なんて端から頭に無い。もし彼女達から用なしと言われたのなら、彼女達の元から去るし、必要なら自身の命を絶つ。他人から見たらさぞや俺の考えは気持ちの悪いものだろう。さすがに俺の考え方が世間からズレているのは分かる。だからといって……。

(……くだらね)

そこまで考えて思考を打ち切った。寝る間際は思考が色々な所に飛んで余計な事を考えてしまう。俺が余計な事を考えてる間にアルビレオも眠ってしまったようで、横になり静かな寝息をたてていた。

(俺もさっさと寝るか)

ボックスから待機状態の鍊金鋼を取り出し、誰にも見えないように手の中で握る。仮面の下でゆっくりと目を閉じて、何が起きてもいいように浅い眠りに付きその日は眠る事にした。

——翌朝。

「じゃあさっそく勝負と行こうぜっ！」

昨夜は特に異常も無く朝を迎えて、四人で朝食も取り終えた矢先にナギ少年のこの言葉だ。俺としてはもう少し食後の休憩をしたかったのだが、
どうやらそうもいかないらしい。

「じゃあ、あっちの広い所ですか」

気持ちを切り替えてここから数十m離れた所を指差す。その場所は木も岩も無く手合わせするにはいい場所だろう。

「よっしゃあ！ さっさと行こうぜ！」

ナギ少年は朝だと言うのに元気に飛び去って行った。
子供はエネルギーに満ち溢れているな。

「おい」

「何？」

俺もナギ少年を追おうとした時に青山から剣呑な声を
掛けられたので、歩き出そうとした足を止め顔だけ振り返る。

「ナギにもしもの事があつたら……」

「多少の怪我はするだろうが殺す事なんてしないし、後遺症を残すような事もしない。仮にも護衛対象なんだから」

もし怪我すら駄目だとか言われたらどうしようもないが、それならナギ少年が俺に手合わせを申し込んだ時点で止めてるだろう。

「詠春はナギが心配で仕方ないのですね」

「そ、そんな事はない!!」

「そうですか？　なら今はそういう事にしておいてあげますよ。ふふ……」

何てムカつく笑い方だ。こう私は全て分かっていますよ的な笑い方だ。当事者じゃない俺でさえむかつく笑みだ。現に青山もアルビレオの笑い方にむかっているようだ。

「おゝい何してんだゝ。さっさと来いよゝ」

中々来ない俺に業を煮やしたのか、ナギ少年が遠くから叫んでいるので、少し急いで広場に向かう。背後から二人も付いて来る気配を感じながらナギ少年の待つ広場に到着。

「ルールは時間無制限。攻撃手段は何でもアリ。敗北条件はどちらかが

気絶或いは負けを認める。もしくは俺やアルビレオ、青山がこれ以上無理

だと判断したら終了。異論はあるか？」

「いや、いいぜ！」

ナギ少年は自分の身の丈以上の杖を軽々と回し、好戦的な笑みを浮かべ、俺は特に構える事も錬金鋼を出す事もせずナギ少年と対峙する。

戦闘態勢に入ってからナギ少年の魔力が高まっていく。改めて対峙してみるとその魔力量の桁外れさが良く分かる。

「開始の合図はしない。そっちの好きなように始めたらいいさ」

今回はナギ少年の実力を見る為なので、初めは俺から攻める事はしない。

「あんた武器使うんだろ？ それを出さなくてもいいのかよ？」

「必要無い」

淡々とした俺の言葉を受けてナギ少年は犬歯を剥き出しにし、そして

ナギ少年から膨大な魔力が噴き出した。

「その言葉！ 後悔してもしらねえぞ！！」

来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐。『雷の暴風！
！』

昨日の魔物の殲滅戦でも拝見した、雷を纏った暴風は破壊の痕を地面に刻みながら突き進んでくる。エヴァが良く使う『闇の吹雪』と属性違いな

だけで同種の呪文なのだが。

（やっぱりまだまだだな）

右手を『雷の暴風』に向ける。ただそれだけの動作をし、他には何もしない。

このまま突き進めば俺の体は無残にも千切れ飛ぶが。

「なっ!？」

現実には『雷の暴風』は俺の掌から先へは少したりとも進んでおらず、掌の先であらゆる方向に飛び散っている。ナギ少年側から見るとまるで片手で受け止められ、たように見えるが、実際は俺が掌から『雷の暴風』と同規模・同威力の衝剄を放っている事によって進んでいないだけだ。

そして、『雷の暴風』は俺が放っている衝剄とお互いに喰い潰しながら拮抗し、ついには俺のコートを揺らすだけで、体に触れる事すら無く眼前で霧散した。

「この程度か？　俺の知り合いの方がもっと上手く出来るぞ」

術式とかは俺には良く分からないが、ナギ少年の『雷の暴風』は魔力によるごり押しだという事は俺でも分かる。大抵の相手はそれで何とかなるだろう。

ナギ少年にはそれほどの魔力が秘められているのだから。だけど、

ある程度の位になるとこれだけでは通用しなくなる。

「っ！！ 舐めんじゃねえええ！！」

自信があつた魔法を片手で受け止められ、少し茫然としていたナギ少年に俺が安っぽい挑発を仕掛けてみると、案の定激昂したナギ少年は身体強化を施した体で俺に真っ直ぐ突っ込んできた。やはり挑発等には引っ掛かり易い性格のようだ。

その小さな体とは不釣り合いな威力の拳を最小限の動きで弾く。

ナギ少年はそれに怯む事無く、杖と拳を交えた連撃を重ねそれと同じ数だけ俺は攻撃を捌く。

まるで小型の台風のようだ。

（身体強化は得意そうだな）

魔法による遠距離攻撃よりも自身に施す身体強化の方が得意そうだ。もつとも

接近戦はやはり荒いが、全体的に見ると今はこちらの方がましではある。

「くっそっ！」

一撃も俺に攻撃が通らない現状に苛立ってか、今までとは比べ物にならないテレフォンパンチを繰り出してきたので、少しだけこちらから手を出す。

大きく空いた懷に踏み込みナギ少年の繰り出した手を両手で掴み、肩に担ぎそのまま前方に叩きつける。

「がっ……はっ……！」

ナギ少年は碌に受け身も取れず背中から諸に地面に叩きつけられ、たまらず肺から空気を吐き出した。無論加減はしてある。全力で叩き付けたらさすがにナギ少年が死んでしまう。それでも、地面に罅が入るのだからそれなりの威力は出したが。

「終わりか？」

本来なら容赦なく追撃を仕掛ける所だが、俺は仰向けのナギ少年を上から見下ろしながら挑発の言葉を発する。とはいってもこれまで見たナギ少年の印象として、ここで終わる事は。

「だ、からっ……俺を舐めんじゃ……っ……ねえよ！」

有り得ない事なのだが。

正に息も絶え絶えだが、それでも膝を折る事無くナギ少年は杖を支えに

立ちあがった。ナギ少年だってさすがに俺との力の差は分かっているだろう。将来的に

ナギ少年は強くなる。それも、かなりのものになる。それは確かだ

が、現状ではナギ
少年が俺に勝つ可能性は0に等しい。それでも立ちあがるのは何故
なのだろうか。

「何でそこまでするんだ？ たかが模擬戦。負けたって構わないだ
ろうに」

好奇心丸出しの問い掛けにナギ少年は口に溜まった
血を地面に吐き捨て、すぐさま先ほどより多くの魔力を注いだ
身体強化を施して殴り掛かってきた。

「へっ！ 馬鹿言ってるじゃねえよ！！ 俺は……最強の魔法使い
になるんだ！
模擬戦だろうと何だろうと俺はこんな所で負ける訳にはいかないん
だよ！！」

初めに比べて格段に鋭く重くなっている拳を防ぎながら
ナギ少年が発したある言葉について考えを巡らせる。

最強。最も強いこと。

男なら一度は持つであろう夢のような言葉。俺もこの世界に来た
時に
その想いもあった。当然だ。きっかけは偶然だが、わざわざこの世
界を選んで
この力を貰ってここに来たのだから。今では違う目標が出来たので
そんな言葉は
当の昔に置いてきてしまったが。

だが、俺に限らずみな子供から大人に成長しその過程で世界を知

り、現実を理解し
先が見えてしまうと、いつしか人は最強になんてなれるはずも無い
と挫折し、諦め、
妥協して生きていく。何も裏に限った事では無く勉強でもスポーツ
にも当て嵌まる。

世の中1000の努力を1の才能が凌駕する事なんてざらだ。凡人
が足し算で地道に
階段を上がるならば、天才は掛け算で容易くその階段を飛び越して
行く。その点ナギ
少年は天才に分類される。圧倒的な魔力。格闘センス。努力で手に
入れる事は出来
なく正しく才能の御蔭。だから、他の人間に比べてナギ少年はまだ
望みはある方だ。

「何故そこまで最強に執着する？ 仮に最強になってどうする？
それに何か意味はあるのか？ そして、その先に何かあるのか？」

10歳の子に聞く質問では無いかと心の内で少し自嘲する。

今の目標に不満なんてあるはずない。だけど、一度それを目指し
た。

何て言ったら大それた言い方だが、ナギ少年がどんな答えを
返すのか興味はあった。この裏の世界でどんな答えを返すのか。

「ごちゃごちゃと……っ！ うるせえんだよ！！『雷の斧！！』」

ナギ少年が格闘しながらほぼ零距离で無詠唱で魔法の射手を放っ
て来たので、
それを後ろに跳び体を逸らして回避する。息つく暇なく上空から雷

の斧が迫って

きたので、片方の掌を上を翳し衝剄で相殺させる。

「俺は頭わりいから難しい事はわかんねえよ！……だけどなあ！

影の地統ぶる者、スカサハの、我が手に授けん三十の棘もつ霊しき
槍を『雷の投擲』」

帯電している魔法の投槍を真っ直ぐ放って来たので、もう片方の
手を地面に

付き片手倒立の状態から手の力のみで上空に回避する。一步遅れて
投槍は俺が

居た場所を通り過ぎていき雷の投槍は地面に突き刺さり、遠くで炸
裂している

音がここからでも聞こえる。ナギ少年は肩で息をしているが、まだ
目は死んで
おらず。それどころかぎらぎらと輝いている。

「男が一度決めたならそれに向かって真っ直ぐ進む！ なった後の
事はなってから決める！！ それで充分だろうがっ！！
百重千重と重なりて、走れよ稲妻。『千の雷！！』」

俺が地上に降り立った瞬間。ナギ少年から今日一番の魔力の
高まりを感じ、対軍殲滅魔法は放たれた。

あまりにも幼い意見。世の中そんな単純に廻ればどんなに楽だろ
うか。

みんながみんなナギ少年のように考えられる訳ではない。
だけど、同時にあまりにも真っ直ぐで明快な答えだった。

（俺も歳取ったなあ……）

無数の雷が迫ってくる現状で、仮面の中で思わず苦笑い。やっぱり見た目が
変わらずにいても、いくら精神は肉体に引っ張られると言っても、
こういう
場面に直面すると改めて自分の年齢を思い知らされる。

「レストレーション」

そして、対軍用魔法はその名に恥じぬ威力を発揮し極めて強力な
雷は俺に降り注ぎ、雷鳴を響かせた。地面は雷で捲り上がり融解し
てしまい
どろどろに溶けてしまっている。

「へっ……ざまぁ……みゃ……が………れ……」

『千の雷』でナギ少年は力尽きたのか、手を振り降ろした状態の
まま

地面に倒れ込み気絶してしまったようだ。時間にしたら短かったが、
あんなに高位の
呪文を連発したんだ。無理も無い。込めている魔力も破格のレベル
だった。

「ナギは派手にやりましたね。生きていますか？」

「分かってて聞くな」

煙の向うからアルビレオが声を掛けてきたので、無然と返す。
煙の中から出ると青山は気絶したナギ少年を介抱しているようだ。

「随分手を抜いたのですね」

「それは嫌味か？」

「いえいえ。そんなつもりはありませんよ」

鍊金鋼は必要無いとか言っておきながら刃鎧を展開しているんだから、

アルビレオの言葉は嫌味としか受け取れない。あの『千の雷』は素で受けるのは

さすがに無理だ。あのまま受けていたら死にはしないかもしれないが、ただでは済まなかっただろう。

世の中やはり理不尽な物だ。まだ10に届いた程度の年齢の子供がこれ程の力を

有しているなんて。つくづく天才は恐ろしい。まあ才能という観点から見れば

俺も人の事は言えないけどさ。

「ナギは興味深いでしょう？」

模擬戦最中の会話は聞かれていたようだ。あんな大声で叫んでいたのなら聞こえてもおかしくないか。

「……だが、まだ子供だ」

今の真っ直ぐなままナギ少年が成長するとは限らない。逆にこのまま成長しない確立の方が高いくらいだ。

「ナギなら大丈夫でしょう」

「根拠は？」

「勘です」

「言うに事欠いて根拠が勘かよ……」

少し呆れたが、どれほどアルビレオがナギと付き合いがあるか分からないが、それでも結構な付き合いになるだろう。あながち馬鹿にも出来ないか。

「まあ根拠はそれでいいとしても、分かってんのか？」

最強って事はそれだけ多くの命を奪うって事だぞ」

戦わずして最強なんて決めれる訳が無い。いや、戦い続けたとしても

決められるはずは無いが、行動をせず自分が最強だと嘯く事なんて誰でも

出来る。出来るが、見てて滑稽だ。

「そうですね。ナギもまだきっちり認識している訳ではないでしょう。

今までだって魔獣や魔物の命を奪う事はありましたが、人の命となると

また違う事になるでしょう」

人は人を殺す事に忌避を感じる。自身と同じ形のものを殺す事に忌避を感じるのは当たり前だ。それが正常で俺のような者は異常に

属する。ここで

家畜等と人間を同列に語るのは場違いだ。もし同列に語るなら何の命も奪う事無く

生きて見せないと矛盾している事になる。

「だけど、ナギなら大丈夫ですよ。いたずらに命を奪う事もしませんし、自分で気持ちの落とし所を決めるでしょう」

「根拠はまた勘か」

「ええ、また勘です」

論理や理屈なんて欠片も無いが、アルビレオがそう信じてるなら俺がとやかく言うべきではないだろう。それに、ナギ少年の考え方は少し眩しくもある。ごちゃごちゃと考える事もせず真っ直ぐに愚直に進む事が出来るのは羨ましい。俺は馬鹿なのに色々と考えてしまうからな。

「アル治療を頼む」

「分かりました」

ナギ少年は所々に傷があるがすやすやと寝入っており、これほどの破壊の痕を残した人と同一人物とは思えない。アルビレオに治療を受ける

ナギ少年を見て、空を見上げる。荒れ果てた地面とは違い空は澄んだ色だ。

（護衛をしていけば分かる事か）

コスモエンテレケイア

完全なる世界の情報を探す傍らナギ少年が折れるか。

それとも貫き通すか。その事にほんの少しだけ興味が出た。

紅き翼と接触して2日目
原作開始まで後25年

英雄はまだ幼く。

第三十五話『最強』（後書き）

眠る前って何だか色々考えてしまいますよね。もしかしたら自分の方が少数派かもしれないが。それと、黒宮はまだナギ達を信用している訳ではありません。純粹にすこし興味が出ただけです。みなさん忘れているかもしれませんが黒宮は割と好奇心旺盛なのです。自分は忘れてませんよ。当然です。……本当ですよ。

ナギはまだ10歳です。それに伴って実力も減退しています。それにしても主人公が主人公してない。

話は変わりますが自分は今年受験になります。なので、只でさえ遅い更新が更に遅れる事になります。完全にこちらの都合で申し訳ありませんが、ご理解してくださいとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1336o/>

武芸者の道筋

2011年7月24日00時11分発行